博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	金　恩惠
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 272 号
学位授与の日付	2019 年 4 月 24 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	韓国語と日本語の内外空間名詞の対照研究 ―コーパスの用例に基づく連語構成の分析を中心に―

Name	KIM Eunhye
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 272
Date	April 24, 2019
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Contrastive study on the Korean and Japanese spatial nouns denoting the interior and exterior: A corpus-based analysis of the collocation

東京外国語大学博士論文

韓国語と日本語の内外空間名詞の対照研究

―コーパスの用例に基づく連語構成の分析を中心に―

金　恩惠(キム・ウンヘ)

目次

第1章　序論 1

1.1. 研究の目的 1

1.2. 研究の対象 3

1.3. 問題の提起と研究の方法 5

1.3.1. 問題の提起 5

1.3.2. 研究の方法 10

1.4. 本稿の構成 11

第2章　先行研究 13

2.1. 韓国語の空間語についての研究 13

2.1.1. 空間語の語彙的意味についての研究 13

2.1.2. 空間語の認知言語学的研究 16

2.1.3. 空間名詞の文法的要素への変化についての研究 19

2.2. 日本語の空間語についての研究 24

2.2.1. 空間語の語彙的意味についての研究 25

2.2.2. 空間語の認知言語学的研究 26

2.2.3. 空間名詞の文法的要素への変化についての研究 27

第3章　本研究の基本的な観点 31

3.1. 意味構造体としての連語の観点 31

3.2. 本研究で用いる名詞分類と動詞分類 39

3.2.1. 名詞分類について 39

3.2.2. 動詞分類について 44

第4章　韓国語の内外空間名詞「안, 속, 밖, 겉」の意味用法 48

4.1. 内部空間名詞「안, 속」の意味用法の分析 50

4.1.1. 「안, 속」の格助詞形と前項の連語の現れ方 50

4.1.2. 類型①先行名詞を伴う連語構成の前項・後項の連語 52

4.1.3. 類型②動詞の連体形を伴う連語構成の前項・後項の連語 67
4.1.4. 類型③前項の連語を伴わない連語構成の後項の連語 70
4.1.5.「안, 속」の意味用法のまとめ 75

4.2. 外部空間名詞「밖, 겉」の意味用法の分析 78
4.2.1.「밖, 겉」の格助詞形と前項の連語の現れ方 79
4.2.2. 類型①先行名詞を伴う連語構成の前項の連語 80
4.2.3. 類型③前項の連語を伴わない連語構成の後項の連語 84
4.2.4.「밖, 겉」の意味用法のまとめ 90

4.3.「안, 속, 밖, 겉」の連語構成の意味関係 90
4.3.1.「안, 속, 밖, 겉」の連語構成の対義関係 91
4.3.2.「안, 속, 밖, 겉」の意味領域の関わり方 93

4.4. 第4章のまとめ 95

第5章　日本語の内外空間名詞「うち,なか,そと,おもて」の意味用法 96

5.1. 内部空間名詞「うち, なか」の意味用法の分析 96
5.1.1.「うち, なか」の格助詞形と前項の連語の現れ方 98
5.1.2. 類型①における「うち, なか+格助詞」の前項の連語 101
5.1.3. 類型①先行名詞を伴う連語構成の後項の連語 110
5.1.4.「うち, なか」の意味用法のまとめ 117

5.2. 外部空間名詞「そと, おもて」の意味用法の分析 118
5.2.1.「そと, おもて」の格助詞形と前項の連語の現れ方 119
5.2.2. 類型①先行名詞を伴う連語構成の前項・後項の連語 123
5.2.3. 類型③前項の連語を伴わない連語構成の後項の連語 130
5.2.4.「そと, おもて」の意味領域のまとめ 135

第6章　韓国語と日本語の内外空間名詞の意味用法の対照 136

6.1.「안, 속」と「うち, なか」の意味用法の対照 136
6.1.1. 類型①先行名詞を伴う連語構成の対照 136
6.1.2. 類型②の前項の連語の対照 152
6.1.3.「안, 속」と「うち, なか」の対照のまとめ 154

6.2.「밖, 겉」と「そと, おもて」の意味領域の対照 156
6.2.1.「밖」と「そと」の連語構成の対照 156
6.2.2.「겉」と「おもて」の連語構成の対照 160

6.2.3.「밖，겉」と「そと，おもて」の対照のまとめ 162

第7章　韓日内部空間名詞における語彙性と文法性の対照 165

7.1. 空間名詞の意味拡大と文法化について 165

7.1.1. 文法化に関する本研究の立場 165

7.1.2. 韓国語と日本語の空間名詞の意味拡大と文法化の研究 169

7.2. 韓国語と日本語の内部空間名詞の意味拡大による語彙性と文法性の変化 172

7.2.1. 先行名詞の分布に現れる意味拡大の様相 172

7.2.2. 韓国語の内部空間名詞「안，속」の意味拡大による語彙的・文法的意味の変化 175

7.2.3. 日本語の内部空間名詞「うち，なか」の意味拡大による語彙的・文法的意味の変化 178

7.3. 第7章のまとめ 183

第8章　結論 186

8.1. 研究結果の要約 186

8.2. 研究の意義と今後の課題 191

【参考文献】 194

表の目次

表 1. 文法化の度合い-大堀壽夫(2005)....28
表 2. 名詞分類-민현식(1990:一部改変)....40
表 3. 名詞分類-최경봉(1998)....41
表 4. 名詞分類-野間秀樹(1990b:一部改変)....42
表 5. 本研究で用いる名詞分類....44
表 6. 自動詞の類型分類-한송화(2000:一部改変)....45
表 7. 動詞分類-浜之上幸(1991:一部改変)....46
表 8.「안, 속」についての辞書の意味記述....48
表 9.「안, 속」の格助詞形の現れ方....50
表 10. [안/속＋格助詞]の出現状況-前項の連語の類型と格助詞別分類....51
表 11. 類型①における[안＋格助詞]の頻出先行名詞....52
表 12. 類型①における[안＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類....52
表 13. 類型①における[속＋格助詞]の頻出先行名詞....53
表 14. 類型①における[속＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類....54
表 15.「안」と「속」の両方と共に現れる名詞....62
表 16. 類型②の連体修飾語の現れ方....67
表 17. ∅＋[안＋格助詞]....70
表 18. ∅＋[속＋格助詞]....70
表 19. 先行名詞を伴わない「안」と「속」の後項の動詞....71
表 20.「안」と「속」の意味領域....76
表 21.「밖, 겉」についての辞書の意味記述....78
表 22. [밖＋格助詞]の格助詞形別の先行要素の現れ方....79
表 23. [겉＋格助詞]の格助詞形別の先行要素の現れ方....79
表 24. 類型①における[밖＋格助詞]の頻出先行名詞....80
表 25. 類型①における[밖＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類....81
表 26. 類型①における「밖＋格助詞 」の先行名詞の意味特性....84
表 27. 先行名詞を伴わない「밖」 と 「겉」の後項の動詞....89
表 28.「밖」と「겉」の意味領域....90
表 29.「うち, なか」についての辞書の意味記述....96
表 30. 先行名詞＋[うち/なか＋格助詞]の格助詞形別の用例数....99
表 31. [うち＋格助詞]の先行名詞の現れ方....99
表 32. [なか＋格助詞]の先行名詞の現れ方....100
表 33. 類型①における[うち＋格助詞]の頻出先行名詞....101

表 34. 類型①における[なか＋格助詞]の頻出先行名詞 102
表 35. [うち/なか＋格助詞]と共通して現れる名詞の格助詞別用例数 110
表 36. [心のうちに/心のなかに]の後項の連語 111
表 37. [心のうちに/心のなかに]の後項の連語「ある」の補語 112
表 38. [心のうちで/心のなかで]と共起する動詞 112
表 39. [(～人の集合)のうちから/なかから]と共起する動詞 115
表 40. 「そと, おもて」についての辞書の意味記述 118
表 41. 類型①における[そと/おもて＋格助詞]の出現様相 120
表 42. 類型①における「そと＋格助詞」の先行名詞の現れ方 120
表 43. 類型①における「おもて＋格助詞」の先行名詞の現れ方 121
表 44. 類型①における[そと/おもて＋格助詞]の頻出先行名詞 122
表 45. 前項の連語と「そと, おもて」の空間的意味領域 128
表 46. 後項の連語と「そと, おもて」の空間的意味領域 135
表 47. 類型①における[안＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類(表12の再掲) 137
表 48. 類型①における[속＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類(表14の再掲) 137
表 49. 「안」と「속」の両方と共に現れる名詞(表15の再掲) 138
表 50. 「안, 속」と「うち, なか」の意味領域の対照 155
表 51. 「밖, 겉」と「そと, おもて」の意味領域の対照 164
表 52. 文法化の三つの段階とその特性-안주호(1997:一部改変) 167
表 53. 意味範疇のあいだの抽象度をはかる証拠-日野(2001) 171
表 54. 韓国語と日本語の内部空間名詞の意味拡大の方向 172
表 55. [안/속＋格助詞]の先行名詞の分布 173
表 56. [うち/なか＋格助詞]の先行名詞の分布 173
表 57. 韓国語と日本語の内部空間名詞の意味拡大と文法性の変化 184

図の目次

図 1. 連語構成の要素と用語 36
図 2. [안/속＋格助詞]の先行名詞による類型 51
図 3. [안/속＋格助詞]の先行名詞の分布 54
図 4. 格助詞別に見る[안＋格助詞]の先行名詞の分布 55
図 5. 格助詞別に見る[속＋格助詞]の先行名詞の分布 55
図 6. 「안」と「속」の先行名詞の意味特性の現れ方 61
図 7. ［밖＋格助詞]の先行名詞の格助詞別・名詞類別分布 81
図 8. 意味グループをなす「안, 속, 밖, 겉」の意味領域の係わり方 94
図 9. [うち/なか＋格助詞]の先行名詞の分布 100
図 10. 先行名詞から見る「うち」と「なか」の意味領域 109
図 11. 「そと」の先行名詞の名詞類別分布 121
図 12. 「おもて」の先行名詞の名詞類別分布 121
図 13. 「そと」と「おもて」の先行名詞の名詞類別分布 122
図 14. [안/속＋格助詞]の先行名詞の分布（図3の再掲） 139
図 15. [うち/なか＋格助詞]の先行名詞の分布（図9の再掲） 139
図 16. 名詞の意味転移と文法化のプロセス 168

第 1 章　序論

1.1. 研究の目的

本研究は，韓国語と日本語の内外空間名詞を対照し，語彙的意味の広がり[1]と意味拡大の様相に見られる韓日両言語の特性を明らかにすることを目的とする．

空間名詞は，「本来の性質や固有の属性から空間性を表す」絶対的空間名詞と「基準となるほかの事物との関連の中でその空間的意味が実現される」相対的空間名詞に分けられるが[2]，本研究では，後者の相対的空間名詞を対象とし，その中でも，内外空間名詞「안，속，밖，겉」と「うち，なか，そと，おもて」について意味領域の記述を試みる．そして，語彙論的観点から，基本となる語義からの意味拡大による語彙性の変化にも注目し，韓国語と日本語の内外空間名詞に見られる語彙性の希薄化と文法的面の変化の様相を考察し，照らし合わせる．

本研究では，次のとおり，研究課題を設定して考察を進める．

第一に，韓国語の「안，속，밖，겉」と日本語の「うち，なか，そと，おもて」について，これらの内外空間名詞がどのような語彙とよく共に用いられ，どのような意味を表すかを，語彙と語彙の間の結合関係を通じて細密に調べ，その意味領域を記述する．

これまでの空間名詞に関する研究では，類義関係など語彙教育の観点や，空間名詞の抽象化など意味拡大のメカニズムの解明を中心とする認知言語論の観点からの研究が主に行われてきた．しかし，韓国語と日本語の空間名詞について項目別に辞書の記述を確認してみると，循環的意味記述となっている部分があるなど，意味領域の記述や意味用法の弁別に必要な情報が十分提供されているとは言えず，個別言語の研究だけでなく，他の言語との対照研究の面でもより詳細な記述が必要であると考えられる．また，これまでの空間語の研究では単独の空間名詞を対象に考察を行ったものが多いが，本研究では，

---

[1] 高田(1991:3)では，対照意味論的分析に関連して，「いくつかの語が集まってかたちづくる語彙の下位区分について，ひとつひとつ分析を重ねることによって，それぞれの意味分野におけるそれぞれの語の意味の広がりの言語ごとの違いが明らかになり，ついには，それぞれの言語の持つ世界観の違いを明示的に示すことができる」としている．

[2] 홍종선(1992ㄴ)では，空間語を二つに分類している．文章や状況に関係なく，その語自体がもともと固有の位置概念を持つ「동，서，남，북…」などといった絶対空間語と，ある事物を基準にして位置概念を表す「앞，뒤，안，밖，틈，사이…」などといった相対空間語に分類している．このような空間語の分類に関連して，森田良行(1996:137-138)は，特別に命名はしていないが，客観的に方向性や領域の指示を行う語，例えば「東，西，南，北」や，「沖，空，梢，麓，頂」などと異なり，方向・領域を表す名詞「上，下，前，後ろ，右，左，内，外」などは，必ずその方向や領域を捉える人間が絡んで，その者の視点を踏まえて初めて方向指示や領域指示が可能な語に当たるとしている．本稿では，このような既存の考え方と用語に倣って，空間名詞を絶対的空間名詞と相対的空間名詞に分け，相対的空間名詞の中でも，内外空間名詞を研究対象とする．

関係名詞[3]のうち，ほかの語彙との関係の中でその意味が実現される空間名詞の特性に注目して，他の語彙との結合関係を綿密に調べ，意味実現のレベルにおける多義の記述をする．

第二に，韓国語と日本語の内外空間名詞について，個別語ではなく，文の中の意味実現のレベルにおける類義関係と対義関係を軸とする系列関係の分析を通して意味の重なりと相異，対立関係をより明確にし，一つの意味グループとしての意味関係を明らかにする．

内外空間名詞は，類義の対と対義の対が相互交差して対立する「相互対立関係」[4]を表す意味グループであり，類義と対義関係における曖昧性や弁別の問題も多く論じられてきた．しかし，これまでの空間名詞の類義語[5]の研究では類義語同士の意味用法の弁別にとどまることが多かった．本研究では，類義の対と対義の対の対立関係にも注目してより精緻に内外空間名詞の意味領域を抽出し，内外空間名詞という一つの意味グループの中での意味関係を描くこととする．

このような類義と対義の意味上の重なりと相異，弁別や使い分けの情報，結合関係に関する情報は，単に意味記述の問題など語彙の分野に留まらず，外国語としての語彙教育の分野をはじめ，辞典の記述，翻訳など実用的な分野からも頻繁に提起される問題であり，より明確な意味情報を提示する．

第三に，本研究では，内外空間名詞の多義の記述と対照を主な目的とするが，韓国語と日本語の内外空間名詞が意味拡大により抽象的意味を持つにつれ，語彙的側面の変化だけでなく文法的側面の制約をもたらす現象に注目して，内外空間名詞における語彙的意味の変化とそれに伴う文法的要素への変化について考察し，韓国語と日本語を対照する．

空間名詞の意味拡大は語彙的意味の変化にとどまることもあるが，語彙的範疇から文法的範疇へ移動する文法化の過程につながることもある．これは，韓国語と日本語の内外空間名詞においても共通して見られるが，二つの言語の間には文法的要素への変化の様相や進展の程度に相異があり，韓国語では語彙要素により表されるものが日本語では文法要素により実現されるなど，両言語の対応のズレの一原因となっている．そこで，本研究では，既存の研究結果を踏まえ，語彙的要素から文法的要素への変化の様相を考察し，空間名詞の語彙的要素と文法的要素の相関関係の側面を探ることとする．

第四に，上記の第一から第三までの分析の結果得られた言語事実を基に韓国語と日本語を照らし合わせて，二つの言語の類似点と相違点を明らかにするとともに，各々の言語における内外空間名詞の意

---

[3] 최경봉(1998)では，ある対象との関係の中で相対的にその位置や空間的意味が実現される名詞で，単独ではその意味を明確に表すことができず，意味上の曖昧性を解消するためには補充的成分を要する名詞を関係名詞の範疇に分類している．최경봉(1998)は，存在論的観点から，名詞を実体名詞と実体の存在様式を表す様式名詞に分類し，そのうち様式名詞を存在物の事件と状態を表す事態名詞と存在物との関係を表す関係名詞に下位分類している．さらに，関係名詞を次元名詞と単位名詞に分類し，次元名詞を空間名詞と時間名詞に分類している．このなかで，空間名詞は，実体と実体の間の関係を位置を通して表す関係名詞であるとしている．

[4] 「相互対立関係」とは，内外空間名詞の「안，속」と「밖，겉」の四つの構成要素が「안」と「밖」，「속」と「겉」，「안」と「겉」，「속」と「밖」という，互いに交差する対立関係をなすことを指す用語として，便宜上用いる．詳細は4.3.1.「안，속，밖，겉」の連語構成の対義関係で述べる．

[5] 類義語には，完全に重なる類義語と意味上重なる部分と重ならない相補的な部分を併せ持つ部分的類義語があり，内外空間名詞は部分的類義語に当たる．

味特性をより細密に示す.

国広(1982:91-100)では,「多義語の意味構造を明らかにするための一つの補助的視点として対照言語学的な方法がある」とし,「類似の基本的意義素を持つ単語をいくつかの言語から持って来て比較対照することによって,各々の言語の構造上の特徴を明らかにするとともに,基本的意義素の分析を一層深め得ることが期待される」と述べている.本研究では,ある空間が韓国語と日本語でどう表現されるかという点だけでなく,どう表現されないかという点にも注目しつつ,その対応関係の一致とズレ,類似と相異を規定する要素,一つの意味グループとしての姿を対照することで,韓国語と日本語の共通性と個別性の一側面を明らかにすることができると考える.

また,本研究は言語教育を主として論ずるものではないが,類義と対義の意味弁別や使い分けの問題,韓国語と日本語の対応関係などは言語教育や習得の分野でも頻繁に取り上げられてきた問題であり,本研究の結果として得られる結果は,このような問いに関連して言語教育にも資する部分があると考えられる.

以上の研究目的を実現するために,本研究では,内外空間名詞を中心とする語彙間の結合関係及び類義と対義関係を軸とする系列関係を中心に,実際の使用例を集めたコーパス資料を用いて,客観的かつ実証的に考察を行う.

1.2. 研究の対象

本研究では,韓国語の内外空間を表す名詞「안, 속, 밖, 겉」とそれに対応する[6]日本語の内外空間名詞「うち,なか,そと,おもて」を分析の対象とする.

空間語に関連する用語は学者によって異なるため,これまでの用語を簡単にまとめた上で,本研究における基本的な立場と見解,用語について述べる.

空間的概念を表す言語表現を称する用語は個別学者の空間的概念と範囲の捉え方によって多様である.박경현(1987)では空間的概念を表す語を「空間概念語」とし,空間概念語のうち,位置を指定する概念語について,それぞれ指定する位置関係によって「上下概念語,前後概念語,左右概念語,内外概念語,側位概念語」[7]という用語を用いている.노대규(1988)は空間的次元の大きさと関連を持つ語を「空間表示語」とし,임지룡(1984)は空間的感覚を表す語を「空間感覚語」とし,その対象を固有語の形容詞に限定した.김선희(1988)は知覚範疇に属する空間を表すことのできる言語表現を「空間語」とし,時間語と区別した.민현식(1990)は「空間語」を空間名詞(강, 바다, 위, 아래など),空間動詞(들어가다, 나오다, 넣다, 놓다など),空間形容詞(높다, 낮다, 얕다, 깊다など)に分けて,空間を表

---

[6] 韓国語の内外空間名詞「안, 속, 밖, 겉」に対応する日本語の内外空間名詞としては,既存の複数の韓日辞典から対訳を収集し,そのうち,位置を表す空間名詞「うち,なか,そと,おもて」に対象を限定した.参照したのは,安田吉実,孫洛範(1989)『엣센스 한일사전』,菅野裕臣他共編(1998;2006)『コスモス朝和辞典 第二版』,大阪外国語大学朝鮮語研究室編(1985)『朝鮮語大辞典』である.

[7] 박경현(1987:8-9)では,「위, 아래, 꼭대기, 밑」を上下概念語,「앞, 뒤」を前後概念語,「좌, 우」を左右概念語,「안, 밖, 속, 겉」を内外概念語,「옆, 곁」を側位概念語と区別している.

す語彙の形態を幅広く論じている. 정수진(2010)は,「空間語」とは特定の対象の形態や次元性, 位置, 空間的動きを表わす語彙やこれらの語彙の結合など, 空間情報を提供する言語表現を総じて表す語であるとし, 韓国語においては空間名詞, 空間形容詞, 空間動詞, 空間助詞の四つの形式の空間語により空間概念が具体化されるとした.

本研究では, 場所, 方向, 位置等の空間的概念[8]を表す表現を全て「空間表現」とし, 空間表現の中でも単一語のレベルを総称して「空間語」とする. これら「空間語」の中でも, 空間を表わす名詞を「空間名詞」と呼ぶことにする. このとき, 本研究で対象とする空間名詞は, その語自体が空間的性質を本来持っていたり, その固有の属性から空間的意味特性を表す絶対的空間名詞ではなく, 空間的位置を判断する基準となるある事物との関連の中でその空間的意味が実現される相対的空間名詞を指す. また, 박경현(1987)の空間概念語における位置関係を空間名詞にも適用して, 位置を表す空間名詞のことを「位置空間名詞」とし, 位置空間名詞のうち, 内外の概念を表す「안, 속, 밖, 겉」を「内外空間名詞」と呼ぶことにする.

また, 韓国語の内外空間名詞に対応するものとして, 日本語の内外空間名詞「うち, なか, そと, おもて」の意味用法を分析, 記述し, 二つの言語の分析の結果を照らし合わせる.

研究の資料としては, 韓国語と日本語の内外空間名詞のカテゴリーとしての対照を目指すため, 並列資料を対象としていない. 本研究では, 研究者の主観の介入をできる限り排除して客観的かつ実証的な結果を得るために, 大規模の電算資料を言語資料として用いる. 韓国語の場合は,『21世紀世宗計画, 研究教育用現代国語均衡コーパス』[9]を対象に, 検索システム「글잡이」 を用い, 「文語」即ち文章語ないし書かれたことばの資料から[先行要素＋안, 속, 밖, 겉＋格助詞]の連語構成を抽出して, その結果として得られた用例を格助詞別に分類した. 日本語の場合は, 日本の国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(モニター公開データ2009年度版))』[10]を対象に, 検索システム「HIMAWARI」を用いて用例を検索した.

具体的には, コーパスから「先行要素＋うち, なか, そと, おもて＋格助詞」の構成を抽出して, その結果得られた用例を格助詞形別に分類した.

---

[8] 空間的概念についての既存の議論は, 第2章先行研究で詳述する.

[9] 『21世紀世宗計画研究教育用現代国語均衡コーパス』は, 1998年から2007年まで行われた「21世紀世宗計画」の成果物の一つである. 本研究では, そのうち第一段階(1988-2000)事業の成果物を用いるが, 分野別均衡を考慮した1000万語節規模のコーパスである. 「文語（書かれた言葉）」(90%), 「純口語（話された言葉）」(5%, 50万語節), 「準口語（話された言葉と違って, 発話そのものではなく発話を前提として主にドラマ, 演劇, 映画などの上演, 上映のために用意された台本などの資料)」(5%, 50万語節)で構成されている. 本研究では, 文語コーパスのみを調査対象とした. 以下,「韓国語コーパス」とする.

[10] 日本の国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(モニター公開データ2009年度版)（以下, 日本語コーパスとする.)』は, 日本国立国語研究所の「KOTONOHA計画」により, 2006年から2010年まで5カ年計画で構築された. 現代日本語を対象とする一億単語規模のコーパスで, 略称はBCCWJ(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)である. 2009年度版には4,500万語が収録されている. サブコーパスとして「書籍, ベストセラー, 白書, ヤフー知恵袋, 国会議事録」が収録されている.

1.3. 問題の提起と研究の方法

1.3.1. 問題の提起

韓国語と日本語の「안と속, 밖と겉」は, それぞれ意味用法の部分的重なりを見せる類義の対であり, 「안と밖, 속と겉」は対義関係を成しているが, 実際の使用においては相互入れ換えできる場合もあれば, 一方しか用いられない場合もある. これに対応する日本語の内部空間名詞は「うち, なか, そと, おもて」であり, 韓国語と同様に類義の対と対義の対をなしている.

しかし, これらの語彙の辞書上の項目別意味記述と用例を見ると, 循環的意味記述となっている部分が多く, 対になる単語同士の意味領域が重なったり, 相異, 対義の関係になったりすることについて個別単語ごとに提示される用例を見ても, 実際に言語使用者や学習者が必要とする弁別要素に関する情報はまだ十分提示されいない.

韓国語の辞書における内外空間名詞の循環的意味記述の例として, 国立国語研究院(1999)の『표준국어대사전(標準国語大辞典)』と延世大学校言語情報開発研究院(1998)の『연세한국어사전(延世韓国語辞典)』の「안」と「속」の意味記述を見てみよう.

以下では,『標準国語大辞典』は【標準】,『延世韓国語辞典』は【延世】と略して記する:

【標準】

「안①」 「어떤 물체나 공간의 둘러싸인 가에서 가운데로 향한 쪽. 또는 그런 곳이나 부분.」【標準:4038】

(ある事物や空間の, 取り囲まれた端から中心に寄った方. またはそのようなところや部分.) [11]

「속②」「일정하게 둘러싸인 것의 안쪽으로 들어간 부분.」【標準:3558】

(一定に取り囲まれたものの内側に入った部分.)

【延世】

「안①」「어떤 공간이나 물건의 둘레에서 가운데로 향한 쪽.」【延世:1220】

(ある空間や事物の, まわりから中心に寄った方.)

「속①㉠」「[주로「～속」의 꼴로 쓰이어](그 물건의) 안.」【延世:1091】

([主に「～속(～なか)」の形で用いられ](その事物の)なか.」

【標準】,【延世】の「속」に関する意味記述では, いずれの辞書でも「속」の類義語である「안」や「안쪽」を用いて説明しているが, このような意味記述だけでは「안」と「속」の意味用法上の違いが鮮明に見えてこない.

【標準】で提示される「안①」と「속②」の用例をみてみよう:

(1) 건물 안/극장 안에 들어가다.(안①) 【標準:4038】

[11] 以下, 韓国語例文の日本語訳, 日本語例文の韓国語訳は, 特に記されていない場合は, 筆者による.

（建物のなか/劇場のなかに入る．）

(2) 건물 속으로 들어가다.(속②)　　【標準:3558】
（建物のなかに入る.）

(1)の「건물 안에 들어가다」と(2)の「건물 속으로 들어가다」は共通して「건물」という先行名詞を伴い，後行の動詞「들어가다」も共通し，空間名詞の出現の条件は助詞を除けば同一の環境であり，空間名詞と結合する助詞の違いが「안」と「속」の出現の条件であるように見える．一般的に，(1)(2)のように移動を表す文では，助詞「에」は場所名詞と結合して，「가다，오다」といった移動動詞の移動の目的地・到達点を表し，助詞「(으)로」は位置や場所を表す名詞と結合して運動，動作，または変動の方向を表す[12]．このようなことから，例文(1)(2)で見られる「안」と「속」の出現の違いは，「안」と「속」の空間的意味の違いによる結果ではなく，移動の＜到達点＞か，それとも＜方向性＞かという助詞の問題として捉えることもできる．

そうであれば，(1)と(2)において，「건물」という具体的空間を表す名詞によって規定される内部空間は，「안」と「속」のどちらとも結合することができ，「안」と「속」の意味領域の違いはないということになる．ところが，上記(1)の「안」と(2)の「속」をそれぞれ「속」と「안」に入れ換えてみると，そうではないことが分かる．

(1)′ ?건물 속/?극장 속에 들어가다.
（建物のなか/劇場のなかに入る．）[13]

(2)′ 건물 속으로/안으로 들어가다.
（建物のなかに入る.）

例文(1)「건물 안/극장 안에 들어가다」の「안」を「속」に入れ換えて(1)′「건물 속/극장 속에 들어가다」にすると，不自然になるが，(2)「건물 속으로 들어가다」の「속」を「안」に入れ換えて(2)′「건물 안으로 들어가다」にすると，不自然な文にはならない．[14] このように，内部空間をあらわす「안」と「속」には意味領域に違いがあると考えられるが，辞書の意味記述や用例では，そのような意味用法上の重なりや違いについてまでは触れていない．

さらに，「안」と「속」の意味領域の違いを検討するために，実際にコーパスから得られた例文をもとに

---

[12] 서정수(1994;2006:462, 869)より引用．

[13] 非文等の判断は筆者の内省に基づくものである．本稿では，言語学の一般的な使用例にならって，文法的に容認できない非文に「*」を付けることにし，不自然ではあるが容認できる表現には「?」を，非文ではないが意味が変わってしまい，別の意味の文とみなされる場合は，「!」を付けて表示する．

[14] これらの例文の自然・不自然の表示は筆者の判断による．

考えてみよう.

(3) a. 집 안에/?속에 들어가다.(家のなかに入る.)[15]
b. 땅 속에/?안에 들어가다.(土のなかに入る.)

(4) a. 주먹 안에/?속에 들어가는 크기의 돌(手のなかに入る大きさの石)
b. 주먹 속에/?안에 꽉 쥐었다.(手のなかで握りしめた.)

(3)では,「안」と「속」の後行の要素は共通しているため, 先行する要素により「안」か「속」のどちらと共起するかが決まる. 先行名詞「집」は「안(에)」との組み合わせが自然であり, 先行名詞「땅」は「속(에)」との組み合わせが自然である. 一方で(4)は先行要素は同一で, 後行要素が異なるパターンの例であり, この場合後行の要素「들어가다」と「쥐다」の意味特性の違いが「안, 속」の選択に影響を与えていると考えられる.

これは類義語における問題に限らず, 対義語の意味用法の弁別や使い分けの問題においても同じである. 次の例を見てみよう:

(5) a. 집 안으로 들어오다. /집 밖으로 나가다.
(家のなかに入る./家のそとに出る.)
b. 입 속으로 중얼거리다. /입 밖으로 소리내어 말하다.
(口のなかで呟く./口に出す.)
c. 안에 입은 셔츠와/겉에 걸친 점퍼의 색깔이 제각각이다.
(なかに着たシャツと/うえにはおったジャンパーの色はまちまちである.)

(5a)は先行名詞「집」に対して空間名詞「안」と「밖」が, (5b)は先行名詞「입」に対して「속」と「밖」が, (5c)は先行名詞を伴わずに「안」と「겉」がそれぞれ対立関係を見せる例である. このように, (5a, b, c)の対義関係を見ると,「안」と「밖」,「속」と「겉」という基本義の対立関係が常に成立するわけではなく, 前後の要素によって結合する空間名詞が異なってくる.

これは日本語の場合も同様であり, 類義語の対は意味用法の重なる部分もあれば重ならない部分もあり, 先行と後行の要素によって類義関係の成立の有無が判断される.

日本語の辞書のうち, 類似点と相違点を用例や対照表を用いて提示している「小学館」の『類語例解辞典』では,「うち」は, ある一定の範囲の中であることを意味し,「なか」は, 空間的に限られた物に対して

[15] 本研究で取り上げる例文は, 特に出処を記載しない限り, 韓国語の場合は,「韓国語コーパス」から, 日本語の場合は「日本語コーパス」から抽出されたものである. 必要に応じて一部変形して使用する.

用いられることが多く，「うち」のように時間や程度，分量などに対して使われることは少ないとして，「うち，なか」の共通の意味として＜あるものや，囲まれている領域の，外側でない部分＞とし， 次のように使い方の例を挙げている：

(6) a. 生徒のうちから代表者を選ぶ.
(학생들 중에서 대표자를 뽑다.) (類：987) [16]
b. 三人のなかから選ぶ.
(세 명 중에서 뽑다.) (類：987)

また，森田良行(1988)は，『基礎日本語辞典』の「うち」の項目で関連語として「なか」を挙げ，「その意味において「なか」はしばしば「うち」と同じように用いられる」とし，次の例を挙げている：

(7) a. 門のうち/門のなかに引き入れる.
(문 안으로 끌어들이다.)
b. 心のうち/心のなかが分からない.
(마음 속을 알 수 없다.)
c. クラスのうちで一番だ/クラスのなかで一番だ. (基礎：184)
(반 안에서 일등이다.)

上記(6)と(7)の辞書の用例では「うち，なか」の意味領域が重なり，それぞれ入れ替えできるとしているが，他の先行，後行要素と結合する場合でも「うち，なか」は入れ替え可能か検討する必要がある．これらの例文を韓国語に直すと，(6a,b)はいずれも「중」と対応し，(7a,c)と(7b)はそれぞれ異なる．(7a,c)の「門のうち/門のなか」では「うち，なか」の両方とも「안」と対応し，(7b)の「心のうち/心のなか」では「うち，なか」の両方とも「속」と対応する．日本語における意味領域の重なりが韓国語においても並行して対応関係を現すのであれば問題はないが，日本語では「うち，なか」を共通して使用するのに対し，韓国語では共通して使用することができず，使い分けなければならない場合もある．従って，このような韓国語と日本語の対応関係について，より細密な結合情報を抽出して示す必要がある．

韓国語と日本語の学習者向けの韓日辞典と日韓辞典の例を見てみよう：

(8) a. 집 안이 훤히 들여다 보이다. (エ_韓日：1481)[17]

---

[16] (類)と表示された例文は小学館の『類語例解辞典』から抽出した例文で，(基礎)と表示された例文は角川書店の『基礎日本語辞典』から抽出した例文で，韓国語訳は筆者による．

[17] (エ_韓日)と表示された例文は民衆書林の『エッセンス韓日辞典』から，(エ_日韓)と表示された例文は『エッセンス日韓辞典』から抽出した例文と対訳である．(コ)の表示は白水社の『コスモス朝和辞典第二版』から抽

(家のなかが丸見えだ.)

b. 방 안에는 아무도 없어요. (コ)

(部屋のなかには誰もいません.)

(9) a. 서랍 속에서 꺼내다. (エ_韓日:1322)

(引出しのなかから取り出す.)

b. 보배는 산 속에 있다. (コ)

(宝は山のなかにある.)

(10) a. 寒いからうちで遊ぶ. (エ_日韓:194)

(추우니까 (집)안에서 놀다.)

b. うちからかぎをかける. (類:987)

(안에서 잠그다.)

例文(8)では「안」を用いており, (9)では「속」を用いている. これらの日本語訳を見ると, (8a,b)の「안」と(9a,b)の「속」はいずれも「なか」と対応しているのに対し, 例文(10a,b)の韓国語訳を見ると, 「안」は「なか」ではなく「うち」と対応していることから, 「안, 속」と「うち, なか」は一対一の対応関係ではないことが分かる. 韓国語においては, (8a,b)の「집, 방」という具体的な建物の内部空間を指す先行名詞を伴う場合と, (10)のように先行名詞を伴わずに空間名詞が内部空間を表す場合にも, いずれも「안」の意味領域に含まれるが, 日本語においては異なる対応関係を表す. また, 韓国語の例文(8)と(9)を見ると, 韓国語では(8)の「집, 방」は「안」と共に現れ, (9)の「서랍, 산」は「속」と共に現れるが, 日本語訳を見ると, (8)と(9)がいずれも「なか」と共に現れる. このような二つの言語の間の対応関係について, 辞書には項目別意味記述と用例が提示されてはいるものの, 明確な弁別の基準や使い分けの情報は示されていない.

以上の(1)～(10)の例文で見てきた通り, 個々の空間名詞の辞書的意味を知っていても, 文のなかで共に用いられる語彙の選択の条件を知らなければ, 正しく自然な表現はできない.

このようなことから, ある語彙の意味を知り, 自然な表現を使うことができるということは, その語彙の先行と後行の要素との正しい結合関係を知り, 共に用いられる語彙としてどのようなものが許容されるかというルールを知ることであると言えるが, そのような共起や結合の情報が十分提供されているとは言えない.

また, 母語話者にとっては, このような意味用法の重なる部分と重ならない部分の区別, 類義・対義の関係にある複数の語彙のうちどちらが自然な表現であるかをすぐに内省で判断することができるが, 内省を持っていない非母語話者にとっては難しい問題である. 実際に, 韓日・日韓辞書の用例を用いて個別空間名詞の意味や用法について説明をしても, 先行名詞や後行の動詞など結合の条件が変わると, ま

出した例文と対訳である.

た困難に陥ることが多い．したがって，どのような語彙との結合が文法的で自然な表現となるかを判断するための情報を抽出して示すことは，個別空間名詞の意味用法の記述の充実化だけでなく，言語教育や習得の側面でも重要であると考える．

1.3.2. 研究の方法

1.3.1.で論じた問題点に関連して，本研究では，文の中で内外空間名詞と共に空間的意味を実現する要素に注目する．

これまでの空間名詞についての研究は単独の空間名詞を対象とする研究が多いが，本研究では，語彙の意味は文の中で共に用いられる他の構成要素との結合関係によって実現されるという「連語」[18]の概念を取り入れ，単独の空間名詞ではなく，空間名詞と格助詞の結合構造を中心語に据え，語と語の結合関係と系列関係を通して分析を進める．

本研究では，実際の言語使用を反映する客観的で実証的な結果を得るために，大容量の現代コーパスから実際に使用された用例を収集して，計量的な方法で分析を行う．研究の対象となる言語資料の選定から言語現象の分析と判断に至るまで計量的な方法を取り入れるが，単なる量的分析の記述にとどまるのではなく，用例の検討や意味の弁別など質的研究の段階においても用いることがある．

分析の方法としては，第一に，内外空間名詞の格助詞形を中心語に据え，その中心語と共に用いられて連語構成をなす先行の要素と後行の要素を取り出し，その結合関係を分析する．具体的には，コーパスから抽出された用例を対象に，内外空間名詞と頻繁に共に用いられる先行の要素と後行の要素を頻度順にまとめ，先行の要素と後行の要素の出現の有無や分布，出現用例数等の現れ方，意味特性，内外空間名詞との意味関係を分析し，その結果を基に内外空間名詞の意味用法を記述する．また，上記分析の結果を基に，連語構成における類義と対義の対の対立項を設定し，中心語と結合する先行要素と後項要素の系列関係の分析を通して意味領域の重なりとズレを抽出して記述する．

第二に，韓国語と日本語の対照においては，コーパス資料から抽出された連語構成を，中心語と共起する連語の意味特性により＜具体空間，抽象空間，範囲，状況，時間＞の範疇に分けて照らし合わせる．連語構成の対応関係において先行要素または後行要素からなる二項連語だけでは対応関係の成立やズレが判断できない場合は，補充語や対象語も射程に入れ，三項連語に範囲を拡大して分析する．韓国語の内外空間名詞に見られる意味領域が日本語ではどう表現されるか，韓国語と日本語の対応関係の成立の有無，意味領域の重なりとズレの程度などの様相から韓国語と日本語の内外空間名詞の言語的表現と思考の類似と相異を探る．

第三に，空間名詞は，意味拡大により，具体的空間の意味から抽象的意味を表わすようになり，さらに

---

[18] 本研究で用いる「連語」とは，英語‘collocation’の訳語で，韓国語学では，文脈によって「連語」，「連語関係」，「連語構成」などに訳されるものである(南潤珍　2006)．Firth(1951：192-194)では，ある語彙の意味はそれと共に用いられる語彙によって把握されるものであるとし，語彙間の関係を，意味の連想関係と文法に二分し，そのうち，意味の連想関係をcollocationとした(南潤珍　2007：610-611)．日本語学では，「縁語関係」，「連語関係」の訳語とともに「コロケーション」が用いられている(亀井孝　外　1996：128)．詳細は3.2．を参照．

一部の空間名詞では抽象的意味が希薄になり，文法的要素へ変化する傾向がある．このような語彙的意味から文法的意味への変化といった現象は，多くの言語に共通して見られる現象であると言われている．これまでの文法化に関する研究は，文法化が完成して文法要素となったものを対象にした研究が多いが，本研究では，文法化の完成に焦点を合わせるのではなく，韓国語と日本語の内部空間名詞の意味拡大による語彙的意味の変化，内部空間名詞と他の語との結合関係の変化，文法的側面の変化などに焦点を合わせて分析を進める．そのために，各々の内部空間名詞の意味拡大による抽象化の進展の程度を，先行名詞の意味特性を中心に定量的にまとめて示す．次に，コーパスから収集した用例を対象に，語彙的意味の薄れと文法的要素への変化が見られるかを調べるために，先行名詞の意味拡大による語彙的自立性の弱化，語彙的意味の希薄化が見られるかどうかを観察し，内外空間名詞と結合する格助詞の制約，統語的自立性の弱化，機能のレベルにおける変化等を考察し，各々の言語の考察から得た結果を基に韓国語と日本語を対照する．

1.4. 本稿の構成

本稿は，これまで述べてきた研究目的に合わせて，下記の通り，構成される．

第1章では，本研究の目的と対象，問題の提起と研究の方法を記しておく．本研究では，現代韓国語と日本語の空間名詞のうち，韓国語と日本語の内外空間名詞「안，속，밖，겉」と「うち，なか，そと，おもて」について，多義にわたる意味領域を記述し，韓国語と日本語を対照することを目的とし，あわせて，韓国語と日本語における意味拡大による文法的要素への変化の様相を明らかにしようとすることを述べた．次いで，問題の提起と共に，内外空間名詞を中心語とする先行と後行の要素を対象に，実際の使用例を集めたコーパス資料を基に結合関係と系列関係から意味特性を分析し，対照することを述べた．

第2章では，韓国語と日本語の空間語，特に空間名詞に関する先行研究について，韓国語と日本語に分けて，それぞれ空間語の語彙論的意味についての研究，空間語の認知言語学的研究，空間名詞の文法的要素への変化に関する研究について考察する．

第3章では，本研究の基本的な観点を提示する．空間名詞の意味を記述するための有効な方法として，意味構造体としての連語の観点を取り入れ，単独の単語のレベルではなく，連語構成という意味構造体の中で意味が実現されることに注目して論を進めることを説明する．また，空間名詞が，他の実質性を持つ名詞とは異なる，関係性を持つ名詞であることと，それゆえに周辺語との関係の中で意味を探る必要があることを述べる．また，研究資料としては，韓国語と日本語の大規模のコーパスを用いて実証的で計量的な研究を行うことを述べ，続く4章と5章の分析に適用する名詞分類と動詞分類について述べる．

第4章では，韓国語の内外空間名詞「안，속，밖，겉」の意味用法について，コーパス資料を基に計量的に調査・分析し，意味用法を記述する．まず，「안，속，밖，겉」の連語構成の前項の連語の統辞的構造により類型別に分け，中心語の格助詞形別に前項の連語と後項の連語の意味特性を分析する．その結果から，空間名詞の間の意味領域の重なりとズレを分析し，弁別の要素を提示するとともに韓国語の内外空間名詞の意味関係を描く．

第5章では，第4章と同じ方法で，日本語の内外空間名詞「うち，なか，そと，おもて」の意味用法について，計量的に分析，記述し，日本語の内外空間名詞の意味グループとしての関係を描く．

第6章では，第4章と第5章の結果をもとに，韓国語と日本語の内外空間名詞の意味用法を対照する．対照の際は，単独の単語ではなく，空間名詞の格助詞形を中心語とする連語構成を対象に，実際の意味の実現のレベルにおける意味用法の対応を試みる．

第7章では，韓国語と日本語の内部空間名詞について，具体的空間を表す基本義から抽象的意味への意味拡大の結果として，その語彙的意味が薄くなったり，文法的制約が生じたり，何らかの文法的要素への変化が見られる現象について考察し，その様相を照らし合わせる．

第8章では，結論として，これまでの研究の結果をまとめ，残された課題について述べる．

第2章　先行研究

空間語についての研究は，大別して空間語の概念や分類，空間語の特性，語彙論的意味と意味拡大の様相に焦点を合わせた＜空間語の語彙論的意味についての研究＞，空間概念の言語化と抽象化による意味拡大を認知言語論の観点から分析の模型を通じて説明しようとした＜空間語の認知言語学的研究＞に分けうる．本研究では，これら二つの観点からの研究に加え，空間名詞の語彙性と文法性の相関に注目しようとする立場から，＜空間語の文法化についての研究＞も見ていくこととする．

2.1. 韓国語の空間語についての研究

2.1.1. 空間語の語彙的意味についての研究

空間語本来の意味と特徴に注目した研究は，노대규(1988)，민현식(1990)，이정애(1996)，박지영(1996)，신은경(2005)などがある．

노대규(1988)は，空間的次元の大きさと関連を持つ語を「空間表示語」[19]とし，空間的次元を一次元，二次元，三次元に分類したうえ，対義語として意味的対立関係にある13の形容詞を対象にその基本義を分析し，意味の拡大について論じた．空間表示語をその意味特性によって二つのグループに分け，「길다，높다，깊다，넓다，두껍다，굵다」の意味特性は肯定的，正常的，一般的，中立的，無標的であり，尺度名詞を作ることができる語であるが，「짧다，낮다，얕다，좁다，잘다，가늘다/잘다」は否定的，非一般的，非中立的，有標的意味特性を持つ語で，尺度名詞を作ることができないとした．

노대규(1988)は，空間名詞に関するものではないが，意味的対立関係に注目した研究である．肯定的，正常的，一般的，中立的，無標的な意味特性を持つ語の意味の派生や拡大が活発であることを明らかにした点で，空間名詞の意味分析においても対立関係の観察は重要な要素となると考える．

민현식(1990)は，品詞分類のための新しい方法として人間性と時間性，空間性の資質を設定することを提案し，そのうち，空間概念を基本意味や派生意味とする単語を空間(性)体言，空間(性)動詞，空間(性)修飾言に分けている．空間(性)名詞については，人間にとって最も基本的な認識の範疇は人間，事物，空間と時間であるという存在論的観点から，名詞を人間名詞，事物名詞，空間名詞，時間名詞に分類した．空間名詞の中でも抽象的空間語として位置を表す典型的な空間概念語を空間次元名詞[20]と

---

[19] 노대규(1988:177)によると，「空間表示語」とは，Clark & Clark(1997)の「あらゆる言語には測定可能な空間的次元(spatial dimensions)の大きさを表す一連の語彙がある．このような語彙を普通空間表示語(spatial terms)という」に基づく用語である．

[20] 민현식(1990:52)は，空間名詞のうち「앞，뒤，위，아래，오른쪽，왼쪽，옆，곁…」などは，空間に対する多様な次元または側面から次元的位置を指示するので，空間次元語または空間位置語と呼ぶことができ，Lyons(1997)もこのような位置語について次元空間(dimentional space)という用語を使用したことを参照したとしている．

し，これらの名詞を時間語化派生可能語（앞，뒤，사이，틈，가운데など）と時間語化派生不可能語（꼭대기，옆など）に分け，時間語化の程度を検討した．また，内外概念語「안，밖」，「속，겉」，「중앙，중，가운데，복판，가，언저리」については，「안，밖」と「속」の時間語化用法の程度は前後概念語＞内外概念語＞上下概念語の順であることを明らかにし，内外概念語の用例として「한 시간(안에，내에)일을 끝내라，한 시간(밖에，*외에)안 걸린다，시간(*내，외) 수당」を挙げ，漢字語「내，외」の共起制約があることや「한 시간 안에」の「안」は「밖」の対義語とみることができず，＜多くも少なくもないちょうどその程度の時間＞という意味の程度語になっているということを指摘した．内外概念語のうち最も時間語化が進んだのは，進行相の機能を表す「가운데，중」であるとした．

민현식(1990)は，空間（性）体言の時間語化に関連して，さらに空間語と時間語の相関性を探った研究で，限られた用例ではあるが，内外概念語の時間語化による共起制約，内外概念語の時間語化の進展の程度に差があることを言及している．

이정애(1996)は，｛안/밖/속/겉｝[21]について，各々の語が明確な意味を持つ語であるにも関わらず，相互混用されることが多いという問題を指摘し，各々の語の意味領域と空間的意味との関係を考察した．空間的な指示範疇が一次的意味を形成し，その適用範疇がほかの領域に拡大していく構造を持っているとし，その意味と用法の拡大は，空間関係を知覚する人間の基本的な能力に基づくものであることを認知意味論的に論じた．｛안/밖｝は{속/겉}とともに空間知覚(space perception)を通じて得られる概念を表す言語形式であり，枠または境界を基準にその内部と外部を指すとし，事物が置かれている場所に関連した実体(LM；境界標示，landmark)と位置している事物(TR；弾道体，trajector)の関係によりその使用や交代に制約が生じるとした．また，明確な場所的空間概念から(心理的)空間概念に，さらに方向概念，時間概念に意味範疇が拡大するとした．{안}と{속}の意味の相異については，韓国語母語話者66名を対象にインフォーマント調査を行い，容器の領域の場合は｛안/속｝の両方とも用いられるが，「방，건물，자동차」といった空間，すなわち内部が開いていて，出入りが可能で，閉ざされていない空間の場合は「안」が用いられるが，「감옥，동굴，차」といった隠蔽性が加わった空間の場合は「속」が「안」より多く用いられるとし，「관(棺)」といった限定された隠蔽性の空間の場合は「속」が自然であるとした．空間の性質の抽象性，隠蔽性などが強くなる場合は｛속｝が多く用いられるとした．同じ空間を表す語であっても話者が対象空間をどのように認知しているかによって｛안｝と｛속｝を選択するのであるとした．｛겉｝については，空間としての意味として用いられる例よりは，｛속｝の欠如を含み，表面的で可視的な部分，外形的な面を指示する意味として主に用いられるとした．

이정애(1996)は，認知言語論的研究ではあるが，{안}と{속}の意味の相異について，インフォーマント調査で得られた実際の言語資料を用いて意味領域を記述しようとした実証的な研究でもあり，本研究にも示唆するところが多いが，意味記述の面では残された問題もある．内外空間名詞の意味の重なりに関連して，開放性の空間は「안」，隠蔽性の加わった空間は「속」を用いるのが自然であるとしながらも，意

[21] ｛안/밖/속/겉｝の表記は이정애(1996)による．이정애(1996)では，박경현(1985)で｛안/밖/속/겉｝を内外概念語としたことに倣って，用語，形態素と意味資質を表す｛ ｝と［ ］の符号もそのまま使用している．

味領域の重なる部分については，話者がどう認知しているかによるとし，特に弁別の基準を示していない．

박지영(1996)では，形態素「겉，바깥，속，안」は，文や文脈のなかで用いられる場合に比べ，複合語を構成する形態素として用いられる場合にはるかに多様な意味を表すとみて，「겉，바깥，속，안」＋語根の複合語を対象に成分分析の方法で意味を分析し，これら形態素の多義，類義と対義の意味関係を明らかにしようとした．また，複合語の語構成においてこれらの形態素は意味的に多義性を持ち，多義の中心意味として，「겉」は状態を表す意味成分「＋드러나다」，「바깥」は「＋기준，＋外，＋방향」,「속」は「-드러나다」，「안」は「-드러나다，＋방향」 を挙げている．類義関係については，「겉」と「바깥」は状態を表す「＋드러나다」の意味成分が類義関係をなすが，「＋方向，＋表示」の意味成分を持つ「바깥」は「겉」と類義関係をなさないとし，「속」と「안」は「＋드러나다，＋마음」の意味成分の類義関係が成立するが，「＋方向，＋表示」の意味成分を持つ「안」は「속」と類義関係が成立しないとした．

박지영(1996)は，独立した名詞ではなく，複合語を構成する形態素を対象として，形態素としての多義性による類義関係と対義関係の重なりやズレを指摘しているが，このようなズレがより拡大した言語単位ではどう現れるかを見てみようとするのが本研究の一つの研究課題である．

신은경(2005)は，空間概念のうち位置を表す語彙を「位置語彙」とし，位置語彙を前後，左右，上下，内外，表裏の五つの領域に分類して，対立関係にある固有語の名詞「앞，뒤，왼，오른，옆，곁，위，아래，꼭대기，밑，안，밖，속，겉」などについて，複数の現代語・古語辞典と歴史資料を対象に分析を行い，その共時的な意味拡大と通時的な意味変化を記述した．「안，밖」は内外位置語，「속，겉」は表裏位置語に分類している．近代から現代への意味変化をみると，「안」は，＜일정한 표준이나 한계를 벗어나지 않은 영역(一定の標準や限界を超えない領域)＞という意味が加わり，「밖」は＜겉이 되는 쪽이나 부분 (表になる方または部分)＞，＜일정한 범위에 미치는 부분(一定の範囲に及ばない部分)＞という意味が加わり，「속」は意味の拡大が最も目立つもので，＜거죽이나 껍질로 싸인 물체의 들어간 부분(皮などに包まれた物体の中の部分)＞，＜여럿으로 이루어진 일정한 범위 안(複数のものからなる一定の範囲のなか)＞，＜사리를 분별할 수 있는 정신(物事の分け前ができる精神)＞などに拡大したことを指摘した．それに対し，「겉」は中世[22]から，近代と現代にいたるまであまり変化が見られず，＜밖으로 드러난 쪽이나 면(外側に向けて出されている方または面)＞，＜밖으로 드러난 모습이나 현상(外側に向けて出されている姿または現象)＞を表すとした．

신은경(2005)は，位置を表す固有語の名詞について，対立関係を中心にその意味の変化を記述したもので，文献資料に基づく実証的な研究であり，共時的な意味拡大の様子を捉えるとともに通時的な意味変化や多義化の様子を実証的に示しているという点で，共時的な研究の重ねが通時的な研究の根拠をなすという点で，本研究の方向付けにも示唆するところが多いと考える．

---

[22] 신은경(2005)では，位置語彙に目だった意味変化が現れた時期を基準にして，15～16世紀を中世国語，17～19世紀を近代国語，20世紀前半は前期現代国語，20世紀後半からは後期現代国語に区分している．

2.1.2. 空間語の認知言語学的研究

空間語の認知言語学的研究[23]は,「人間が概念を組織し, 構造化する方式が, 人間の身体および身体的経験によって制約されるため, 概念的構造が本質的に身体的経験から発生する」[24]と主張する認知言語学の観点から, 意味拡大や意味拡大による抽象化, 空間語の時間語化に注目して, その意味・形態の分析と意味の類型化を記述しようとした研究と, 空間の概念要素が身体化を通じて言語化し, 他の意味領域の概念化の根本的要素としてどう作用するかという認知的過程を解明して示そうとした研究に分けうる. 近年の空間語の研究の大部分を占めるこれらの研究は, 空間語の認知的概念化の過程の解明に重点を置いているため, 本研究の語彙の実証的な探求という方向とは異なる部分があるが, その結果として取り出された空間語の意味拡大の結果は, 本研究に示唆するところが多い.

以下では, 임지룡(1984), 박경현(1987), 김선희(1987, 1988), 서은(2004), 정수진(2010)を見ることにする.

임지룡(1984)は, ある語彙の意味域を把握するためには, 相互依存・対立関係にある語彙を把握することが重要であるとし, このような有機的関係を広げていくことで, その語彙の意味範疇が分かるとし, 基準点を中心におき, (＋)方向と(-)方向の極対称関係[25]を基に空間感覚語の意味特性を分析した. 空間感覚語の基本範疇は固有語の形容詞であるとして, 対義語の対をなすものに限定して8つの対を定めた. 空間感覚語は, ある基準点を中心に(＋)方向と(-)方向の極対称の体系を表すとし, 対称関係にある空間感覚語は意味構造に偏向性を表し, 無標項が有標項より積極的で生産的であることを指摘した. 空間概念語は, 具体的な長さ, 広さ, 体積を持つ中心語と呼応する場合は基本用法を表すことが多く, 抽象概念の中心語と呼応関係にある場合は主に拡大用法を表すとし, 中心語が抽象概念語の場合は客観的な測定が不可能であり, 比較の基準も話者の主観により異なることを指摘し, 極対称体系と時間的・抽象的段階への拡大過程を考察した.

박경현(1987)は, 現代韓国語の空間概念語[26]のうち, 位置を指定する上下(위, 아래, 꼭대기, 밑),

---

[23] 김동환(2010:6-7)によると, 認知言語学は,「言語が, 我々人間に与えられる情報を組織して処理し, 伝達する道具として機能するという言語観に基づいて自然言語を分析する言語学理論」で, アメリカで70年代後半, 80年代初頭に, ジョージ・P・レイコフ(George Lakoff), ロナルド・ラネカー(Ron Langacker), レナード・タルミ(Leonard Talmy)の研究から始まる. 認知言語学は体験に基づく言語理論で, 言語の研究に人間の本能, 身体, 人間の知覚と認知能力を活用する. したがって, 認知言語学では, 言語研究に先立ち, 人間の身体の様相を観察し, それを適切に把握することが言語分析の基礎であると見て, 言語の形式的構造は, 自立的なものではなく, 一般的な概念的組織, 範疇化原理, 認知の過程における処理メカニズム, 体験的・環境的影響を反映するものと見る.

[24] Evans & Green(2006, 임지룡・김동환 옮김 2008:168-169)を参照.

[25] 임지룡(1984)では, 対義関係を二元分類, 多元分類, 極対称, 関係, 階層, 逆対称の6つに分けている. 対義関係の間にどちらの方にも含まれない中間地域をおいて, 互いに正反対の方向を向けている語彙の間を極対称としたリーチ(Leech, 1981)より極対称の基準を取り入れている.

[26] 박경현(1987:5)は, 空間概念語とは, 空間を占めている対象の位置, 方向, 大きさ, 距離, 状態などを認識する知覚能力, すなわち空間知覚(space perception)を通して得られる概念を表す語を総称する用語であ

前後(앞, 뒤), 左右(좌, 우), 内外(안, 밖, 속, 겉), 側位(옆, 곁)の概念を表す空間概念語を対象に, その空間語の核心的な意味[27]を明らかにしたうえ, その意味の核心部分からからどのように意味が拡大していくのかを空間概念語の複合形態を中心に分析した. 分析に当たって, 空間概念語の属性を四つにまとめているが, 一つ目は, 空間概念語の意味分析は人間の身体との関連に注目して考察されること, 二つ目は, ある一定の参照対象を設定したのちに, それを基準に空間感覚語の関係を記述すること, 三つ目は, 空間概念語はある対象を基準に他の対象の相対的位置を表す関係的意味を持ち, 意味領域の拡大により時間的意味, 更には抽象的な意味を持つこともできるとし, 四つ目は, 空間概念語の基本方向体系は人間の知覚体系を基に形成されたもので, 可能性と対面性に基いて自己中心的に物事を知覚し, 相互作用する空間の中で正と負の関係が言語にも投影されるとした. 内外概念語の核心意味については,「안」は境界などに取り込まれた二次元的対象の中に向けた方向又は場所であるとし,「속」は境界などに取り囲まれた三次元的対象の中に向けた方向性または場所であるとした.「안, 속, 밖]は, 具体的な境界により取り囲まれた面または立体の内外境界を表わすとして, その境界により取り囲まれた対象を二次元の面として認識するか三次元的なものとして認識するかによって「안」と「속」を区別して使用するようになるとし, 三次元の対象は, その部分として二次元を含めるので,「안」と「속」のいずれも使用することができるとしている. [28]

「밖」については, 境界などに取り込まれた対象の, 境界を超えた側または場所を意味するとした.「밖, 겉」は同義関係または包括関係にあるとした.「안」に対して「밖」は従属部, 男子の活動領域, 基準超過を,「겉」は皮相部を表し,「밖」と「겉」は可視域を表すと説明した.

また, 現代韓国語(原文は「現代国語」である)の内外概念語は空間的関係から拡大されることがあるとして, 以下の通り五つにまとめている:

①内外概念語は, 男女の活動領域を表すことができ,「안」は女性の活動領域,「밖」は男性の活動領域を表すことができる.

②内外概念語は, 皮相と実相, 形式と内容, 肉体的活動と心的活動を表すことができ,「안」と「속」は心的領域と実質部を,「겉」は皮相部を表すことができる.

③内外概念語は, [±可視]を区別する意味を持つこともあり,「안」と「속」は不可視域を,「겉,밖」は可視域を表すことができる.

④内外概念語は, 一定の限界を基準とするときにその基準の未達と超過を表すことができ,「안」は基

ると定義した.

[27] 박경현(1987:8-9)は, 単語の意味を解明するには普通二つの方法が適用されるが, 一方は一語多義に基く方法で, もう一方は核心的意味に基く方法であるとし, 前者の方法は, 一つの単語が脈絡の中で持つ具体的な意味を一々記述することであり, (中略)後者の方法は, 一つの単語が持つ複数の意味の間の共通的資質を抽出して核心意味とし, この核心意味が実際の状況で人間の認知・推理能力によってどう具体的な意味に拡大していくのかを説明するとした.

[28] 例えば,「몸, 코, 귀, 입, 뼈, 주먹, 머리, 이, 배, 팔, 손, 가슴, 품, 집, 방, 광, 무덤, 굴, 구멍, 주머니, 자루, 통, 바구니, 상자, 독, 항아리, 병, 알, 옷, 산, 숲, 땅, 골짜기」は, 二次元の面や三次元の立体として認識される対象であるとし, これらの語は「안」や「속」のどちらとも自然に共に用いられると説明している.

準未達を，「밖」は基準超過を表すことができる．

また，認知言語学的な側面から，基本的には空間性を持っていない概念にも空間的類推と空間化隠喩が身体的・文化的経験を基に適用され，意味が拡大されるということを明らかにした．

김선희(1987，1988)は，知覚範疇に属する空間を表す言語表現を「空間語」とし，これと対照的に抽象的な時間の体系や概念を表す言語表現を「時間語」と定義し，順序，区間，方向，長さ，距離などの空間語の時間語化について考察した．「안」と「속」，「겉」と「밖」について，「안」はある空間における一次元の線で限定された境界線を表し，「속」は境界線から垂直に深く入っていく二次元の面を表すかまたはある事物自体によって二次元の空間がぎっしり詰まっている様子を表すとした．「밖」は一次元の線で定義される「안」や二次元の面で定義される「속」の相対語として用いられるが，「겉」は「안」または「속」の相対語としては用いられないと指摘した．これら「안，속，겉，밖」のうち，一次元の線である「안」のみが時間語として用いられ，二次元の面である「속」は時間語として用いられないとし，「밖」についても，二次元の面を対象とすることから，「속」の場合と同様に，時間語として用いられないとした．

また，「안」の空間的意味は＜ある境界線になる枠＞であるとし，時間語としての「안」は＜限定された時間の範囲＞を表わすとし，「5월，12시」といった時間の位置を表す時間語と「한 시간，10분」といった時間の量を表す時間語が「안」と結合すると，時区間の意味を持つようになり，＜時区間における動作の範囲＞を限定する意味を表すとした．加えて，時間語「안」は統合する助詞によって後続する動詞の種類と形態が制約されるとし，「안에」は，時間の位置を表す時間語と共起する場合に瞬間動詞や動作の終点を持たない動作動詞との共起に制約が有り，述語は予定，意図，推定等を表し，過去形を持たないとした．それに対し，「안으로」は，常に未来の時間を表し，過去時の時間語や過去時制とは結合せず，「－겠다，ㄹ 것 같다」や命令形等と共に用いられるとした．

김선희(1987,1988)は，空間語が時間語としてどのような意味をどのように表すかに焦点を当てた研究であり，空間語「안，속，겉，밖」については，これらのうち時間語として用いられるのは一次元の線で境限定された境界線を表す「안」だけであるとし，詳細に論じていない．しかし，時間語として用いられる「안」が統合する助詞によって，また，共に用いられる時間語の特性によって，後続する動詞の種類と形態に制約が生じることを指摘し，例示しているという点で，本研究に示唆するところが大きい．

서은(2004)は，空間語に表れる隠喩的概念化の様相を体験主義的観点から論じた研究で，空間語のうち，ある事物を基準に定めた位置概念を表現する「相対空間語」[29]に限定して，一般名詞の単一語と依存名詞の単一語を中心に，『21世紀世宗計画研究・教育用コーパス』を資料にして，空間語が隠喩的に概念化する様相，特徴と頻度等を隠喩の種類によって具体的に示した研究である．空間語に表れる概念的隠喩は存在，志向，構造隠喩の順に適用され，空間語は存在隠喩が容器，場所，事物隠喩のいずれかの過程を経て概念化することを例を挙げて論じた．存在隠喩の容器隠喩により体(心，感情)，状態，

[29] 서은(2004)の「相対空間語」は，홍종선(1992ㄴ)の「空間語自体が本来特定の位置の値を持つ絶対空間語」と「ある事物を基準として位置概念を表現する相対空間語」の分類による「相対空間語」である．

社会的概念，言語表現，社会組織，多数と範囲を「안」と「속」を用いて表すことができ，志向隠喩により物理的方向だけでなく各々の文化が志向する価値を表すことができるとして，「위，전체，중심，안，연결，목표，앞」等は肯定的価値を，「아래，부분，주변，밖，분리，목표 없음，뒤」は否定的価値を表すとした．志向隠喩には「위-아래」，「중심-주변」，「안-밖」，「앞-뒤」の隠喩があるが，「안-밖」志向性を持つ空間語は「겉，바깥」だけであり，「겉」は＜非公式-公式，真実と嘘＞の頻度が高く，＜重要-重要でない＞という隠喩の概念化の頻度は低いことを例示した．

정수진(2010)は，空間語の意味拡大の様相を総合的に明らかにすることを目的としたものである．空間概念は大きく空間名詞，空間形容詞，空間動詞，空間助詞の四つの形式によって具体化されるとし，認知言語学の経験主義的観点から空間語の意味拡大の様相と意味構造を分析した．「空間名詞」の範囲については，空間概念を指すもの，すなわち具体的空間性の事物が備えている共通の特性や条件を表すかまたは空間の一部を限定して指すものをいう[30]としている．物理的対象の一部分を表す空間名詞のうち，頻度の高い「안，속，밖，겉，아래，밑」を対象に空間的意味の非空間的意味への拡大について論じた．「안」の意味は，具体的な内部空間をあらわす＜物理的境界の内部＞から具体的な空間ではなく非空間的意味をあらわす＜範囲，限界，条件，基準内＞という意味に拡大しているとし，そのような意味拡大は，物理的な境界により派生した特性である＜閉鎖性＞によって範囲，限界，基準などの境界の概念に抽象し，空間化したとみている．＜밖＞の意味は，空間的意味の＜物理的境界の外部＞，＜物理的事物の表面＞から非空間的意味の＜範囲，限界，条件，基準外＞，＜それ以外は＞に拡大したと分析した．

これまでの先行研究を通して，韓国語の空間語の概念と範囲，分類はある程度確立したものと見られ，空間語に対する意味用法の分析も活発に行われてきたことが分かる．また，内外空間名詞の時間語化や抽象化に伴う結合関係の変化を観察して記述したり，認知言語学の体験主義の観点から空間語の多義性を分析したり，空間語の認知的概念化を調べるために，具体空間の意味から抽象的空間への意味拡大の様相を考察している．しかし，多くの研究が限られた用例に頼る研究であるという点と個別語の意味に関する研究が多く，類義と対義関係を含む，より体系的な意味関係を実証的に考察した研究は見当たらない．

2.1.3. 空間名詞の文法的要素への変化についての研究

これまでの空間名詞に関する研究は，空間語の概念や範囲，分類，個別空間語の意味記述，空間語の意味拡大等，語彙的な意味に関する論議が大部分である．しかし，空間名詞の意味領域が実体的空間の領域から時間的，心理的，抽象的，関係的意味領域に拡大していくにつれ，語彙的意味の変化は，

---

[30] 具体的には，物理的対象の形態的特性を指す名称として「점，선，면，입체」，このような内容を記述したり測定できる抽象的な環境の名称として「공간，장소，영역，위치」，これらの一部分を表す名称として「안，밖，앞，뒤，위，아래，옆，사이」を挙げている．

文法的側面の変化を伴うこともある.

このような空間名詞の文法的側面の変化については，これまでは形態論や文法論の側面でのみ論議が行われてきたが，本研究では，空間名詞の語彙的意味の変化によりどのような文法的側面の変化がもたらされるかを，用例を通して探ることを試みる．それに関連する先行研究として，이성하(1998)，안주호(1997)，남윤진(2000)，한용운(2003)，김한샘(2006)，목정수(2013)，이영제(2013)を検討することとする．[31]

이성하(1998)は，意味的に完全な単語（つまり，内容語又は語彙語）から個別意味を持つことなく文法的機能だけを主に担う単語（つまり，機能語）に変わる変化のことを文法化というとし，文法化をより広く認める立場を示している．言語単位の変化は連続性を持っているため，変化が始まる時点から変化が終結する時点までの全過程を文法化理論の研究対象に含めなければならないと見ているのである．また，このような文法化は，語彙的レベル，統辞的レベル，談話的レベルで行われるとし，語彙的レベルの文法化現象として，相対的関係の位置を表す関係表示名詞が物理的空間から心理的空間，論理的連結の表示に変化することを説明し，その実例の一つとして「밖에」を挙げている.

안주호(1997)は，「文法化」とは，主に語彙的機能をしていた語が文法的機能をするかまたは文法的機能をする形態の一部になること，あるいはあまり文法的な機能を持たないものからより文法的な機能を持つものに変化する現象であるとし，文法化を「完成したもの」に限定する既存の研究とは異なる立場を取り，文法化の進展の段階に対する判断は変化の過程における「程度性」によるべきであるとしている.

また，韓国語の名詞の文法化の方向性を調べるために，依存名詞を中心に，文法範疇に属する自立名詞，接詞，助詞，語尾へと文法化が進む過程を論じている.

안주호(1997:201)では，現代韓国語における空間名詞の助詞化について，潜在的にでも関係的意味を表していた「関係的名詞」の意味が拡大し，本来副詞句であったのが先行名詞との結合の強化により後置詞になり，また助詞となる過程を経るのが普通であるとし，従って，助詞となり得る依存名詞は主に「場所」を表し，具体性を持つ語であるとした．また，これらの助詞化の過程で，場所を表していたのが心理的な空間を意味するようになり，話者の主観的判断が介入する様態の意味を持つようになるとした．そのうち，統辞的な構成が融合により単一形態の助詞となる[32]例として「밖에」を挙げている．「밖에」は，純

---

[31] 本研究では共時的な観点から現代韓国語と日本語における内外空間名詞の文法化の一断面を見ていくことになるが，基本的に文法化は通時的な変化であることから，通時的変化の過程を考察した신은경(2005)と，時間語についての論考ではあるが，정동경(2005，2013)も参照した．정동경(2005)では後期中世韓国語（1447年の訓民正音諺解から1923の演經座談まで）の時間名詞の特徴と出現・変化・消滅の様相を考察して，先行語と時間名詞との結合関係，時間名詞と助詞との統合関係の変化を通して時間名詞の自立程度の変化を基に，語彙化と文法化したものと見られる語彙の通時的変化の過程を考察した.

[32] 안주호(1997：202)では，名詞から助詞への文法化には二つの形成過程があるとし，統辞的構成の副詞句が形態的構成の助詞になる場合と，単一形態の依存名詞が単一形態の助詞になる場合があるとした．前者の例として「-까지，-게/-에게，-께，-밖에等」を挙げ，後者の例として「뿐，만，대로，만큼等」を挙げて

粋な空間的場所を表す名詞「밖」と助詞「에」が境界の再分析と類推によって助詞として固まったもの[33]であるとし，助詞化の過程を次のように論じている：

(11) 병원의 자동문을 지나 밖에 나서자, 바람이 확 끼쳐왔다. (自立的語彙素)
(病院の自動ドアを通り，そとに出ると，風が吹きついてきた．)

(12) 그 일은 내 관심/소관 밖이다. (意味拡大)
(それはぼくの関心/所管外のことである．)

(13) 세월을 기다리는 도리밖에 없지. (限定の機能)
(年月が経つのを待つよりほかはない．)

(14) 단 하나밖에(*하나 외에) 없는 아들이… (限定の助詞)
(たった一人しかいない息子か…) (안주호 1997:208-209)

(11)の「밖」は自立的語彙素であり，一定の空間の外部を指す副詞語(外部空間の指示)で，後行の述語に制約はない．(12)の「밖」は，具体的空間から心理的空間への意味拡大により，心理上，外部を現し，対象となる先行名詞を否定する．この場合は否定語を述語として要求し，限定の意味を持ち，「외에」と入れ替えることができるとしている．(13)の「밖」は，「없다, 아니다, 못하다, 모르다」などといった否定語を伴う場合，「밖」と結合した先行名詞だけを指示する＜限定＞の意味を持つようになり，限定助詞「만」と入れ替えることで，「-만 있다」にすることができるとした．(14)の「밖」は限定の助詞であり，[밖에 없다]に構造化することができるとしている．「밖에」の持つ外部空間の指示性が否定語「없다」と結合して，その存在を一段と強調する機能を果たすようになり，意味の面では限定の意味から強調の意味へ拡大したものであり，「외에」と入れ替えできないとしている．

このように「-밖에」が文法的な機能に拡大することができたのは，具体的空間の指示から心理的空間の指示に，更に，隠喩によって，否定性の意味を持つものに意味が拡大されたためであるとし，「-밖에」の助詞化[34]の証拠として，例(15)のように「-밖에」の後ろに補助詞が付くという点を挙げている：

いる．

[33] 안주호(1997:41, 207)では，文法化を三つの段階に分け，第一段階は，自立的語彙素が多義化して依存的になる段階で，本動詞から補助動詞に，自立名詞から依存名詞になる段階であり，第二段階は，補助動詞や依存名詞が前後の要素と結合して依存度が高くなり，制約的に用いられる接語(clitic)になる段階であり，第三段階は，融合により語尾・助詞・接尾辞といった完全に異なる範疇になる段階であるとした．そのうち「-밖에」は文法化の第二段階の助詞であるとしている．

[34] 「밖에」の助詞化に関する研究である박승윤(1997)では，限定の意味を持つ「밖에」が一種の格助詞あるいは限定助詞であるとし，「名詞句＋밖에」が関連した受身化現象，尊称化現象などからみて，動詞の項となることも可能であるとした．また「밖에」が名詞句だけでなくほかの後置詞句にも自由に付くことからも，助詞とみることができるとしている．

(15) 그 나쎄에 그 정도로밖에는 처신할 수 없니?
(いい年をして，なんというざまだ.) (안주호 1997:210)

안주호(1997)は，文法化を「完成したもの」に限定するのではなく，語彙形態素の語彙的内容の喪失がはじまる段階を文法化の出発点とみて，文法化の進展の段階に対する判断は変化の過程における「程度性」によるべきであるとしている.

남윤진(2000:133)では，「밖에」には，＜そと＞の意味を表す場合と抽象化した＜排除＞の意味を表す場合があるとした.「밖에」が＜そと＞の意味を表す場合は，その分布が一般名詞と同様であるが，＜排除＞の意味の場合は常に先行要素を伴うとし，そのうち，先行要素が名詞句＋助詞構成である場合や動詞の副詞形である場合などは，修飾語と被修飾語の関係が成立せず，＜외에＞と置き換えることもできないということから，名詞句とは判断しがたいとしている.

このように名詞句と判断しがたい助詞としての用法が86.24%を占めるというコーパス[35]分析の結果から，「밖에」の文法化が相当進んでいると指摘し，次の例を挙げている.

下の(16, 17)は名詞句，(18, 19)は助詞として用いられた例である:

(16) 세포 내에는 밖에 비하여…
(細胞のなかはそとに比べて…)

(17) 시나 산문문학으로 표현할 밖에는/표현하는 외에는 딴 수가 없겠다.
(詩や散文文学で表現するほかは(表現する以外はほかに方法がないだろう.)

(18) 4학년까지밖에/*4학년까지외에 없는 중리분교를 수료하고…
(4年生までにしか/*4年生までのほかにないジュンリ分校を修了して…)

(19) 어렴풋하게밖에/*어렴풋하게외에 이해하지 못했다.
(おぼろげにしか/*おぼろげにほか理解できなかった.) 남윤진(2000:133)

한용운(2003)は，文法化の結果が依存名詞や副詞，補助動詞である場合，これは文法化ではなく，語彙化であるという立場を取っている. 依存名詞の文法化については，依存名詞は，自立名詞に比べ，指示的な意味が鮮明ではないが，依然として連体修飾語の修飾を受けることができ，助詞との結合ができるので，語彙形態素とみることができるとした. 意味の変化は言語単位の変化における必須の条件では

[35] 1980年以後に出版された文語・散文の刊行物を母集団にして，170種の単行本のテクストと新聞記事から構成された合計1,008,015語節規模のコーパスである.

あるが，意味変化が起こったからといって文法化や語彙化したと見ることはできないとし，その結果が多義語となる可能性もあるとして，文法化を文法的な結果に限定する厳格な立場を示している．空間名詞の文法化に関連しては，起源形式[36]に名詞を含めている「統辞単位結合体[37]」が助詞化したものとして，「밖에」を挙げている．中世国語から現代国語(以下では，現代韓国語と記する．)に至るまで，「밖」の変異の過程をたどり，15世紀には自立名詞から意味が分化して自立名詞と依存名詞が共存するようになり，さらに，19世紀には依存名詞と助詞が結合して文法的要素である助詞に分化し，現代韓国語では自立名詞「밖」，依存名詞「밖」，助詞「밖에」が共存するようになったと見ている．

김한샘(2006)では，関係の中で相対的に把握される空間名詞のうち，「앞，뒤，가운데，위，아래，안，밖」[38]を対象に，文献資料と現代韓国語コーパス[39]を用いて，通時的に意味変化を分析した．個別空間語の分析では，「밖」は，名詞＞依存名詞＞助詞＞語尾の全過程を経て，語尾としての用法まで範疇が変化したとみられ，文法化したとみることができるが，その他の空間名詞は，意味変化に範疇の明確な移動が見当たらず，まだ文法化が進んでいるとはみられないとし，依存的用法と助詞結合形の固定性が見られるだけであるとした．ただ，自立名詞として用いられるときは，[[[名詞][空間名詞]][助詞]]の構造となるが，依存性と助詞結合の制限性を獲得して依存名詞のように用いられると，[[名詞][[空間名詞][助詞]]の構造に変化していく傾向は明確であるとした．

목정수(2013:60)では，{X 앞/뒤/위/아래/안/속-에}の名詞は，先行名詞の時空間を特定化して助詞の機能を明細化する役割をする要素，すなわち方向の表示の「依存名詞」であるとみている．この場合，空間名詞の意味は，一般名詞の実質的意味に比べると，関係的で構造的な意味に属し，これは抽象/形式的な意味に近いということができるとしている．

이영제(2013)では韓国語の依存的な特性の名詞のうち，依存名詞とは性格を異にし，意味が実質的であるが分布は制限され，依存的特性を表す語彙的な部類の名詞を機能名詞に分類し，「일，이유，사실」といった補文名詞，空間名詞や時間名詞等の関係概念の名詞，依存用法の漢字語名詞をこの部類に分類している．そのうち依存用法の空間名詞は，非実質的な意味により文法的機能意味とつながる

---

[36] 한용운(2003)は，文法化以前の形式に対して，「起源形式」と命名している．ここで，起源形式は助詞に変化するすぐ直前の段階の形式で，語彙形態素であることもあれば，統辞単位の結合体であることもあるとしている．

[37] 「体言＋助詞」の構成や「動詞語幹＋語尾」の構成のように統辞的に意味のある単位をなす構成だけでなく，統辞的に一つの単位を成すことはできないが，文法化の起源形式になり得る形式を「統辞単位結合体」としている．

[38] 김한샘(2006)では，최경봉(1998)の名詞分類上の「様式－関係－次元－空間」の意味を持つ名詞のうち，「方位」に対する名詞と複合語を除外した空間名詞を選定して分析の対象としている．

[39] 延世大学校言語情報研究院で構築した「延世コーパス1～9」と「韓国語教育用コーパス」．

類型であるとして，これらの名詞を「様式的空間名詞」[40]に分類している．

이영제(2014:38)では，様式的空間名詞は主に＜状況，条件，環境，結果，(特定の)範囲＞などの意味に解釈されるとき，依存的な特性があらわれるとし，次の例を挙げている．

(20) 세상 사람들의 무관심 속에 버려지는 아이들이 많다.
(世のなかの人々の無関心のなかで捨てられる子供達が多い．)
(20)′ *속에 버려지는 아이들이 많다.
(なかで捨てられる子供達が多い．)

(21) 궂은 날씨 속에도 많은 관객들이 모여들었다.
(悪い天気のなかでも大勢の観客が集まって来た．)
(21)′ *속에도 많은 관객들이 모여들었다.
(なかでも大勢の観客が集まって来た．) 이영제(2014:38)

(20, 21)では，(20, 21)′ のように先行成分を省略すると非文になることから，「속」が先行する名詞に意味的に依存していることが分かり，自立名詞とは性格が異なると指摘している．

これまでの名詞の文法化に関する先行研究では，どのような現象を文法化とするか，その概念とメカニズム，対象の範囲，典型的な例の提示などが主に論じられてきた．しかし，内外空間名詞に関連しては，「밖」＋格助詞「에」が助詞化した「밖에」の分析に留まっており，それ以外の内外空間名詞の語彙から文法への変化を，用例をもって実証的に分析をして示した研究は，管見の限り，見当たらない．

そのような点で，이영제(2013)で提示している「依存名詞とは性格を異にし，意味が実質的であるが分布は制限され，依存的特性を表す語彙的な部類の名詞」という部類について，空間名詞を対象にさらに実証的な分析を進める必要があると考える．

2.2. 日本語の空間語についての研究

日本語の先行研究においても，空間語の語彙的意味用法の分析に注目した研究より空間語の抽象化や時間語への意味拡大の様相や文法化の問題，形式名詞としての意味用法に焦点を合わせた研究が多い．そのうち，語彙的意味を考察した森田由行(1988)，荒川清秀(2004)と江口正(2006)，名詞に接続する形式名詞「うち，なか」について考察した方允炯(방윤형，2007，2008)を見ていくことにする．

---

[40] 유혜원(2008:202-203)では，空間名詞を実体的空間名詞と様式的空間名詞に分類し，様式的空間名詞はさらに様式的空間自立名詞と様式的空間依存名詞に分類したが，様式名詞の詳細は論じていない．
이영제(2014:46-47)では，様式的空間名詞を細分類して，主導的機能を持つ様式的空間自立名詞と補助的機能を持つ様式的空間依存名詞に分けている．

2.2.1. 空間語の語彙的意味についての研究

森田良行(1988)は，日本語の基礎語彙のうち基礎的な和語を対象にその意味と用法を細かく分析して提示するなかで，ある一つの語をその語だけで考えるのではなく，分析するとき，その語と対応して逆の条件を満たす言葉や類似の条件構成をなす言葉を同時に扱うことが肝要であるとし，類義語や対義語を一緒に取り扱うことによって，各語の意味や用法の違いが際立ってくるとした．

「うち，なか，そと，おもて」についても対をなす語を一緒に取り上げながら，文のレベルでその意味用法を記述した．「うち」は「そと」に対する概念として，＜ある連続した空間に境界を設け，それを境としてその範囲をこえないところ＞を意味するのに対し，「なか」は＜他のものに挟まれ，囲まれた部分＞であり，完全に断絶した領域であるとした．また，「うち，なか」の違いについて，「うち」は＜「そと」に広がる領域を，ここまでと区切った線の範囲で＞という意味であり，時間や状況の用法においても＜ただある状態のあいだ＞というだけの意味を表し，「なか」とは差が際立つとしている．また，「そと」については，「うち」との関係から「そと」の意味用法を説明しようとした．ある範囲・領域において，その範囲・領域を超えない部分を「うち」とするとし，「うち」と「そと」とは，本来連続した存在であり，それを仮に仕切って，「うちに属する範囲」と「そとに属する範囲」と判断しているのであるとした．また，「そと」と「うち」を仕切る面や線の表側が「そと」，裏側が「うち」であるとした．「おもて」については，「おもて」は他者に見せるべきそのものの主たる側，つまり，「正面」であるとし，何らかの価値的な指標を備えている側であるとした．また，「おもて」は，平面状の物体の両面のうちの一方であるが，そのものの本来の機能を果たすための側，もともとほかの人を考慮して設けられたものの正面であるとした．

荒川清秀(2004)は，空間名詞を「トコロ性をもった名詞」とみて，中国語との対照を通してその「トコロ性」のなかみを考察した．名詞と動詞との組合わせには「トコロ的な結びつき」と「非トコロ的な結びつき」があると指摘し，また名詞のトコロ性というのは，名詞の持ついくつかのカテゴリーの一つであって，そのうちのどの側面を引き出すかは動詞によって違うとし，動詞との関係で助詞の前にくる名詞が規定されるとした．

江口正(2006)は，「うち」の後ろにどのような格助詞がつくかによって，典型的に共起する述語が変わることを指摘した．例えば，「うちに」は存在の場所を表す述語と共起し，[うちから]は出発点を表す述語とよく共起するとし，その分布は，「うち」が表す「範囲」の意味と格助詞の用法の相互作用によって規定されるとした．これは，＜集合の範囲＞を表す「うちで」と助詞を伴わない「うち＋∅」においても同様であり，「うちで」は後ろの名詞の意味に対比的な解釈を受けることになるとし，述語に関しては制約がないようにみえるが，後ろの名詞の解釈には制限があるとした．

方允炯(2007)は，空間語「うち」について，名詞に接続する形式名詞「うち」の意味と機能を＜空間，時間，状況，範囲＞に分けて，明治期と現代の用例を取り上げて比較した．明治期は，基本的意味である＜空間＞が中心的な意味・機能であったが，現代に入っては，基本的＜空間＞としての意味はその勢力を失い，固定化したタイプしか用いられなくなり，＜時間＞を表す意味用法が中心的な意味・機能とな

っているとした．＜範囲＞を表す用法の場合も，明治期には＜比較の元を表すタイプ＞が中心的な意味・機能であったのが，現代に入っては，＜量的限定を行うタイプ＞の用法が中心であるとした．

方允炯(2008)は，名詞に接続する形式名詞「なか」は，現代においては＜空間＞を表す用法のみならず，＜状況＞を表す用法に拡大したことを指摘し，動詞に接続する「なか」の場合は，明治期には＜空間，時間，状況，範囲＞を表すことができたが，現代に入っては，そのうち＜時間＞を表す用法はなくなったとしている．

2.2.2. 空間語の認知言語学的研究

日本語の空間名詞について認知言語学的研究では，空間概念の言語化，空間語の意味分析を通しての日本語の認知類型の考察，言語的表現に影響する要因の分析といった研究が多い．

以下では，時間語化を論じた籾山洋介(1991)，空間名詞に付く助詞や動詞との関係を論じた田中茂範（1997），空間認知の類型を分析した김성경(2010)を見ることにする．

籾山洋介（1991）は，多義語[41]の分析を通して基本義[42]を明らかにし，さらに基本義を含む複数の多義的別義の相互関係を明示的に示すためのケーススタディーとして，空間語の時間語への転用を考察した．空間表現の時間への転用については，空間を基本義とするある種の名詞(例えば，辺り，そば，うえ，うち等)は時間へも転用可能であるが，逆に時間を基本義とする語は空間へは転用できないということを言語事実に基づいて実証した．また修飾語を伴わないときは必ず空間を表すが，時間を表すときは必ず修飾語を必要とすることを明らかにした．それに対し，時間を基本義とし，空間へも転用できる語はないことから，空間から時間への転用は一方向性を表すとした．

田中茂範（1997）は，日本語の空間表現としての助詞の特性について考察した上，英語の前置詞による空間表現との類似点と差異点を意味論的観点から比較対照して，日本語と英語の空間表現の意味構造を解明しようとした．日本語の空間表現は二つに分けることができるとし，空間表現として使用される助詞である「に，で，を，から，まで，へ」を「空間辞」とし，空間名詞と空間辞が結合した形態を「空間詞」と呼び，「中に，上で，下まで，外へ」と「トコロ」を「空間詞」として規定した．また，空間名詞を用いる空間的表現では話者の視点が関係すると見て，「視点内在表現（直視的表現）」と「視点不在表現（非直視的表現）に分けて説明している．

김성경(2010)では，日本語の空間指示語の分類及び意味分析を通して，日本語の空間認知の類型

---

[41] 籾山洋介(1991)は，多義語の定義として国広哲弘(1982:97)の定義を引用しているが，ここではそのまま再引用する．「多義語とは同一の音形に，意味的に何らかの関連を持つ二つ以上の意味が結び付いている語を言う．同音異義語とは，同一の音形に，意味的に関連を持たない二つ以上の意味が存在する場合に生じる二つ以上の語のことである．」

[42] 籾山洋介(1991:188)は，多義語の複数の意味の中で最も基本的(あるいは，プロトタイプ的)と考えられる意味を「基本義」と呼ぶことにしている．

を体系的に記述するための基盤を提示し，それを空間に関する語彙教育の理論的根拠にしようとした研究である．日本語の空間指示語の範疇化の要素として重力，視線，可視性，距離，形態，介入性，近接性が作用すると主張し，これらの要素に基いて空間指示語の意味分析を単純な羅列ではなくより明確に簡略化し，体系的に記述しようとした．内外空間名詞については，「なか」と「そと」を「対立型空間指示語」に分類して，＜ある境界によって取り囲まれた領域＞を「なか」，それ以外の領域を「そと」とした．また，場所を表す「に」と結合する基本空間表現を対象に，「なか」は参照物の接触(内部)領域を，「そと」は参照物の非接触(外部)領域を指示し，「なか」は参照物自体の内部空間が意義性を持たない場合や，意義性を確保していても，参照物が「連結の媒体」と解釈される場合，「なか」は参照物の非接触(外部)領域を指示するとしている．

日本語の空間語の研究では，個別語の語彙的意味用法の抽出や分析，記述に関する研究は限られており，認知言語論的観点からの空間語の分類，意味拡大の分析，空間概念の空間語化の研究が活発で，日本語の空間認知類型を解明しようとする研究が多い．また，空間語の意味拡大による時間語化や抽象化の研究においても，単に空間名詞の語彙的意味の変化に留まらず，空間名詞と助詞との結合関係の制限など文法的側面の変化に注目した研究が多い．そこで，韓国語と日本語の空間名詞を比較対照するためには，基本的な言語資料の構築のために，内外空間名詞の語彙的意味の綿密な分析から始まる必要があると考える．

2.2.3. 空間名詞の文法的要素への変化についての研究

以下では，日本語の文法化研究のうち，文法化の範囲と概念等について論じた研究として，三宅知宏(2005)，大堀壽夫(2005)，砂川有里子(2000)を，空間的名詞(特に内外空間名詞)の文法化や形式語化を論じた研究として，江口正（2006），日野資成(2001)，塚本秀樹（2006，2009）を，韓国語と日本語の文法化の対照研究として塚本秀樹(2001，2009)，堀江(2005)，朴江薫（2014）を見ていくことにする．

三宅知宏(2005)では，現代日本語における「文法化」とは，「内容語だったものが機能語としての性格を持つものに変化する現象と言える」とし，その変化の過程には次第に変化するという漸次性とカテゴリーの連続性が見られるとした．その点で，文法化に関する共時的な研究の意義として，同一の形式で，内容語的な用法と機能語的な用法を併せ持つ場合，その用法間の連続性および両者の有機的な関連性を捉えることが可能になり，文法化後の機能語としての意味・文法機能を説明する際に，文法化前の内容語としての意味からの類推が可能になることを挙げている．

大堀壽夫(2005)では，文法化の典型例を「自立性をもった語彙項目が付属語となって，文法機能を担うようになるケース」すなわち脱語彙化と規定し，通時的変化の結果として現れたものに限って文法化としている．また，文法化の動機付けとして，具体的領域から抽象的領域への概念の拡大としてのメタファーと，同一領域における焦点化のシフトとしてのメトニミーという二つのメカニズムを挙げ，文法化の5つの基準を提示した．意味機能の面では具体的な意味から抽象的な意味に，範例の面では開いたクラスから閉

じたクラスに，標示の義務性では随意的であったのが義務的に，形態の面では自由形式が拘束形式に，文法作用の面では相互作用していなかったのが相互作用するようになるとし，下記の図にまとめ，文法現象をつぶさに見ていくことで，文法機能の明確化と他の言語との比較ができるとしている．

表 1. 文法化の度合い-大堀壽夫(2005)

←低い	(文法化の基準)	高い→
具体的	意味・機能	抽象的
開いたクラス	範例の成立	閉じたクラス
随意的	標示の義務性	義務的
自由形式	形態の拘束性	拘束形式
相互作用なし	文法内の相互作用	相互作用あり

砂川有里子(2000)は，「文法化」とは，実質的な意味を持つ語が機能語へと変化することで，空間を表す動詞や名詞の時間表現への変化もその一つであるとし，文法化の重要な特徴を次のようにまとめている:

意味変化とともに様々な形態的・統語的変化が起こる．

意味変化はランダムなものではなく，認知的に動機付けられている．

意味変化は具体的意味から抽象的，一般的な意味に進む．

さらに，以上の変化は段階的・連続的なものであって，元の語彙のカテゴリーとの間に明確な線を引くことは難しいとした．空間的概念を表す名詞および動詞が時間的概念を表す付属語へと変化する文法化現象を考察し，そうした空間から時間へのメタファー転換を動機づける意味的要因，さらにはそうして付属語化されたメタファー表現の特性について「トコロ」などを中心に分析を行った．その結果，空間概念の言語表現によって時間概念を表現する際は，メタファーによる空間から時間への意味の転写が起こり，空間的概念を表す語はもとの語とは別の文法カテゴリーに属する語に変化したり，対の一方の表現しか用いられなくなることを明らかにした．

日野資成(2001)は，日本語の名詞や動詞がそれぞれ形式名詞や補助動詞に文法化するとき，語用論的・意味論的変化が観察できるとし，抽象化，抽出化，意味の希薄化を挙げている．抽象化は具体的な意味がなくなり，抽象的な意味が現れることで，抽出化は意味の部分的喪失を，意味の希薄化は意味の喪失であるとし，抽象化の方向として名詞の場合は＜ものから空間，空間からこと/時間，空間から質＞への変化を，動詞の場合は＜物理的から心理的＞方向への変化のモデルを提示した．文法化の意味的制約として「関係概念」(相対的概念)を挙げ，文法化する語彙項目のうち，空間を表す名詞を入れている．空間を表す語彙はそれぞれの位置が，基準点や空間によって決まる語彙であり，具体的な「空間」から「時間」への抽象化の例として「うち」，「かぎり」，「まえ」，「すえ」，「さき」，「あと」を挙げ，「うち」の場合は，「空間」と「時間」の意味の場合の両方に＜限りのある＞という意味を維持し，抽象化するとした．

江口正(2006)では,「うち」という一種の形式名詞が単独で助詞のようなふるまいをし,辞として使われる現象に注目し,同様の意味を持つ「なか」では単独の辞的用法がないことから,「うち」のこの用法を持つこと自体は「うち」の特質であるとした.また,「うちに」[うちから]については,ほぼ「うち＋に」「うち＋から」に分析することができ,その意味では特に複合辞的な性質を考える必要がないが,「うちで」と「うち＋φ」は,その分布に特殊な性質が加わり,その特殊性のゆえに複合辞的な性質を獲得しているとした.つまり,複合した形式ではないが,辞としての性質を持つに至ったものと判断している.江口の論旨を受け入れることにすると,「うち」は空間を表す名詞から形式名詞に,形式名詞からさらに文法性のより強い「辞」へと,文法化が進んでいるということができる.

塚本秀樹(2006)では,日本語と朝鮮語の対照を通して両言語の類似と相異を示しているが,位置を表す名詞の対照の一例として「内(うち)/안;속」を取り上げている.日本語では空間名詞「うち」が用いられるが,対応する朝鮮語では「안,속」ではなく「동안에,전에,머지않아/조만간」などが用いられるとし,これは,日本語と朝鮮語の相違,具体的には日本語の方が文法化が進展しているということを示す現象であるとした.その文法化の様態を対照する中で,「(F)位置を表す名詞」の項目で,「内(うち)/안<an>;속<sok>」を挙げ,日本語の位置を表す名詞「うち」が位置の意味を失い,転じて一定時間の間隔を表すのに対し,韓国語の「안,속」は文法化が生じておらず,元来の位置の意味が失われていないとし,結論として,「日本語と朝鮮語の相違を引き起す根本的な要因として,日本語の方が朝鮮語よりも文法化が生じている,といった文法化の進展の違いを導き出すことができる.こういったことが根本にあるため,種々の言語現象で両言語間の相違となって現れる」とし「文法化に着目すれば,種々の言語現象における両言語間の相違を統一的に捉え,適切に説明することが可能になる」として,最終的な結論の中で「両言語における文法化の進展の違いは,形態・統語的仕組の違いというさらに根本的な要因と強く結びついており,これに由来したものである」としている.

堀江薫(2005)では,言語類型論の観点から韓国語と日本語の文法化の対照を行った結果,表面的には多くの共通性が認められる反面,文法化パターンの生産性(拡大の度合い)や具体的な文法化の経路の詳細には相違点があるとし,名詞の文法化,アスペクト形式の文法化,活用形の文法化に分けて考察した.名詞の文法化に関連して,日本語の形式名詞は,内容語から文法形式への変化という多様な文法化のプロセスを体現[43]している品詞であり,日本語の形式名詞と概ね同様とされる韓国語の依存名詞でも文法形式に転じる現象など全体的な類似性が見られるが,詳細では相違点があるとし,日本語の場合は「品詞くずれ(脱範疇化)」[44]の現象が観察されるが,韓国語の場合はあまり見られないとした.このよ

---

[43] 「名詞」から「補文化辞,接続助詞,終助詞」,「名詞+格助詞」から接続助詞,接続詞,終助詞」,「名詞＋述語」から「アスペクト・モダリティ形式」になるにつれ,名詞としての特徴を喪失するようになるとした.

[44] 堀江(2005:98-99)は,日本語の形式名詞は「ものを」「もので」「ところが」「ところを」「ところで」といったように後続する格助詞と一語化し,名詞は名詞的特徴を,格助詞は格表示機能をそれぞれに喪失するが,韓国語の場合,このような現象は,依存名詞と対格助詞が結び付いて「～のに.～ものを.」という意味を表わ

うな名詞の品詞くずれの現象に関する両言語の相違は，品詞間の境界（例：名詞と副詞的要素）に関して日本語の方がより連続的であるということを示唆するとしている．

朴江訓(2014)では，文法化の観点から韓国語と日本語を対照しているが，「韓日両言語は形態類型論的に同一の膠着語に属するが，韓国語は多くの文法カテゴリーにおいて日本語より文法化の度合いが低い」という仮説を立て，その主張を裏付けるために，韓日両言語の6つの文法カテゴリー[45]に起因する可能性を提示し，そのうち，否定呼応表現「밖에」と「しか」の文法化の度合いを比較した．その結果，「しか」が「밖」に比べ，文法化の度合いが高いと主張している．「밖에」が名詞句に後接する場合は，多重否定呼応表現構文が許されるが，名詞句以外の項目，例えば，複合助詞，後置詞，引用マーカー等に後接する場合は多重否定呼応表現構文が許されない．それに対し，「しか」は複合助詞，後置詞，引用マーカー等に許されるので，「しか」が文法化の度合いが高いということができるとし，そのような結果となった理由として，「しか」が「밖」よりはるかに以前に出現して使用されてきたという出現時期のズレとそれによる「頻度効果」をあげている．

これまで日本語の文法化についての先行研究を検討した結果，韓国語と日本語の文法化研究で論じられている問題は概ね共通する部分が多く，空間名詞の文法化現象の方向や現れ方も共通する部分が多い．しかし，実際に事例の分析においては相異する部分が多いということが指摘されており，塚本(2006)では，その違いの原因として，韓国語と日本語の文法化の進展の違いを挙げており，堀江(2005)でも，そのような相異が見られる原因として，「品詞くずれ」という文法化現象の進展の度合いに差があることを指摘し，朴江訓(2014)も「밖에」と「しか」の例を通して韓国語と日本語の文法化の度合いに差があり，日本語における文法化が進んでいるということができると指摘している．しかし，これらの指摘は限られた対象に対して，限られた用例を用いてその結論が出されたものであり，より綿密な検討が必要であると考える．さらに，同じ意味範疇で対をなす空間名詞は，それぞれどのような様相を表すかも検討の対象にする必要がある．

また，韓国語と日本語各々の文法化に関する研究は蓄積されているが，韓国語と日本語の空間名詞の文法化を対照した研究はあまり見当たらず，特に韓国語を中心に据えた研究は，管見の限り，見当たらない．そこで，これまでの研究の結果を踏まえて，現在という断面に現れる語彙的要素から文法的要素への変化の様子を観察して記述する必要があり，それは通時的文法化研究にも繋がるものであると考える．

す「kel」以外あまりみられないと指摘している．

[45] 詳しくは，(i)否定呼応表現，(ii)アスペクト形式，(iii)文末形式，(iv)複合動詞，(v)複合助詞(vi)補助動詞の場合を挙げている．また，韓日両言語においてこのような相違点が見られる理由として，(i)形態・統語論的要因，(ii)各文法カテゴリーの出現時期のズレ，つまり通時的要因，(iii)言語使用と社会的・文化的認知との相互関係のズレを挙げている．

第3章　本研究の基本的な観点

本研究では，ある語彙の意味は，単独の個別の語彙のレベルではなく，文の他の成分との結合関係と意味上の係わりの中で意味構造体のレベルで実現されるという立場をとる．

本章では論を展開する上での基本的な観点について，3.1.「意味構造体としての連語の観点」，3.2.「本研究で用いる名詞分類と動詞分類」の二節に分けて述べる．3.1. では，本研究の考察の対象である空間名詞の語彙的・文法的特性による意味記述の問題と，空間名詞の意味分析に関する基本的な観点として，意味構造体としての連語の概念と連語構成，コーパスに基く記述の必要性について論じ，3.2. では，既存の名詞分類と動詞分類を基に，空間名詞と共に現れる名詞と動詞を分類するための分類基準を立てる．

3.1. 意味構造体としての連語の観点

＜空間名詞の語彙的・文法的特性による意味記述の問題 ＞

位置を表す空間名詞の意味は，空間名詞に本来内在している意味ではなく，何らかの基準となる対象があって，その基準となる事物を前提にして成り立つものであるとされる．実際に，基準となる事物を指す隣接成分を伴わなければ空間名詞が意味をなさないか，曖昧になる場合がある．

本研究で分析の対象としている内外空間名詞「안，속，밖，겉/うち，なか，そと，おもて」についても同じことが言える．次の例を見てみよう:

(22) a. 형이 방 안으로 들어갔다.
（*lit.* 兄が部屋のなかに入った．）
b. 형이 안으로 들어갔다.
（*lit.* 兄がなかに入った．）

(23)　형이 ?방 속으로 들어갔다.
（*lit.* 兄が部屋のなかに入った．）

(22a)は，内外空間名詞「안」が「방」という先行名詞を伴い，＜部屋のなか＞という具体的な空間を表す．(22b)「안」は，その空間的意味を限定する先行成分を持たないが，後行する動詞「들어가다」によって「안」が移動先の内部空間を表すとみることができる．このように，ある語彙の意味は，単独の語彙でその意味を表すことができる場合もあれば，他の語彙との結合関係のなかでその意味が実現されることもある．(23)は，(22a)の「안」を「안」と類義関係にある「속」に入れ換えた例であるが，なんとなく不自然な表現になる．このように，語彙的・文法的に正しい結合の条件が満たされていても，語彙間に存在する条件が満たされていない場合，不自然な表現になる．以上の観点から見ると，「방」と「안」が「방」と「속」の構成より自然な連結構成であると言うことができ，先行名詞「방」の意味特性から，「속」より「안」を選択した方

が自然な表現になると言うことができる.

このように, 位置空間名詞に属する内外空間名詞の意味は, 何らかの基準となる事物を前提にして成り立つものである点と, 語彙間に存在する条件により決まるという点を踏まえると, 空間名詞の意味を記述するためには, 空間名詞の前後に現れ, 空間名詞と共に意味を実現する語彙に注目する必要がある.

(24) a. 48시간 안에 결정을 내리라는 것이었다. ＜CH000084＞
(48時間以内に決定を下すようにということだった.)
b. *φ안에 결정을 내리라는 것이었다.
(*φうちに/以内に決定を下すようにということだった.)

(24a)は時間を表す名詞句「48시간」と「안에」の連結構成が＜一定の限られた時間の範囲＞を表すものである. それに対し, 時間を表す名詞句が省略された(24b)は, 単独の「안」だけでは意味が成立せず, 非文になる. このようなことから, (24a)のように時間の範囲を表わす名詞の修飾を受ける「안」は, 「一定の限られた時間の範囲」を表わすとされるが, 実際は, 単独の「안」だけでは意味をなすことができず, 「時間名詞＋안」の条件が満たされたときに「안」の＜時間の範囲＞という意味が実現されると見なければならない. 即ち, (24a)の時間の範囲を表す名詞の修飾を受ける「안」と(22)の具体空間を表わす「안」は, 異なる結合の条件を持つと言える.

(25) a. 명준은 어둠 속에서 몸을 도사렸다. ＜AE000094＞
(ミョンジュンは暗闇のなかで体を沈ませた.)
b. ?명준은 φ 속에서 몸을 도사렸다.
(ミョンジュンはφなかで体を沈ませた.)
c. *명준은 어둠 φ에서 몸을 도사렸다.
(ミョンジュンは暗闇φで体を沈ませた.)
d. ?명준은 어둠 안에서 몸을 도사렸다.
(ミョンジュンは暗闇のなかで体を沈ませた.)

(25a)「속」は「어둠」という名詞と共に＜暗闇のなか＞という状況を表す. それに対し, (25b)「속」は, その基準となる事物を指す修飾成分がなく, 「속」の意味が曖昧になる. また, (25c)のように「속」を取り除くと, 「어둠＋에서」だけでは＜暗闇のなかで＞という状況の意味を表わすことができず, 文法的にも非文になる. また, (25d)は「속」を類義関係にある「안」に入れ換えた用例であるが, 文法的には正しくても, 何となく不自然な表現になる. このことから, 語彙の選択には語彙間の共起関係に制約が見られ, そのような制約が語彙と語彙との連結の際に一つの条件として作用するということができる.

上記の(22～25)の空間名詞「안, 속」と連体修飾語の意味関係からも分かるように, 空間名詞の意味領域を記述するためには, 単独の空間名詞の意味の分析だけでは不十分で, 共に用いられる前後の要素

の意味特性を検討しなければならない.

空間名詞の意味の記述に関連して，実際の意味の実現のレベルにおける意味特性の把握や意味領域の記述が十分に行われたとは言い難く，より徹底した観察と分析が必要であり，このような語彙的な側面からの実態の把握は，空間名詞の文法的側面の特徴にも繋がるものであると考えられる.

空間名詞の語彙的・文法的特性に関連して，최경봉(1998)は，空間名詞の関係名詞としての特性を取り上げ，空間名詞と時間名詞は実体を存在させるためのうつわの役割をするという点と，単一に対応する具体的な指示体がないという点で，関係意味を持つとみて，空間名詞を関係名詞に分類している.

このような観点からみると，空間名詞と共に用いられる前後の要素としてどのようなものが現れているか，その意味特性は何か，その意味特性が空間名詞の意味の実現にどう係わってくるかを観察することは，内外空間名詞の意味領域を分析し，記述する上で有効な方法となると考える.

さらに，空間名詞の意味の記述に関連して，1.3.1.問題の提起においても触れているが，空間名詞の意味を記述するためには，類義関係と対義関係にある語彙について，語彙の意味が実際に実現された用例を綿密に観察したうえで，その結果から，語彙間の共起関係の傾向をつかみ，客観的に提示することが重要である.

＜意味構造体としての連語の概念と連語構成＞

上述した通り，空間名詞は，自立名詞として実質的な空間的意味を表すこともあれば，単独ではその意味を正しく実現することができず，修飾成分や述語等との関係の中でその意味が実現される．本研究では，以上の空間名詞の語彙的・文法的特性に関する議論を踏まえ，韓国語と日本語の空間名詞は，「空間名詞の前後に現れる語彙との結合関係によってその意味が限定されるか，またはその意味が具体的に実現される」という立場から，語彙間の共起関係に焦点を当てる「連語」の観点を取り入れる.

語彙の意味について考えるにあたって，個別の語彙を，単語のレベルではなく，共に現れる他の要素との関係の中で把握しようとする考え方として，連語関係（collocation）[46]の概念を初めて提案したFirth(1951)を挙げることができる．Firth(1951：192-194)は，「ある語彙の意味はそれと共に用いられる語彙によって把握される」とし，[47]語彙間の関係を意味の連想関係と文法的関係に二分した．そのうち，前者，即ち意味の連想関係をcollocationとした．また，単語の語彙的意味は，複数のレベル[48]における多様な陳述を通して得られるものであるとする．そのうち，連語の意味は，単語の意味に対する概念的または抽象的な接近と直接的に関連するものではなく，結合のレベルから抽出されるものであると指摘し，「night」

---

[46] 南潤珍(2006)では，「連語関係」とは英語‘collocation’の訳語で，韓国語学では，文脈によって「連語関係」，「連語構成」，「連語」等に訳されたものであるとし，日本語学では，亀井他(1996)によると，「縁語関係」，「連語関係」などの訳語とともに「コロケーション」が用いられているとした.

[47] Firth(1951)はその例として「ass」を挙げて説明している：「ass」という単語の意味の一部が連語(collocation)による意味であるということを共に用いられる単語を通して理解することができる．「silly, obstinate, stupid, awful, egregious」などと習慣的に共に現れるうちに「ass」の意味を形成する.

[48] 詳しくは，綴字のレベル(orthographic level)，音韻論的レベル(phonological level)，文法のレベル(grammatical level)，連語のレベル(collocational level)等

の持つ意味のうち一部は「night」と連語をなす「dark」によって得られるものであり，同じく「dark」の意味のうち一部は「night」との共起関係を表すとしている．

また，Sinclair，J..(1991)では，連語（collocation）を「あるテクストにおいて，互いに短い距離の中に現れる2つあるいはそれ以上の語の出現」であるとし，連語（collocation）の研究においてはコロケーションの範囲の設定が問題となるとし，明確な基準を設定することは難しいため，研究者によって異なる基準を設定することになると指摘した．

韓国語の研究においても，語彙の意味の実現に関連して，文における単語と他の成分との関わり合いについて，「連語」をはじめ，意味構造体をめぐる様々な議論が行われている．連語の概念や「連語」という用語を用いていないが，連語に通じる観点から語彙の意味を考察することを主張した研究として，노대규(1988)は，ある単語の意味は，その単語と概念的な係わりを持つほかの単語の意味によって明らかになるとし，ある言語の語彙的構造を分析するためには，系列関係[49]と統合関係を見なければならないとした．また，김광해(1993)は，ある単語について正確な意味を記述するためには，その単語の定義に依存するのではなく，その単語が前後のどのような単語と連結されているか，または連結されていないかという，その単語の用法に関する情報を提供するのが重要であるとした．

実際に「連語」という概念と用語を取り入れた連語研究は，連語の識別や分類を中心とする立場と，語彙間の共起関係の究明を通して言語現象を説明しようとする立場に大別できる．

まず，前者の立場に近い研究は，連語関係は特定の言語構成に現れるものであるとみて，どのような構成を連語もしくは連語構成として識別すべきかという連語の識別の問題を中心に議論した研究である．

そのうち，김진해(2000)では，特定の語彙が他の語彙を要求することによって発生する語彙素の間の制限的共起関係を「連語」と定義し，「連語構成」は，単語の意味拡大により語彙の意味関係の変化をもたらす重要な要素の一つであるとし，連語を語彙的連語と形態・統辞的連語に分類している．[50]また，임근석(2002)では，連語を「広義の連語」と「狭義の連語」に分け，前者は全ての言語単位を対象にして，その言語単位が典型的に結合する共起関係を指し，連続的に現れる全ての連語単位の特性を反映することができるとし，後者は，語彙素の相互間または語彙素と文法素の間の緊密な結合関係であるとし，狭義の連語をさらに語彙的連語と文法的連語に二分している．また，狭義の連語のうち，語彙的連語とは，文の中で一定の統辞的構成をなす二つの語彙素が互いに高い共起性を現し，分布の制約があり，意味的に透明かまたは半透明な場合をいうとしている．

それに対し，後者の立場の研究として，より幅広い連語と連語関係を認めた上で，そのような連語構成

---

[49] 노대규(1988)では，系列関係は，ある一つの言語表現において，相互交代できる語彙要素の相互関係であり，統合関係は，ある一つの言語表現を成している構成関係であるとした．

[50] 김진해(2000)における「語彙的連語」は，特定の語彙が概念的に他の語彙の出現を強制するものとして「눈이 부시다，개가 멍멍 짖다」を例示し，言語社会の構成員により習慣的に構成された結合関係として「목이 잠기다，몸부림을 치다，뜨거운 박수，열광의 도가니」を挙げている．また，「形態・統辞的連語」として，様態副詞による連語「단지～ㄹ뿐이다/-밖에 없다，반드시-야 하다，설마～-ㄹ까」，否定極語による連語「결코～아니다」，依存名詞による連語「가는 길에，그 탓에，그럴 리가 없다」，補文動詞による連語「-을 명령하다，주장하다，-지 걱정이다」を挙げている．

と連語関係を以って何をすべきかという観点に基づき，実質的な言語現象及び言語事実の究明を試みた研究もある．

そのうち，南潤珍(2006)では，語彙論的単位と言い難い構成でも構成要素の語彙が高い共起頻度をもつのであれば，それも連語関係の一種と看做す観点があるとし，このような観点に立つと，類義語の使い分け方の記述はそれぞれの語彙の連語構造の記述にほかならないとし，連語研究の対象範囲をより広く捉えている．また，南潤珍(2007)では， コロケーション[51]を語彙間の関係の問題として捉え，頻度や距離などの量的情報に基づいて語彙間の共起関係を探る研究としての立場から，形態・統辞・意味的に適切な語彙をあてはめる知識だけでは得られない，より自然な韓国語を使いこなすための能力との関連に注目している．

「連語」という用語に関連しても，김진해(2000)と임근석(2002)の規定する「連語」は，Firthの「連語(collocation)」に比べ，より限られた範囲の，共起性の高い語彙同士の結合関係に限定されたものである．南潤珍(2007：612)によると，このような観点の違いは，もともと英語学の術語であるcollocationの訳語を定めるのにも反映されているという．英語のcollocationは，語彙間の共起関係を意味する場合と複数の語彙の共起でなされた構成体を意味する場合とがあり，文脈によって区別されるが，前者の立場を取る研究では，collocationを「연어」(連語)と訳し，共起する語彙に制約を持つが，意味の透明性は維持されている語彙構成を指すときに用いる．また，この語彙構成の要素になる語彙のうち，意味又は統辞面で中心的役割を果たす語彙に対して「연어핵」(連語核)，そうでない構成要素に対しては「연어변」という用語を用いて区別する．後者の立場では，collocationは文脈によって，「연어관계」(連語関係)，「연어구성」(連語構成)と訳される．ある言語使用の場面において，隣接した複数の語彙が共に現れる頻度が高い時，それらの語彙の共起関係を「연어관계」(連語関係)，その共起関係を成す言語構成を「연어구성」(連語構成)として区別する．また，「연어구성」(連語構成)は基準となる任意の語彙である中心語(node)と，その中心語と共に用いられる語彙を「연어」(連語:collocate)としている．また，日本語学では，collocationについて「縁語関係」，「連語関係」，「コロケーション」が用いられるとした．

これまで検討したように，「連語」という用語の定義や対象とする範囲は学者によって様々であり，その定義と範囲の規定によって研究の対象や観点が異なるものとなる．しかし，大きく見て，語彙の意味や働きを単独の単語のレベルではなく，共に現れる語彙と語彙との結合関係から見出そうとする言語研究の方法として，多くの成果を上げ，近年は実際の言語研究や言語教育の分野で連語の考え方や方法が用いられるようになっている．

本研究では，韓国語と日本語の空間名詞の対照研究でもあるが，研究の基本的な観点としては，上述した韓国語の研究における後者の観点から，意味構造体としての連語の概念に基く観点と用語を取ることにし，日本語における連語やコロケーション研究については，特に触れない．

本研究では，このような議論を踏まえて，「語彙と語彙との共起関係により単語の意味が実現される」と

---

[51]南潤珍(2007)のコロケーションは，Firth(1951)で提案されたcollocationに由来する．Firth(1951：192－194)では，ある語彙の意味はそれと共に用いられる語彙によって把握されるとし，語彙間の関係を，意味の連想関係と文法的関係に二分し，このうち前者，即ち意味の連想関係をcollocationとしている．南潤珍(2007)は，用語において「コロケーション関係」，「コロケーション構成」，「中心語」，「連語」を用いている．

いうcollocationの考え方を基に，本研究で使用する術語としては，南潤珍(2006:10-11)に従って，次の通りに定めることとする：

－「連語関係」：ある言語使用の場において，複数の語彙が頻繁に共に現れる場合，それら語彙の間の共起関係を「連語関係」とする．
－「連語構成」：その共起関係を成す言語構成を「連語構成」とする．
－「連語構造」：両方を包括するときは，「連語構造」という．[52]

本研究における「連語」，「連語構成」，「中心語」の考え方を下記の図1に示す．図1では，「空間名詞＋格助詞」の構造(以下では「空間名詞の格助詞形」とする)をとる[속에]を中心語に据え，この中心語の前に共起して中心語を修飾する連体修飾成分を「前項の連語」とする．前項の連語には中心語の先行名詞と先行名詞の連体修飾成分が含まれる．先行名詞を含む空間名詞の前に現れる成分を「先行要素」とも呼ぶ．また中心語の後ろに共起する成分が「後項の連語」であり，主に共起する動詞と意味成立上必要な対象語と補語が含まれる．ここで，対象連語構成において中心語からどれくらい離れた語彙までを連語として認めるかという問題があるが，基本的には中心語を囲んで一つの意味構造体の成立に必要な要素は全て連語とみなす．

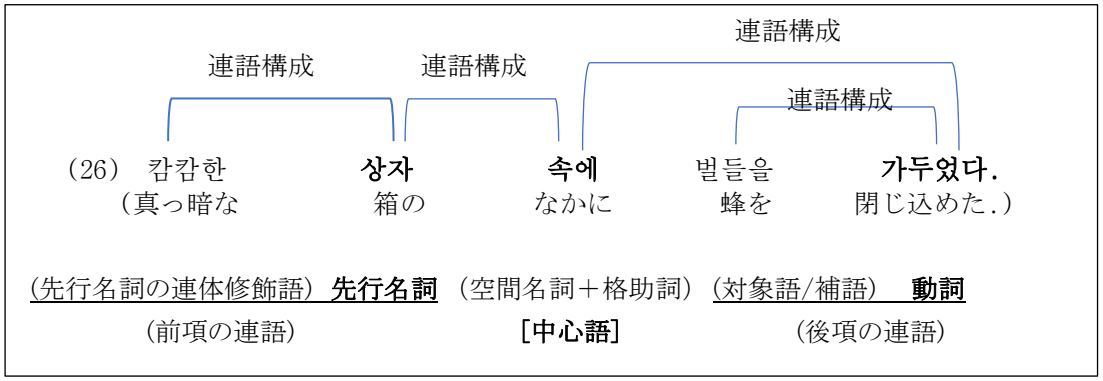

図 1. 連語構成の要素と用語

上図に基くと，「캄캄한」と「상자」，「상자」と「속에」，「속에」と「가두다」，「벌들을」と「가두다」は連語関係をなし，「캄캄한 상자」，「상자 속에」，「속에 가두다」，「벌들을 가두다」，「캄캄한 상자 속에」は連語構成である．

実際の分析においては，空間名詞の格助詞形「속＋에(格助詞)」を中心語に据え，中心語の前項の

[52] 南潤珍(2006)では，共起関係を成す言語構成を「連語構成」とし，連語構成は，基準となる任意の語彙である中心語と，その中心語と共に現れる語彙である連語から成るとみている．例えば，「고운 방，깨끗한 방，고운 마음씨，깨끗한 마음씨」は「連語構成」ということができ，それぞれの構成を成す要素のうち，「방」の連語は「고운，깨끗한」であり，「마음씨」の連語は「고운，깨끗한」である．「고운と방」，「깨끗한と방」，「고운と마음씨」，「깨끗한と마음씨」は，「連語関係」をなすという．

連語，後項の連語を分析する．本研究では，上記のように，基本的に中心語と前項の連語，あるいは，中心語と後項の連語からなる連語構成を対象に分析を行うことになるが，1.3.1.問題の提起でも触れているように，先行名詞とその修飾成分だけでは語彙の選択や意味の弁別が難しくなる場合がある．上記図1の例を見てみよう:

(26)′ 캄캄한 상자 속에/안에 벌들을 가두었다.(図1の例を再掲)
（真っ暗な箱のなかに蜂を閉じ込めた．）

(26)′ は中心語として「속에」を用いているが，「속에」を「안에」に入れ換えても文が成立しないということはない．しかし，「안」と「속」のうち，どちらの方がより自然な表現であるかを判断するためには，前項の連語だけではなく，後項の連語を分析する必要があり，さらに前項と後項の連語を修飾する成分または補充する成分との意味関係を分析する必要がある．そこで，本研究では，「連語構成」の分析の範囲を二項連語に限らず，「캄캄한 상자 속에」や「상자 속에 가두다」のような拡大した連語構成も分析の対象とすることもある．このような三つ以上の要素からなる分析対象は，内外空間名詞を修飾する前項の連語だけでは意味領域の弁別ができない場合，あるいは前項の連語が共通しているため，追加の弁別の要素が必要な場合は，述語との意味関係から中心語をなす空間名詞の意味特性を分析する．

しかし，このような語彙間の結合が自然な表現であるかどうかをどう判断すればいいかという問題がある．一般に言語使用の場では母語話者の内省に頼ることが多いが，分析の結果の客観性と信頼性を確保するために，コーパスにおける使用頻度を調査して，その頻度情報を基に言語使用の傾向を捉える方法がある．

＜非明示的ルール及び自然さの問題と大容量コーパス＞

本研究では，これまでの空間名詞の意味記述における問題を解決するために，韓国語と日本語の大容量のコーパス資料を用いて内外空間名詞の意味用法を連語の観点から分析する．

本研究で用例をコーパスから収集するのは，第一に，研究者の内省に頼る研究によく見られる主観的な判断を排除し，客観的な結果を見出すためであり，第二に，大容量の資料から得られる頻度による信頼性を確保するためである．さらに，コーパス資料から得られた使用頻度等の結果に見られる言語使用の傾向性から，内外空間名詞の使用における自然さの問題に対する解決策を探ろうとする試みである．

まず，語彙の意味の研究においては，語彙の意味の分析と記述に関連して，どのようにして研究者の主観を排除するか，どこまで客観的な判断として認められるかという問題に関連して，現実の言語活動の結果をバランスよく収集した資料でできているコーパスを対象に分析を進めることで，ある程度客観性を確保することができると考える．

このようなコーパス資料の分析から得られる頻度による信頼性の確保に関連して，남윤진(2000:18－19)では，「言語体系は本質的に確率的秩序によって運営され，実際の言語使用に現れる頻度は文法に内在する確率が顕在化したものであり，文法に内在するこれらの確率的特性を明らかにすることが言語

研究の目標である(Halliday(1991), Sinclair(1991)という[53]考えを基に,「言語研究に確率論を導入することについて, 言語研究の下位分野によりその状況が異なるが, 語彙論の場合は, 語彙の頻度が持つ言語学的意味が一般的に認められているため, 確率論の導入が自然である」とする. また,「特に語彙は不規則的で, 選択の可能性が開かれているため, 頻度や確率による分析が研究の客観性, 科学性を保証するほぼ唯一の方法である」としている. さらに,「コーパス言語学は実際の用例に基づいた, 頻度情報を含んだ帰納的な結果が得られ, 特に程度性の概念を適用するほか解決方法のなかった問題に対する客観的な判断基準を得ることができる」としている.

本研究では, ある単語の意味は共に用いられる他の単語との係わりのなかで決まるという連語の観点から, 言葉の意味の記述に際して, ある言語表現が正しいかどうかという基準で正否を判断する観点だけでなく, 文が自然であるかどうかの自然さの観点からも考察する.

文法的には問題のない構成であっても, 実際の言語の使用においては, 不自然と感じて使われなかったり, 文法的な基準からすれば成立し得ない構成であっても, 実際の言語場では頻繁に使用されたりすることがある. 実際の言語使用の場面では, 文法的な規範だけではなく, その言語を話す人々によって長い年月をかけて築かれた基準, つまり,「自然さ」というもう一つの基準が存在すると考えられる. 母語話者であれば, 本来内在する内省により, ある文が非文であるかどうか, 自然な文であるかどうかを判断し, 容易に使い分けることができる問題でも, 非母語話者の場合は, 使用上の基準が明確に提示されなければ, 語彙の習得や言語使用の場面での選択は困難である可能性がある. このような自然さの問題は, 特に本研究で取り上げる類義語の下位意味を弁別するとき, 重要な判断の基準となり得る.

そこで, 本研究では, 実際の言語活動の結果を収集した大規模言語資料であるコーパスから用例を抽出して, それらの用例の出現頻度を「自然さ」の一つの基準に用いることにする. 勿論, 出現頻度が完璧に信頼できる客観的基準であるとは考えられないが, 少なくとも, 現実の言語場においてどのような表現がどのような範囲で, その言語の使用者の間で容認されるかという, 客観的言語事実をありのまま反映するものであると考えることができるからだ.

このようなことから, 言語使用における自然さというのは, その言葉を使う言語集団により年月をかけて築かれてきたものであり, どこまでを容認するかという認識の現れであると考えることができる. また, ある言語現象の出現頻度は, 自然さの判断の一つの客観的基準になり得るもので, 非明示的ルールの根拠としても妥当性なるものであると考えられる. したがって, このような自然さなどを判断するに当たっては, 正否の二分法によらず, ある空間名詞がどのような前項の要素や後項の要素と比較的頻繁に共起するか, またはしないかという分布の傾向によることにする.

コーパスから収集された用例の分析に際しては, 収集した用例の数や分布, 出現頻度がそれ自体で重要な言語事実であることは間違いないが, 言語の体系における当該言語現象の重要性を決定づける唯一の証拠ではない. コーパスでの出現頻度が高いからと言ってそれが一般的に広く容認された表現であり, 反対に, 出現頻度が低いからと言って一般的に容認されていないと一概には言えないからだ.

また, 出現頻度が高くないからといって, それだけ実際の言語の使用においで重要でないとすぐに判

[53] Halliday(1991), Sinclair(1991)(남윤진(2000)より再引用. 日本語訳は筆者による.)

断してはいけない．頻度などの計量的な結果から何を読み取ることができるか，計量的なデータをどう解釈するかが重要な問題なのである．

各々の空間名詞の使用様相を計量的に算出してその数量的結果を出現頻度などで提示することにとどまらず，それにより，計量的な分布と頻度情報が示唆すること，即ち，言語事実としては存在しているがまだ明らかになっていない非明示的なルールを探り出し，言語使用上の傾向として現れているだけの言語的特徴を見える形で客観的に記述することができるという点で，言語事実を記述する際の実証的・客観的根拠として用いることにする．

3.2. 本研究で用いる名詞分類と動詞分類

本研究では，内外空間名詞と共に現れる先行要素と後行要素との結合関係を通して内外空間名詞の意味領域を抽出しようとする．そこで，中心語となる空間名詞がどのような名詞あるいは動詞と，どれくらいの頻度でともに現れるか，あるいは共起する名詞や動詞はどのような意味特性を表わすものかを調査して分析することは，本研究の結論の導出にも繋がるもっとも重要な要素である．

以下では，既存の名詞分類と動詞分類を検討した上で，本研究の目的に適した分類の基準を定める．また，韓国語と日本語を対照する際，本研究の基本言語である韓国語の名詞分類と動詞分類を日本語にも適用するが，分類上著しいズレが生じると判断される場合は，分類から除外して別に記すことにする．

3.2.1. 名詞分類について

既存の名詞分類としては，存在論的観点から基本的な意味領域を分類した민현식(1990)，同じ存在論的観点による分類ではあるが，実体と様式の対立に着目して分類した[54]최경봉(1998)，文法的分類を基に語彙的意味を考慮して分類した野間秀樹(1990b)を検討する．

まず，민현식(1990)は，存在論的観点から，基本的な意味領域を人間，事物，空間，時間の四つに大別し，その分類に従って名詞を人間名詞，事物名詞，空間名詞，時間名詞に分けている．さらに，空間名詞を自立性の有無により固有名詞と普通名詞に分け，それぞれの項目を具体物か抽象物かに分類したのち，具体物は自然物か人工物かによってさらに分けている．このような空間性の分類の考え方を本研究の実際の分析の場面では，空間性と時間性の有無など，上位の意味領域の分類として取り入れることにする．以下に，민현식(1990)の名詞分類を表で示す．

---

[54] 최경봉(1998：38)では，意味領域と意味分類に関連して，「意味領域」は，意味構造の中で語彙が占めている領域であり，存在対象が世界の中で占めている領域であるとし，意味領域の間の違いは，それぞれの意味領域が持つ弁別的資質によって区別され，このような弁別的な違いを通して語彙に対する意味分類を行うことができるとし，意味領域の分類は，Nida(1975)とLyons(1977)の見解に基づくとしている．Nida(1975：182)では，実体や対象，事件（行為と過程），抽象概念，関係などが言語の意味領域をなす中心分類となると見ていること，Lyons(1977：440)でも，品詞の意味論的部分は，実体(entities)，属性(properties)，事件(actions)，関係(relations)などを識別する可能性を前提とするとし，これらの四つの要素を各々の個別言語から中立的な，存在論的枠組みとしている．

表 2. 名詞分類-민현식(1990:一部改変)

名詞類	分類の基準				用例*
	意味資質	固有/普通	具体/抽象	自然/人工	
人間名詞	＋人間性	人間固有名詞			홍길동(洪ギルドン), 이순신(李舜臣)
		人間普通名詞			사람(人), 학생(学生), 손님(お客様)
事物名詞	＋事物性	事物固有名詞	具体物	①自然物	진돗개(珍島犬), 무궁화(むくげ)
				②人工物	대우그룹(大宇グループ), 성경(聖書)
			抽象物		멘델법칙(メンデルの法則)
		事物普通名詞	具体物	①自然物	개(犬), 소(牛), 꽃(花), 나무(木), 돌(石)
				②人工物	책상(机), 옷(服), 컴퓨터(コンピュータ)
			抽象物		사건(事件), 현상(現象), 언어(言語)
空間名詞	＋空間性	空間固有名詞	具体物	①自然物	백두산(白頭山), 한강(漢江), 서울(ソウル)
				②人工物	도산공원(島山公園), 경복궁(景福宮)
			抽象物		유토피아(ユートピア), 무릉도원(武陵桃源)
		空間普通名詞	具体物	①自然物	하늘(空), 땅(地), 산(山), 강(川), 들(野原)
				②人工物	집(家), 강당(講堂), 공원(公園)
			抽象物		공간(空間), 자리(席), 앞(まえ), 뒤(うしろ), 위(うえ), 아래(した), 사이(間)
時間名詞	＋時間性	時間固有名詞			설날(お正月), 추석(秋夕:旧暦のお盆)
		時間普通名詞	事物名詞の派生語		해(とし), 달(つき), 월(月), 일(日)
			空間名詞の派生語		앞(まえ, さき), 뒤(あと), 안(ない)
			時間名詞の専担語		때(とき), 시간(時間), 세월(歳月)

*用例は一部抜粋である.

次に, 최경봉(1998:36-40)の名詞分類では, 名詞がある存在する対象を指示する語彙であることから, 名詞が指示する対象が世界の中でどのような位置を占めているかという存在論的特性を探ることを出発点とし, このような存在論的側面から名詞の意味領域を分類し, それを基に意味を分類している.

このような名詞の意味分類の体系は, 存在論的意味分類と文法論的意味分類に分ける[55]ことができるが, 存在論的意味分類は文法論的意味分類と関係づけることにより, 分類の意味を持つとした. 実際の分類では, 名詞を存在の様態により実体と様式に分類したうえで, 存在論的意味分類の基本的な意味領域を人間, 事物, 事態, 関係に類別し, この四つの領域を意味の近さにより区別・体系化している. 下位分類においては, 事物名詞は空間物と個体物に, 事態名詞は事件名詞と状態名詞に分類し, 関係名詞は次元名詞と単位名詞に分類している. 空間名詞に関わるものについては, 固有の意味を持つ空間名詞は, 実体名詞のうち事物名詞の下位分類である空間物という項目に分類されるのに対し, 名詞固有

[55] 최경봉(1998:35)では,「存在するものの意味を解釈するためには, その基礎的な存在のあり方を明らかにしなければならない. このような存在のあり方を明らかにすることを存在論的と表現した」とし,「文法論的側面」という意味は, 統辞的側面とは異なる意味で, 存在論的側面と対比する意味として用いられたもので, 意味, 統辞, 形態的側面を包括する意味を表す」としている.

の意味を持たず相対的な意味を表す空間名詞は，様式名詞のうち関係名詞の下位分類である次元名詞という項目に分類される．また，存在論的に見て分類する価値があると判断される下位の部類は，品詞論において下位の部類に属する文法単位と対応関係を維持するという観点から，文法論的分類を加えている．このような分類の結果を実体名詞と様式名詞の分類体系に基づいてまとめると，次の表3の通り：

表 3. 名詞分類-최경봉(1998)

名詞類の分類の基準							下位分類	用例*
存在論的意味分類				文法論的分類				
実体名詞	人間			指示	外延	間接	人称代名詞	그(彼)，그녀(彼女)
						直接	固有名詞	케네디(ケネディー)，이순신(李舜臣)
					内包		普通名詞	사람(人)，학생(学生)，선생(先生)
	事物	空間物		指示	外延	間接	指示代名詞(空間代名詞)	그곳(そこ)，이곳(ここ)，여기(こちら)
						直接	固有名詞	백두산(白頭山)，서울(ソウル)
					内包	-	普通名詞	산(山)，들(野原)，강(川)，바다(海)
		個体物	有情物	指示	外延	間接	指示代名詞	그것(それ)，저것(あれ)，이것(これ)
						直接	固有名詞	메리(メリー)，쫑(ジョーン)
					内包		普通名詞	호랑이(虎)，사자(獅子)，원숭이(猿)
			無情物	指示	外延	間接	指示代名詞	그것(それ)，저것(あれ)，이것(これ)
						直接	固有名詞	아폴로1호(アポロ1号)，포니(ポニー)
					内包		普通名詞	나무(木)，자동차(自動車)，눈(雪)
様式名詞	事態	事件	自動	機能	主導的	自立		운동(運動)，장사(商売)，잠(眠り)
					補助的	依存	補文名詞	희망(希望)，이해(理解)，걱정(心配)
			他動	機能	主導的	自立		결혼(結婚)，사랑(愛)，공부(勉強)
					補助的	依存	補文名詞	강조(強調)，거절(拒絶)，기대(期待)
		状態	現象	機能	主導的	自立		추위(寒さ)，홍수(洪水)，건강(健康)
					補助的	依存	依存名詞	척(ふり)，만큼(だけ)，대로(まま)，통(通)，뿐(ばかり)
			抽象	機能	主導的	自立		가치(価値)，자유(自由)，정의(正義)
					補助的	依存	補文名詞	것(こと)，소문(噂)，사실(事実)
	関係	次元	時間	機能	主導的	自立		봄(春)，겨울(冬)，내일(明日),때(とき)
					補助的	依存	依存名詞	무렵(ごろ)，동안(あいだ)，터(はず)
			空間	機能	主導的	自立		위(うえ)，아래(した)，옆(そば)
					補助的	依存	依存名詞	쪽(方)，편(側)
		単位		機能	主導的	自立	数詞	하나(ひとつ)，일(いち)，첫째(第一)
					補助的	依存	単位性依存名詞	개(個)，마리(匹)，톨(粒)，척(隻)

*用例は一部抜粋である．

次に，日本における韓国語の名詞分類として，野間秀樹(1990b)は，語彙・文法的分類を試みた．格語尾・接尾辞など文法的諸要素との結合と名数詞(類別詞)の選択等による文法的分類を基に，語彙的意味も考慮した分類である．この名詞分類は，ありのままの言語事実を反映するために，＜＋，－＞の二分法を取らず，ゆるい分類となっている．名詞を大きく可算名詞と不可算名詞という基準で分類するとともに，活動体名詞と不活動体名詞の二つに分けてから下位分類している．以下の表4は，野間秀樹(1990)によるが，本文の説明を基に一部を追加または省略した．

表 4. 名詞分類-野間秀樹(1990b：一部改変)

<table>
<tr><td rowspan="14">完全名詞</td><td>動物名詞</td><td>개(犬)，새(鳥)</td><td>活動体名詞</td><td>可算名詞</td></tr>
<tr><td>人間名詞</td><td>사람(人)，학자(学者)</td><td rowspan="13">不活動体名詞</td><td rowspan="5"></td></tr>
<tr><td>-----団体名詞-----</td><td>회사(会社)----------</td><td>----------</td></tr>
<tr><td>場所名詞</td><td>곳(ところ)，장소(場所)</td></tr>
<tr><td>具体名詞</td><td>짐(荷物)，나무(木)</td></tr>
<tr><td>身体名詞</td><td>손(手)，얼굴(顔)，몸(からだ)</td></tr>
<tr><td>事柄名詞</td><td>생각(考え)，사실(事実),언어(言語)</td></tr>
<tr><td>抽象名詞</td><td>도덕(道徳)，각도(角度)</td><td rowspan="8">不可算名詞</td></tr>
<tr><td>現象名詞</td><td>비(雨)，가뭄(日照り)，불(火)</td></tr>
<tr><td>色彩名詞</td><td></td></tr>
<tr><td>物質名詞</td><td>물(水)，가스(ガス)</td></tr>
<tr><td>性質名詞</td><td>필요(必要)，안전(安全)</td></tr>
<tr><td>活動名詞</td><td>조심(用心)，인쇄(印刷)</td></tr>
<tr><td>営為名詞</td><td>빨래(洗い)，인사(挨拶)</td></tr>
<tr><td>位置名詞</td><td>위(うえ)，앞(まえ)，뒤(うしろ)</td></tr>
<tr><td>時間名詞</td><td>오늘(きょう)，봄(春)</td></tr>
<tr><td>数量名詞</td><td>삼인분(三人分)，천원(千ウォン)</td></tr>
<tr><td>形容名詞</td><td>객관적(客観的)，미적(美的)</td></tr>
<tr><td rowspan="3">不完全名詞</td><td colspan="3">第一群　분(分)，나름(なり)，따위(など)</td></tr>
<tr><td colspan="2">第二群　것(こと)，나위(-すること)，리(はず)</td><td>바람(はずみ)</td></tr>
<tr><td colspan="2">第三群　개(個)，잔(杯)，번(番)</td><td>만(だけ)，남짓(あまり)</td></tr>
</table>

上記の名詞分類を検討した結果をまとめると，민현식(1990)は，空間語から時間語への移動という現象に見られる空間語と時間語の相関性を明らかにするために，空間概念語の範疇の設定という観点から名詞を分類したうえで，下位範疇を分類するが，空間普通名詞の「앞」と同形の語が時間語の下位項目である時間普通名詞に再度分類されるなど，空間と時間の相関性に重点を置いた分類となっている．しかし，状態と動作を表わす名詞は除外しているため，名詞分類としては限界がある．

최경봉(1998)は，名詞の存在論的意味属性によって名詞の文法的特性も決定されるという観点から，

存在論的分類と文法的特性を基準として名詞を分類していることは，本研究の研究目的にもつながる部分があり，語彙的意味用法の記述だけでなく，内外空間名詞の文法的要素への変化についての論議にもつながる分類だといえる．野間秀樹(1990b)は，語彙的意味による分類では同じ部類と判断される名詞でも，文法的な要素との結合関係においては異なる部類としての特徴を表わすことから，分類をより細分化した部分がある．実際の適用においては，人間名詞と場所名詞の中心に位置する団体名詞のような多面語[56]の取り扱いについてはより詳細な分類作業が必要である．

以下では，これまでの名詞分類に関する論議を踏まえ，本研究で用いる名詞分類の枠組みを立てることにする．

まず，최경봉(1998)の存在論的名詞分類にならって，名詞を実体と実体でないものという二つの部類に分ける．최경봉(1998)は，上記の表3で示した通り，名詞の存在論的意味属性によって名詞の文法的特性も決定されるという観点から，存在意味論的分類基準によっていくつの段階の上位分類をし，さらに文法的特性を基準として名詞を下位分類している．この意味分類体系は，本研究で求める語彙的意味用法の記述だけでなく，内外空間名詞の文法要素への変化に関する論議にも有用であると考えられる．しかし，名詞分類上の用語としては，최경봉の実体と様式を対立させるのではなく，実体性名詞と非実体性名詞[57]の対立を最上位の大分類とする．次は，実体性名詞を＜人間，事物＞に，非実体性名詞を＜事態，関係＞の意味部類に分け，さらに，人間名詞を＜人間名詞，団体名詞＞に，事物名詞を＜具体名詞，場所名詞，身体名詞，物質名詞＞に，事態名詞を＜事件名詞，状態名詞＞に分けたうえで，意味論的に下位分類[58]し，その分類した項目および用例を表5に示す[59]：

---

[56] ここで団体名詞に分類される「은행」だけでなく，「책，편지，신문，연설，영화，음반」等は，物理的側面の「形態」と意味的側面の「内容」という両面性を持つ名詞である．「책」は，具体物としての形態を持つ「本」を表すこともあれば，抽象的意味である「本の内容」を表すこともある．また，「학교」等の名詞は，学校の建物や場所を指すこともでき，教育活動が行われる機関や団体を指すこともできる．このような語彙類に対しては，例文をもって判断する必要がある．その名詞分類の特性や詳細は임지룡(1996：238，2009：206)，이운영(2004)，차준경(2004)を参照．

[57] 서정수(1996)は，名詞を大きく「実体性名詞」と「非実体性名詞」に分け，そのうえ細分類をしている．しかし，서정수(1996)の分類は，文法的な性質の違いを分類の基準としているため，時間名詞を実体名詞に分類するなど，基本的に意味論的分類に基く本研究の名詞分類の基準とは異なる．そこで本研究では，大分類の用語のみ用いる．

[58] 意味論的名詞分類は，学者によって分類の基準も，分類方法もまちまちで，分類のばらつきが大きいと言われている．

[59] 최경봉(1998)，野間秀樹(1990b)の名詞分類における文法的な分類の基準は，実際の分析の際に必要に応じて適用することとし，表5には示さない．

表 5. 本研究で用いる名詞分類

<table>
<tr><th colspan="3">存在論的名詞分類</th><th colspan="2">意味論的下位分類</th><th>例示</th></tr>
<tr><td rowspan="8">実体性名詞</td><td colspan="2" rowspan="2">人間</td><td colspan="2">人間名詞</td><td>사람(人), 학자(学者)</td></tr>
<tr><td colspan="2">団体名詞</td><td></td><td>회사(会社), 은행(銀行), 학교(学校), 당(党)</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="6">事物</td><td rowspan="2">具体名詞</td><td>具体物名詞</td><td>버스(バス), 차(車), 상자(箱)</td></tr>
<tr><td>自然物名詞</td><td>나무(木), 땅(地), 꽃(花)</td></tr>
<tr><td colspan="2">場所名詞</td><td></td><td>집(家), 극장(劇場), 도시(都市)</td></tr>
<tr><td colspan="2">身体名詞</td><td></td><td>얼굴(顔), 몸(体), 입(口)</td></tr>
<tr><td colspan="2">物質名詞</td><td></td><td>물(水), 가스(ガス)</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="12">非実体性名詞</td><td rowspan="9">事態</td><td rowspan="4">事件</td><td colspan="2">活動名詞</td><td>운동(運動), 공부(勉強), 인쇄(印刷)</td></tr>
<tr><td colspan="2">行為名詞</td><td>결혼(結婚), 사랑(愛), 희망(希望)</td></tr>
<tr><td colspan="2">営為名詞</td><td>구경(見物), 인사(挨拶), 생활(生活)</td></tr>
<tr><td colspan="2">事柄名詞</td><td>생각(思い), 사실(事実), 언어(言語), 영화(映画)</td></tr>
<tr><td rowspan="5">状態</td><td colspan="2">抽象名詞</td><td>마음(心), 기억(記憶), 사회(社会), 의식(意識)</td></tr>
<tr><td colspan="2">性質名詞</td><td>필요(必要), 안전(安全)</td></tr>
<tr><td colspan="2">現象名詞</td><td>어둠(闇), 안개(霧), 추위(寒さ), 홍수(洪水)</td></tr>
<tr><td colspan="2">感覚名詞</td><td>차가움(冷たさ), 뜨거움(厚さ)</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">関係</td><td colspan="2">位置名詞</td><td>위(うえ), 앞(まえ), 뒤(うしろ)</td></tr>
<tr><td colspan="2">時間名詞</td><td>오늘(きょう), 봄(はる), 때(とき)</td></tr>
<tr><td colspan="2">数量名詞</td><td>개(個), 마리(匹), 원(ウォン)</td></tr>
</table>

3.2.2. 動詞分類について

本研究では，実際の分析において，内外空間名詞に先行して現れ，かつ共起頻度の高い名詞を中心に分析を進めるが，先行名詞を伴わない連語構成の場合は，前項の連語や後項の連語をなす動詞の種類，現れ方や意味特徴を調べ，それを基に空間名詞の意味領域を記述する必要が生じる．そこで，これまでの韓国語の動詞分類[60]のうち，천기석(1983)[61]によって動作動詞と状態動詞に区分したうえで，下位分類を行うが，下位分類の詳細においては，한송화(2000)の考えと用語を用いる．한송화(2000)は，主語の行為性の有無により行為性自動詞と非行為性自動詞に分け，行為性自動詞は他動詞に類似する

[60] 한송화(2000)によると，動詞の下位分類に関する研究は，構文論的特性により分類した研究，相的特性により分類した研究，自動詞の範囲や定義に関する研究，動詞の構文構造，項構造に関する研究等があり，下位類型の一部に関する研究として移動動詞，中立動詞等に関する研究に分けられる．

[61] 천기석(1983)は，動作動詞と状態動詞に区分したうえで，動詞の中心意味を考慮した語彙意味論的方法により下位分類をしている．動作動詞は，授与意味，所有意味，移動意味，否定意味，比較意味，上接意味，操縦意味，保留意味，可変意味に分類し，状態動詞は度量意味(基本度量，副次度量)と評決意味(推論意味，感覚意味)に分類している．

統辞的特性を表し，非行為性自動詞は形容詞に類似する統辞的特性を表すとし，自動詞の統辞・意味的特性は自動詞およびそれに係る名詞句に現れる格構造から読み取ることができるとし，このような格構造により自動詞を分類している．以下に，한송화(2000:367-369)の自動詞の類型分類表を簡略化して示す:

表 6. 自動詞の類型分類-한송화(2000:一部改変)

	動詞の類型		用例
		(細分類)	
非行為性自動詞	対象自動詞	対象 場所 場所補語交差 生成 叙述性	곯다(傷む)，늙다(老いる)，불다(吹く) 닦이다(吹かれる)，새다(漏れる) 들끓다(沸く)，차다(満ちる) 나다(生える)，생기다(生ずる) 알려지다(知られる)，밝혀지다(明かされる)
	所在自動詞	所在Ⅰ 所在Ⅱ	꼬이다(わく)，붙다(つく)，속하다(属する) 가라앉다(沈む)，떨어지다(落ちる)
	比較自動詞	比較Ⅰ 比較Ⅱ	앞서다(先立つ)，뒤지다(遅れる) 걸맞다(似合う)，맞먹다(匹敵する)
	変性自動詞	変成Ⅰ 変成Ⅱ	되다(なる) 변하다(変わる)，화하다(化する)
	対称自動詞Ⅰ	交替/比較/場所 分裂	바뀌다(代わる) 나뉘다(分かれる)，갈리다(割れる)
	被動自動詞	原因 利害	찌들다(汚される)，감싸이다(包まれる) 당하다(やられる)，잡히다(捕まる)
	心理自動詞	原因 対象Ⅰ 対象Ⅱ 判断 感覚 知覚	놀라다(驚く)，노하다(怒る) 질리다(飽きれる)，물리다(飽きる) 거슬리다(障る)，기막히다(あきれる) 맞다(正しい)，잘되다(できる) 결리다(凝る)，쑤시다(痛む) 느껴지다(感じられる)，들리다(聞こえる)
行為性自動詞	行為自動詞	行為Ⅰ 行為Ⅱ 発話	날다(飛ぶ)，놀다(遊ぶ)，뛰다(走る) 웃다(笑う)，울다(泣く)，걷다(歩く) 중얼거리다(つぶやく)，떠들다(騒ぐ)
	位置自動詞	位置Ⅰ 位置Ⅱ	이르다(至る)，닿다(着く)，머무르다(とまる) 남다(残る)，서다(立つ)，앉다(座る)
	移動自動詞	移動Ⅰ 移動Ⅱ 移動Ⅲ	꺼지다(消える)，달아나다(逃げる) 가다(行く)，오다(来る)，내리다(降りる) 떠나다(去る)，벗어나다(脱する)
	対称自動詞Ⅱ		갈라서다(別れる)，다투다(争う)
中立動詞			움직이다(動く)，떨다(震える)，향하다(向かう)

*用例は一部抜粋である．

また，韓国語の動詞分類のうち，アスペクトによる動詞分類である浜之上幸(1991)を用いる．浜之上幸(1991)は，アスペクトいう術語を，言語外の事象が生起して終了していく中での位置づけである局面を表す形式としてではなく，局面に対する話し手の主観的判断を示す動詞の文法範疇として定義し，パラディグマティックに対立する動詞の形式を「한다:하고 있다: 해 있다」[62]とみている．その分類の骨格を下表に示す:

表 7. 動詞分類-浜之上幸(1991:一部改変)

<table>
<tr><td rowspan="3">動詞</td><td>状態動詞
＜하고 있다>を持たない.</td><td colspan="3">닮다(似る)，맞다(合う)
늙다(老いる)，돌다(気が触れる)
결혼하다(結婚する)，생기다(見える)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">動作動詞
＜하고 있다＞を持つ.</td><td colspan="3">状態性動作動詞
＜하고 있다＞が具体的な動作を表し得ず，局面を特定できない.
心理的な活動:알다(分かる)，열중하다(熱中する)
時間的な基準に対する関係性:늦다(遅れる)</td></tr>
<tr><td>動作性動作動詞
＜하고 있다＞が具体的な動作を表し，局面を特定できる.</td><td>主体変化動詞
잡다(握る)
오다(来る)</td><td>生起変化:가다(行く)
終了変化:죽다(死ぬ)</td></tr>
<tr><td></td><td>主体非変化動詞
먹다(食べる)，걷다(歩く)</td><td></td></tr>
</table>

上記の動詞分類を検討した結果，学者により分類の基準も，分類方法も異なるため，本研究で用いる分類基準を新たに立てることは難しく，内外空間名詞と共に現れる動詞を収集し，その結果を基に分析の段階別に再検討しつつ適用していくことにするが，これまで検討した動詞分類において共通する部分はそのまま適用することにする．適用の手順としては，状態動詞と動作動詞に分類したうえで，動詞の意

[62] 浜之上(1991:13)は，従来の「하고 있다」のアスペクト的意味とされていた「進行相，結果状態相，反復相」を，局面とはいったん離れた形で定義しなおす必要があるとし，「하고 있다」のアスペクト的意味の定義としては「あらゆる局面を継続の中にあるものとして動的に描写するもの」(あらゆる局面:一回か多回かを問わず，生起する前から終了した後に，次の局面に移行するまでのすべての段階)とし，「해 있다」のアスペクト的意味は「一定の限定された局面を継続の中にあるものとして静的に描写するもの」であるとした．「瞬間性」については動詞そのものの性質を規定しようとすることで，「結果性」は特定のアスペクト形式で具体化されたアスペクト的意味を動詞の性質として一般化しようとすることであるとし，「瞬間性，結果性」という概念は，「하고 있다，해 있다」という特定のアスペクト形式をとった場合の局面がどのようなものであるかという点からの規定であって，アスペクトのパラダイムにおかれた動詞に共通する語彙的な意味を規定したものではないとしている．

味属性や意味部類による既存の動詞分類[63]の基準を用いることにする. [64]

また, 本来は対照言語である日本語の動詞分類についても検討しなければならないが, ここでは, 日本語の意味論的分類として, 日本語語彙大系の動詞の意味的基準[65]による＜心理動詞, 感情動詞, 知覚動詞, 動作動詞, 移動動詞, 変化動詞, 発生動詞, 授与動詞＞などを取り入れることにし, 分析の結果により, 再分類することにする.

---

[63] 動詞の意味部類による細分類の一つとして, 以下に, 이응백(1998)の分類の例を示す.
移動動詞:가다(行く), 오다(来る)
心理動詞(主観動詞・感覚動詞・自己判断動詞):좋다(よい), 나쁘다(わるい)
遂行動詞(話行動詞): 말하다(話す), 제안하다(提案する)
断言動詞: 주장하다(主張する), 단언하다(断言する), 말하다(言う)
対称動詞: 같다(同じだ), 다르다(異なる), 닮다(似る)
受恵動詞: 주다(与える), 받다(もらう), 잃다(失う)
経験動詞: 알다(分かる), 느끼다(感じる)
知覚動詞: 보다(見る), 듣다(聞く), 맡다(扱う)
認知動詞: 알다(知る), 모르다(知らない)
祈願動詞: 원하다(希望する), 바라다(望む)
再帰動詞: 입다(着る), 신다(はく), 먹다(食べる)

[64] 남경완(2008:148-154)では, 意味領域によって特定の複数の用言を一つの部類にして提示する方式は, 形態的・機能的属性を排除して意味的属性という基準によって用言を分類する方法であるが, 状態性と動作性による分類の下位分類の段階では, 特徴的な意味領域の羅列に留まることが多いとし, より上位の意味的属性による分類が必要であるとした. そこで, 用言の意味分析の基準となる意味的属性の分類の側面では状態性と動作性, 自動性と他動性を用いることを提示し, 意味部類の側面では物理性と精神性, 移動性と非移動性を, 文法的範疇の側面では使役と主動性, 被動性と能動性を分類の基準として用いることを提示している.

[65] 日本語の動詞分類の意味的基準は, 主に日本語語彙大系の動詞の意味的用法の分類を参考にした. 大きくは, 状態と行動, 使役, 可能, 開始, 終了の6つに分けている. 6つの分類の詳細を示すと下記の通り:

1. 状態＜抽象的関係(存在, 属性, 所有), 相対関係, 因果関係, 精神的関係(知覚状態, 感情状態, 思考状態, 心的状態), 身体状態, 自然現象＞
2. 行動＜物理的行動(物理的移動, 所有的移動, 属性変化, 身体変化, 結果, 身体動作, 利用, 結合動作, 生成, 消滅, 破壊), 精神的行動(精神的移動, 知覚動作, 感情動作, 思考動作)＞
3. 使役
4. 可能
5. 開始
6. 終了

第4章　韓国語の内外空間名詞「안，속，밖，겉」の意味用法

以下では，韓国語の内部空間名詞「안と속」と外部空間名詞「밖と겉」について考察する．「안と밖」，「속と겉」の対ではなく，「안と속」，「밖と겉」をそれぞれセットにして検討することにしたのは，類義関係にある単語同士を相互照らし合せることにより，単語同士の意味が重なる部分と重ならない部分をより明確化し，各々の単語の意味を鮮明にしていくことができるようになるからである．資料を分析した結果，中心語の格助詞形によって前項の要素と後項の要素の分布と頻度に有意味な計量的特性を見るために，[안/속/밖/겉＋格助詞]を基に本論考を進める．

意味用法の分析の資料としては韓国語コーパスから用例を収集し，その結果抽出された用例を分析の目的に合わせて分類し，それぞれ表にまとめていく．検索結果から誤抽出と判断される用例は筆者の判断で除外した．

実際に用例の分析に入る前に，既存の辞書における内外空間名詞の意味記述を検討しておく．本研究では， 国立国語研究院(1999)『표준국어대사전(標準国語大辞典，以下【標準】とする)』と延世大学校言語情報開発研究院(1998)の『연세한국어사전(延世韓国語辞典，以下【延世】とする』を検討の対象とする．

まず，「안」と「속」についての辞書の意味記述を見てみよう:

表 8.「안，속」についての辞書の意味記述

	【標準】	【延世】
안	p.4038 ①어떤 물체나 공간의 둘러싸인 가에서 가운데로 향한 쪽. 또는 그런 곳이나 부분. ②일정한 표준이나 한계를 넘지 않은 정도. ③안방. ④안찝. ⑤「아내」를 이르는 말. ⑥조직이나 나라 따위를 벗어나지 않은 영역.	p.1220 ①어떤 공간이나 물건의 둘레에서 가운데로 향한 쪽. ②일정한 기준이나 한계에 못 미치는 정도. ③안방. ④안감.
속	p.3558 ①거죽이나 껍질로 싸인 물체의 안쪽 부분. ②일정하게 둘러싸인 것의 안쪽으로 들어간 부분. ③사람의 몸에서 배의 안 또는 위장. ④사람이나 사물을 대하는 자세나 태도. ⑤품고 있는 마음이나 생각.⑥어떤 현상이나 상황, 일의 안이나 가운데. ⑦감추어진 일의 내용. ⑧사리를 분별할 수 있는 힘이나 정신. 또는 줏대 있게 행동하는 태도. ⑨식물 줄기의 중심부에 있는, 관다발에 싸인 조직.	p.1091 ① [주로「～속」의 꼴로 쓰이어]㉠ (그 물건의) 안. ㉡그러한 상태, 또는 그러한 상태가 지속되는 것. ②마음이나 느낌, 생각. ③안에 들어 있는 중심 되는 것. ④ [「소」에서 온 말로] 만두나 떡의 속에 맛을 내기 위해 넣는 고명. ⑤위. 뱃속.

上記辞書の「안」と「속」の意味記述を見ると,【標準】では「속」の意味記述の項目①, ②, ③, ⑥に,【延世】では「속」の①㉠, ③に類義語である「안/안쪽」を用いている.

【標準】の「안」①と「속」②の例文をみてみよう:

(27) 건물 안/극장 안에 들어가다. (안①) ((1)の再掲)
(建物のなか/劇場のなかに入る.)((1)と同一)

(28) 건물 속으로 들어가다. (속②) ((2)の再掲)
(建物のなかに入る.)((2)と同一)

(29) a.옷은 옷장 안에 넣어라. (안①) 【標準:4038】
(服は衣装だんすのなかに入れろ.)

(30) a.패물을 장 속 깊숙이 숨겼다. (속②)【標準:3558】
(貴金属を衣装だんすのなかに隠した.)
b.?패물을 장 안 깊숙이 숨겼다.
(貴金属を衣装だんすのなかに隠した.)

(27)と(28)では,「안」と「속」の先行の要素「건물」と後行の要素「들어가다」が同一で,「건물(建物)」という名詞の内部空間を表す場合, 後ろにくる「안」と「속」のどちらとも自由に組み合わさることができる. しかし, (27)の「안」を「속」に入れ換えてみると,「?건물 속/?극장 속에 들어가다」のように不自然な文になるが, そのような違いについては示されていない. 一方で, (28)の場合は,「속」を「안」に入れ換えて「건물 안으로 들어가다」にしても問題はない. このようなことから,「건물 안」と「건물 속」という語彙間の結合はいずれも問題がないと見られる. (27)の「안」を「속」に入れ替えると不自然な文になるというのは,「안」 と「속」の入れ替えの問題だけではなく, 助詞「에」との結合の結果であるとも考えられる. つまり, (27)の「속＋에」という空間名詞と助詞からなる中心語と「건물」という先行要素, そして「들어가다」という動詞との間で「語と語の好む傾向」が相反するため不自然になると言える.

それに対し, (29, 30)では, (29)の先行名詞「옷장」と(30)の先行名詞「장」は,「안」と「속」を区別して伴うだけの意味上の違いはないことから, 後行の要素である動詞「넣다」と「숨기다」の意味特性により,「안」と「속」の選択の制限が生じると見ることができる. (30a)の「장 속」を「장 안」に置き換えた(30b)をみると,「깊숙이 숨기다」との組み合わせが何となく不自然である. このようなことから, 後項の連語である「숨기다」だけではなく,「깊숙이」という副詞の意味特性も「속」と「안」の選択に係わっていることが分かる. すなわち, 文の主成分である名詞と動詞からなる連語構成以外の付加的な修飾語のレベルでも「안」と「속」の意味特性による選択の違いに係わることができるのである.

このように, ある単語について辞書的意味を十分理解できたとしても, 表現しようとする意味を的確に正

しく表現するためには，具体的な語と語の結合情報がなければ，思い通りの自然な文を作ることは難しい．

本研究では，上記のような既存の韓国語の辞書における意味記述を踏まえ，次の順に論議を進める．

第一に，類義語の対である「안と속」，「밖と겉」についてコーパス用例を収集して分析し，先行・後行要素と中心語の結合関係の様相と頻度情報から「안と속」，「밖と겉」の意味の重なりと排除，語彙的結合環境による出現の制約などを綿密に観察，分析し，その結果から「안と속」，「밖と겉」の意味領域の類似点と相違点を記述する．

第二に，「안，속，밖，겉」の対応関係を考察して，結合関係では見て取ることのできなかった，意味用法の弁別性に関する情報を取り出す．

第三に，上記の第一と第二の結果をもとに，個別語の意味領域，意味グループとしての相互関係を明らかにし，韓国語の内外空間名詞の使用域の全体像を描くこととする．

4.1. 内部空間名詞「안，속」の意味用法の分析

4.1.1. 「안，속」の格助詞形と前項の連語の現れ方

前項の連語の分析に入る前に，まず中心語である[안/속＋格助詞]形の現れ方を見てみよう．「안，속」との格助詞形別の出現用例数をみると，下の表9のように，「안」は4,235例が収集されたのに対し，「속」は11,616例が収集され，「안」の2.7倍にものぼり，「안」より「속」の使用頻度がはるかに高いことが分かる：

表 9.「안，속」の格助詞形の現れ方

（アラビア数字は用例数，( )内は頻度[%]）

	에	에서	으로	의	을	이	合計
안	1656(39.1[66])	1092(25.8)	781(18.4)	380(9.0)	228(5.4)	98(2.3)	4235
속	4558(39.2)	3837(33.0)	1355(11.7)	979(8.4)	498(4.3)	389(3.3)	11616

本研究で対象としている「안」と「속」の格助詞形の頻出度は，「안」と「속」どちらとも「에＞에서＞으로＞의＞을＞이」の順となり，そのうち「에，에서，으로」の用例が80%以上を占める．

本研究で中心語とする「空間名詞＋格助詞」構造の前に現れる成分，つまり前項の連語をその統辞的構造にしたがって分類すると，第一に先行名詞を伴なう連語構成（以下，類型①とする），第二に動詞の連体形からなる連体修飾語を伴う連語構成（以下，類型②とする），前項の連語を伴わない連語構成（以下，類型③とする）の三つの類型に分類することができる．まとめると以下の図2の通りである：

[66] 小数点第2位を四捨五入して表示する．以下同様．

類型①　先行名詞＋[안/속＋格助詞]＋後項の連語
(건물 안에 들어가다.)(建物のなかに入る.)

類型②　連体修飾語＋[안/속＋格助詞]＋後行の連語
(집중호우가 내리는 속에서…)(集中豪雨が降るなかで…)

類型③　Ø[67]＋[안/속＋格助詞]＋後行の連語
(안에서 놀다.)[68](うちで遊ぶ.)

図 2. [안/속＋格助詞]の先行名詞による類型

[안/속＋格助詞]の出現用例を前項の連語の類型別に分類したところ，最も多く現れたのは類型①である. [안＋格助詞]の場合は，類型①が3,525例で80%を超え，類型②は収集されておらず，類型③が436例である. [속＋格助詞]の場合は，類型①が10,307例で89%近くを占め，類型②76例で少なく，類型③は936例あった.「先行名詞を伴わない」類型③の場合は，後項の連語の分析により得られる意味情報を基に「안」と「속」の意味領域を弁別していくことにする.「안」の用例の中に連体詞「그，이，저」を伴う例は263例あったが，文脈からその指示対象が特定できることが多く，本研究では連体詞「그，이，저」を伴う例を検討の対象から排除することにした. 収集した用例を，[안/속＋格助詞]の前項の連語の統辞的構造により三つの類型に分類し，更に格助詞別に分類して，表10にまとめた:

表 10. [안/속＋格助詞]の出現状況-前項の連語の類型と格助詞別分類

	안						속					
	類型①		類型②		類型③		類型①		類型②		類型③	
格助詞	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数		用例数	%
에	1434	40.7	-	-	61	14.0	4266	41.4	23	30.0	43	4.6
에서	934	26.5	-	-	80	18.3	3721	36.1	47	62.0	33	3.5
으로	525	14.9	-	-	241	55.3	991	9.6	3	4.0	355	37.9
이	192	5.4	-	-	34	7.8	24	0.2	0	-	364	38.9
을	88	2.5	-	-	8	1.8	354	3.4	3	4.0	126	13.5
의	352	10.0	-	-	12	2.8	951	9.2	0	-	15	1.6
合計	3525	100	-	-	436	100	10307	100	76	100	936	100

*合計の用例数は，上記表9の合計と異なるが，類型①から③に該当しない例は除外した結果である.

先行名詞を伴う類型①では，「안」と「속」のいずれも「에＞에서＞으로」の順に高い頻度で現れ，方向・場所を表す格助詞を伴う例が多くみられた. それに対し，先行要素を伴わない類型③では，「안」は「으로

[67] 本研究においてこの表示は，中心語に先行する連体修飾成分がないということを意味する.

[68] 類型①の例文は【標準】，類型②の例文は「韓国語コーパス」，類型③の例文は(エ-韓日)より引用. 類型①と②の日本語訳は筆者によるもので，類型③の日本語訳は(エ-韓日)の対訳である.

＞에서＞에」など方向・場所を表す格助詞の順で,「속」は主体・方向・対象を表す格助詞「이＞으로＞을」の順に出現する.

4.1.2. 類型①先行名詞を伴う連語構成の前項・後項の連語

4.1.2.1. 類型①における先行名詞の現れ方

類型①における先行名詞の現れ方を分析するために,[안/속＋格助詞]の先行名詞を出現頻度順で上位10位まで表にまとめる.　まず,「안」の類型①に分類される用例の先行名詞を下の表11に示す.

表 11. 類型①における[안＋格助詞]の頻出先行名詞

	안에(1434)**		안에서(934)		안으로(525)		안의(352)		안을(192)		안이(88)	
안 (3525)	방(部屋)	65*	테두리(枠)	41	방(部屋)	25	나라(国)	18	방(部屋)	34	방(部屋)	11
	입(口)	47	사회(社会)	38	대문(正門)	19	방(部屋)	18	집(家)	11	집(家)	9
	시일(時日)	46	범위(範囲)	26	집(家)	19	골목(路地)	4	입(口)	7	골목(路地)	5
	년(年)	43	차(車)	23	엘리베이터	11	입(口)	11	가게(店)	5	나라(国)	5
	올해(今年)	38	버스(バス)	21	(エレベーター)		집(家)	10	교실(教室)	5	입(口)	5
	시간(時間)	35	방(部屋)	17	건물(建物)	10	램(ラム)	9	대합실	5	비행기	3
	집(家)	27	입(口)	17	몸(からだ)	9	몸(からだ)	9	(待合室)		(飛行機)	
	우주(宇宙)	19	집(家)	29	입(口)	9	차(車)	9	배(船)	5	차(車)	3
	몸(からだ)	18	비행기	15	교회(教会)	8	포구(浦)	9	차(車)	5	교실(教室)	2
	배(おなか)	17	(飛行機)		문(門)	8	성(城)	8	우리(檻)	5	법정(法廷)	1
			울타리(柵)	12	올해(今年)	8			문(門)	4	울(柵)	1
合計		355		226		126		113		86		45

*左の列に示した上位10位までの先行名詞の出現用例数. **( )の中の数字は類型①における格助詞別の用例数.

上記の表11の「안＋格助詞」の頻出先行名詞を名詞類別に分類した結果を以下の表12に示す. 表の中の数字は格助詞別の高頻度順10位の先行名詞の用例数と頻度である:

表 12. 類型①における[안＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類

名詞分類	格助詞結合形別の出現用例数													
	안에		안에서		안으로		안의		안을		안이		名詞分類別合計	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
時間名詞	162	46.0	-	-	8	6.0	-	-	-	-	-	-	170	18.0
場所名詞	128	36.0	33	15.0	100	80.0	49	46.0	69	80.0	28	62.0	407	43.0
身体名詞	65	18.0	17	8.0	18	14.0	20	19.0	7	8.0	5	11.0	131	14.0
具体名詞	-	-	71	31.0	-	-	19	18.0	10	12.0	7	16.0	107	11.0
抽象名詞	-	-	105	46.0	-	-	18	17.0	-	-	5	11.0	128	14.0
合計	355	100	226	100	126	100	105	100	86	100	45	100	943	100

*「－」表示は全く現れないという意味ではなく,低頻度でもコーパスの用例に載っている可能性はあるが,統計処理上,資料の中には含まれていないという意味である.

上記の表12から，空間名詞と結びつく格助詞によって，共起する先行名詞の種類と出現頻度に異なる傾向が見られる．[안＋格助詞]全体では，場所名詞43%，時間名詞18%，身体名詞と抽象名詞がそれぞれ14%，具体名詞が11%で，場所名詞の出現頻度が最も高い．しかし結合する格助詞別にみると，注目すべきことに，「안에」の項目では時間名詞が46%と，半分近くを占めでいるのに対し，「안에서」の項目では時間名詞の用例は見当たらず，抽象名詞が46%といった分布の違いが見られる．また「안을，안이」の項目では場所名詞が60%以上を占め，方向を表す助詞「으로」と結合した「안으로」では先行する名詞のうち場所名詞が79%と，圧倒的に多い．

下の表13は，「속」の類型①に分類される用例の頻出先行名詞の出現様相である．[속＋格助詞]の先行名詞を，頻度順で上位10位まで表13にまとめた：

表 13. 類型①における[속＋格助詞]の頻出先行名詞

	속에(4266)**		속에서(3721)		속으로(991)		속의(951)		속을(354)		속이(24)	
	머리(頭)	82*	어두움(闇)	132	마음(心)	80	마음(心)	44	어둠(闇)	28	머리(頭)	5
	물(水)	82	생활(生活)	87	어둠(闇)	52	생활(生活)	44	마음(心)	19		
	어둠(闇)	78	상황(状況)	82	물(水)	44	영화(映画)	37	숲(森)	12		
	가슴(胸)	70	현실(現実)	70	구멍(穴)	20	사회(社会)	21	가슴(胸)	11		
속***	의식(意識)	55	관계(関係)	68	이불(布団)	18	숲(森)	20	머리(頭)	9		
(10307)	생활(生活)	47	역사(歴史)	58	입(口)	17	어둠(闇)	29	안개(霧)	9		
	주머니	40	사회(社会)	51	바다(海)	29	작품(作品)	29	물(水)	8		
	(小袋)		분위기	50	안개(霧)	15	소설(小説)	15	미궁(迷宮)	7		
	작품(作品)	39	(雰囲気)		잠(眠り)	13	기억(記憶)	13	구멍(穴)	6		
	기억(記憶)	36	환경(環境)	50	산(山)	12	이야기	12	가방(鞄)	5		
	땅(地)	35	의식(意識)	50			(物語)					
合計		564		698		287		222		114		5

*左の列に示した上位10位までの用例の出現用例数.
**( )の中の数字は格助詞別の用例数の合計である.
***( )の中の数字は[속＋格助詞]の出現用例数の合計である.
合計の項目の数字は各格助詞形の高頻度順10位の先行名詞の合計である.

上記の表13の「속＋格助詞」の頻出先行名詞を名詞類別に分類した結果を表14に示す．表の中の数字は格助詞別の高頻度順10位の先行名詞の用例数である：

表 14. 類型①における[속＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類

名詞分類	格助詞結合形別出現用例数													
	속에		속에서		속으로		속의		속을		속이		名詞分類別合計	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
抽象名詞	91	16.0	479	69.0	93	32.0	78	35.0	19	17.0	−	−	759	40.0
現象名詞	78	14.0	132	19.0	67	23.0	−	−	37	32.0	−	−	314	17.0
場所名詞	117	21.0	−	−	92	32.0	20	9.0	33	29.0	−	−	262	14.0
身体名詞	152	27.0	−	−	17	6.0	16	7.0	20	18.0	5	100.0	210	12.0
活動名詞	47	8.0	87	12.0	−	−	44	20.0	−	−	−	−	178	9.0
事柄名詞	39	7.0	−	−	−	−	64	29.0	−	−	−	−	103	5.0
具体名詞	40	7.0	−	−	18	7.0	−	−	5	4.0	−	−	63	3.0
合計	564	100	698	100	287	100	222	100	114	100	5	100	1889	100

*「-」表示は全く現れないという意味ではなく，低頻度でもコーパスの用例に載っている可能性はあるが，統計処理上資料の中には含まれていないという意味である．**表の中の数字は各格助詞形の頻度順10位の先行名詞の用例数である．

表12と14によると，[안＋格助詞]の場合は場所名詞が最も多く，43%を占めていたのに対し，[속＋格助詞]では抽象名詞が最も多く，40%を占め，次いで現象名詞は17%，場所名詞は14%となり，時間名詞の例は今回の調査からは得られなかった．格助詞別の分布を見ると，「속에」は身体名詞27%と場所名詞21%と，実体名詞との結合が多く見られるのに対し，「속에서」は抽象名詞69%と現象名詞19%と，非実体名詞との結合が合わせて88%に上り，同じ空間名詞であっても，空間名詞と結びつく格助詞の種類によって，中心語と共起する先行名詞の種類に大きな差があることが分かる．

上の表11と13，表12と14より得られた，[안＋格助詞]と[속＋格助詞]の頻度順上位10位以上の先行名詞の名詞類別の出現用例数を下の図3に示す．図3では，「안」と「속」のそれぞれと共起する先行名詞の種類と使用頻度に違いがあることが鮮明に見られる．

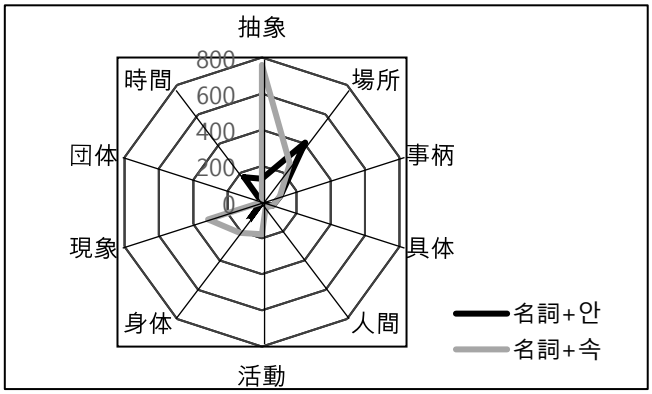

図 3. [안/속＋格助詞]の先行名詞の分布

また，表12と14によると，同じ空間名詞であっても，空間名詞と結びつく格助詞の種類によって中心語と共起する先行名詞の種類に大きな差があることが分かるが，その内容をまとめて下の図4と5に示す.

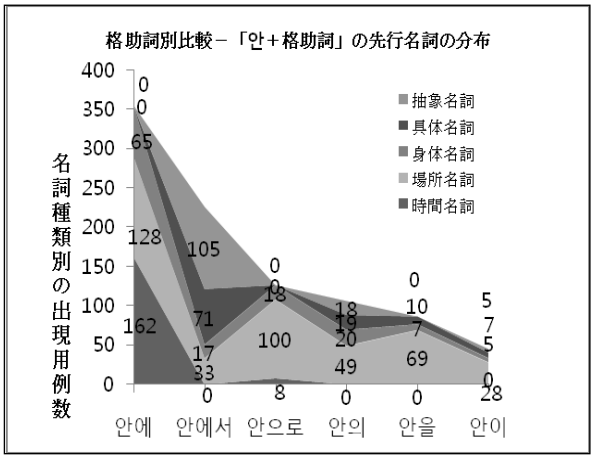

図 4. 格助詞別に見る[안＋格助詞]の先行名詞の分布

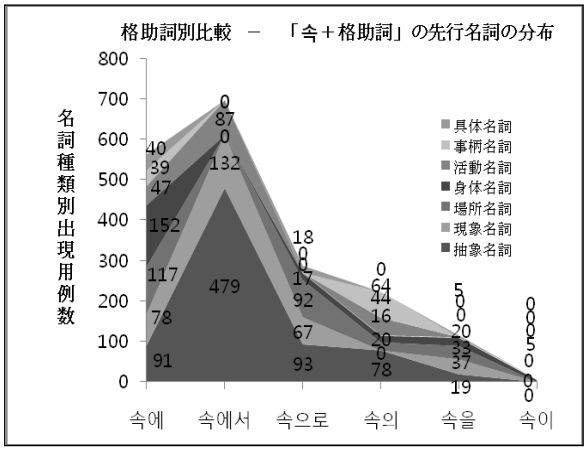

図 5. 格助詞別に見る[속＋格助詞]の先行名詞の分布

これまでの調査の結果から，空間名詞別に，また，同じ空間名詞であっても格助詞形によって先行名詞の出現には差が見られることに注目し，類義と対義の対の意味用法の分析においては[内外空間名詞＋格助詞]からなる中心語の資料を基に分析，記述することにする.

4.1.2.2. 類型①における頻出先行名詞の分析

以下では，上記表11と13の頻出先行名詞を中心に，「안」または「속」のそれぞれとよく結合する名詞と，「안」と「속」のいずれともよく結合する名詞に分けて，それらの名詞と「안」と「속」の結合様相を検討していく.

「안」または「속」と相補的に共起する先行名詞の意味特性は，その名詞とよく共起する「안」または「속」の相違点を示し出すものと考えることができ，「안，속」のいずれの方とも共起する名詞の意味特性は，「안」と「속」の類義点を示すものと考えることができる.

[안＋格助詞]，[속＋格助詞]のそれぞれと頻繁に結合する名詞

＜先行名詞＋[안에/속에]＞

[名詞＋안에]の場合，先行名詞は時間＞場所＞身体名詞の順に現れ，「시일，년，올해，시간」など時間の長さを表す名詞が46％と最も多く，続いて「방，집，우주」など具体空間を表す場所名詞が36％を占める. このとき，「안」は，＜時間的に限定された範囲内＞という＜範囲＞の意味を表わす.「입，몸，

배」などの身体名詞と共に用いられる「안」は，人間の身体という基本的な意味よりも一つの容器として身体空間の意味を表すことが多い．

（時間名詞）

(31) 48시간 안에 결정을 내리라는 것이었다. ＜CH000084＞
（48時間内に決定を下すようにということだった．）

（場所名詞）

(32) 할머니는 방 안에 누워 있었다. ＜BEXX0022＞
（おばあさんは部屋のなかで横になっていた．）

身体名詞は「안」と「속」のとちらとも共通して用いられることが多く，次項で詳しく取り扱うことにする．「안」に対し，[名詞＋속에]の場合，先行名詞は身体＞場所＞抽象名詞の順に多く，特に「머리，가슴」などの身体名詞が最も多いが，本義の「身体」より＜心理，心情＞などの意味に拡大することが多い．「속」は「물，땅」のような自然名詞との結合が多く，＜形の一定しない，中が物質により詰まっている，不可視の空間＞であることを表す．また，「기억，의식」などの抽象名詞が16％を占め，「속」は＜心理・心情＞の意味用法の頻度が高いと言える．

（身体名詞）

(33) 변화를 위해 앞장서야 한다는 생각이 늘 머리 속에 꽉 차 있곤 했다.＜CH000087＞
（変化のために先頭に立たなければという思いで，いつも頭のなかがいっぱいだった．）

(34) 우리들의 가슴 속에 길이길이 사라지지 않을 하나의 肖像. ＜BHXX0019＞
（我々の胸のなかに永遠に消え去ることのない一つの肖像）

（場所名詞）

(35) 탄층이 깊이 있는 경우는 갱내굴이라 하여 땅 속에 굴을 뚫고 석탄을 캐낸다.
＜BDXX0009＞
（炭層が深いところにある場合は，坑内トンネルと言って，土のなかにトンネルを掘って石炭を掘り出す．）

（抽象名詞）

(36) 원주민들의 기억 속에 남아 있는, 백인들과의 첫 접촉은 1900년쯤부터 이루어진다.
＜BHXX0031＞
（先住民の記憶のなかに残っている，白人との初の接触は1900年ごろから行わる．）

（現象名詞）

(37) 어둠 속에 잡귀들이 몸을 감추고들 있었다. ＜BEXX0022＞

（闇のなかにおばけたちが身を隠していた．）

＜先行名詞＋「안에서/속에서」＞

［名詞＋안에서］の場合，先行名詞は抽象＞具体＞場所名詞の順に多く現れ，「테두리，범위，울타리 」といった範囲を規定する抽象名詞が47%で最も多い．「안」は，これらの先行名詞によって限定される＜抽象的範囲または領域＞の意味特性を表す．また「안에서」は，「차，버스，비행기」などの具体名詞と共に用いられると，乗り物としての属性や機能の面より，＜具体的な所在・活動の場所＞の意味特性を表すようになる．

（抽象名詞）

(38) 당연히 그 테두리 안에서 움직이는 것이 질서이며 도리라는 주장도 있다. ＜CH000017＞

（当然その枠のなかで動くのが秩序であり，道理であるという主張もある．）

(39) 가정이라는 울타리 안에서 때로는 은밀하게 때로는 공개적으로 일어나는 가정폭력을 사회에서 법으로 다스려야 한다는 움직임이 구체화되고 있다. ＜CA96F343＞

（家庭という囲いのなかで，時には密かに時には公に発生する家庭暴力を社会で法律で罰せられなければならないという動きが具体化している．）

（具体名詞）

(40) 돌아가는 차 안에서 영훈이 아빠가 영훈에게 말했습니다. ＜CG000032＞

（帰りの車のなかで，ヨンフンの父はヨンフンに言いました．）

［名詞＋속에서］の場合，先行名詞は抽象＞現象＞活動名詞の順に現れ，抽象名詞が69%と最も多く，場所，身体，具体名詞など実体性名詞の出現は少ない．「안에서」とは異なり，範囲を表す名詞は現れず，「현실，관계，분위기」といった状況を表す名詞がほとんどである．次いで，「어두움」などの現象名詞が19％を占めるが，これらの名詞も意味拡大により抽象化することが多く，「속에서」は，＜ある状況や状態，関係の中で＞といった抽象的意味特性を強く表すと言えよう．

（抽象名詞）

(41) 나는 현재의 사회 현실 속에서 무시할 수 없는 비중을 차지하는 노동 시장 내에서의 성적 차별에 대하여 논해 보려고 한다. ＜BIXX0004＞

(私は今の社会の現実のなかで無視できない比重を占めている労働市場内における性差別について述べようとする.)

(42) 이기적 경쟁심만 불러일으키는 사회 분위기 속에서 어려서부터 규율과 질서를 깨우치게 하는 산 교육… ＜CA96F351＞
(利己的な競争心だけを引き起す社会の雰囲気のなかで, 幼いころから規律と秩序を諭してやる生きている教育…)

(現象名詞)

(43) 명준은 어둠 속에서 몸을 도사렸다. ＜AE000094＞(25の再掲)
(ミョンジュンは暗闇のなかで体を沈ませた.)

(活動名詞)

(44) 우리 민요는 생활 속에서, 일 속에서 자연발생적으로 생겨난 것으로 여러분이 다 아시는 바와 같습니다. ＜CH000063＞
(我々の民謡は生活のなかで, 労働のなかで自然発生的に生まれたもので, 皆さんもご存知の通りです.)

＜先行名詞＋「안으로/속으로」＞

[名詞＋안으로]の場合, 先行名詞は場所＞身体＞時間の順に現れるが,「방, 교회」などの場所を表す名詞が79%を占める. これらの場所名詞は,「방」のように内部空間を持つ立体のものと,「문」のようにそれ自体では空間を持たないが, 一つの通過の地点や境界として内の空間と外の空間を区分ける役割をするものに分けることができる. このようなことから,「안」は＜二次元の平面＞と＜三次元の立体＞という両空間の意味特性を表すと考えられる.

(場所名詞)

(45) 형이 어머니의 등을 밀면서 대문 안으로 들어갔다. ＜AE000148＞
(兄が母の背中を押しながら大門のなかに入った.)

(46) K는 차에서 내려 건물 안으로 들어갔다. ＜BEXX0007＞
(Kは車から降りて, 建物のなかに入った.)

[名詞＋속으로]の場合, 先行名詞は抽象＞場所＞現象の順に現れ, 抽象名詞と場所名詞が32%ずつ現れる. 特に抽象名詞の場合, ＜心情・感情＞を表す「마음」が用例の大部分を占める. また, 場所名詞の場合,「물, 바다, 산」といった自然物の空間を表すことが多く, ＜周囲が取り囲まれた立体の空間,

中の見えない不可視の空間，密集の空間＞を表す．

（抽象名詞）

(47)나는 이 때 온몸으로, 그리고 마음 속으로 절절히 느끼게 되었다. ＜BHXX0023＞

（私はこの時，身を以て，また心のなかで切々と感じるようになった．）

（場所名詞）

(48)최서방은 발길을 빨리 하여 더 깊이 산 속으로 들어갔다. ＜BEXX0022＞

（崔さんは足取りを速めて，さらに深い山のなかに入っていった．）

＜先行名詞＋「안의/속의」＞

［名詞＋안의］の場合，先行名詞は場所＞身体＞具体＞抽象の順に現れ，「방，골목，집」といった場所名詞の45％を含め，具体的空間を表す先行名詞が83％を占める．また，抽象名詞と共に用いられる「안」は，その先行名詞が表す抽象的な空間の範囲を限定する意味を表す．

（場所名詞）

(49)방 안의 분위기가 더욱 머쓱해졌다. ＜CG000115＞

（部屋のなかの雰囲気がよけいにまずしくなった．）

（抽象名詞）

(50) 세무 조사는 자동차 수입과는 전혀 관계가 없는 나라 안의 문제이다. ＜BA93E009＞

（税務調査は，自動車の輸入とは全く関係のない国内の問題である．）

それに対し，［名詞＋속의］の場合，先行名詞は抽象＞事柄＞活動の順に現れ，「마음，기억」といった抽象名詞が35％であるのに対し，場所名詞は9％に過ぎない．「영화，작품」といった事柄名詞との共起が29％を占め，「속」は具体物よりは抽象的対象との共起頻度が高く，＜心理的・抽象的＞な意味を表す．

（事柄名詞）

(51)이들은 영화 속의 인물을 철저히 연구해서 자신이 영화 속의 실제 인물처럼 되려고 노력한다. ＜BHXX0065＞

（彼らは映画のなかの人物を徹底して研究し，自分が映画のなかの実際の人物のようになろうと努力する．）

＜先行名詞＋「안을 /속을」＞

[名詞＋안을]においては,「방, 집」などの場所名詞の共起頻度が80％と最も高く, 具体名詞がそれに続くが,「배, 차」など交通手段を表す具体名詞の場合は, ＜活動性・可視性＞といったような場所空間としての意味を表すことが多い.

（具体名詞）

(52)경관이 다가와 허리를 굽히고 차 안을 들여다보더니… ＜CE000030＞

（警察官が近づいてきて, 腰をかがめて車のなかを覗き込んで…）

それに対し, [名詞＋속을]においては 「안개, 어둠」といった現象名詞が32％と最も高く,「숲, 물」などの場所名詞が29%を占める.「속」は自然現象や自然物によって取り囲まれた＜不可視の空間＞を表す.

（現象名詞）

(53)나를 따르는 사람은 어둠 속을 걷지 않고 생명의 빛을 얻을 것이다. ＜CH000004＞

（私に従う者は暗闇のなかを歩かず, 命の光を得ることになる.）

（場所名詞）

(54)부처님께서 교외 숲 속을 제자들과 거니실 때의 일이었다. ＜BHXX0037＞

（お釈迦様が郊外の森のなかを弟子たちと歩いていたときのことだった.）

＜類型①における頻出先行名詞の分析のまとめ＞

これまで先行名詞を伴う[안/속＋格助詞]の先行名詞の分布と用例を通して分析した「안」と「속」の意味用法をまとめると, 次の1)から6)までの通りである.

1) 中心語によって頻出先行名詞の種類も異なり, 格助詞の意味の実現にも差が見られる.
2) [안＋格助詞]の先行名詞は70％以上が場所名詞, 身体名詞, 具体名詞など実体を持つ実体性名詞であるが, [속＋格助詞]の先行名詞は70%以上が抽象名詞, 現象名詞, 活動名詞, 事柄名詞など実体を持たない非実体性名詞であり,「속」の連語構成の場合は,「머리, 가슴」などの身体名詞であっても抽象的な意味として用いられることが多い.
3) 時間名詞はほとんど「안에」 と共に現れ, 時間的な限界や範囲を表し, 語彙的・文法的な意味から固まった表現であると言うことができる.
4) 具体名詞, 場所名詞, 身体名詞に比べ, 時間名詞や抽象名詞は特定の格助詞形に用例が偏る傾向があり, その意味領域はかなり限定される.
5) [속＋格助詞]の場合, 時間名詞はあまり見当たらず, 抽象名詞, 身体名詞, 現象名詞の順に出現頻度が高い. また,「속」は「안」と違って, 現象名詞, 活動名詞, 事柄名詞の出現頻度が高く, 抽象化した意味領域の範囲が広い.

6) ［안＋格助詞，속＋格助詞］の先行名詞から抽出できる「안，속」の意味特性を下記の図6にまとめたところ，実体性が高くなるほど意味の重なりが密接になり，実体性が低くなるほど意味の重なりが少なくなり，意味領域が離れていくことが明らかになった．

これまでの「안」と「속」の先行名詞の意味特性の現れ方をまとめて，下の図 6 に示す．

- 「안」と「속」の先行名詞として現れる名詞を左右に対立させる．
- 実体性名詞と非実体性名詞との共起関係を上下に対立させる，その弁別要素として＜可視性，具体性，空間性＞，＜不可視性，抽象性，非空間性＞を挙げる．
- 先行名詞のうち□で囲んだ名詞は「안」と「속」のどちらの先行名詞にもなるもの．
- →は「そのような傾向が強まる」ということを示す．

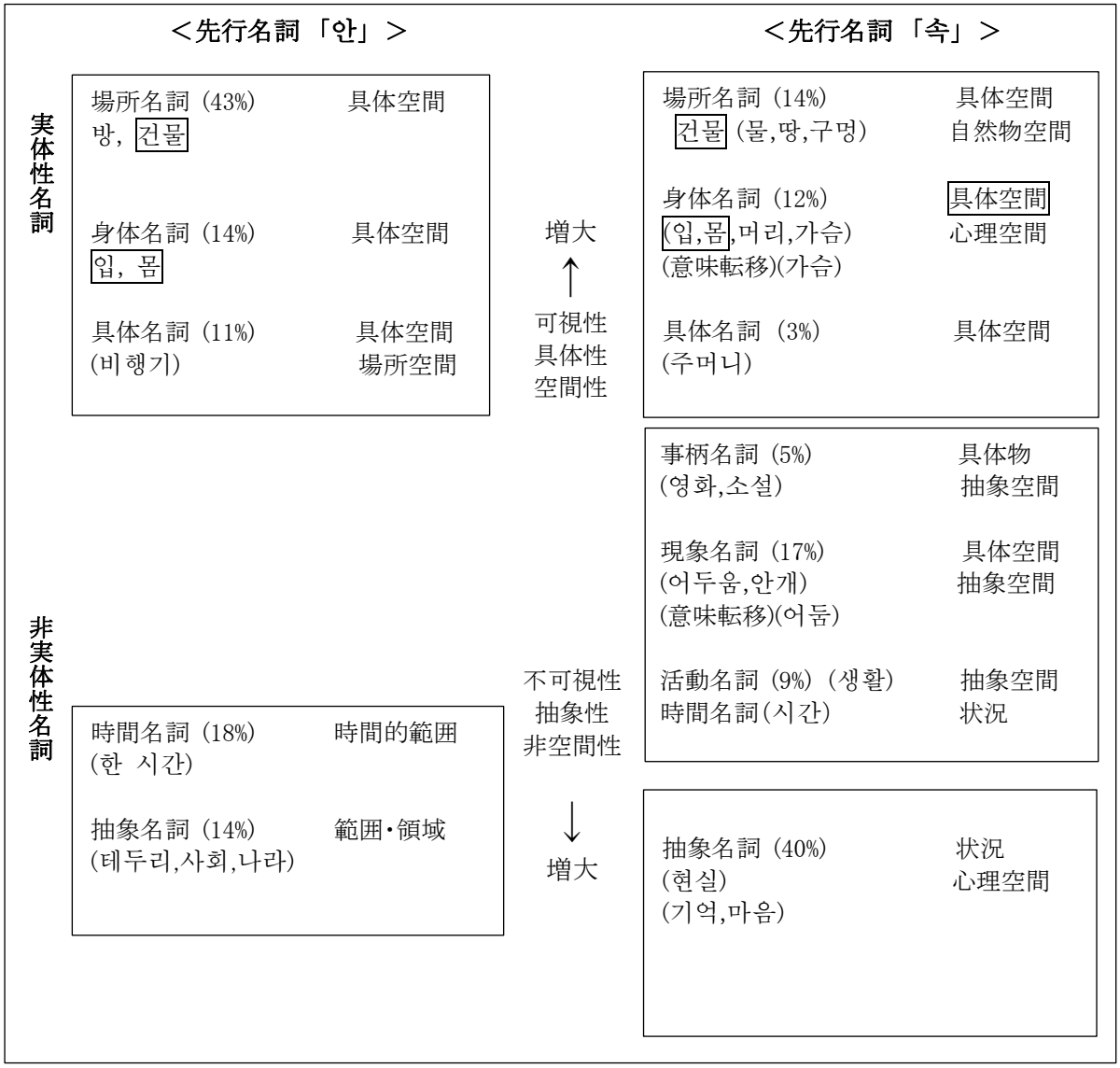

図 6.「안」と「속」の先行名詞の意味特性の現れ方

4.1.2.3. 共通の先行名詞を伴う「안と속」の後項の連語の分析

上記表11と表13に示したように，「안」と「속」の先行名詞のうち一部の部類は「안」と「속」の両方と共通して用いられる．そのような先行名詞は類義の対である「안」と「속」の意味用法の重なりを指し示すものであると考えられる．そこで，類義の対の意味用法の重なりを分析するために，表11と表13より出現用例数3以上の名詞のうち，「안」と「속」の両方と共起する先行名詞を抽出して，次の表にまとめた：

表 15.「안」と「속」の両方と共に現れる名詞

共通の先行名詞	用例数		共通の先行名詞	用例数		共通の先行名詞	用例数		共通の先行名詞	用例数	
	안에	속에		안에서	속에서		안으로	속으로		안의	속의
입(口)	47	23	사회(社会)	38	51	입(口)	9	17	몸(身体)	9	7
시간(時間)	35	14	틀(枠)	12	19	－	－		사회(社会)	3	21
몸(身体)	18	23	세계(世界)	9	25	－	－		우리(我)	3	10
우리(我)	17	12	공간(空間)	8	18	－	－		－	－	－
내(自分)	14	21	구조(構造)	7	21	－	－		－	－	－
공간(空間)	10	14	－	－	－	－	－		－	－	－
상자(箱)	9	22	－	－	－	－	－		－	－	－
품(懐)	8	12	－	－	－	－	－		－	－	－

＊出現用例数3以上の用例から比較した．
＊[안 을 / 속 을， 안 이 / 속 이]の場合は，用例数が3以上である共通の先行名詞は収集されなかった．

上の表15から，「안」と「속」に共通して現れる名詞は，中心語によって種類や用例数に偏りがあることが分かる．「안」と「속」が共通する先行名詞をとる場合，「안에/속에」の用例が最も多い．また，先行名詞が抽象名詞である場合は，「안에서/속에서」と共起する頻度が高い．また「안」と「속」のどちらとも結合する名詞であっても，実際はどちらか一方と共起しやすいものがあり，一方ではどちらともほぼ同等に共起するものがある．たとえば，「시간」は「시간 안에」が35例，「시간 속에」が14例で「안에」と共起する用例数が多いのに対し，「몸」は「몸안에」が18例，「몸 속에」は23例となり，「속에」と共起する例のほうが多くみられる．

以下では，中心語［안/속＋格助詞］の前項・後項の連語との結合条件を検討することで，「안」と「속」の意味用法の重なりと相違を記述する．用例分析に当たり，下記の点を確認しておこう：

- 共通の先行名詞を名詞の種類別に分けて分析を行う．
- 「＞，＜」の記号は，「안」と「속」の両方とも用例が現れるが，その出現頻度に差があることを意味する．
- （ ）の中の数字はコーパスから収集した用例数である．

共通の先行名詞が身体名詞であるもの

身体名詞の場合は，「입，몸」の例がほとんどで，입 안에(47)＞입 속에(23)，입 안으로(9)＜입

속으로(17), 몸 안에(18)＜몸 속에(23), 몸 안의(9)＞몸 속의(7)である.

(55) a. 국수를 입 안에 쏙 집어넣고는 오물오물 씹어 먹는다. ＜BHXX0069＞
(麺を口のなかに入れては, もぐもぐとかんで食べる.)
b.이것저것 손에 잡히는 것을 입 속에 집어넣던 어린 놈이… ＜BHXX0051＞
(あれこれ手にさわるものを口のなかに入れていた幼い子が…)
c. 입 안에 쓴 침이자꾸 괴었다. ＜BEXX0009＞
(口のなかに苦いつばがたまっていた.)
d. 얼마 남지 않은 소주를 입 속에 털어넣고는… ＜BEXX0008＞
(残りわずかの焼酎を口のなかに入れては…)

(56) 나는 입 안이 씁쓰름해졌습니다. ＜DENA009＞
(私は口のなかがにがくなりました.)

(57) a.수은은 사람 몸 속에 들어가면 축적되어… ＜BA93E009＞
(水銀は人間の体のなかに入ると蓄積して…)
b.우리 몸 안의 장기들은 나이를 먹을수록 위축되는 반면… ＜CB000121＞
(私たちの体の中の臓器は年を取るにつれ萎縮していく反面…)

(58) 몸 안에/*속에 있는 모든 긴장이 풀려나가듯 진우의 마음은 평화로웠다. ＜BEXX0001＞
(体のなかの緊張が全て解けていくようにチヌの心は穏やかだった.)

(55a.b.c.d) の後項の連語「넣다, 고이다, 털어넣다」は「안」と「속」のどちらとも共起するが, その頻度には差があり, 文のほかの要素などにより選択が変わる. 例えば, コーパス調査の結果を見ると,「입 안」は19例,「입 속」は10例で,「안」が「속」より出現頻度が高いが, 後項の連語が「털어넣다, 쑤셔넣다」などの場合は主に「속」と共起する. このようなことから, ＜奥の空間, 狭い空間＞という意味特性が「속」の空間的意味を構成するということが分かる. (56)の「입 안이」は「씁스름하다」と共起して口の中の状態や感覚を表わすが, ときには, 意味拡大によって＜ほろ苦い気持ちになる＞といった＜心理・心情＞を表す. それに対し,「속」は「입 속이 헐다」のように具体的身体空間を表すときに用いられる.

身体名詞「몸」の場合, (57a)のように「들어가다, 쌓이다, 있다」などと共起する場合, その主体や対象が「수은, 마약」などといった物質で,「몸」の具体空間としての意味が薄れる場合には「안에」より「속에」と主に共起するが, (57b)のように先行名詞「몸」が＜具体的な空間性, 存在の空間＞の意味を表す場合には「안」と「속」を入れ換えることもできる.

また, (58)のように動詞の補語が「긴장, 생명」といった＜抽象名詞＞である場合は,「몸 안에」しか用いられない. (57b)のように補充語が「세포, 신경, 장기」など実体を持つ＜身体器官の一部＞である場合は「안」と「속」のどちらとも共起する.

このように，身体名詞「입，몸」などの場合は，身体との緊密性，一体性，不可視性，閉鎖性が強調される場合には「속」をより好む傾向があり，モノを入れるなどの具体空間の意味が強調される場合は，「안」と「속」の両方とも用いることができるが，どちらかと言えば，「안」の頻度がより高くなる．また，心理的・抽象的な意味の補語や後項の連語を伴う場合は，ほとんど「안」と共起している．

共通の先行名詞が抽象名詞であるもの

抽象名詞の場合は，「사회，세계，구조，틀」などがあり，사회 안에서(38)＜사회 속에서(51)，틀 안에서(12)＜틀 속에서(19)，세계 안에서(18)＜세계 속에서(23)，구조 안에서(7)<구조 속에서(21)，사회 안의(3)<사회 속의(21)である．

(59) a.조직 사회 안에서/*속에서 개인의 힘이란 한계가 있기 마련이었다. ＜AE000060＞
(組織社会のなかで個人の力というのは限界があるものだった.)
b.우리는 하루가 다르게 변화하는 사회 *안에서/속에서 살아가고 있다. ＜CB000119＞
(私たちは日ごとに変化する社会のなかで生きている.)

(59a)のように「안」は先行名詞により規定される＜範囲・領域内，条件の下＞という意味として用いられ，文の必須成分でない付加的成分となることが多い．それに対し，「속」は(59b)のように，前項の連語により規定される抽象的空間の＜状況や状態の中＞という意味が加わり，後項の動詞の必須項となることが多い．後項の連語においても，「살아가다，자라다」のような持続性の動詞が主に用いられる．

共通の先行名詞が時間名詞であるもの

共通して現れる時間名詞は「시간」しかなく，시간 안에が35例，시간 속에が14例で，「시간 안에」の出現頻度が高い．

(60) a.48시간 안에/*속에 결정을 내리라는 것이었다. ＜CH000084＞
(48時間内に決定を下すようにということだった.)
b.그는 인간이 유한한 시간 속에/*안에 던져져 병들고 언젠가는 죽지 않으면 안 되는 상황에 있는 것에 관하여… ＜BHXX0037>
(彼は，人間が有限の時間の中に放り出され，病に冒され，いつか死ななければならない状況に置かれていることについて…)

「안」は，(60a)のように，時間の長さや期間を表す「시간」と共起して＜時間的条件や範囲＞を表し，＜行動の終結・完了＞を表す動詞を伴うのに対し，「속」は，(60b)のように，時間の長さや期間の限定を表す「시간」ではなく，抽象化した時間，即ち，＜ある時間的状況＞を表し，「살다，있다，두다，숨다」といった＜持続性＞を表す動詞と共起する．

共通の先行名詞が場所名詞・具体名詞であるもの

表15には場所名詞の例はないが，具体的空間を表す「공간」の例を挙げる．具体名詞は，身体名詞と並んで「안」と「속」の混用が多く現れる部分であり，ここでは상자 안에(9)＜상자 속에(22)を例示する．

(61) a.해바라기와 작열하는 태양을 그의 회화적 공간 안에 채색해 놓았다.＜BEXX0001＞
(ひまわりと灼熱の太陽を彼の絵画的空間のなかに彩色したのである.)
b.거대한 바닷물의 공간 속에 갇혀… ＜BEXX0020＞
(巨大な海の空間のなかに閉じ込められ…)
c. 상자 안에 넣어 소중스레 선반 위에 얹었다. ＜CG000114＞
(箱のなかに入れて大切に棚の上に置いた.)
d.삼중의 상자 속에 소중히 보관하고 있는… ＜BA90A010＞
(三重の箱のなかに大切に保管している…)
e.판도라가 상자를 열자 상자 속에 들어 있던 질병과 재앙의 영들이 나와서 온 세상에 퍼졌다. ＜CH000003＞
(パンドラが箱を開けると，箱のなかに入っていた病気，災いの霊が飛び出して，世界中に飛び散った.)

(61a)と(61b)は同じ先行名詞を伴っているが，連体修飾語により異なる空間的性質を持つ．(61a)のような二次元の平面は「안」と共起して＜開かれた可視の空間>を表し，(61b)の三次元の立体は「속」と共起して＜閉ざされた不可視の空間＞を表す．このときの「안」と「속」は置き換えできない．

具体名詞の場合，「상자」は「안」と「속」のどちらとも共起し，置き換えできる場合も多い．(61c)のように「안」と共起する場合，後項の連語は主に「넣다，있다」が用いられ，(61d)のように「속」と共起する場合にも，「넣다，두다，보관하다，들어 있다」を用いるなど，あまり差が見られない．しかし，コーパスを調査した結果では「속」の出現頻度が高く，2.5倍にもなる．そこで，「안」と「속」の一方しか用いられない場合と両方とも用いられる場合を区別するために(61c)と(61d)を比較してみると，(61c)の先行名詞は単に「상자」であるが，(61d)の先行名詞は「삼중의 상자」という閉ざされた空間を強調する連体修飾語がついている．また，(61e)のように，閉ざされた状態が前提される場合は「속」を用いることが多い．このようなことから，ほとんどの場合，「안에」は「속에」に置き換えても問題ないが，その逆は不自然になることが多く，「속」がより空間的領域が限定されるということが分かる．

先行要素が代名詞であるもの

(62) a.내 안에 있는 토속 신앙과 그 안에 자리잡고 있는 나의 민중의식은… ＜BHXX0030＞
(私のなかにある土俗信仰とそのなかに根づいている自分の民衆意識は…)
b.내 속에 있는 진정으로 바라는 나의 모습을 찾고 싶은 거예요. ＜BEXX0008＞
(私のなかにある，真に求めていた自分の姿を探したいのです.)

c.어쩌면 시(詩)의 신(神) 뮤즈가 내 안에 와 머물고 있었던가. ＜CH000044＞
(もしかしたら詩の神であるミューズが私のなかに宿っていたのか.)

(62)の「내 안에, 내 속에」は,「있다, 남아 있다」のような＜存在や状態の継続＞を表す動詞を伴うことが多い. その補語としては, (62b,c)のように,「안에」は「신앙, 가능성, 기질」などといった概念的抽象名詞が主に用いられ,「속에」は「불안, 욕망, 용기」などといった心理・感情的抽象名詞が主に用いられる. また, (62c)では「당신, 뮤즈」といった人間名詞が補語として用いられ,「所在」を表す「안」の具体的空間の意味特性が鮮明に表れている.

＜共通の先行名詞を伴う「안と속」の後項の連語の分析のまとめ＞

「안と속」を中心語とする連語構成において共通の先行名詞を伴う用例を分析した結果をまとめると, 次の通りである.

1) 格助詞結合形により, 共通する名詞の種類と用例数に偏りが見られる. 共通する先行名詞はほとんどが「안에/속에」と共起するが, 抽象名詞の場合は主に「안에서/속에서」と共起し, それも＜空間, 範囲＞の意味に限る. 他の格助詞形との共起はあまり見当たらない. ある先行名詞が「안」と「속」の両方と共起すると言っても, 実際はどちらか一方が多く用いられる傾向を見せるものと, 両方がほぼ同等に用いられる傾向のものに分けられる.
2) 身体名詞「입, 몸」などの場合は, 身体との緊密性, 一体性, 不可視性, 閉鎖性が強調される場合には「속」をより好む傾向があり, モノを入れるなどの具体空間の意味が強調される場合は,「안」と「속」の両方とも用いれれるが,「안」がより頻繁に用いられる. また, 心理的・抽象的な意味の補語や後項の連語を伴う場合は,「안」と共起することが多い.
3) 抽象名詞との連語構成では,「안」は先行名詞により規定される＜範囲・領域内, 条件の下＞の意味を持つ付加的成分となることが多いのに対して,「속」は前項の連語により規定される抽象的空間の＜状況や状態の中, 持続性＞という意味を持ち, 後項の動詞の必須項となることが多く,「살아가다, 자라다」などといった持続性の動詞が主に用いられる.
4) 場所名詞の場合, 二次元の平面の場合は「안」と共起し, 三次元の立体は「속」と共起する. 先行名詞が「바다, 땅」など＜閉ざされた不可視の空間＞を表す場合は「속」を用いるが,「회화적 공간」のように＜開かれた可視の空間＞を表す場合は「안」を用いる.
   具体名詞「상자」の場合, 前項の連語だけではなく, 後項の連語も共通する用例が多く, 混用の傾向が見られる. しかし, コーパスを調査した結果では,「속」の出現頻度が高く, 2.5倍に上り, 前項と後項の連語の意味特性が不可視性や深さ, 閉鎖性に繋がる場合は,「속」と共起する. ほとんどの場合,「안에」は「속에」に置き換えても問題ないが, その逆は不自然になることが多く,「속」がより空間的領域が限定されるということが分かる.
5) 代名詞との連語構成「내 안에, 내 속에」の場合は,「있다, 남아 있다」などの＜存在や状態の継続＞を表す動詞を伴うことが多く, その補語として,「안에」は「신앙, 가능성, 기질」などといった概念的抽象名詞を,「속에」は「불안, 욕망, 용기」などといった心理・感情的抽象名詞を用いる傾向を見せる.

4.1.3. 類型②動詞の連体形を伴う連語構成の前項・後項の連語

類型②は，前項の連語として名詞（名詞句）ではなく動詞連体形の連体修飾語を伴う．この類型②の用例は76例抽出されただけで，先行名詞を伴う［속＋格助詞］の用例の数に比べると，極めて少数である．また，動詞連体形の連体修飾語を伴う［안＋格助詞］の用例は一例も収集されず，［속＋格助詞］の用例も，数の少なさだけでなく，「속에서」は47例，「속에」は23例，「속을」と「속으로」はそれぞれ3例と，結合する格助詞に偏りが見られる．出現した連体修飾語の現れ方を格助詞形別に表16にまとめた：

表 16. 類型②の連体修飾語の現れ方

		속에(23)	속에서(47)	속으로(3)	속을(3)
動作動詞(40)	動作継続	물결치다(波立つ)	(비가) 내리다((雨が)降る)，불어젖히다/휘몰아치다/치다(吹きまくる)		(눈이)오다/내리다((雪が)降る)
		뒤쫓다(追いかける) 다하다(尽きる)	지켜보다(見守る)，갖추어가다(整っていく)，겪다(経験する)，견디다(耐える)		
		왕왕거리다(わめく)，살아가다(暮らす)，복닥거리다(込み合う)	계속되다(続く)，복닥대다(込み合う)		
	動作結果	줄이다(減らす) 형상화하다(形象化する)，맞이하다(迎える)	강화시키다(強化させる)，심화하다(深化する)，인정하다(認める)，주장하다(主張する)		
		둘러싸이다(囲まれる)	씌우다(かぶせる)，에워싸다(取り囲む)，구획화되다(区画化される)，밀폐되다(密閉される)		
			기울다(傾く)、벌어지다(起こる)，영락하다(なり下がる)		
		잡히다(捕まえる)， 엇갈리다(すれ違う)， 변하다(変わる)	보이다(見える)，상징되다(象徴される)		돌아가다(帰る)
状態動詞(36)	心理	담담하다(安らかにしている)，쓸쓸하다(寂しい)，어렵다(苦しい)	어렵다(苦しい)(2)，곤궁하다(貧しい)，무미하다(味気ない)，미숙하다(青くさい)，인색하다(ケチだ)，말없다(口数が少ない)，부드럽다(やわらかい)，멋적다(尻こそばゆい)，불안하다(不安だ)，아프다(痛い)，혼란하다(混乱する)，바쁘다(忙しい)		
	状態	깜깜하다(真っ暗だ)，고요하다(静かだ)(2)，잠잠하다(収まっている)，조용하다(静かだ)，한산하다(閑散とする)	깜깜하다(真っ暗だ)(2)，컴컴하다(真っ暗だ)(2)，어둡다(暗い)，고요하다(静かだ)(2)，어수선하다(慌ただしい)	컴컴하다(2) 뿌옇다(ぼやけている)	
		무르익다(熟す)	오목하다(くぼい)，더럽다(汚い) 전무하다(皆無だ)		
合計(76)		23	47	3	3

＊(　)の中は項目別用例数である．

表16に示した[속＋格助詞]の連体修飾語をなす動詞類を見ると，動作動詞が40例，状態動詞が36例で，あまり差が見られない．しかし，さらに詳しく分類すると，動作動詞の用例のうち，自然現象の持続を表わす動詞が7例，動作の継続を表わす動詞が11例であり，動作の終了とその結果を表わす動詞が22例で，最も多い．また，状態動詞を伴う36の用例のうち，＜心理・感情＞を表わすのが16例，状態を表わすのが20例であるが，肯定的イメージの意味特性を表す動詞は，「부드럽다」,「고요하다」,「조용하다」,「잠잠하다」の四つで，否定的意味を表す動詞が多い．

また，「속」と結合して中心語をなす格助詞の種類によって出現頻度に差が見られる．[속에서]は47例で，[속에]は23例，「속으로，속을」はそれぞれ3例で，場所を表す副詞格助詞と結合して，ある動作や状態が続く状況・背景を表す．

(63) 결혼을 하고 죽음을 맞이하는 속에 어떻게 예속되는 과정을 거쳤는가…
＜BE95Z004＞
(結婚をし，死を迎えるなかに，どのように縛られる過程を経ていったのか…)

(64) 집중호우가 내리는 속에서 잠을 자다가 당한 참변이었다. ＜CA96F351＞
(集中豪雨が降り注ぐなかで寝ていたところあった惨事だった.)

(65) 멋적은 속에서 멍하니 쳐다보고만 있다. ＜AE000398＞
(てれくさいなかでぼうっと見つめているだけであった.)

(66) 이러한 신세계질서의 진통이 계속되는 속에서 우리는 그 변화를 주목하고 대응책을 시급히 마련해야 할 것이다. ＜BA92A003＞
(このような 新世界の鎮痛が続くなかで，我々はその変化を見つめ，対応策を早急に講じなければならない．)

(67) 여성 스스로 자신의 능력을 인정하는 속에서 여성의 사회 참여가 이루어질 때 오랜 세월 동안 유지되어 온「여성이 지적 능력에서 남성보다 뒤떨어진다」는 신화는 깨질 것이다. ＜BHXX0052＞
(女性自らが自分の能力を認めるなかで女性の社会参加が実現するようになるとき，長い間維持されてきた「女性の知的能力が男性より低い」という神話は崩れるだろう．)

(68) 까마귀들이 그 눈 오는 속을 둥글게 빙빙 날고 있었다. ＜CG000114＞
(カラスの群れがその雪の降るなかを丸く旋回していた．)

(63)から(68)までの例文の「속」は，空間名詞本来の空間的意味は薄くなり，抽象化した状況の意味を表していることから，先行名詞と共に現れる連語構成とは異なる性格の連語構成であると言える．

(63)は「결혼을 하고 죽음을 맞이하는」過程そのものを「속」を以て表しているが，「결혼，죽음」という終結した事態ではなく，「결혼을 하는，죽음을 맞이하는」という動詞の進行相の局面を表わすという意味を「속에」が強調しているとみることができる．(64)の例文を次のように書き換えても基本的な事実の伝達には問題がないが，[名詞＋속에서]の連語構成が表す中立的意味に＜進行＞の意味を「-는 속에서」という構成を通して実現していると言える．

(64)′ 집중호우 속에서 잠을 자다가 당한 참변이었다.
(集中豪雨のなかで寝ていたところあった惨事だった.)

(64)，(65)，(68)の「속」は「에서」という助詞と結合して，＜ある事態・状態が持続するなか＞という継続状況の意味を表わす．例(64)では雨の降る事態の継続状況を，(65)では心理状況を表す．表16で示した「물결치는/비가 내리는/눈보라치는＋속에서」は,同じ意味を表す名詞との結合「물결 속에서，비 속에서，눈보라 속에서」に比べると，その状況の臨場感を現実的に表し，強調する．このようなことから，動詞連体形と共起する「속」は，＜事態の継続＞を強調する意味を表すことができる点で，「안」とは異なる意味領域を持つと言うことができる．さらに「속」は，その事態に対する否定的な判断を反映することが多く，特に感情・心理を表す形容詞の連体形の場合は，＜멋적다，쓸쓸하다，불안하다，어렵다＞などの例に見られるように，全て否定的な意味を表している．

1また，(66)を，同じく状況を表す「가운데」に入れ換えてみよう:

(66)′ 이러한 신세계 질서의 진통이 계속되는 가운데, 우리는 그 변화를 주목하고 대응책을 시급히 마련해야 할 것이다.
(このような新世界の秩序の鎮痛が続くなか，我々はその変化を見つめ，対応策を早急に講じなければならない．)

「속에서」を「가운데」に入れ換えてみると，その事態を見る観点がより客観的になるが，文の意味は維持される．しかし，(65)の「멋적은 속에서」を「멋적은 가운데」に入れ換えてみると不自然になる．このようなことから，「속」は「가운데」とは違って，進行の意味だけではなく，状況に対するより主観的な立場を表すと見られる．

＜類型②の前項・後項の連語の分析のまとめ＞

これまでの類型②の前項と後項の連語の分析の結果をまとめると，次の通りである．

1) 中心語の先行要素として動詞の連体形を取る類型②に該当する「안」の用例は今回の調査からは得られなかった.「속」の構成は76例抽出され，先行名詞を伴う[속＋格助詞]に比べ，極めて少数である.
2) 格助詞別分布は,「속에서」が62%で最も多く，次いで「속에」＞「속을/속으로」の順に現れ，ある動作や状態が継続する状況・背景を表す.
3) その状況の臨場感を現実的に表して強調することができることから，動詞連体形と共起する「속」は，＜事態の進行＞を強調する意味を表し，「안」とは異なる語彙的意味領域を持つ.
4) 類型②の「속」はある事態に対する否定的な判断を反映することが多く，特に感情・心理を表す形容詞の連体形の場合は全て否定的な意味を表している.

4.1.4. 類型③前項の連語を伴わない連語構成の後項の連語

先行名詞を伴わない[안/속＋格助詞]の連語構成の用例は次の表17，18のように現れた:

表 17. ∅＋[안＋格助詞]

	안에	안에서	안으로	안이	안을	合計
用例数	25	10	135	6	46	222
比率	11.3	4.5	60.8	2.7	20.7	100

表 18. ∅＋[속＋格助詞]

	속에	속에서	속으로	속이	속을	合計
用例数	14	11	106	12	3	146
比率	9.6	7.5	72.6	8.2	2.1	100

表17を見ると,「안」の場合は,「안으로」が60.8％で最も多く，次いで「안을＞안에＞안에서＞안이」の順に現れ，表18の「속」の場合は,「속으로」が72.6％で最も多く，次いで「속에＞속이＞속에서＞속을」の順に現れる.「안」と「속」のいずれの場合も，으로と結合して中心語を成す用例が最も多い.

先行名詞を持たない類型③は，空間名詞の意味範囲を限定したり，規定する先行名詞を持たない類型である. ここでは，後項の用言とその補語もしくは対象語が「안」と「속」と共にどのような意味を実現しているかを検討することで，先行名詞に影響されない「안」と「속」の基本的な意味特性を見極めることとする.

用例を検討する前に，中心語の前に連体修飾成分を伴わない「안」と「속」の後項の動詞の現れ方を下の表19にまとめた:

表 19. 先行名詞を伴わない「안」と「속」の後項の動詞

[안/속]＋格助詞		格助詞形別の出現動詞	意味特性
안＋格助詞 (213)	안＋에(25)	있다(ある)(13), 들다(入る)(7) 들어가다(入る)(3) 담다(入れる)(2)	存在 移動 付与
	안＋에서(10)	나오다(出る)(10)	移動
	안＋으로(135)	들어가다(入る), (98), 들어서다(立ち入る)(18) 굽다(まがる)(5), 돌리다(回す)(5) (소리가)기어들어가다(声が小さくなる)(5), 움츠리다(引っ込める)(4)	移動 方向 変成
	안＋이(6)	들여다보이다(見え透く)(3) 연결되다(繋がる)(1), 넓어지다(広がる)(1), 달라지다(変わる)(1)	視覚 変化
	안＋을(19)	살피다(窺う)(7), 들여다보다(覗く)(6), 보다(見る)(1), 엿보다(覗く)(2), 기웃거리다(覗く)(1), 둘러보다(見回す)(1) 향하다(向かう)(1)	知覚(視覚) 方向
속+ 格助詞 (146)	속에(14)	있다(ある)(4), 들다(入る)(6) 넣다(入れる)(4)	存在 付与
	속에서(11)	이루어지다(行われる)(3), 살다(暮らす)(2) 날다(飛ぶ)(1), 꿈틀거리다(うごめく)(1) 끓다(煮え返る)(1), 치밀어오르다(込み上がる)(1), (천불이)나다(湧きかえる)(1), 솟구치다(燃え立つ)(1)	営み 活動 心理・感情
	속으로(106)	중얼거리다(つぶやく)(28), 말하다(言う)(14), 부르짖다(叫ぶ)(9), 외치다(わめく)(7), 되뇌다(繰り返す)(9) 웃다(笑う)(12) 생각하다(思う)(20), 들어가다(入る)(7)	発話 感情 思考 移動
	속이(11)	보이다(見える)(5), 비치다(透ける)(4) 불편하다(穏やかでない)(1), 후련하다(すっきりしている)(1)	視覚 感情・心理
	속을(3)	열다(開く)(1), 터놓다(打ち明ける)(2)	心理

*後項の用言の右側の数字は，検討対象として選定された用例の数である．コーパスから抽出された用例のうち，慣用句や誤抽出されたものは検討対象から除外した．抽出された用例のうち，『標準国語大辞典』で慣用句の項目に分類されたものは除外した．その例の一部を挙げると，「속이 깊다(考え深い)，속이 넓다(心が広い)」や「속을 썩이다(心配をかける，心をいためる)，속을 태우다(気をもむ)，속을 끓이다(気をもむ，心を悩ます)」等がある．

これらの動詞の現れ方を見ると，「안에」と「속에」の場合は，両方とも「있다，들다」が共通して現れることから，意味領域の重なりがあると推定することができるが，「안으로」と「속으로」など他の格助詞形では，共通する後項の連語は見当たらず，意味領域の違いが予想される．

[안에/속에]＋動詞

「안에」の場合は，「있다(ある，いる)/계시다(いらっしゃる)(13)，들다(入っている，ある)/들어차다(詰まる)(7)，들어가다(入る)(3)，담다(入れる)(2)」のような，存在と移動の動詞が主に用いられるのに対し，「속에」の場合は移動動詞はあまり見当たらず，「들다(入っている，ある)(6)，있다(ある，いる)(4)，넣다(入れる)(4)」といった存在動詞が主に用いられる．先行名詞を取らない単独の「안]の意味特性は，「속」に比べ，物理的空間を表す場合が大部分であり，人が移動できる空間であったり，人の存在する空間，容器としての空間を表す．

(69) 안에 들어서니 어두운 조명에 낮은 칸막이가 좌석을 구분해 놓은 것이 마치 70년대…레스토랑과 같았다．＜BA90A010＞
(なかに入ると，薄暗い照明と低い仕切りで座席を分けしているのが…まるで70年代のレストランのようだった．)

(70) 안에 있는 물건들은 거의 모든 것이 금빛이었으며 화려하고 웅장했다．
＜BIXX0004＞
(なかにあるものはほぼすべてが金色で，華麗で壮大であった．)

(71) 씨는 언제나 뵈지 않는 속에 있다．　＜BHXX0032＞
(種は常に見えないなかにある.)

(69)，(70)のように具体的な空間の場合は「안」と共起するのが自然であり，中の見えない空間の場合は，(71)のような「속」と共起するのが自然である．「있다(ある)」の主体や補語として＜具体的な対象，人間名詞＞が用いられる場合は，「안，속」の両方とも伴うことができるが，「진실(真実)，기쁨(喜び)」といった＜抽象名詞＞の場合は「속」と共に現れることが多い．

[안에서/속에서]＋動詞

「안에서」は「나오다(出る)(10)/솟아나오다(湧き出る)，들려오다(聞こえてくる)/새어나오다(漏れる)」のような＜移動，起点，出処＞の動詞と主に現れ，「속에서」は「이루어지다(行われる)(3)(/살다(暮らす)(3)」のような＜人の営みや活動＞の動詞，「꿈틀거리다(うごめく)(2)/끓다(騒ぐ)/치밀어오르다(込み上げる)」のような＜心理＞を表わす動詞と共に現れる．

(72) 얼마 후 안에서 왕형사가 나왔다. ＜CE000020＞
(しばらくしてなかからワン刑事が出てきた.)

(73) 그 그릇의 뚜껑을 열자 속에서 휘파람 새가 날아갔다. ＜CH000044＞
(その容器の蓋をあけたところ, なかからうぐいすが飛び出した.)

(74) 수혜는 속에서 외치고 있는 자신의 내면의 소리를 들었다. ＜BEXX0001＞
(スヘは心のなかで叫んでいる自分の内面の声を聞いた.)

(72)と(73)は, いずれも内部の空間から外に向けての＜方向性＞と＜移動の起点＞を表している. (73)では,「뚜껑을 열자(蓋を開けると)」という条件節を与えることにより, ＜閉ざされた空間＞である「속」の意味特性を明確にしている. (72)と(73)が具体的な空間を表すのに対して, (74)の「속」は, ＜心の中＞という抽象的な心理空間を表し, 外に向けて開かれていない閉ざされた空間である.

[안으로/속으로]＋動詞

「안으로」は, 後項の連語が「들어가다(入る)(98), 들어서다(立ち入る)(18)」のように出入を表す移動動詞が最も多く, 次は「굽다(曲がる)(5), 돌리다(まわす)(5)」,「(소리가)기어들어가다(声が小さくなる)(5), 움츠리다(引っ込める)(4)」などといった方向性のある動作動詞の順で,「속으로」は,「중얼거리다(つぶやく)(28), 말하다(言う)(14), 웃다(笑う)(12), 부르짖다(叫ぶ)(9), 되뇌다(繰り返す)(9), 외치다(叫ぶ)(7)」などといった発話動詞が最も多く, 次いで「생각하다(思う)(20)」といった思考動詞の順で,「들어가다(入る)(7) 」などの移動動詞や動作動詞の例はあまり見当たらなかった.

(75) 그는 분장실 문을 밀고 안으로 들어갔다. ＜BEXX0020＞
(彼は薬屋の戸を押してなかに入った.)

(76) 자꾸만 말소리가 안으로 기어들어가는 것 같았다. ＜CG000114＞
(どうも声がなかに消え入りそうだった.)

(77) 이건 꿈이라고 나는 속으로 중얼거렸다. ＜D96AA114＞
(これは夢であると私は心のなかで呟いた.)

(78) 나는 속으로 생각했습니다. ＜BHXX0051＞
(私は心のなかで思いました.)

「안으로」は，(75)のような移動動詞との共起が圧倒的に多く，出入のできる具体空間の意味用法が最も多いことが分かる．「안으로」は(76)のような物理的な方向を示す意味として萎縮を表す動詞とよく共起して，＜マイナス方向への変化＞を表す．しかし，(77)の「속으로」と比べてみると，「속으로」は＜心の中で＞という意味であって，物理的な空間ではなく心理的空間を意味する．(77)，(78)の「속으로」は，発話動詞「話す」，思考動詞「考える」といった動詞との共起が多く，不可視的な，内面的・心理的空間を表す．

[안이/속이]＋動詞

「안이」は，先行名詞を伴わない場合でも，先行名詞に当たる単語が文脈から読み取れることが多いが，「속이」は先行名詞を伴わない単独の用法がほとんどであることが特徴的である．

(79) 엘리베이터는 안이 들여다보이는 투명 유리창을 설치하는 것이 좋다.
＜BA93A042＞
(エレベータにはなかが透けて見える透明ガラスを設置するのがよい.)

(80) 입술의 경계와 안이 자연스럽게 연결되는 듯한 화장이 자연스러워 보인다.
＜CE98D286＞
(唇の輪郭とその内側が自然につながるような化粧がナチュラルに見える.)

(81) 속이 훤히 들여다보인다. ＜CA96F341＞
(なかが透けて見える. /はらわたが見えてすく.)

(82) 허기가 져서 속이 떨린다. ＜AE000085＞
(ひどくひもじくて，お腹が震えている.)

「안이」は(79)のような立体空間を表すこともでき，(80)のように平面の空間にも用いられるが，「속이」は(81)のように立体に限定される．「속이」の場合，(81)と(82)に見るように，「속」の意味拡大は多重的な様相をあらわすことが多く，同じ動詞との結合であっても，文脈によって具体空間を表すこともあれば，心理・感情などの抽象空間を表すこともできる．主体の心理・心情を表す「속이」の連語としては，「속이 아프다(心が痛い)，속이 상하다(気に障る，)」といった否定的な意味の動詞が主に現れ，否定的な意味領域を表すことが多い．

[안을/속을]＋動詞

(83) 밖에서 유리창을 통해 겨우 안을 볼 수 있었다. ＜BIXX0004＞

（ガラス窓からやっとなかを覗くことができた.）

(84) 박씨는 아버지의 속을 가끔 썩였지요. ＜BB93B002＞
（朴さんはよく父親の心のなかを悩ませていました.）

「안을」は，(83)のように「살피다（窺う）(7)，들여다보다（覗く）(6)」といった視覚動詞との共起が多いのに対し，「속을」は ，(84)のように「열다（開く），터놓다（打ち明ける）」 といった状態の変化を表す動詞と結合して，実体物ではなく，心理的な動きを表わす．また，本研究では対象としていないが，収集された用例の大部分が「속을 썩이다(心配をかける，心をいためる)，속을 태우다(気をもむ)，속을 끓이다(気をもむ，心を悩ます)」といった慣用句として固まった表現であり，＜抽象的な心理空間＞を表すことが多い．

＜類型③の後項の連語の分析のまとめ＞

先行要素を伴わない類型③の連語構成の後項の要素を分析した結果を以下にまとめる:

1) 先行名詞を伴わない類型③の格助詞形別の頻度は，「안」の場合は「안으로」が60.8%で最も多く，「속」の場合は「속으로」が72.6%を占め，格助詞「으로」とともに用いられる頻度が高い．
2) 先行名詞を伴わない「안」は，＜存在・付与＞，＜移動，方向＞，＜変成＞，＜視覚＞の意味特性を表す動詞と共起して，＜具体空間＞の意味領域を表す．
3) 先行名詞を伴わない「속」は，結合する格助詞によって「속」の表す意味領域に差がある．位置を表わす「에」と結合した「속에」は，＜存在，付与＞を表わす動詞と共に場所や容器といった＜具体空間＞を表すことが多い．「속에서」は，＜営み・活動＞を表わす動詞を伴う場合もあるが，一方では，「끓다（煮え返る），솟구치다（燃え立つ）」といった特定の動詞とセットとして用いられ，＜心理的・抽象的空間＞を表わすことが多く，慣用句のように緊密な共起関係を持つ固まった表現にはなっていないが，具体的な内部空間の意味より抽象的な意味を表す頻度がはるかに高い．
4) 「속으로」は，移動動詞を伴う場合は＜具体空間＞を表わすが，発話動詞や思考動詞と共に用いられる場合は＜内面的・心理的な不可視の空間＞を表わし，「속이」は視覚動詞と共に＜内心＞という＜心理空間＞を，「불편하다（穏やかでない），상하다（さわる）」等の動詞と共に＜心理状態＞を表わす．「속을」は，「썩이다，태우다，끓이다」といった特定の動詞との緊密な関係を持つ慣用句となっているため，本研究の対象から除外しているが，先行要素を伴わない用例の大部分は慣用的用法であるということが特徴的である．

4.1.5.「안，속」の意味用法のまとめ

これまで，[안/속＋格助詞」を中心語とする連語構成を対象に，その前項の連語と後項の連語の現れ方と意味特性の分析を通して，「안」と「속」の意味領域の抽出を試みた．まずは，中心語の前項の連語の形態により三つの類型に分け，各類型ごとに前項の連語と後項の連語の現れ方と意味特性を分析し

た. その結果, 前項と後項の連語の意味上の係わりから抽出した「안」と「속」の意味領域を表にまとめると以下の通り:

表 20.「안」と「속」の意味領域

前項の連語			後項の連語の意味特性から見る「안」と「속」の意味領域	
			「안」と「속」の意味領域	「안」と「속」の意味領域別用例
類型	空間名詞	先行名詞の名詞分類		
類型① (先行名詞)	안	場所名詞　집(家)	①具体空間	①집 안에 있다.(家のなかに入る.)
		具体名詞　차(車)	②存在の空間	②차 안에 있다.(車のなかにある.)
			③動作・活動の空間	③집 안에서 놀다.(家のなかで遊ぶ)
			④拡散・開放の空間	④소리가 방 안에 울려퍼지다. (音が部屋のなかに響き渡る.)
			⑤可視性の空間	⑤방 안을 들여다보다. (部屋のなかを覗く.)
			⑥移動空間	⑥안으로 몰래 기어들어가다. (なかに密かにはいこむ.)
			⑦境界性	⑦울타리 안으로 넘어가다. (垣のなかに超えて行く.)
		身体名詞　입(口)	⑧容器性	⑧입 안에 침이 괴다. (口のなかに唾がわく.)
		時間名詞　시간(時間)	⑨時間	⑨빠른 시간 안에 처리하다. (早いうちに処理する.)
		抽象名詞　틀(枠組み)	⑩範囲・限界	⑩큰 틀 안에서 진행하다. (大きな枠組みのなかで進める.)
	속	具体名詞　주머니(袋) 상자(箱)	①具体空間	①주머니 속에 넣다. (袋のなかに入れる.)
			②不可視・閉塞の空間	②캄캄한 상자 속에 갇히다. (真っ暗の箱のなかに閉ざされる.)
		場所(自然)名詞　땅(土)	③存在の空間	③땅 속에 있는 용암 (土のなかにある溶岩)
		身体名詞　머리(頭)	④身体空間	④머리 속이 아프다. (頭のなかが痛い.)
		現象名詞　안개(霧)	⑤自然空間	⑤안개 속을 지나다. (霧のなかを通る.)
		活動名詞　생활(生活)	⑥活動の空間	⑥생활 속에서 하는 일. (生活のなかでやること.)
		事柄名詞　영화(映画)	⑦抽象空間	⑦영화 속으로 들어가다. (映画のなかに入る.)
		時間名詞　시간(時間)	⑧時間	⑧시간 속에서 살아가다.

		抽象名詞　마음(心)	⑨心理的空間	(時間のなかで生きる.) ⑨마음 속을 들여다보다. (心のなかを覗く.)
類型② (動詞の 連体形)	안	－	今回の調査からは，用例は得られなかった.	
	속	－	①抽象性＞具体性 ②継続性＞完了性 ③否定性＞肯定性	①능력을 인정하는 속에서 (能力を認めるなかで) ②진통이 계속되는 속에서 (陣痛が継続するなかで) ③눈보라가 치는 속에서 (吹雪が吹きまくるなかで)
類型③ (前項の 連語を 伴わない)	안	－	①存在 ②付与 ③移動 ④視覚 ⑤状態変化(変成)	①안에 있는 물건.(なかにある物.) ②안에 들어있다. (なかに入っている.) ③안으로 들어가다. (なかに入る.) ④안을 들여다보다.(なかを覗きこむ.) ⑤안으로 구부리다,(なかに曲げる)
	속	－	①存在 ②付与 ③活動 ④心理・感情 ⑤発話 ⑥思考 ⑦移動 ⑧状態変化 ⑨視覚的制限 ⑩営み	①속에 들어있다.(なかに入っている.) ②속에 넣다.(なかに入れる.) ③속에서 이루어지다.(なかで行われる.) ④속이 후련하다.(むねがすっきりする.) ⑤속으로 부르짖다.(なかから叫ぶ.) ⑥속으로 생각하다. (心のなかで考える.) ⑦속으로 들어가다. (なかに入り込む) ⑧속이 비다.(なかが空いている.) ⑨속이 비치다.(なかが透けて見える.) ⑩속에서 살다(なかで暮らす.)

*上段の①から⑩までの「안」の項目と下段の①から⑩までの「속」の項目は番号順に対応する関係ではない.
*「안」と「속」の意味領域とその用例は番号順に対応する.
*適用の順は一つの例示である.

実際の言語使用の場においては，「안」と「속」のどちらか一方を選択しなければならない場合もあれば，「안」と「속」のどちらでもよい両方許容もしくは混用される部分もある．このような意味と用法の重なりは，類義語においては避けられない問題であるが， これは，どちらが正しいかという可否の問題ではなく，言語場における傾向や程度の問題として，ありのままの実態を把握したうえで，その意味用法の具体的情報を提示することが肝要であると考える.

4.2. 外部空間名詞「밖, 겉」の意味用法の分析

この節では, 外部空間名詞「밖, 겉」の意味用法についてみていくことにする. 実例の分析に入る前に,「밖, 겉」についての辞書の意味記述を見てみよう:

表 21.「밖, 겉」についての辞書の意味記述

	【標準】	【延世】
밖	p.2447 ①어떤 선이나 금을 넘어선 쪽. ②겉이 되는 쪽. 또는 그런 부분. ③일정한 한도나 범위에 들지 않는 나머지 다른 부분이나 일. ④무엇에 의해 둘러싸이지 않은 공간. 또는 그쪽. ⑤한데. ⑥바깥양반.	p.782 ① ㉠선이나 를 넘어선 쪽. ㉡ 겉이 되는 쪽이나 부분. ㉢ 집이 아닌 다른 곳. 자기가 있는 곳이 아닌 곳.② [의존적으로 쓰이어] ㉠어떤 범위나 한도를 넘어선 것.㉡ [「-을/ㄹ 밖에 없다」의 꼴로 쓰이어] (앞의 관형절이 나타내는 상태나 행동의 방법만이) 「있을 뿐이다」의 뜻을 나타냄.
겉	p.298 ①물체의 바깥 부분. ②밖으로 드러난 모습이나 현상.	p.93 ① (안팎이 있는 물건에서) 밖으로 드러난 쪽이나 면. ②밖으로 드러난 모습.

辞書における「밖」と「겉」の意味記述と用例をみると,「안」,「속」と同様に類義語を以て意味記述がなされ, 循環的な記述となる問題がある.

【標準】の「밖」②と「겉」①の意味記述と例文をみてみよう:

(85) 옷장 안은 깨끗했으나, 밖은 긁힌 자국으로 엉망이었다. (밖②)
(衣装だんすのなかはきれいだったが, そとは傷だらけだった.)

(86) 봉투 겉에 주소를 쓰다. (겉①)
(封筒の表面に住所を書く.)

(87)이 화로는 겉은 쇠로 되어 있고, 안은 황토를 두껍게 발라 만들었다.(겉①)
(この火鉢は表面は鉄でできていて, 内側は黄土を厚く塗って造られている.)

(85)の「밖」は, 外部の空間を表すのではなく,「옷장」という具体物の表面を表す. この場合, 同じく表面を表す「겉」に置き換えてもあまり不自然ではない. それに対し, (86)の「겉」は, 封筒の「表面」を表すが, (85)の「옷장」の「表面」を表す「밖」と置き換えることはできず,「봉투 밖에 주소를 쓰다」とは言わない. また, (85)の「안」は,「밖」と対義関係を成しているのに対し, (87)の「안」は,「밖」ではなく「겉」と対義関係を成す. (85)の「옷장」を先行名詞とする「안」と「밖」の対義関係と, (87)の「화로」を先行名詞と

する「안」と「겉」の対義関係の相異について，【標準】밖②＜겉이 되는 쪽. 또는 그런 부분＞と「겉」①＜물체의 바깥 부분＞という意味記述は，十分な情報を提示しているとは見られない.

このように「밖」と「겉」の意味特性は，重なる部分もあれば相互入れ替えできない部分もある. 以下では，部分的類義語である「밖」と「겉」についてコーパス用例を分析し，先行・後行要素と中心語の結合関係から「밖」と「겉」の意味領域の重なりと排除を綿密に分析し，その結果から「밖」と「겉」の意味の類似点と相異点を記述する.

4.2.1.「밖，겉」の格助詞形と前項の連語の現れ方

韓国語コーパスの用例を抽出した結果,「밖＋格助詞」は3,498例あるのに対し，「겉＋格助詞」は203例しかなく，他の内外空間名詞「안，속，밖」に比べ極端に少ない. 外部を表す空間名詞は，「밖」は「으로，에，에서」の格助詞と結合し，「겉」は方向性を表わす「으로」との結合が最も多く，67.5%を占め，続いて「에，에서」の順で結合する.

また，「밖，겉」も「안，속」と同様に，前項の連語の統辞的構造によって，先行名詞を伴う類型①と先行名詞を伴わない類型③の二つに分けて検討を進めることにする. 今回の調査から「밖，겉」に類型②に該当する用例は見つからなかった.

下の表22，23は，[밖/겉＋格助詞]の格助詞形と前項の連語の類型による現れ方をまとめたものである:

表 22. [밖＋格助詞]の格助詞形別の先行要素の現れ方

類型	格助詞別用例数(%)						
	밖에	밖에서	밖으로	밖이	밖을	밖의	合計
類型①	272(20)	185(13.6)	533(39.2)	5(0.4)	104(7.6)	262(19.2)	1361(39)*
類型③	954(44.6)	257(12.0)	783(36.6)	14(0.7)	100(4.7)	29(1.4)	2137(61)
合計	1226(35)	442(12.7)	1316(37.7)	19(0.5)	204(5.8)	291(8.3)	3498(100)

*括弧の中の数字は(全体出現用例数に対する類型別用例数の百分率)

表 23. [겉＋格助詞]の格助詞形別の先行要素の現れ方

類型	格助詞別用例数(%)						
	겉에	겉에서	겉으로	겉이	겉을	겉의	合計
類型①	4(100)	0	0	0	0	0	4(100)
類型③	26(13.1)	10(5.0)	137(68.9)	13(6.5)	6(3.0)	7(3.5)	199(100)
合計	30(14.8)	10(4.9)	137(67.4)	13(6.4)	6(3.0)	7(3.5)	203(100)

*括弧の中の数字は(全体出現用例数に対する類型別用例数の百分率)

[밖＋格助詞]は，先行名詞を伴う用例が1,361例で，全体の用例の39%を占め，先行名詞を伴わない用例が2,137例で全体用例のうち61%を占めている. これに対し，[겉＋格助詞]は，収集用例203例のうち，先行名詞を伴う類型①の用例は4例と，全体の2%に過ぎず，先行名詞を伴わない類型③の用例は

199例で,「겉」の用例全体の98%を占めている. このように, 出現用例数に差が見られるという点は「밖, 겉」の顕著な違いとして, 注目すべき点である.

[밖＋格助詞]のうち, 連体詞の「ㅋ, 이, 저」と共に現れる用例は373例で,「밖」の用例全体の10.4%であり, 内部空間名詞「안」の6.2%,「속」の3.2%に比べると高い出現の傾向を見せているが, 空間名詞としてではなく, 助詞の用法と判明した大部分を分析の対象から除外した. また, 収集した「밖에」 の用例のうち, ＜以外＞の意味の用例が357例,「-(ㄹ)수 밖에 없다(～するしかない)」の用例が292例, ＜限界と不満足＞の意味の用例が85例あったが, これらの734例はすでに文法化が進展したものと見られることから, 本項の意味用法の分析では対象としないことにし, 語彙性と文法性の相関の面から見ることにする.

[겉＋格助詞]の場合は, 連体修飾節を伴う用例は見当たらなかった. このような結果から, 先行名詞を伴う用例の割合が80パーセントを超える「안, 속」と先行名詞との結合の頻度が低い「밖」と「겉」とは, その様相を異にしていると言える.

4.2.2. 類型①先行名詞を伴う連語構成の前項の連語

名詞＋[밖/겉＋格助詞]の検索結果を見ると,「밖, 겉」の両方に共通して用いられた先行名詞は一例も見当たらなかった. このようなことから,「밖」と「겉」の分析に当たっては, 頻出先行名詞の対照表は作成しないこととする.

[밖＋格助詞]の頻出先行名詞のうち3例以上出現したものを表24にまとめ, 表24の名詞の種類を分類して表25にまとめた:

表 24. 類型①における[밖＋格助詞]の頻出先行名詞

밖＋格助詞	[밖＋格助詞]の先行名詞(出現数)
밖에 (272)	입(口)(34), 문(門)(21), 창(窓)(19), 눈(目)(13), 집(家)(10), 대문(正門)(6), 구멍(穴), 울타리(柵)(5), 관심(関心)(4), 동대문(東大門)(4), 삽짝(柴の戸)(4), 세계(世界)(4), 일(仕事)(4), 골목(路地)(3), 동구(町の入り口)(3), 방문(戸)(3), 사회(社会)(3)
밖에서 (185)	문(門)(18), 대문(大門)(9), 집(家)(7), 창(窓)(7), 담(塀)(6), 몸(身体)(5), 나라(国)(4), 방(部屋)(4), 사립(문)(柴の扉)(4), 울타리(울)(柵)(4), 구멍(穴)(3), 동구(町の入り口)(3), 마음(心)(3), 삽짝(柴の戸)(3), 유리창(ガラス窓)(3), 테두리(枠)(3), 통제권(統制圏)(3), 현실(現実)(3), 담장(塀)(2), 산문(山門)(2)
밖으로 (533)	창(窓)(50), 대문(正門)(33), 차창(車窓)(23), 입(口)(21), 문(門), 집(家)(20), 몸(からだ) (12), 사립(柴のと)(11), 구멍(9)(穴), 세상(世の中)(9), 창문(窓)(8), 나라(国)(7), 동구(町の入り口)(7), 삽짝(柴の戸)(7), 예상(予想)(6), 건물(建物)(5), 골목(路地)(5), 관심(関心) (5), 교문(校門)(5), 물(水)(5), 방(部屋)(5), 울(柵)(5), 유리창(ガラス窓)(4), 차(車)(4), 학교(学校)(4), 등(等, 等位)(3), 리(里, 距離の単位)(3), 공장(工場)(3), 관심권(関心圏) (3), 교회(教会)(3), 담(塀)(3), 대합실(待合室)(3), 담장(塀)(3), 땅(地)(3), 방문(部屋の戸)(3)
밖을(104)	창(窓)(60), 차창(車窓)(17), 문(門)(9), 대문(正門)(6), 집(家)(6), 방(部屋)(3), 사립(柴の戸)(3)
밖의(262)	문(門)(13), 창(窓)(10), 예상(予想)(8), 상식(常識)(6), 리(里, 単位)(5), 동구(町の入り口)(4), 담(塀)(3), 땅(地)(3), 언론사(マスコミ)(3), 절(寺)(3)
밖이(5)	담(塀)(1),무덤(墓)(1), 삽짝(柴の戸)(1), 시구문(シグ門(死口門)(1), 장지(障子)(1)

表 25. 類型①における[밖＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類

名詞分類	格助詞結合形別の出現用例数													
	밖에		밖에서		밖으로		밖의		밖을		밖이		名詞類別合計	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
具体名詞	−	−	−	−	4	1.2	−	−	−	−	−	−	4	0.5
身体名詞	47	31.1	5	5.3	33	10.2	−	−	−	−	−	−	85	11.4
場所名詞	89	58.9	74	78.7	250	77.4	57	79.2	104	100	5	100	579	77.3
抽象名詞	15	10.0	15	16.0	36	11.2	15	20.8	−	−	−	−	81	10.8
合計	151	100	94	100	323	100	72	100	104	100	5	100	749	100

[밖＋格助詞]は名詞の種類によって偏って分布し，場所名詞の用例が圧倒的に多いことが表25から分かる．先行名詞別に[밖+格助詞]の結合様相をまとめると以下の通り:

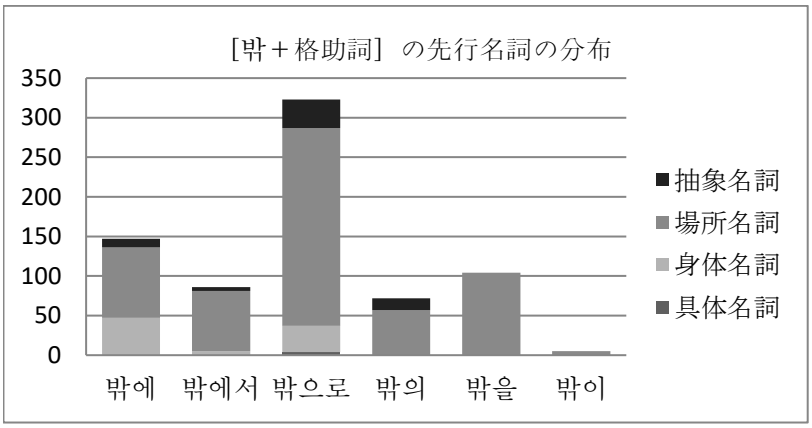

図 7. [밖＋格助詞]の先行名詞の格助詞別･名詞類別分布

上の表24の頻出先行名詞の例文を中心語の格助詞形別に見てみよう.

＜先行名詞＋[밖에]＞

(88) 문 밖에 심은 버드나무도 벌써 10년 가까이 자라고 보니… ＜BHXX0023＞
(門のそとに植えた柳の木ももう10年近く伸びてしまい…)

(89) 미리는 창 밖에 눈을 던졌다. ＜BHXX0051＞
(ミリは窓のそとに目をやった.)

(90) 페르시아에서는 해서는 안 되는 일은 입 밖에 내서도 안 된다.＜BHXX0031＞

（ペルシアでは，やってはいけないことは口のそとに出してもならない．）

(91) 후배니까 아끼고 키워주고 싶은데 왜 눈 밖에 날려고 해. ＜BEXX0002＞
（後輩なんだから大事にし，育ててやりたいのに，どうしてにらまれるようなことをするか．）

(92) 관계자들의 관심 밖에 있던 무명의 레슬러 김원기가 최초로 금메달을 따냈다. ＜BHXX0024＞
（関係者らの関心のそとにいた名もないレスラーの金ウォンギが初めて金メタルを獲得した．）

(88)，(89)の「밖에」の場合は，「문，창，대문」などの場所名詞との連語構成では，それらの先行名詞を境界物とする＜具体的なそとの空間＞を表すが，「울타리，담」などといった場所名詞と異なり，閉鎖的な境界ではなく，疎通のできる境界物である．ここで，これらの先行名詞を場所名詞と見るべきか，それとも具体名詞と見るべきかの問題があるが，本研究では，その境界物が移動の起点と着点，通過点になり得るということから場所名詞に分類している．これらの名詞を具体名詞とみなす場合は，その境界物を平面的なモノとしてとらえることになり，「밖」の平面空間を表わす意味領域がより強調される．

(90)，(91)は身体名詞との連語構成であるが，実体名詞である身体名詞が，具体空間の意味から抽象的な意味に拡大し，本来の意味とは異なる意味の固まった表現となっている．このような身体名詞との連語構成は，＜何らかの，規定された範囲を超える＞という否定的な意味を表すことが多い．(92)の「밖」は，「관심」という抽象名詞と共起して，＜抽象的基準や限界を超えた領域＞を表す．

＜先行名詞＋[밖에서]＞

(93)문 밖에서 인기척이들렸다. ＜BEXX0024＞
（門のそとから人の気配がした.）

(94)문 밖에서 기다릴게요. ＜CE000079＞
（門のそとで待っています.）

(95) 그것은 사안의 진위를 심판하는 법정의 테두리 밖에서 일어나고 있는 것이다. ＜AB000697＞
（それは事案の真偽を審判する法定の枠のそとで起きていることである．）

「밖에서」は，収集した用例のうち約90%が場所名詞と共起して外の具体空間を表す．(93)，(94)においても，「문」などの具体物の場所名詞は「うち」と「そと」の境界の役割をし，「밖」はその境界を超えた外の空間を表す．(93)の「밖에서」は＜外から内に向けて＞という＜起点と方向性＞を表し，(94)の「밖에서」は，＜位置，存在，活動の空間＞を表す．実際は立体的な空間であるが，境界物によって平面的に対立する空間のように区分される．(95)の「밖」は＜囲まれたある範囲のそと＞を意味し，その外の空間は特

に制限がなく，規制や調節のできない空間を表す．

＜先行名詞＋밖을＞

(96)나는 가슴을 설레며 가만히 창 밖을 내다보고 있었다. ＜BGXX0033＞

（私は胸をときめかせながらそっと窓の外を眺めていた．）

「밖을」の場合はすべて場所名詞と共に現れ，実際の具体空間の意味を表す．

＜先行名詞＋밖의＞

(97)교육부의 처사는 상식 밖의 일이라는 지적이다. ＜BB95Z004＞

（教育部のやり方は常識外れのことであると指摘されている．）

頻出名詞の種類としては場所名詞が最も多いが，「예상，상식」といった抽象名詞が境界の基準となる抽象空間である．このようにある範囲や領域を離れた抽象的な空間の意味を表す場合には，「밖」は否定的な意味を表す．

表 26. 類型①における「밖＋格助詞 」の先行名詞の意味特性

名詞の種類	前項の連語の先行名詞	先行名詞の意味特性
場所名詞	문(門)(65), 대문(正門)(54), 사립문(柴の戸)(14),삽짝(柴の戸)(10), 교문(校門)(4), 장지(障子)(4), 방문(部屋の戸)(4), 울타리(柵)(14), 담(塀)(12)など	①二次元の平面空間 ②内と外の境界 ③移動の起点
	창(窓)(143), 차창(車窓)(40), 창문(窓)(9)など	①可視性 ②内と外の境界
	집(家)(37), 방(部屋)(3), 구멍(穴)(3), 골목(路地), 대합실(待合室), 무덤(墓), 건물(建物)など	①三次元の立体空間 ②境界を持たない
	학교(学校)(4), 공장(工場)(3), 교회(教会)(3)절(寺)(3), 나라(国)(2)など	①具体空間 ②団体としての抽象的空間
具体名詞	차(車)(2)	①具体空間
	물(水)(2), 땅(地)(2)	①自然物の具体空間 ②二次元又は三次元
身体名詞	입(口)(55), 눈(目)(13)	抽象的・慣用的表現
	몸(身体)(17)	①実体的身体空間
抽象名詞	예상(予想)(24), 상식(常識)(6), 관심(関心)(3), 통제권(統制圏), 마음(心), 세상(世の中)(9), 현실(現実)(3), 사회(社会)(3), 세계(世界)(1), 일(仕事)(4), 테두리(枠)(1)	①心理的空間・範囲 ②抽象的空間 ③抽象的範囲・境界
単位	리(厘)(6), 등(等位)(1)	①数量 ②抽象的な境界や範囲を形成

次項では，頻出用言を＜移動，存在，状態・状態変化，人間活動，自然現象＞に分けて，どのような動詞とよく用いられ，どのような意味を表すかを見ていく.

4.2.3. 類型③前項の連語を伴わない連語構成の後項の連語

先行名詞を伴わない[밖＋格助詞]は，後項の連語としてどのような動詞と共起して，どのような意味を表すかを見ていく.

表22を見ると，「밖」の場合は，「밖에」が44.6%で最も多く，続いて「밖으로＞밖에서＞밖을＞밖의」の順に現れ，表23の「겉」の場合は，「겉으로」が68.8%で最も多く，続いて「겉에＞겉이＞겉에서＞ 겉의＞겉을」の順に現れる.「밖」の場合は에と結合して中心語を成す用例が最も高い頻度で用いられ，「겉」の場合は으로と結合して中心語を成す用例が最も高い頻度で用いられる.

先行名詞を持たない類型③は，空間名詞の意味範囲を限定したり，あるいは空間名詞により限定されていた先行名詞がない類型である. ここでは，後項の用言とその補語もしくは対象語が「밖」と「겉」と共にどのような意味を実現しているかを検討することで，先行名詞に影響されない「밖」と「겉」の意味特性を見極めることとする.

[밖에/겉에]＋動詞

「밖에」の頻出用言は「나가다(出る)(91), 나오다(出てくる)(33)」などの移動動詞や存在詞の「있다(ある, いる)(35)」などである.

(98) 물 묻은 몸으로 밖에 나오니, 벌써 해가 서쪽으로 기울어져 있었습니다.＜BGXX0031＞
(水に濡れた体でそとに出たら, すでに太陽は西に傾いていました.)

(99) 밖에 나가봐야 조국이 소중한 걸 안다고 하잖아요? ＜AE000094＞
(そとに出てみてはじめて祖国が大切であることを分かると言うじゃないですか.)

(100) 가슴 속에 간직한 슬픔은 여러가지로 밖에 드러나요. ＜BG94Z007＞
(胸のなかにひそめている悲しみは, いろんな形でそとに現れる.)

(98)の「밖」は＜ある囲まれた内部空間のそとの空間・外部空間＞を表し, (99)の「밖」は現在属している空間とは＜性質の異なる別の空間, 自分に属しないよその空間＞を表す. (100)の「밖」は＜個人の感情・心理的な空間＞に対立する＜表に現れた部分＞を意味する. (99)と(100)のように社会的空間や抽象的な空間として用いられる場合は, ＜否定的, マイナスのイメージ＞を表わすことが多い.

それに対し,「겉에」は視覚を表す「보이다(見える)」, 出現を表す「나타나다, 드러나다(あらわす)」など, 付着を表す「바르다(塗る), 묻다(つく)]等と結合する頻度が高い.

(101) 겉에 보이는 잡티가 없더라도 표면을 문질러가며 닦는다. ＜CB98D286＞
(表面に見えるほこりがなくても, 表面を擦りつけながら洗う.)

(102) 안에 입은 셔츠와 겉에 걸친 점퍼・바지・운동화의 색깔이 제각각이다.
＜CA96F343＞ ((5c)の再掲)
(なかに着たシャツとうえにはおったジャンパー, パンツとスニーカーの色はまちまちだ.)

(103) 그것은 겉에 드러난 현상만을 지적하기 때문이다. ＜BHXX0018＞
(それは, 表面に現れた現象だけを指摘するためである.)

(101)の「겉」はある具体物の＜表面そのもの＞を表し, ＜付着性の表面, 可視的空間＞である. (102)の「겉」は, 外から見て＜最も表層の面＞で, 付着性とは異なる＜着脱＞の意味を表し, 下のものが外から見える場合は「속」ではなく,「안」と対義関係をなすということが特徴的である. (103)の[겉]は, (101)の＜そとから見える二次元の具体的な表面＞とは異なる抽象的な空間である.

[밖에서/겉에서]＋動詞

「밖에서」の頻出用言は，移動を表す「들어오다（入る）(15)」，聴覚を表す「(소리)나다（音がする）/들려오다（聞こえる）(24)」などである．

(104) 그 때 밖에서 들어오는 세명이 오반장의 눈에 띄었다. ＜CE000020＞
（そのとき，そとから入ってくる三人がオ班長の目についた.）

(105) 밖에서 들어온 말 가운데 가장 먼저 논의해야 할 것은 역시 한자말입니다.
＜BHXX0016＞
（そとから流入した言葉のうち，最優先に論議すべき言葉は，やはり漢字語です.）

(104)の「밖」は，仕切られた具体空間の＜外部＞を意味し，(105)の「밖」は自分の所属する社会でない外部，よそという＜抽象的範囲や領域＞を意味する．「밖에서」は人をはじめ，無生物や音，声，視線などの移動の起点でもあり，ときには向かう方向でもある．

それに対し，「겉에서」は「보다」という視覚動詞と結合した用例が80％を占め，このときの「겉]は＜視覚的な空間›として用いられる頻度が高いが，＜具体的な表面＞を表す場合と抽象化した表面的な状況を表す場合がある．

(106)사람의 뇌는 겉에서 보면 많은 주름이 잡혀 있다. ＜BHXX0056＞
（人間の脳は，そとから見ると，多くのしわができている.）

(107)패션 모델들도 겉에서 보는 것과는 달리 매우 고달픈 직업이다. ＜BHXX0050＞
（ファッションモデルもそとから見るのと違って，大変しんどい職業である.）

(108)여전히 겉에서 맴도는 아웃사이더로 남아 있게 되었을지도 모른다.
＜BIXXD004＞
（依然とそとでもたもたしているアウトサイダーとして残っていたかも知れない.）

(106)の「겉」は＜具体物の表面＞という意味を表すが，(107)の「겉」は抽象的な意味も含めており，「보다（見る）」などの視覚動詞と連語構成を成して＜うわべでは＞という固まった表現となり，この場合，マイナス評価を伴うことが多い．(108)の「겉」は「맴돌다」と共起して二つの意味を表すことができる．一つは＜実際にある場所に入ることができずにもたもたしている›という意味で，もう一つは＜ある集団や組織社会から排除された状態＞という抽象的意味を表わし，マイナスの評価を伴う．

[밖으로/겉으로]＋動詞

「밖으로」の頻出用言は,「나오다(出る)(265), 보이다(見える)(13), 드러나다/드러내다/나타나다(あらわれる, あらわす)(8), 바라보다(眺める)/내다보다(見る)(6), 향하다/돌리다(向かう)(5)」などで, 移動動詞の出現頻度が圧倒的に高く, 続いて出現・露出動詞, 視覚動詞の順で用いられる.

(109) 유괴 납치범이 날뛰는 판에 함부로 밖으로 내보낼 수는 없지만… ＜BA91B014＞
(誘拐・拉致犯が闊歩する中で, うかつにそとに出すことはできないものだが…)

(110) 공이나 자랑을 밖으로 나타내지 말아야 한다는 가르침이다. ＜BJXX0020＞
(功や自慢をそとにあらわしてはいけないという教えである.)

(111) 불만을 겉으로 드러내지도 못하고… ＜BA93E018＞
(不満をおもてに出すこともできず…)

(109)の「밖」は, ＜家のそと＞という具体的な空間を表すこともできるが, ＜安全でない外部の空間, 社会空間＞といった抽象的な空間を表すこともできる. (110) の「밖」は, 単に内面的な不満や気持ちなどを表出する個人的な空間ではなく, 功や自慢などを他人に分かってもらおうとして, 積極的に持ち出す社会的空間である. そのため,「나타내다, 드러내다 (あらわす) 」の対象は, 不満や気持ちといった感情や心理的なことを表す場合もあるが, 抽象的な事柄や考え・自慢等を表す空間である.

「겉으로」は,「겉＋格助詞」のうち最も用例が多く, 頻出用言としては「드러내다, 드러나다」が半分近くを占め,「보이다, 보다(見える, 見る」は30%近くを占める. そのうち「겉으로 보기에는/보면/봐서는/보기와는(そとから見ると)」のような表現が20%を占める. (111)の「겉」の場合, 主体自らが自分の「불만(不満), 내심(内心), 주장(主張)」といった抽象的な考え・感情・心理などを表に出す空間であり, そのときの「겉」は＜抽象的空間＞の意味を表わす.

[밖을/겉을], [밖이/겉이]＋動詞

「밖을」の頻出用言は,「내다보다(89), 바라보다(14), 보다(10), 향하다(9), 살피다(6), 나서다(3)」などで, 視覚動詞と移動動詞と共起する頻度が高い.

(112) 수혜는 창가에 앉아 밖을 내다보았다. ＜BEXX0001＞
(スヘは窓際に座り, そとを眺めた.)

(113) 창문 쪽에 시선을 던지면서 밖을 향하여 귀를 기울였다. ＜BEXX0019＞
(窓の方に視線を投げる一方で, そとに向かって耳を傾ける.)

(114) 이 책을 살 때면 다시 포장지로 겉을 싸 비닐봉지에 담아둔다. ＜BJXX0016＞
(この本を買う時は，包装紙で再度表面を包んでビニール袋に入れておく.)

(112), (113)の「밖을」は同じく＜外の空間＞を表すが，(112)の場合，「밖」は「내다보다(見る，眺める)」と共起して＜視覚の空間＞を表すのに対し，(113)の「밖」は，聴覚的な空間である. (114)の「겉」は，具体物である本の表面を表し，これらの表面はそとから何らかの状態の変化などを加えることのできる＜可変性の空間＞を表す.

「밖이」の場合は，「보이다(見える)(2)，훤해지다(明らむ) 」のような視覚動詞，「소란하다(騒がしい)」のような聴覚動詞，「깨끗하다(きれいだ)」など状態を表す動詞と共起する.

(115) 안에서는 밖이 잘 보였다. ＜CE000020＞
(なかからはそとがよく見えた.)

(116) 밖이 소란해지는 것이었다. ＜CE000020＞
(そとが騒がしくなったのである.)

(117) 사람이 사람답지 못하면 아무리 겉이 번드르해도 무슨 소용이 없으며…
＜CH000003＞
(人間が人間らしくなければ，いくらうわべがきれいでも何の役にも立たないもので…)

(115)の「밖」は視覚的対象となる空間であるのに対し，(116)の「밖」は「소란해지다(騒がしくなる)」という状態変化の主体である. (115)，(116)の「밖」は事態や状況の変化が生起する立体空間であり，視覚・聴覚的活動ができる空間であるが，(117)の「겉」は，「번드르르하다(つややかだ，きれいだ」のような状態を表す動詞と共起して，実際の価値とかけ離れたうわべだけの良さを表すことが多く，否定的な意味を表わす.

これまでの[밖/겉＋格助詞]の後項の連語から抽出された動詞の意味特性をまとめると，次の通り:

表 27. 先行名詞を伴わない「밖」と「겉」の後項の動詞

[밖/겉+格助詞]		格助詞形別の出現動詞	意味特性
밖+格助詞	밖+에	나가다(出る)(91), 나오다(出てくる)(33) 있다(ある, いる)(35)	移動(開放性), 出現(可視) 存在
	밖+에서	들어오다(入る)(15) 나다/들려오다(音がする/聞こえる)(24)	移動, 起点 知覚(聴覚)
	밖+으로	나오다(出る)(265), 향하다(向かう)(8) 드러나다(8)/나타나다(8)(あらわれる) 드러내다(8)/나타내다(8)(あわわす) 보이다(見える)(13)바라보다(眺める)(6) 돌리다(回す)(5)	移動, 方向・移動 出現 表出 知覚(視覚) 動作
	밖+이	보이다(見える)(2), 소란하다(騒がしい) 깨끗하다(きれいだ), 훤해지다(明るくなる)	知覚(視覚), 知覚(聴覚) 状態,, 状態変化
	밖+을	내다보다(外を見る)(89), 바라보다(眺める) (14), 보다(見る)(10), 살피다(探る)(6) 향하다(向かう)(9) 나가다(出る)(4), 나서다(出かける)(4)	知覚(視覚), 行動 方向 移動
겉＋格助詞	겉+에	보이다(見える), 바르다(塗る), 걸치다(羽織る)	知覚(視覚), 付着, 取付
	겉+에서	보다(見る), 맴돌다(もたもたする, あたりを回る)	視覚, 状態, 行動
	겉+으로	드러내다/드러나다(100)(あらわす) 보이다(見える)/보다(見る)	表出, 出現 知覚(視覚)
	겉+이	번드르르하다(つややかだ, きれいだ)	状態
	겉+을	싸다(包む)	動作, 状態

4.2.4.「밖, 겉」の意味用法のまとめ

これまで前項と後項の連語から抽出された「밖」と「겉」の意味領域をまとめると次の通りであり,「밖」と「겉」を比較して表28に示す.

表 28.「밖」と「겉」の意味領域

	前項の連語	後項の連語		前項と後項の連語の意味特性による「밖」と「겉」の意味領域
	先行名詞の種類	後項の連語とその意味特性		
밖	場所名詞 具体名詞 抽象名詞 身体名詞	*①나타나다/나타내다 (あらわれる/あらわす) *②있다(ある, いる) *③보(이)다(見る,見える), 들리다(聞こえる) *④일어나다(起こる) ⑤나가다(出る),들어오다(入る) ⑥향하다(向かう) ⑦시끄럽다(騒がしい),춥다(寒い) ⑧놀다(遊ぶ) ⑨눈 밖에 나다(睨まれる)	①出現, 公開 ②存在 ③知覚, 伝達 ④発生 ⑤移動・疎通 ⑥方向 ⑦状況・状態・変化 ⑧活動 ⑨固まった表現	①具体空間 – 立体・平面空間 抽象空間 –「外部そと」の空間 ②境界から離れた空間 ③視覚, 可視性の空間 聴覚, 臭覚空間 ④活動, 発生の空間 ⑤移動・疎通・拡散の空間 ⑥行動・視線の方向性の空間 ⑦状況・変化の空間 ⑧活動・行動の空間 ⑨否定的イメージの空間
겉	具体名詞	*①보다(見る) *②드러나다/드러내다 (あらわれる, あらわす) *③있다(ある, いる) *④일어나다(生じる) ⑤씌우다, 붙이다 (かぶせる, 貼る) ⑥마르다(乾く) 노랗다(枯れる) ⑦맴돌다(あたりを回る)	①知覚, 判断 ②出現,露出 ③存在 ④行動・作用対象 ⑤付着,着脱 ⑥状態変化 ⑦固まった表現 ⑧断絶	①具体空間 – 平面空間 抽象空間 – 価値判断の空間 ②感情・心理空間 ③表面自体の空間 ④変化の空間 ⑤付着・密着空間 ⑥状態変化, 視覚・触覚空間 ⑦否定的イメージの空間 ⑧表裏の分断・不可視性

「*」は,「밖」と「겉」に共通して現れる用言で,「밖」と「겉」意の連語構成を通して味特性を比較できる項目である.

4.3.「안, 속, 밖, 겉」の連語構成の意味関係

前節までは「안と속」と「밖と겉」の類義関係に注目して分析を進めてきた. 本節では,「안, 속, 밖, 겉」の対立関係を見ていくことにする.

4.3.1.「안, 속, 밖, 겉」の連語構成の対義関係

ある語彙の意味関係は系列関係と結合関係に大別することができる. そのうち, 系列関係は語彙素の縦の関係であり, 語彙選択の軸である. それに対し, 結合関係は語彙間の横の関係であり, 語彙の連鎖の軸を意味する[69]. 本研究では, 結合関係である内外空間名詞と前項と後項の連語の共起の様相を通して「안, 속, 밖, 겉」の個々の意味特性を分析し, 「안」と「속」と「밖, 겉」の類義の対としての類似点と相違点を探る.

以下では, 対立語の関係にある「안と밖」の連語構成, 「속と겉」の連語構成を通して対立関係を分析する. <「うち」と「そと」の空間>という基本的な具体空間の意味においては「안と밖」, 「속と겉」の対義関係が成立するが, 前項と後項の連語との結合により連語構成を成した場合は, 結合する名詞または動詞の語彙的意味特性によって, 基本的な対義関係とは異なる対立関係をあらわすことがある.

本稿では, 個別単語ではなく連語構成による意味実現のレベルにおける「안と속」, 「밖と겉」の対義関係の検討を通して, 意味グループとしての「안, 속, 밖, 겉」の意味領域の相互関係を描くこととする. 以下では, 「안と밖」, 「속と겉」の対義関係を, 基本義の対義関係との一致の有無により四つの類型に分けて検討していく:

1) 基本義の対義関係と一致する類型

<안 ⇆ 밖>

1-1) 집 안으로 들어가다. (家のなかに入る.)　　집 밖으로 나오다. (家のそとに出る.)

1-2) 범위 안에 있다. (範囲内にある.)　　범위 밖에 있다. (範囲外にある.)

<속 ⇆ 겉>

1-3) 속으로 생각하다. (心のなかで考える.)　　겉으로 드러내다. (おもてに出す.)

1-1), 1-2)のように, 「안」は, 実体性の<具体空間>の先行名詞や非実体性の<範囲>の先行名詞との連語構成において, 共通して「밖」と対義関係を現し, 基本義の対義関係と一致する. 「속」は, <表裏関係>や1-3)のような抽象的意味を表す場合は, 「속」対「겉」という基本義の対義関係が成立するが, 「속」が<表裏関係>ではなく具体的な内部空間を表す場合は「밖」と対応する.

2) 基本義の対義関係と一部一致する場合

---

[69] 임지룡(1992:135)参照.

＜「안/속」と「밖」の共通の対立(안・속 ⇄ *겉/밖＞

2-1) 상자 안에/속에 넣다. 상자 밖으로/*겉으로 꺼내다.
(箱のなかに入れる.) (箱のそとに取り出す.)

2-2) 사회 안에서/속에서 이루어지다. 사회 밖에서/*겉에서 이루어지다.
(社会のなかで行われる.) (社会のそとで行われる.)

2-1, 2-2)のように「안」と「속」のどちらとも共起し, 具体空間, 抽象空間をあらわす先行名詞の場合,「안」は基本義の対義関係と一致して「밖」と対立する. 同じく具体空間, 抽象空間をあらわす「속」は基本義の対義関係をなす対応語である「겉」を取ると非文となり,「밖」と対応する.

3) 基本義の対義関係と一致しない場合

＜「속」と「밖」の対立(속 ⇆ *겉/밖)＞

3-1) 주머니 속에 넣다. 주머니 *겉으로/밖으로 꺼내다.
(子袋のなかに入れる.) (子袋のそとに取り出す.)

3-2) 물 속으로 들어가다. 물 *겉으로/밖으로 나오다.
(水のなかに入る.) (水のそとに出る.)

3-3) 상상 속으로 들어가다. 상상 *겉으로/밖으로 나오다.
(想像のなかに入る.) (想像の表に出る.)

＜「안」と「겉」の対立(안 ⇄ 겉/*밖)＞

3-4) 뫼비우스의 띠의 안과… 뫼비우스의 띠의 겉이…
(メビウスの環のなかと…) (メビウスの環のおもてが)

3-1, 3-2, 3-3)の「속」は,「겉」ではなく「밖」と対応している. 先行名詞が実体性名詞でも非実体性名詞でも, 表裏の関係を表わす「속」以外は立体空間に対しては「속対겉」の対義関係は成立しない. また, 3-4)のように立体空間ではなく表裏関係をなす平面空間をあらわす場合,「안」は「밖」ではなく「겉」と対応する.

4) 基本義の対義関係と全く違う対義語と対応する場合

＜内外空間名詞の間の対立関係が成立しない(안 ⇄ *겉/*밖)(밖⇄/*안/*속)＞

4-1) 한 시간 안에 돌아오다. 한 시간 *밖에/후에 돌아오다.
(一時間のうちに戻る.) (一時間後に戻る.)

4-2) 눈 밖에 나다. *눈 안에 넣다/눈에 들다.
(睨まれる) (目にとどまる.)

4-3) 예상 밖으로 예상 *안으로/대로
(予想外に) (予想通りに)

基本義から意味拡大が行われた場合，基本的に対義関係は成立しない．4-1)は，空間を表す意味から時間的範囲を表す用法への意味拡大があったことにより，対義の対応関係がそれ以上成立しなくなり，基本義の段階で成立していた対義関係ではなく，時間名詞「후(後)」と対立する．4-2，4-3)のように，慣用表現の段階までその意味が固まっていないが，その構成成分を入れ換えるとその意味が成立しなくなる，意味上のかたまりとして固まった表現の場合は，類義や対義の関係においても，異なる対応関係を見せることが多い．

4.3.2.「안，속，밖，겉」の意味領域の関わり方

本研究では，内外空間名詞の格助詞形を中心語に据え，その中心語がどのような前項の連語，あるいは後項の連語と結合するか，また，同一条件の下で相互入れ換えできる類義の対の意味上の重なりとズレはどうなるか，「안，속，밖，겉」は，どのような対義関係を表すかを見てきた．以下では，これまでの考察から得た結果をまとめ，内外空間名詞という意味グループを構成する「안，속，밖，겉」の意味用法の関わり方を図8に示す：

1) 内外空間名詞の使用頻度は，内部を表す空間名詞が外部を表す空間名詞よりはるかに高く，「속＞안＞밖＞겉」の順となっている．
2) 「안と속」，「밖と겉」は，具体的な空間を表す場合に意味用法の重なりが目立つ傾向があり，実際の言語場では混用の様相も見られる．このように類義の対の境界線上に位置し，意味用法上の弁別性を割り出して提示することが難しい場合には，コーパス資料から得た出現頻度に基く「傾向性」を，自然さの判断基準として採用した．
3) 「안と속」，「밖と겉」は，基本義から時間的意味，抽象的意味にと，拡大していけばいくほど，他の語彙との結合関係に制約が生じる．
4) 「안」と「속」の弁別点としてよく取り上げられるのが，「안」は二次元で，「속」は三次元の空間であるということである．しかし，「안」と「속」が共通して用いられる三次元空間を見ると，最も重要な弁別点は，空間の内部が見えるかどうかという＜可視性と不可視性＞，範囲を限定するかしないかという＜範囲限定＞，状況を表すかどうかという＜状況性＞，出入りができるかどうかという＜開放性と閉鎖性＞である．他にも，「안」は広さを持つ拡散の空間，存在の空間，移動空間であるのに対し，「속」は深さを持つ密閉性の空間，自然物・自然現象の空間，存在の空間，状況の空間，心理・感情・抽象的空間の意味領域を持つ．
5) 「밖」と「겉」の最も重要な弁別点は，境界の有無である．「밖」は境界を越えて，あるいは通して「う

ち」から「そと」へ，「そと」から「うち」へ移動したり，疎通できる空間であり，その境界線または境界物から離れた空間も含まれる三次元の空間である．それに対し，「겉」は，と境界物が介することはなく，表と裏は一体物の関係にある．「밖」は，移動，出現，事態の生起・継続の空間，視覚・聴覚的空間，立体的空間であるのに対し，「겉」は，存在，付着，露呈，状態変化の空間で，平面的空間である．

6) 対義関係においては，基本義の段階では「안と밖」，「속と겉」の対立関係を見せるが，二次元の平面を表す「안」は「밖」ではなく「겉」と対立関係を成し，立体・抽象的意味を表す「속」は「겉」ではなく「밖」と対立関係を成す．また，基本義から時間的意味，抽象的意味へと意味拡大が進展すると，基本的な対義関係は成立しなくなる．

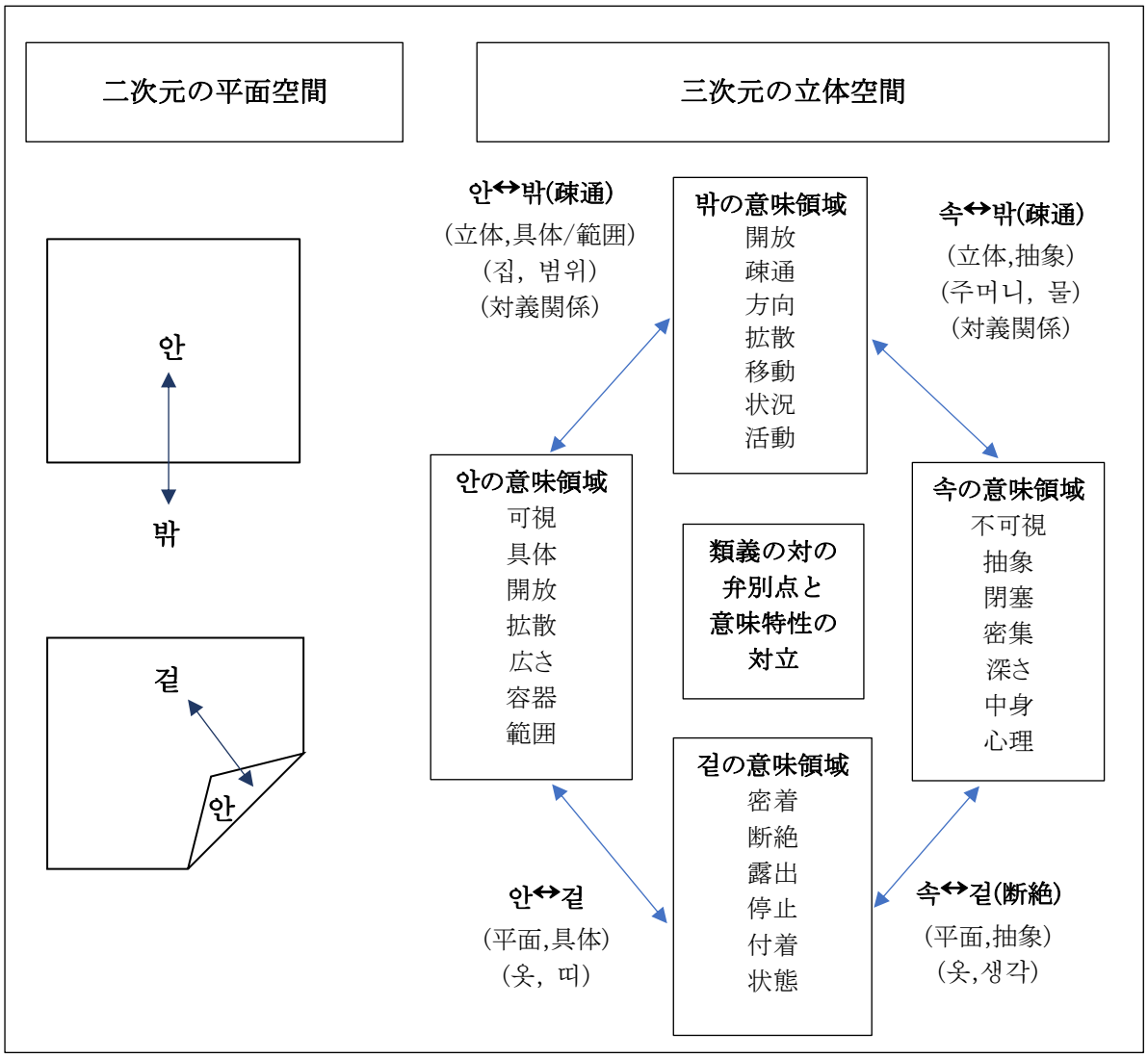

図 8. 意味グループをなす「안，속，밖，겉」の意味領域の係わり方

4.4. 第4章のまとめ

本研究では，内外空間名詞「안，속，밖，겉」の意味用法について，語彙間の意味の重なる部分と重ならない部分をより明確化し，各々の語彙の意味を綿密に記述することを目指した．そのために，既存の研究とは異なり，語彙間の結合関係による意味の実現に焦点を当てる連語の観点を採用した．

分析の方法としては，内外空間名詞と格助詞の結合形を中心語に据え，各々の中心語はどのような前項の連語，あるいは後項の連語と結合し，どのような意味を表すかを考察した．具体的には，中心語［안/속＋格助詞］と前項・後項の連語からなる連語構成を統辞的構造により分類し，先行名詞を伴なう連語構成，用言の連体形からなる連体修飾語を伴う連語構成，前項の連語を伴わない零形態の連語構成の三つの類型に分けて分析した．

まず，類義語の対である「안と속」，「밖と겉」をセットにして，前項・後項の連語と中心語の結合関係から「안と속」，「밖と겉」の類似点と相違点を分析した．その結果，類義の対に意味用法上の重なりが見られる場合は，コーパスから収集した用例の出現頻度に基く「傾向」を，より自然な表現の根拠として用いた．さらに，「안，속，밖，겉」の対立関係を通して，結合関係では見て取ることのできなかった意味用法の弁別点を取り出し，これらの結果を基に個別語の意味領域と内外空間名詞の意味グループとしての関係を明らかにした．以下にその結果を示す．

まず，「안と속」，「밖と겉」は，具体的空間を表す場合に，意味用法の重なりが見られ，実際の言語場では混用の様相も見られる．「안と속」，「밖と겉」は，基本義から時間的意味，抽象的意味へとその意味が拡大すると，他の語彙との結合関係に制約が生じ，基本義の用法で成立していた対立関係も成立しなくなる．

「안」と「속」の弁別点としては，可視性と不可視性，開放性と閉鎖性を挙げることができる．他にも，［안」は広さを持つ拡散の空間，存在空間，移動の空間であり，それに対し，「속」は深さを持つ密閉性の空間，自然物・自然現象の空間，存在空間，継続状態の空間，心理的・感情的空間である．

「밖」と「겉」の最も重要な弁別点は，境界の有無である．「밖」は境界を越えて，あるいは境界を通して「うち」と「そと」が疎通できる空間であり，その境界線または境界物から離れた空間も含まれる三次元の空間である．それに対し，「겉」は境界を介さず，一体物の表と裏の関係にある．「밖」は，移動，出現，事態発生の空間で，視覚的・聴覚的空間，立体的空間であるが，「겉」は，存在，付着，露呈，状態変化の空間で，平面的空間である．

対義関係においては，基本的に「안と밖」，「속と겉」の対立関係を見せるが，二次元の平面の「안」と表裏の関係を表す場合の「속」は，基本的な対義関係ではなく，「겉」と対応する．また，基本義から時間的意味，抽象的意味に意味拡大が進展すると，基本的な対義関係は成立しない．

これまでの考察の結果を基に，今後は連語構成の用言と対象語・補語との関係をさらに精緻に分類・分析することが必要である．本研究は，語彙意味論的観点から考察を進めてはいるが，文の中での語彙の意味の実現には文法的関係による制約なども係わっていることから，用言を中心とする意味の受け係りの上での文法的問題についての考察の必要があると考える．

第5章　日本語の内外空間名詞「うち,なか,そと,おもて」の意味用法

本章では，日本語の内部空間名詞「うち，なか」と外部空間名詞「そと，おもて」について考察する．韓国語の場合と同様に，意味上の重なりと相異をより鮮明に記述するために「うち，なか」と「そと，おもて」という類義関係にある語彙同士をセットにして考察する．また，日本語においても中心語の格助詞形によって前項の要素と後項の要素の分布と頻度に有意味な計量的特性を見ることができることから，[うち/なか/そと/おもて＋格助詞]を基に本論考を進める．意味用法の分析の資料としては，日本語コーパスから収集した用例を分析の目的に合わせて分類し，それぞれ表にまとめていく．検索結果から誤抽出と判断される用例等は発表者によって除外した．

5.1. 内部空間名詞「うち，なか」の意味用法の分析

実際に用例の分析に入る前に，既存の辞書における内外空間名詞の意味記述を見てみよう．本研究では，小学館の『デジタル大辞泉(第三版)』，岩波書店の『広辞苑（第6版）』，小学館の『現代国語例解辞典(第四版)』を検討の対象とする．『デジタル大辞泉』は【大辞泉】，『広辞苑』は【広辞苑】，『現代国語例解辞典』は【例解】と略して記する．

まず，「うち，なか」についての辞書の意味記述を見てみよう：

表 29.「うち，なか」についての辞書の意味記述

辞書名	うち(内)	なか(中)
【大辞泉】	①(「中」とも書く)ある一定の区域・範囲の中．㋐仕切られた内側．内部．⇔外(そと)．㋑中心または手前に寄ったほう．㋒ある範囲に含まれるもの．㋓外から見えないところ．うら．㋔心の中．心．内心．㋕ある数量のなか．㋖ある時間のなか．以内．あいだ．	①㋐空間的な，ある範囲の内側．㋑ 家庭・学校・会社など，ある組織や集団の内部． ②事物についてある範囲を限定し，その範囲内でことを考えるときに用いる語．うち． ③ 区切られた空間の，端から遠い所．中央． ④ 二つの事物の間．中間．⑤ 段階・等級・順序などを考えて，三つ並んでいるものの二番目．ちゅう．⑥抽象的な事物について，その内部． ⑦ ある状態の最中．ただなか．
【広辞苑】	p.1814[うち【内】] [一]〔名〕 ❶(「中」とも書く)何かを中核・規準とする，一定の限界のなか．①区域内．内部．②限度内．以内．あいだ．③内裏．宮中．また，天皇．❷自分の属する側（のもの）．①なか．また，国内．②身のまわり．側近．③(「家」とも書く)自分の家，また，家庭．④(「家」とも書	p.14514[なか【中・仲】] ❶一定の区画・範囲の内．「外」に対する． ①内部．うち．②心の中．胸中．③(廓の中の意で)江戸で吉原，大坂で新町の遊郭の称． ❷一つづきの物事の両端でない部分．三つのものの中央． ①中部．中央．②中等．中位．③多くの物事のうち．④二つの物事の中間．⑤

	く)転じて，家．家屋．⑤自分の夫または妻．うちの人．うちの者． ⑥自分の属するもの．⑦仏教で，儒教などを外とするのに対し，仏教の側のこと．❸物事のあらわでない面． ①外からは見えない心中．②うちとけた面．③公式でない面．	ある事が起き，まだ終わらない間．ある状態にある，その間．⑥(多く「仲」と書く)男女・夫婦・親子・兄弟・知人等の人間関係．間柄．⑦(中国の「伯仲叔季」の訓からか)三人以上の兄弟姉妹の2番目．⑧月の中旬．
【例解】	p.110[うち内(中)] ①空間的，平面的に，ある範囲や区域，限界などの中．↔そと ②一定時間の間．形式名詞のように用いる．③程度，分量などで，ある限度を越えていないこと．以下．以内．⑤人の気持．心の中．⑥家，家の建物，家庭．また，自分の家，家庭．⑦自分の属する所．↔よそ．⑨終始そのようなさまであるあいだ．	p.916[なか中] ①物の内側．内部．中間．↔外そと ②事態，状態，事柄の内部．③順序で，中間に当るものを指して言う．

【大辞泉】の[用法]の説明欄では，「うち，なか」の意味用法の重なりとズレについて説明した上で，相互置き換えできるかどうかを例示している．以下では，置き換えできる場合と置き換えできない場合に分けて示す：

＜置き換えできる場合＞

①ある仕切りで区切られた空間・平面などを表す場合は，「外は寒かったが，部屋の内（中）には暖かく火が燃えていた」のように，「内」も「中」も同じように使うが，「内」のほうがやや文語的な言い方である．

②「大勢の応募者の内（中）から選ばれた人」のようにある範囲を示す場合．

＜置き換えできない場合＞

①ある状態にあることを示す「雨の中を歩く」「忙しい中を無理に頼む」等は「内」に置き換えられない．

②「中の指」のように順序の中間を示すときも「内」とはいわない．

③この場合，ある時間の範囲内であることを示す「朝，まだ暗い内に出発した」や，事柄がある範囲に含まれることを示す「苦労するのも勉強の内だ」などでは，「内」を「中」で置き換えることはできない．

しかし，このような辞書の意味記述と例示だけでは，実際の言語使用の場では，特に外国語としての学習という立場からすれば，それほど簡単に説明できる問題ではない．「うち，なか」と共に用いられる語彙によって「うち，なか」の両方とも許容される場合があれば，そうでない場合もあるため，内省を持つ母語話者であれば直ぐに判断できる相異点であっても，そのような相異点を取り出して明示的に示す必要がある．

5.1.1.「うち，なか」の格助詞形と前項の連語の現れ方

以下では，[うち/なか＋格助詞]を中心語として，「うち，なか」の前項の連語と後項の連語を分析する．分析の方法と手順は韓国語の場合と同様である．コーパスから収集した用例を，[うち/なか＋格助詞]の前項の連語の統辞的構造により，三つの類型に分類して次に三つの類型と類型別の用例を挙げておく：

類型①先行名詞＋[うち/なか＋格助詞]＋後行の連語

試合が二日のうちに迫る．(시합이 이틀 안으로 다가왔다.)[70] 【大辞泉】

類型②連体修飾語＋[うち/なか＋格助詞]＋後行の連語

話しているうちに考えが変わった．이야기하는 동안에 생각이 바뀌었다.）

＜LBo9_00027＞

類型③Ø＋[うち/なか＋格助詞]＋後行の連語

うちを探ると，問題があるらしい．(안을 살펴보니 문제가 있는 것 같다) 【大辞泉】

「うち，なか」の意味領域を記述するためには，三つの類型を考察する必要があるが，ここでは，名詞に接続する類型①と③に限って調査及び分析を進めることにする．なぜならば，類型②の場合，「うち，なか」の実質的な意味は希薄化し，＜範囲，期間，状況＞の節を構成する文法的要素となり，形式名詞としてすでに文法化した表現になっているため，ここでは対象としない．類型③の場合，コーパスを検索した結果， 先行要素を伴わない「うち」の場合，「自分の属する側（のもの），自分の家，また，家庭」の意味が大部分で，先行要素を伴わない「なか」の場合は，すでに提示された情報を基に，その中から選択をしたり，空間的に規定される用法が大部分で，今回の分析では対象としていないが，「うち」と「なか」の全体像を把握するためには，後続の研究で分析する必要がある．

5.1.1.1. 類型①における「うち/なか＋格助詞」の先行名詞の分布

まず，類型①の前項の連語にはどのような名詞がどのような頻度で現れるかを調べるために，「先行名詞＋うち/なか＋格助詞」の用例をコーパスから収集して，格助詞別の用例数を表 30 に示した．

その分布を見ると，「なか」が「うち」より三倍以上使用頻度が高いことが分かる．また，格助詞形別の用例数を見ると，「うちに」が 63.5%を占め，「うちの」が 22%，「うちから」が 6.1%，「うちで」が 5.5%と，「うち」ニ格の用例が最も多い．一方，「なか」は「なかに」が 42.9%を占め，「なかで」が 39.1%，「なかの」が 8.4%で，方向と位置を表す格の出現頻度が高い．このような格助詞別の用例の出現頻度が「うち」と「なか」の語彙的意味の類似や相異を直接表すものではないが，「うち/なか＋格助詞」の現れ方を通して言語使用の現状を理解することができるうえ，頻出類型を中心に今後の分析の基礎資料とすることで，客観的かつ信頼できる分析の結果を提示することができる．

---

[70] 類型①③の例文は【大辞泉】，類型②の例文は『日本語コーパス』から引用した．韓国語訳は筆者による．

表 30. 先行名詞＋[うち/なか＋格助詞]の格助詞形別の用例数

うち			なか		
格助詞	先行名詞＋[うち＋格助詞]		格助詞	先行名詞＋[なか＋格助詞]	
	用例数	出現頻度		用例数	出現頻度
に	1510	63.5	に	3412	42.9
の	531	22.2	で	3,109	39.1
から	146	6.1	の	670	8.4
で	131	5.5	を	329	4.1
を	42	1.8	から	295	3.7
が	17	0.7	が	93	1.2
へ	5	0.2	へ	46	0.6
合計	2382	100.0	合計	7954	100.0

下記の表 31 と 32 は，[うち/なか＋格助詞]と共起する先行名詞を格助詞別・名詞類別に分類したもので，その名詞分類は「表 5. 本研究で用いる名詞分類」による．まず，類型①における[うち＋格助詞]の先行名詞の現れ方を表 31 にまとめた．

表 31. [うち＋格助詞]の先行名詞の現れ方

	うちに		うちの		うちから		うちで		うちを		うちが		うちへ		合計	
名詞類	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
時間	742	49.0	28	5.3	29	19.9	12	10.3	−	−	−	−	−	−	814	34.0
抽象	374	25.0	35	6.6	5	3.4	27	20.2	8	19.0	6	35.3	2	40. 0	430	18.0
事柄	123	8.1	113	21.3	29	19.9	16	13.0	−	−	−	−	−	−	265	11.1
活動	89	5.7	11	2.1	4	2.7	12	8.8	1	2.4	−	−	−	−	129	5.4
人間	68	4.5	115	22.9	55	37.6	19	14.5	−	−	3	17.6	−	−	274	11.5
現象	37	2.4	3	0.5	−	−	10	7.6	1	2.4	−	−	−	−	61	2.6
身体	32	2.0	11	2.1	1	0.7	12	9.2	26	62.0	8	47.1	−	−	83	3.5
具体	21	1.3	49	9.2	11	7.5	4	5.3	1	2.4	−	−	−	−	89	3.7
場所	24	1.5	38	7.2	6	4.1	10	7.6	3	7.1	−	−	3	60.0	94	3.9
数量	−	−	117	22	3	2.1	5	3.4	−	−	−	−	−	−	124	5.2
団体	−	−	16	3.0	2	1.4	3	2.3	−	−	−	−	−	−	24	1.0
動物	−	−	1	0.2	1	0.7	1	0.4	−−	−	−	−	−	−	3	0.1
物質	−	−	−	−	−	−	−	−	2	4.7	−	−	−	−	2	0.1
合計	1510	100.0	537	100.0	146	100.0	131	100.0	42	100.0	17	100.0	5	100.0	2382	100.0

[うち＋格助詞]と共起する先行名詞は，頻出順で時間名詞＞抽象名詞＞人間名詞＞事柄名詞の順となっている．「うち」と結合する格助詞別の頻度順を見ると，「うちに」は時間名詞が 49%と圧倒的に多く，「うちの」は数量名詞，事柄名詞の順で，[うちから]は人間名詞，時間名詞，事柄名詞の順で，結合する格助詞によって頻繁に共起する名詞類が異なる．このように「うち」は，場所名詞など実体性名詞とはあま

り共起せず，時間名詞や抽象名詞など非実体性名詞とよく共に現れ，分布のばらつきが大きい．

これに対し，[なか＋格助詞]と共起する先行名詞を調べた結果，実体性名詞と非実体性名詞のとちらとも広く共起し，「うち」より意味領域が広いことが分かる．「なか」と結合する格助詞別に頻出先行名詞を見ると，「なかに」の場合は抽象名詞が最も多く，次いで人間名詞，場所名詞，事柄名詞の順で，「なかの」は具体名詞，抽象名詞，場所名詞の順であり，「なかで」は抽象名詞，事柄名詞，具体名詞，活動名詞の順となっている．全体としては，抽象名詞＞場所名詞＞事柄名詞＞具体名詞＞人間名詞の順となる．

以下に，類型①における[なか＋格助詞]と共起する先行名詞の現れ方を表 32 にまとめた．

表 32. [なか＋格助詞]の先行名詞の現れ方

	なかに		なかの		なかから		なかで		なかを		なかが		なかへ		合計	
名詞類	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
抽象	725	21.2	130	19.4	33	11.2	892	28.5	29	8.8	8	17.4	10	10.7	1827	23.0
場所	549	16.1	124	18.5	28	9.5	309	9.9	136	41.3	13	28.2	41	44.1	1200	15.1
事柄	492	14.4	96	14.3	57	19.3	470	15.0	13	4.0	1	2.2	7	7.5	1136	14.3
具体	270	7.9	144	21.5	52	17.6	439	14.1	38	11.6	4	8.7	9	9.7	956	12.0
人間	608	17.8	68	10.1	50	17.0	152	4.9	6	1.8	－	－	4	4.3	888	11.2
活動	177	5.2	16	2.4	44	14.9	437	14.0	3	0.9	－	－	3	3.2	680	8.5
身体	265	7.8	36	5.4	6	2.0	164	5.2	33	10.0	20	43.5	8	8.6	532	6.7
現象	132	3.9	21	3.1	14	4.8	142	4.5	64	19.5	－	－	10	10.8	383	4.8
団体	105	3.1	22	3.3	8	2.7	72	2.3	2	0.6	－	－	1	1.1	210	2.6
時間	33	0.9	4	0.6	－	－	32	1.0	1	0.3	－	－	－	－	70	0.9
物質	43	1.3	4	0.6	－	－	－	－	4	1.2	－	－	－	－	51	0.6
動物	13	0.4	1	0.2	2	0.7	－	－	－	－	－	－	－	－	16	0.2
数量	－	－	4	0.6	1	0.3	－	－	－	－	－	－	－	－	5	0.1
合計	3412	100.0	670	100.0	295	100.0	3109	100.0	329	100.0	46	100.0	93	100.0	7954	100.0

上記の結果を基に，[うち/なか＋格助詞]と共起する先行名詞の名詞類別の分布を図 9 に示した．図 9 に表示された数字は，出現用例数である．

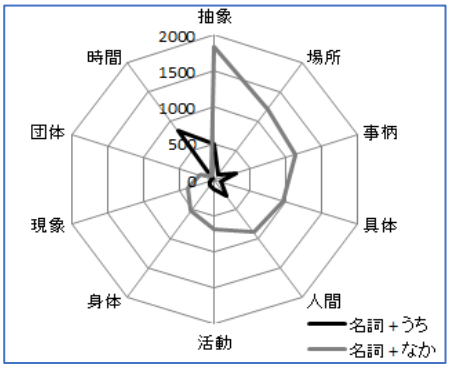

図 9. [うち/なか＋格助詞]の先行名詞の分布

図 9 に示された「うち，なか」の先行名詞の分布から，先行名詞を伴う類型においては，「なか」が「うち」よりはるかに頻繁に用いられるということ，「うち」の場合は時間名詞・抽象名詞が圧倒的に多く，分布が偏っているのに対し，「なか」の場合は，時間名詞を除いて，幅広く分布していることが分かり，「うち」と「なか」の意味領域の重なりとズレが鮮明に現れる．

5.1.2. 類型①における「うち，なか+格助詞」の前項の連語

上述した先行名詞の分布上の特徴を反映して「うち，なか」の意味特性を調べるために，類型①における「うち，なか」の先行名詞を延べ語数で頻出順上位 15 位までを分析の対象とし，以下の表 33 と 34 にまとめた．

下の表 33 と 34 の網掛けの部分は「うち」と「なか」のどちらとも共起する名詞である．

表 33. 類型①における[うち＋格助詞]の頻出先行名詞

うちに		うちの		うちから		うちで		うちを		うちへ		うちが	
用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数
無意識	143	三人	46	今	18	心	21	胸	16	門	3	心	5
その日	101	三つ	13	者	16	胸	21	手	8	世界	2	手	3
今	83	彼ら	7	委員	9	一日	8	心	8	－	－	胸	3
一瞬	54	一月	6	子供	6	～円	6	腹	2	－	－	腹	2
短時日	46	人	6	物	2	一生	5	かすみ	1	－	－	年上	1
暗黙	30	心	6	年齢	2	仕事	4	居間	1	－	－	中学生	1
夜	24	物	5	三つ	2	一年	4	空気	1	－	－	－	－
胸	21	目標	5	宵	2	三人	3	馬場	1	－	－	－	－
朝	18	女	5	小学生	2	受給者	3	鳳輦	1	－	－	－	－
一生	16	胸	5	損害賠償金	2	人間	3	寺	1	－	－	－	－
無音	15	人々	4	幼児	2	彼ら	3	循環	1	－	－	－	－
心	15	一生	4	朝	2	機関	2	－	－	－	－	－	－
一日半	15	住民	3	職員	2	生涯	2	－	－	－	－	－	
今日	14	家	3	精算額	2	子供	2	－	－	－	－	－	－
一夜	13	自分	3	低学年	2	責任	2	－	－	－	－	－	－
(合計)	608		121		71		89		41		5		15

表 34. 類型①における[なか＋格助詞]の頻出先行名詞

なかに		なかの		なかから		なかで		なかを		なかへ		なかが	
用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数	用例	用例数
人	142	自分	20	家々	4	心	85	部屋	16	家	6	頭	12
頭	79	個人	16	鞄	4	状況	73	雨	14	孤独	4	家	7
心	78	森	13	活動	4	頭	59	闇	11	部屋	4	世	5
作品名	64	夢	12	希望者	4	生活	55	頭	10	わたし	3	口	3
家	35	世	12	袋	3	歴史	37	家	9	林	3	部屋	2
自分	30	家	11	動き	3	夢	33	山	8	森	3	心	2
闇	25	心	11	社員	3	流れ	31	林	6	闇	3	居間	1
部屋	24	世界	10	心	3	社会	27	雪	6	暗闇	3	鏡	1
生活	22	頭	8	闇	3	関係	26	森	5	カウンター	2	国	1
人	22	鏡	7	人たち	3	胸	26	心	5	茂み	2	目	1
夢	19	箱	7	家	3	口	24	空気	4	山	2	腹	1
山	19	絵	7	建物	2	闇	23	口	4	水	2	体	1
口	18	山	6	苦労	2	自然	19	箱	4	心	2	山	1
雪	18	記憶	5	能力	2	家	18	水	4	土	2	車	1
世	18	歴史	5	部屋	2	環境	17	胸	4	システム	1	台所	1
人々	17	小説	5	実践	2	本	16	建物	3	居間	1	胸	1
合計	630		155		47		569		113		43		41

表33と表34に示すように，大部分の先行名詞は「うち」か「なか」の一方としか共起しない．「うち」または「なか」の一方としか共起しない名詞の意味特性を分析し，その結果を基にしてそれらの名詞と共起する「うち」と「なか」の意味領域を画定し，「うち」と「なか」の意味領域の重なりとズレを明確に見出すことができる．一方で，抽象名詞「心」，身体名詞「胸，腹」，人の集合を表す「～人（人の数）」といった一部の名詞は「うち」と「なか」のどちらとも共起することから，それらの名詞と共起する「うち」と「なか」の連語構成を分析し，「うち」と「なか」の意味領域の重なりとズレを探ることにする．

5.1.2.1. 類型①先行名詞を伴う連語構成の頻出先行名詞の分析

上記の表33と表34のうち，頻出先行名詞を伴う用例が「うち」と「なか」のどちらか一方としか結合しない場合，「うち」，「なか」がどのような意味領域を表すかを検討する．

先行名詞＋[うちに/なかに]

(118) 大切なのは，どちらがご主人さまかを今のうちにしっかりたたきこんでおくことだ．
＜PB59_00371＞
(중요한 것은 어느쪽이 주인님인지 지금 당장 확실하게 해두는 것이다.)

(119) むしろ，彼はユダヤ人処刑という，暗黙のうちに負わされていた任務の遂行を拒否する．
＜LBj9_00059＞
(오히려 그는 유대인 처형이라는 암묵적으로 주어진 임무의 수행을 거부한다.)

(120) だが男はみな大なり小なり，その種の願望を心のうちに秘めている． ＜OB3X_00260＞
(그러나 남자는 모두 크건 작건 그런 종류의 소망을 마음 속에 간직하고 있다.)

［先行名詞＋うちに］と共起するのは，「今，一瞬，夜，一生」といった時間名詞が約49％を占め，時間名詞と結合する「うち」は＜時間的範囲＞を表す．次に用例数が多いのは，「無意識，暗黙，心」といった抽象名詞と共に＜抽象空間＞を表す例で，約25％％を占めている．そのうち，「無意識のうちに，暗黙のうちに」の「うち」は空間的意味を失い，＜ある状態の持続＞を表しており，［心のうち］の「うち」は＜心理・心情の抽象空間＞を表す．「うちに」と場所名詞との共起は1.5％に止まり，具体空間との関わりはほとんど示さない．

(121) 具体的な現実に分け入らず，頭のなかにある「結論」だけで決めつける．
＜LBn3_00066＞
(구체적인 현실을 파악하지 않고 머리 속에 있는 '결론' 만으로 단정한다.)

(122) 家のなかにいても，天井から砂が降ってくる． ＜LBl6_00018＞
(집 안에 있어도 천정에서 모래가 떨어진다.)

(123) 日本人の生活のなかに根づいている深い信仰．＜LBt9_00063＞
(일본인의 생활 속에 뿌리내리고 있는 깊은 신앙)

［先行名詞＋なかに］の場合，共起する名詞は「心，夢，生活」といった抽象名詞が21％，「人，私，子供」といった人間名詞が18％で，身体名詞でありながら意味上は＜心理，心情＞を表す「頭，胸」が8％を占めており，＜人の営みや心理的働き＞に関わる用法が目立つ．また，「なかに」は「家，部屋，山」といった場所名詞との共起が16％を占め，「うちに」に比べ具体空間との関わりがはるかに高いと考えられる．

先行名詞＋うちで/なかで

(124) 渡辺の胸のうちで不安が急速に膨れ上がった．＜PB39_00464＞
(와타나베의 가슴 속에서 불안이 급속히 부풀어올랐다)

(125) 真利子の心のうちで起こっていることは想像できたので，私は黙った．＜LBk9_00207＞
(마리코의 마음 속에서 일어나고 있는 것은 상상할 수 있었기 때문에 나는 침묵했다.)

［先行名詞＋うちで］は262例で，共起する名詞の頻度順は抽象名詞＞人間名詞＞事柄名詞＞時間名詞となっている．抽象名詞の「心」と身体名詞の「胸」が共起する例が最も多く，後項の連語とともに心理的状態や感情と関わる＜心理的空間＞を表す．人間名詞とともに後項の連語による言及や比較の＜対象集団や物事の範囲＞を表し，時間名詞とともにある限定された時間的範囲のなかから特定の部分を取り立てるための範囲の指定という＜限定的時間の範囲＞を表す．

(126) タケシは心のなかでそう呟き，もう一度デモ隊に向って手をふった．＜PB1n_00058＞
(다케시는 마음 속으로 그렇게 중얼거리며 다시 한 번 데모대를 향해 손을 흔들었다.)

(127) 自然のなかでたくさんのことを学び．＜LBo3_00132＞
(자연 속에서 많은 것을 배운다.)

(128) 学力低下という状況のなかで学業成績や学校種別が、職業アスピレーションの形成にどのような影響を与えているのか．＜PB53_00369＞
(학력저하라는 상황 속에서 학업성적이나 학교종별이 직업향상심 형성에 어떠한 영향을 주고 있는가.)

［先行名詞＋なかで］は3,109例が抽出され，抽象名詞＞事柄名詞＞具体名詞＞活動名詞＞場所名詞の順となっている．「なかで」は＜個人の心理・心情＞を表す「心」だけではなく，「状況，社会，関係」といった，＜人の人との関わり＞を表す抽象名詞との共起が目立つ．また，「本，車，船」といった具体名詞が14％を，場所名詞が10％近くを占めており，＜具体空間＞を表す名詞との共起頻度が高い．特徴的なのは，「うちで」と「なかで」の両方において「心」が最も多く収集されており，＜心理・心情の抽象空間＞では「うち」と「なか」の意味領域の境界が接近していると考えられる．

先行名詞＋うちの/なかの

(129) 三人のうちの二人は厚生年金方式をとって，一人だけが私学共済の方式をとっている．＜OM25_00006＞
(세 사람 중 두 사람은 후생연금방식을 택하고 한 사람만이 사학공제방식을 택하고 있다.)

(130) それから，心のうちの不安を隠そうとするように… ＜OB1X_00173＞
(그리고는 마음 속의 불안을 감추려는 듯이…

［先行名詞＋うちの］は531例で，数量名詞＞事柄名詞＞人間名詞の順に共起し，主に比較対象となる範囲・集団を表す．

(131) 話を聞いてもらうだけでも，自分のなかのわだかまりが少しずつ解消していくのを感じました．＜PB33_00730＞
(이야기를 들어주기만 해도 내 안의 응어리가 조금씩 해소되어 가는 것을 느꼈습니다.)

［先行名詞＋なかの］は670例で，具体名詞＞場所名詞＞抽象名詞の順に共起し，「鏡，箱，絵」といった具体名詞と「森，家，山」といった場所名詞と供に具体空間を表し，「自分，個人，夢，心，世」等の抽象名詞とともに抽象空間を表す．「なかの」は「うちの」と違って，先行名詞と後項の名詞が＜全体と一部＞の関係を表すことは少ない．

先行名詞＋うちから/なかから

(132) 今のうちから化粧をすると大人になって肌が悪くなると言われてきたので，普段化粧はしていません． ＜OC09_00177＞
(지금부터 화장을 하면 어른이 되면 피부가 나빠진다는 말을 들어왔기 때문에, 보통때는 화장은 하지 않습니다.)

(133) 深い理解と経験を持つ者のうちから労働大臣が委嘱するものである．＜OW5X_00146＞
(깊은 이해와 경험을 가진 사람 중에서 노동대신이 위촉하도록 한다.)

［先行名詞＋うちから］は146例で，人間名詞＞時間名詞＞事柄名詞の順に共起し，＜範囲＞を表す特性が強く現れる．「今，朝」といった時間名詞と共起して＜ある一定の時間的境界より遅くならないうち＞という＜始発時間制限の設定＞を表し，「者，委員」といった人間名詞と共起する場合，＜選択の対象範囲＞を表す．また，同じく人間名詞との共起であっても，時期的に限定された範囲を表す「子供，小学生」との連語構成では＜一定の時期的範囲の限定＞を表す．

(134) なんといっても無意識的な活動のなかから生れ出るものなのである． ＜LBk9_00194＞
(뭐라고 해도 무의식적인 활동 속에서 생겨나는 것이다.)

(135) 希望者のなかから抽選で決める． ＜LBn6_00028＞

(희망자 중에서 추첨으로 정한다.)

[先行名詞＋なかから]は262例で，頻出名詞は事柄名詞＞具体名詞＞人間名詞の順であり，時間名詞の用例は抽出されなかった．「活動，苦労，実践」といった人間活動を表す名詞との共起がほとんどである．また「建物，鞄」といった具体名詞と共に＜ある囲まれた具体空間＞を表す．「職員のうちから」と「社員のなかから」に見られるように，[なかから]も[うちから]と同様に人間名詞と共起することができ，先行名詞だけではその意味特性の違いを取り出すことが難しい．

先行名詞＋うちを/なかを

(136) 日本人はその腹のうちを打ち明けようとしない． ＜PB52_00023＞
(일본인은 속을 보여주려고 하지 않는다)

[先行名詞＋うちを]は42例しか見られないが，そのうち身体名詞「胸，腹」などが60％以上を占め，抽象名詞「心」などが20％を占め，身体名詞も抽象名詞と同様に＜心理・心情の抽象空間＞を表す用法が大部分である．

(137) 部屋のなかを行ったり来たりして，いすをひとつひとつきまった場所におきなおした．
＜PB39_00090＞
(방 안을 왔다갔다하면서 의자를 하나 하나 정해진 곳에 다시 놓았다.)

(138) 二台の自動車は，先になりあとになり，雨のなかをただひたすら走った．＜LBe9_00176＞
(두 대의 자동차는 앞서거니 뒤서거니 하면서 빗속을 그저 달렸다.)

[先行名詞＋なかを]は329例で，そのうち「部屋，家，山，林」といった場所名詞が41％を占め，次いで「雨，闇，雪」といった現象名詞が20％を，「頭」などの身体名詞が10％を占めている．「なかを」は具体名詞とともに＜具体的空間＞を表すことが多く，自然現象を表す名詞と共に進行の＜状況＞を表す．

先行名詞＋うちが/なかが

(139) レイ子の心のうちが知りたい． ＜OB1X_00182＞
(레이코의 마음 속을 알고 싶다)

(140) 刑事の胸のうちが読めていたので，私はさして驚かなかった． ＜LBe9_00063＞
(형사의 가슴 속을 읽을 수 었었기 때문에, 나는 그다지 놀라지 않았다.)

[先行名詞＋うちが]は17例しかなく，「手，胸」などの身体名詞が47％，[心，自分]などの抽象名詞が35％で，「手」を除いてはすべて＜心理・心情＞を表す．

(141) オルノフは一瞬頭のなかが空白になったような気がした． ＜LBq9_00164＞
(올노프는 순간 머리 속이 텅빈듯한 느낌이었다.)

(142) 家のなかが空っぽだ． ＜LBq9_00231＞
(집 안이 텅 비었다.)

[先行名詞＋なかが]の場合も「頭，口」などの身体名詞が44％でもっとも多いが，抽象的な心理空間の意味を表す用例より具体的な身体空間を表すことが多く，「家，部屋」といった場所名詞とともに具体空間を表すことが多い．

先行名詞＋うちへ/なかへ

(143) 何故に我々は世界のうちへ出て来なければならないのであるか． ＜PB49_00275＞
(왜 우리는 세계 속으로 나오지 않으면 안되는가.)

(144) 彼女に続いて，彼は部屋のなかへ入っていった． ＜PB49_00383＞
(그녀에 이어，그는 방 안으로 들어왔다.)

[先行名詞＋うちへ]は，場所名詞が3例，抽象名詞が2例で，合わせて5例しが収集されなかった．それに対し，[先行名詞＋なかへ]の先行名詞は，収集された96例のうち「家，森」といった場所名詞が44%を占め，共起する先行名詞の内部空間への移動を表すことが多く，「闇，茂み」などと共起して現象や自然を具体空間化する．

5.1.2.2. 前項の連語の分析に基づく「うち，なか」の意味領域のまとめ

これまでの前項の連語の分析の結果を以下にまとめる．

1) 先行名詞全体を対象とした場合，[うち＋格助詞]の先行名詞は71%が非実体性名詞で，＜時間＞と＜範囲＞の領域が広く，＜具体空間＞と＜状況＞の領域はほとんど見られない．それに対し，[なか＋格助詞]の先行名詞は非実体性名詞が51％，実体性名詞が49％を占め，＜時間＞との共起はほとんどなく，＜範囲，具体・抽象空間，状況＞の幅広い領域に分布するという違いが見られた．
2) 場所・具体・身体・人間名詞のような実体性名詞との連語構成において，先行名詞が本来の実体性を表す場合は意味領域の重なりは見られず，「うち，なか」の意味境界は離れている．ところが，実体性を失って心理空間を表す「胸」，取り立てや比較対象の範囲を表す「子供，人」との連語構成においては，「うち，なか」の意味領域が重なることが分かった．収集用例の分布から，「胸のなか」の「な

か」はもともと具体空間を表すが，抽象空間にまで意味拡大したものと考えられ，本来から抽象空間しか表さない「胸のうち」と意味領域が重なるようになったと考えられる.

3） 抽象・現象・事柄・活動・時間名詞のような非実体性名詞との連語構成において，＜状況・時間・範囲＞の意味領域では「うち，なか」の意味領域の重なりは見られず，意味境界は離れているが，＜心理空間＞を表す「心」との連語構成においては「うち，なか」の意味領域の重なりが広範囲で密接となり，＜概念的抽象空間＞を表す「世界」との連語構成においても意味領域の重なりが見られる.

4） このような結果から，「うち」，「なか」は先行名詞の実体性が高くなるほどそれぞれ固有の意味領域を明確に表し，意味境界は離れていくことになるが，先行名詞の実体性が低くなり抽象化するほど「うち，なか」の意味境界は接近し，重なりが広がる傾向を見せる.

これまでの前項の連語の分析の結果を基に,「うち，なか」の意味領域を下記の図10に示す:

＜うち＞				＜なか＞	
先行名詞の名詞類別分布		「うち」の意味領域（頻出用例）	「うち，なか」の意味領域の重なり	「なか」の意味領域（頻出用例）	先行名詞の名詞類別分布
実体性名詞	場所名詞（3.9%）	具体空間(門)（具体物）	意味領域は重ならない．	具体空間(家,森)（具体物，自然物）	場所名詞(15.1%)
	具体名詞（3.7%）	具体空間（作品）	意味領域は重ならない．	具体空間（箱,鞄）	具体名詞(12.2%)
	身体名詞（3.5%）	具体空間(手)	意味領域は重ならない．	具体空間（胸，頭，口）	身体名詞(6.7%)
		心理空間（胸*）	心理空間(実体名詞の非実体名詞化)の場合は重なりを見せる．	心理空間（胸*）	
	人間名詞（11.5%）	範囲（住民，子供）	範囲(実体名詞の非実体名詞化)の場合は重なりを見せる．	範囲（人，希望者）	人間名詞(8.5%)
		時間の範囲（子供，小学生）	時間の意味領域は重ならない．		
	その他（数量・団体・物質名詞など）				その他（数量・団体・物質名詞等）
非実体性名詞	抽象名詞（18.0%）	心理空間（心）**	心理空間「心」の場合:意味領域の重なりが広範囲で密接．	心理空間（心）	抽象名詞(23.0%)
		抽象空間（世界，社会）	抽象空間のうち，概念的抽象空間を表す場合，意味領域の重なりが見られる．	抽象空間（世界,夢）	
		固定化（無意識）	意味領域は重ならない．	固定化（世）	
	事柄名詞（11.1%）	抽象空間(目標)	意味領域は重ならない．	抽象空間（小説）	事柄名詞(14.3%)
	その他(活動・現象名詞など)		意味領域は重ならない．		その他(活動・現象名詞など)
	時間名詞（34.0%）	時間，朝，一日	＜時間名詞＞ 意味領域は重ならない．	時間	時間名詞(0.9%)

＜うち＞

実体性名詞（29%）

非実体性名詞（71%）

＜実体性名詞＞

① 意味境界の重なりが少ない．
② 先行名詞の実体性が高くなるほど意味領域は離れる．
③ 実体名詞の非実体化により意味領域が重なる傾向を見せる．

＜非実体性名詞＞

① 意味領域の重なりがある．
② 心理空間，概念的抽象空間の場合に意味領域の接近や重なりが目立つ．
③ 時間名詞の場合は意味領域の重なりは見られない．

＜なか＞

実体性名詞（49%）

非実体性名詞（51%）

*身体名詞「胸」は心理・心情を表す場合に限る．

**網掛の部分は意味境界の重なりを見せる用例・意味領域を表す．

図 10. 先行名詞から見る「うち」と「なか」の意味領域

5.1.3. 類型①先行名詞を伴う連語構成の後項の連語

ある名詞が「うち，なか」の先行名詞として両方と共起する場合，先行名詞だけでは「うち，なか」の相違点を見出すことができない．下の表35は，コーパスから収集した用例のうち，「うち，なか」の両方と共通して用いられる名詞を格助詞別に分類したものである．

表 35. [うち/なか＋格助詞]と共通して現れる名詞の格助詞別用例数

	格助詞別用例数							
	に	の	から	で	を	へ	が	合計
心のうち	15	6		21	8		5	55
心のなか	78	11	3	85	5	2	2	186
胸のうち	21	−	−	21	16	−	3	61
胸のなか	−	−	−	26	4	−	−	30
腹のうち	−	−	−	−	2	−	2	4
腹のなか	−	−	−	−	−	−	1	1
～(人)のうち	−	57	27	6	−	−	−	90
～(人)のなか	−	−	10	−	−	−	−	10

表35から分かるように，「心」，「胸，腹」，人の集合を表す「～人（人数，特定の集団など）」といった名詞が共通して現れるが，そのうち「心」は，「なか」との共起の例が「うち」の3倍を超えるほどの高い頻度で現れる．そのとき「なか」がとる格はニ格とデ格への偏りはあるが，他の格との結合に制限は見られない．「心」を伴う「うち」もニ格とデ格への偏りが見られるうえ，カラ格とヘ格を取らない．

身体名詞から抽象化した「胸」の場合，「なか」より「うち」と頻繁に結合し，「うち」がとる格はニ格とデ格，オ格であるが，「なか」は主にデ格を取り，分布に違いがある．

また，人の集合を表す名詞の場合は，「うち」の用例が「なか」の用例より9倍に上り，ノ格とカラ格を取る．「なか」は用例数の少なさとカラ格しか取らないことから，言語使用における傾向性を見ることができる．

以下では，「うち，なか」の両方と共起する先行名詞のうち，出現頻度の高い「心」と「～人（人の集合）」の連語構成を対象に後項の連語を分析し，「うち」と「なか」の意味領域を対照する．

5.1.3.1. [心の＋うち/なか＋格助詞]の後項の連語

上の表35の通り，[心のうち/なか＋格助詞]の連語構成は，[心のうち]が55例，[心のなか]が186例収集され，「なか」との共起の頻度がはるかに高いことが分かる．以下では，収集された用例を空間名詞と結合する格助詞別に分けて，「うち」と「なか」の後項の連語を分析し，その現れ方と意味特性を取り出す．

心のうちに/なかに

下の表36は，[心のうちに]，[心のなかに]の後項の連語の位置に現れる動詞を，動詞の意味によって

分類したものである．[心のうちに]と[心のなかに]のどちらとも共起し，共通して現れる動詞は，思考動詞と発生動詞，存在動詞である．また，相異点としては，「心のうちに」は「秘める，思う，忘れる，気づく，感じる」といった心理的活動を表す動詞と共起するが，「心のなかに」は，心理状態をより具体的に表したり，感情を表す「わだかまる，くすぶる，息づく」といった動詞との共起が目立つ．また，動作動詞としては，[心のなかに]は「受け入れる，蓄える，しまい込む，体制化する，設定する」といった対象語を持つ具体的な動作を表す動詞が多い．このようなことから，心理的空間としての「なか」は「うち」に比べ，動的，可視的，開放的な空間であると言える．

表 36. [心のうちに/心のなかに]の後項の連語

後項の連語	うちに	なかに
心理動詞	秘める，忘れる	わだかまる，落ち着く，くすぶる，息づく，
思考動詞	思う	思う，思い描く，描く
知覚動詞	感じる(2)[71]，発見する，気づく	見過ごす，揺曳する
動作動詞	同居する，残る	去来する，分けこむ， 息づく，生きる，残る，住み着く，待つ，抱える
	焼きつく，蒔く，打ち明ける，迫る，刻む	受け入れる，蓄える，かき起こす，つぶやく，しまい込む，飼う， 持ち合う，とどめる，刻み付ける，体制化する，設定する
変化動詞	満ちる，沸き起こる，起こる，きざす，湧き出る	浮かぶ，生じる，沸く，沈着する，空く，生まれる，鳴る，渦巻く，映る
授与動詞	与える	
存在	ある，いる	ある，いる，存在する

＜心のうちに＞

(145) 心のうちに「さらになにかあるのでは」という不安感，つまり学者としては期待感があり，地震計のほかに、いざというときに必要なすべての機器を持参していました．
＜LBe4_00024＞
(마음 속에 '더 무슨 일이 있는 건 아닌지?'하는 불안감, 즉 학자로서는 기대감이 있어서, 지진계 외에도 만일의 경우에 필요한 모든 기기를 지참했습니다.)

＜心のなかに＞

(146) 個人それぞれの心のなかにある正義というものを横に繋いでいく試みこそ必要だろうと思うのです． ＜LBk9_00080＞
(개인 각자의 마음 속에 있는 정의라는 것을 옆으로 펼쳐보는 시도야말로 필요할 것이라고 생각합니다.)

[71] ( )内は用例数．明記されないものは用例数1であることを示す．表36から表39まで同様である．

(145),(146)の[心のうちに/なかに＋ある]という連語構成では，前項の連語「心」と後項の連語「ある」が共通している．ここでは，「うち」と「なか」の意味領域の相異点を探るために，連語の範囲を広げ，動詞「ある」の補語の意味特性を見る．下の表37の通り，「うちに」は「恐怖，不安，怒り，気持ち」といった主観的感情や心理状態を表す名詞と主に共起しているが，「なかに」は主観的感情や心理状態を表す名詞だけではなく，「プラン，正義，概念，イメージ，意識」といった概念的抽象名詞とも共起する．さらに「心のなかに」は「道」といった場所名詞や「女の人」といった人間名詞を補語として取ることができ，「うちに」との相異点が鮮明に現れる．

表 37. [心のうちに/心のなかに]の後項の連語「ある」の補語

名詞分類	[心のうちに]	[心のなかに]
抽象名詞	恐怖，不安，怒り，不安感，期待感，気持ち	気持ち(2)，幻滅感，空白感，挫折感，孤独感，悩み，葛藤，感づくもの，ぐらつき，欲，引っかかり
抽象名詞	－	正義(3)，誓い，プラン，概念，イメージ，生き物，自然，傾向性，物語，理念，期待，現実，意識，強制力
場所名詞	－	道
人間名詞	－	女の人

心のうちで/なかで

下の表38に示すように[心のうちで]と[心のなかで]は思考・認識を表す心理動詞「思う」，発話動詞「呼ぶ」以外は重ならない．[心のなかで]は，感情・思考を表す心理動詞，「告げる，読む，呟く，言う，叫ぶ」といった発話動詞，「凍る，崩壊する」といった変化動詞とともに，動的，開放的，可視的な意味特性を表す．

表 38. [心のうちで/心のなかで]と共起する動詞

後項の連語の動詞分類	[心のうちで]	[心のなかで]
心理動詞	いとしむ	愛する，耐える，嫌う，満足する，ため息づく
	思う(5)，受け取る	思う(12)，考える(2)，イメージさせる，祈る(2)，比べる，望む，思量する，願う
		びっくりする，感じる，聞こえる
動作動詞	働く，響き渡る	舌打ちする，ひびく
発話動詞	叫ぶ	告げる，読む，叱る，唱える，呟く(10)，言う(4)，呼ぶ(2)，口ずさむ，叫ぶ(2)，語りかける
変化動詞		引っかかる，凍る，崩壊する，成長する

＜心のうちで＞

(147) 少女の私は，心のうちでうらやましいと，叫んでいたのです． ＜LBe0_00009＞

(소녀인 나는 마음 속으로 부러워라고 외치고 있었어요.)

＜心のなかで＞

(148) a. 自由になったのよ，と彼女は心のなかで呟いた． ＜LBg9_00232＞

(자유가 된거야, 라고 그녀는 마음 속으로 중얼거렸다.)

b.彼女は心のなかで自分を叱りつけていた． ＜LBs9_00113＞

(그녀는 마음 속으로 자신을 책망하고 있었다.)

(147)(148a)のように，「うち」と「なか」は共通して「思う，叫ぶ」といった動詞と共に＜思考・言語活動の空間＞を表すが，共起する用例数には差が見られ，「うち」より「なか」が頻繁に用いられる．また，表38に示すように，「なか」は，「嫌う，感心する，泣く，願う」とともに感情的・心理的活動や動作を行う空間であり，(148b)のように，「争う，叱る」といった動作動詞による＜対象への行動・作用＞の空間を表す．このように，「うち」と「なか」は「心」という抽象的な概念に空間性を与えるという点では共通し，意味用法の重なりが見られるが，感情・心理など静的状態を表す場合は「うち」と共起する傾向があり，感情・心理を表す作用・動作・活動など動的な動きを表す場合は「なか」と共起する傾向がある．

心のうちの/なかの，心のうちが/なかが，心のうちを/なかを

これらの中心語は，その用例数は少ないが，後項の連語との結合関係は密接で，直接的である．

＜心のうちの＞

(149) それから，心のうちの不安を隠そうとするように… ＜OB1X_00173＞

(그리고는, 마음 속의 불안을 감추기라도 하려는 듯…)

＜心のなかの＞

(150) ところが，自分の心のなかの図において，以前とまったく同じイメージを持っていれば，同じ結果になっていくのです． ＜OB5X_00306＞

(그러나, 자신의 마음 속의 그림에서 이전과 아주 똑 같은 이미지를 가지고 있다면, 같은 결과가 나오게 되는 것입니다.)

(149)，(150)では，[心のうちの]は「不安，遠慮」とともに＜私的な心理空間＞を表し，[心のなかの]は「像，図，柱，(煩悩の)種」といった具体物を表す補語とともに＜具体化した抽象空間・存在の空間＞を表す．「先行名詞「心」と結合する「なか」の意味領域は，「うち」に比べて，より具体的，動的，可視的な空間であると言える．

＜心のうちが＞

(151) レイ子の心のうちが少しわかった気がする. ＜OB1X_00173＞
(레이코의 마음 속을 조금 알게 된 것 같다.)

＜心のなかが＞

(152) 心のなかが熱くなり, 急に喜びを感じはじめる. ＜PB57_00202＞
(마음 속이 뜨거워지고, 갑자기 기쁨을 느끼게 된다.)

(151),(152)のように, [心のうちが]は「分かる, 飲み込めない, 知りたい, 浮かばない」と共起して, 他人には見せたくない不可視の私的な心理空間を表し, [心のなかが]は「熱くなる, 空っぽになる」の2例しかないが, 変化が生じたり, 活動のできる動的意味領域を表す.

＜心のうちを＞

(153) 自分の心のうちを見抜かれたことに驚きを覚える. ＜OB1X_00182＞
(내 마음 속을 들켰다는 것에 놀라고 있다.)

＜心のなかを＞

(154) 誰かに心のなかをのぞかれたような気がする. ＜LBm9_00138＞
(누군가에게 마음 속을 들킨 것 같은 느낌이 든다.)

(153)のように[心のうちを]は「察する, 打ち明ける, 見抜く, 覗き込む」と共起して, ＜不可視性, 内密性の私的な心理空間＞を表し, (154)のように[心のなかを]も「見せる, 覗かれる」と共起して「心のうちに」と同様に心理空間を表す.

[心のうち/心のなか＋格助詞]の後項の連語から見る「うち」と「なか」の意味領域

共通する先行名詞「心」を伴う「うち, なか」の連語構成は, それぞれどのような後項の連語と結合し, どのような意味を実現しているかを分析し, 「うち, なか」の意味領域にどのような意味上の重なりとズレが現れるかを見た. その結果, 「叫ぶ, 思う」といった言語活動や思考活動の動詞との連語構成では, 「うち, なか」の混用の様相が見られるほど意味領域が重なる. しかし, 「うち」は「思う, 考える」といった思考・感情を表す心理動詞と共に＜概念的・静的空間, 不可視性の空間, 閉鎖的な空間＞を表すことが多く, 「なか」は心理動詞と動作動詞の両方とも共起して, 心理的活動や感情的な変化等を動的に表すことが多く, ＜動的空間, 可視性の空間, 変化の空間＞を表す.

5.1.3.2. [～人(人の集合)の＋うち/なか＋格助詞]の後項の連語

上記の表34に示したように, [～人(人の集合)のうち/なか+格助詞]の連語構成は, 「～人(以下では人の集合を意味する)のうち」が90例, 「～人のなか」が10例収集され, 「うち」が「なか」より頻繁に用いられることが分かる. 収集された用例を格助詞別にみると, 「～人のうち」の場合は, ノ格が57例て最も多く, カラ格が27例, デ格が6例で, 「～人のなか」は, カラ格が10例得られただけである. 以下では, 収集された用例のうち, 重なりを見せる[～人のうちから]と[～人のなかから]の後項の連語を分析し, その現れ方と

意味特性から「うち」と「なか」の意味領域を取り出す.

表 39. [(～人の集合)のうちから/なかから]と共起する動詞

	先行名詞	後項の連語	後項の連語の意味特性
[～(人)のうちから]	～者, ～人	出る	出現
	(経験を有する)者, 希望者, 職員, 部会, 申請者, 委員, 社員	任命する, 指名する 選択する, 選任する, えり抜ける, 受け入れる	選択 受容
		排除する 騒ぎ出す	排除 発話
[～(人)のなかから]	候補者, 社員, 生徒, 飛行士	排除する, 出てくる	出現
	軍人, 職員, 若い者, 応募者, 参加者	任命する, 選ばれる, 発掘する 育てる, 育てられる	選択 養育, 育成
	会員, 子供ら	もれる, 上がる, 出る	発話

収集された用例から, 人の集合を表す先行名詞をみると,「希望者, 応募者, 社員, 職員」などと, [うちから]と[なかから]に共通する先行名詞が多く,「任命する, 選ぶ, 出る」のように, 後項の連語も共通することが多い. 特徴的なことは, [うちから]は,「(経験を有する)者」といった例のように,「選択の対象となる集団」の＜範囲や資格, 条件を限定したり明示する＞ことが多いのに対し,「なかから」はそのような用例は見当たらず,「軍人, 職員, 若い者]といった範囲の広い不特定の集団を選択の対象とすることが多い. 以下, 例文を見てみよう:

(～人の集団)のうちから/なかから

＜後項の連語が出現動詞である場合＞

＜うちから＞

(155) 新来者のうちから, たちまち病に倒れるものが続出した. ＜PB22_00065＞

(새로 온 사람들 중에 오자마자 병으로 쓰러지는 사람이 속출했다.)

＜なかから＞

(156) 日本, アジア, 世界の指導者は, […]中略)沖縄出身者のなかから出なければならない. ＜OB6X_00064＞

(일본, 아시아, 세계의 지도자는, […]오키나와 출신 중에서 나와야 한다.)

後項の連語の位置に出現動詞を伴う例のうち, (155)の「新来者」は, 範囲と構成要素が明白に限定された集団で, (156)の「沖縄出身者」は, より広い範囲の不特定の構成要素からなる集団である. つまり, 人の集合の範囲を表す[うちから]と[なかから]の意味領域は一部重なる部分があるが, 範囲や

資格・条件が明示される場合は「うち」を用いることになり，「なか」と意味領域は重ならない．

＜後項の連語が選択動詞である例＞

＜うちから＞

(157) a. 広い経験を有する者のうちから，両議院の同意を得て，内閣総理大臣が任命する．
＜OM25_00006＞
(넓은 경험을 가진 자 가운데/중에서, 양 의회의 동의를 받아 내각총리대신이 임명한다.)

b. 三名の候補者のうちから内務大臣が天皇の裁可をえて任命するものとされていた．
＜PB23_00270＞
(세 명의 후보자 가운데/중에서 내무대신이 천황의 재가를 받아 임명하도록 되어 있다.)

c. 委員長及び委員のうちから指名された3人又は5人の裁定委員からなる裁定委員会が…
＜OW6X_00008＞
(위원장 및 위원 중에서 지명된 3인 또는 5인의 재정위원으로 구성된 재정위원회가…)

＜なかから＞

(158) 数多くの応募者のなかから選ばれた人が，いまも大島町の職員となって働いています．
＜PB12_00212＞
(수많은 응모자들 중에서 선발된 사람이 지금도 오시마초 직원이 되어 근무하고 있습니다.)

(159) 人材を海軍の若い軍人のなかから育てようと捜していた． ＜LBa2_00014＞
(인재를 해군의 젊은 군인 중에서 육성하고자 찾고 있었다.)

後項の連語が出現動詞である場合と同様に，選択動詞を伴う例のうち(157)は，先行名詞として，資格や条件が明示された範囲に限定し，集団の数や規模が明確である反面，(158)(159)の先行名詞は，対象となる集団の範囲も広く，その条件や資格などを規定していない．このようなことから，「うち」と「なか」が＜集団の範囲の限定＞という意味領域を表すという点では共通するが，その下位分類として，ある集団の範囲が一定の条件や数量等により強く制限されたり，その集団の構成要素の属性などが明示的に規定・限定される場合は「うち」が用いられ，ある集団の範囲が比較的に広く，明示的に規定されない場合は「なか」が用いられる傾向があり，意味領域のズレが生じる．

＜後項の連語が発話動詞である場合＞

＜なかから＞

(160) そんな声が会員のなかから出てきました. ＜PB53_00537＞
(그런 목소리가 회원 사이에서 나왔습니다.)

(161) 見守る子らのなかから, 驚きと喜びのため息がもれた. ＜PB49_00382＞
(지켜보는 아이들 사이에서 놀라움과 기쁨의 한숨이 새어나왔다.)

(155)～(159)と異なり, (160), (161)は人の集合の範囲を限定するのではなく, 主節の内容を補充する付加的情報を提示するという点で,「うちから」の意味領域とは重ならない. 韓国語訳をみても,「～가운데, 중」といった範囲を表す語彙ではなく, 関係の意味を表す「사이」に訳され, その意味領域の違いが鮮明にあらわれる.

5.1.4.「うち, なか」の意味用法のまとめ

類議の対をなす内部空間名詞「うち」と「なか」について, コーパスから収集した[うち/なか＋格助詞]の連語構成を対象に, 前項の連語と後項の連語の意味特性から「うち, なか」の意味用法を考察した結果を以下にまとめる.

1) コーパスから収集された用例のうち,「なか」が「うち」の約3倍で, 意味領域も格段に広い.
2) 「うち」の先行名詞は, 非実体性名詞が71%で圧倒的に多く, ＜時間, 心理・心情の抽象空間＞を表す. 場所名詞や具体名詞等の実体性名詞と共に＜具体空間＞を表すことはあまりない. 身体名詞や人間名詞など, 実体性名詞と共起する「うち」は, ＜心理空間＞や＜範囲＞を表す. 一方,「なか」と共起する先行名詞は非実体性名詞が51％, 実体性名詞が49％で, 場所名詞や具体名詞とともに具体的な空間を表す. このような＜具体空間＞の意味領域では「うち, なか」の意味領域の重なりはほとんど見られない.
3) 具体名詞, 場所名詞, 身体名詞など, 実体性の高い先行名詞との連語構成の場合,「うち, なか」の意味領域の重なりは見られないが, ＜心理・感情＞, ＜範囲の限定＞を表す連語構成の場合,「うち, なか」は密接な意味領域の重なりを見せ, 混用の傾向が見られる.
しかし,「胸」,「腹」といった身体名詞が抽象化して心理的な空間を表す場合,「うち」は＜より不可視の静的な空間, プライベートな閉ざされた空間＞を表し,「なか」は＜より可視的で動的な空間, 開放性を持つ空間＞を表す.
4) 前項の連語が＜集団, 状況の範囲＞を表し, 後項の連語が出現動詞や選択動詞である場合,「うち」は範囲と構成要素がな明確な場合に用いられるが,「なか」は選択の範囲がより広く, 明確な構成要素の指定はない.
5) 「うち」は, 主に＜抽象空間, 時間, 範囲＞を表し,「なか」は＜具体空間, 抽象空間, 範囲, 状況＞を表す.「うち, なか」は, 心理・心情の抽象空間では一部意味領域の重なりを見せるが, 共起する後項の連語の排他的分布から, 意味用法上の違いを表す.

5.2. 外部空間名詞「そと, おもて」の意味用法の分析

日本語の外部空間名詞の分析に入る前に, 内部空間名詞の場合と同様に既存の辞書における外部空間名詞「そと, おもて」についての辞書の意味記述を見てみよう:

これらの辞書の意味項目の記述と用例をみると,「そと, おもて」の意味上の重なりは,「そと/おもてで遊ぶ」,「そと/おもては寒い」のように外部の空間を表す場合に限るが, 韓国語との対照を念頭に置いて, 類義の対の枠組みを立てて, 意味領域を分析する.

表 40.「そと, おもて」についての辞書の意味記述

辞書名	そと(外)	おもて(表)
【大辞泉】	①特定の仕切られた範囲から出た広い部分. ⇔うち. ㋐一定の区域の外方, 外部. ㋑家・屋敷などの建物の外部の空間. 屋外. 戸外. ②物の表に向いた方. 外面. そとがわ. ③自分の家庭とは別の所. よそ. ④関係者以外の人や場所. 部外者. 他人. よそ. ⑤世の中. 世間. ⑥仏教を「内」というのに対して, 儒教.	①物の二つの面のうち, 主だったほう. 表面. また, 外側. ⇔裏. ②他のものより前に位置すること. 前面. ③畳・草履・下駄などの表面につけるござ. ④衣服の表地. ⇔裏. ⑤うわべ. 外見. ⇔裏. ⑥表向きのこと. おおやけ. 公式. 正式. 」⇔裏. ⑦正面. 家の入り口. ⇔裏. ⑧家の外. 戸外. また, 家の前の通り. ⑨野球で, 各回の, 先攻チームが攻撃する
【広辞苑】	p.11615[そと【外】] ①(平安時代までは普通「と」といった)一定の空間的範囲があるとき, その内側でない部分. 外方. 区域外. ②屋外または屋敷の外部. 戸外. ③自分の属する側または身近なものを「内」というのに対して, その反対のもの. ほか. ④表に現れた部分. 表面. 外面. ⑤〔哲〕意識の外部にある世界. 外界. 客観的世界. 客体性. 超越的世界. ↔うち	p.3026[おもて【表】] (「面おもて」と同源) ❶人の目に立つ方の面(にあるもの). ↔裏. ①表面. 正面. 前面. 人目に立つ面. ②そと. 外面. 外部. ③うわべ. みえ. ④客をもてなす座敷. ⑤和船の船首に近い所. 表の間ま. また, 一番前にある櫓を漕ぐ役. ⑥畳表のこと. ❷向いている方向. その面. ①むき. ②日光がよくあたる側. ③(地名などと合して)そちらのほう. もと. ❸はっきりと人前に示すに足る, 正式・公式のもの. ①おおやけ. ②正式の方. しるしとするもの. ③江戸幕府や大名の屋敷内で, 政治を行う所. また商家で, 店. ↔奥. ❹1対のものの1番目のもの. ↔裏. ①連歌・俳諧の懐紙を二つ折にした第1面. ②野球の試合の各回で, 先攻チームが攻撃に当たる番. ③表千家おもてせんけの略.
【例解】	p.728[そと(外] ①包み覆われているものの外部. 表に現れた	p.164[おもて(表)] ①物事の外側, 前方, 上部に現れた部分. ま

	部分. 外面. ↔うち. ②家, 屋敷などの外部. 戸外. 門外. ↔うち・なか. ③自分の家でない別の所. また, 家庭や社会, 機関等の外部. よそ.	た, 相反する面をもった物事の目につく部分. ↔裏②家などの正面. また, 家の前や外の方. 戸外. ↔裏. ③うわべ. 外見. ④他のものより前に位置すること. 前面. 正面. ⑤第一に重んずべきことや公式, 正式のこと. ⑥畳や下駄などの表面を覆うもの ⑦野球で各回の先攻の攻撃↔裏.

5.2.1.「そと, おもて」の格助詞形と前項の連語の現れ方

「そと, おもて」の意味領域を分析するために, 日本語コーパスから「そと, おもて」の中心語からなる連語構成の用例を収集して, 本研究で中心語とする[空間名詞＋格助詞]構造の前に現れる成分, つまり前項の連語をその統辞的構造にしたがって分類し, そのうち, 類型①と類型③の用例を分析する.

類型①では, 先行名詞は中心語の空間を特定する基準もしくは境界であり, 中心語の空間的領域を制限したり空間的特性を与えるものであり, どのような先行名詞とどの程度の頻度で結合するのか, その共起の様相を調べることで中心語の意味領域を探る. 類型②では, 中心語とともに用いられる連体修飾語は中心語の意味特性を規定すると考えられるが, 外部空間名詞の連語構成の用例はほとんど収集されなかったため, 除外した. 類型③では, 先行名詞による空間的制約がない場合, 中心語は本来の空間名詞としての特徴を鮮明に表すことになると考えられ, その後項の連語との結合関係でどのような意味領域を表すかを記述する.

以下に, 類型①と③の構造と例を示す:

類型①: ノ格の先行名詞＋[そと/おもて＋格助詞]＋後項の要素
部屋の外へ出る. (방 밖으로 나가다.) 【大辞泉】

類型③: φ＋[そと/おもて＋格助詞]＋後項の要素
外へ出て遊ぶ. (밖으로 나가서 놀다.) 【例解】

5.2.1.1. 類型①における「そと/おもて＋格助詞」の先行名詞の分布

まず, ノ格の先行名詞をともなう[そと/おもて＋格助詞]の連語構成の用例を収集して格助詞別に分類し, その分布を下の表41に示す.

先行名詞＋[そと＋格助詞]の用例は1,411例が収集されたが, 先行名詞＋[おもて＋格助詞]の用例は極端に少なく, 47例しか収集されず, 使用頻度に格差が見られる. また, [そと＋格助詞]の用例を格助詞別に分類した結果, ニ格の用例が最も多く, 全体の約44%を占め, 次いで, 「ノ＞デ＞オ＞ヘ＞カラ＞マデ＞ガ」の順となっている. 一方, ノ格の先行名詞を伴う[おもて＋格助詞]の場合もニ格の用例が最

も多く，全体の約51％を占め，次いで，「オ＞ガ＞カラ＞へ＞デ」の順となっている．

表 41. 類型①における[そと/おもて＋格助詞]の出現様相

そと			おもて		
格助詞	先行名詞＋そと＋格助詞		格助詞	先行名詞＋おもて＋格助詞	
	用例数	出現頻度		用例数	出現頻度
に	625	44.3	に	24	51.1
の	233	16.5	の	0	0
で	170	12.1	で	1	2.1
を	145	10.3	を	8	17.0
へ	141	10.0	へ	3	6.4
から	64	4.5	から	5	10.6
まで	17	1.2	まで	0	0
が	16	1.1	が	6	12.8
合計	1411	100.0	合計	47	100.0

「そと」と「おもて」の連語構成を分析する前に，コーパスから収集された「そと＋格助詞」の先行名詞の現れ方を表42に，「おもて＋格助詞」の先行名詞の現れ方を表43に示す．

表 42. 類型①における「そと＋格助詞」の先行名詞の現れ方

名詞類別	そとに	そとの	そとで	そとを	そとへ	そとから	そとまで	そとが	名詞類別合計	名詞類別出現頻度
場所	438	206	144	143	115	50	16	15	1127	79.9
抽象	81	3	10	1	9	3	－	－	107	7.6
具体	48	8	7	－	13	7	1	1	85	6.0
団体	16	3	2	－		－	－	－	21	1.5
身体	17	2		－	1	4	－	－	24	1.7
事項	10	6	6	－	－	－	－	－	22	1.6
人間	8	4	－	1	－	－	－	－	13	0.9
活動	7	－	－	－	－	－	－	－	7	0.5
物質	－	－	1	－	1	－	－	－－	2	0.1
現象	－	－	－	－	2	－	－	－	2	0.1
時間	－	1	－	－	－	－	－	－	1	0.07
用例数	625	233	170	145	141	64	17	16	1411	100.0

表42を見ると，「そと」の先行名詞のうち，場所名詞が圧倒的に多く，全体の約80％を占め，次いで，抽象名詞，具体名詞の順となっている．

表 43. 類型①における「おもて＋格助詞」の先行名詞の現れ方

名詞類別	おもてに	おもての	おもてで	おもてを	おもてへ	おもてから	おもてまで	おもてが	名詞類別合計	名詞類別出現頻度
場所	10	－	1	4	2	4	－	2	23	48.9
抽象	3	－	－	1	1	－	－	－	5	10.6
具体	11	－	－	3	－	1	－	3	18	38.4
身体	－	－	－	－	－	－	－	1	1	2.1
用例数	24	－	2.1	8	3	5	－	6	47	100.0

また，表43を見ると，「おもて」の先行名詞のうち，場所名詞が最も多く，全体の約49％を占め，次いで，具体名詞が約39％，抽象名詞が約11％の順となっている．

上記の表42の「そと＋格助詞」の先行名詞の現れ方を下の図11に，表43の「おもて＋格助詞」の先行名詞の現れ方を下の図12に示す．以下の図11～13に示す数字は，コーパスから収集した用例数を意味する．

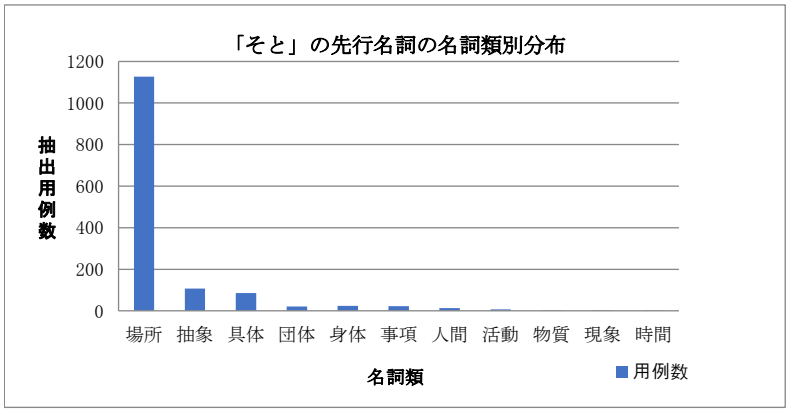

図 11.「そと」の先行名詞の名詞類別分布

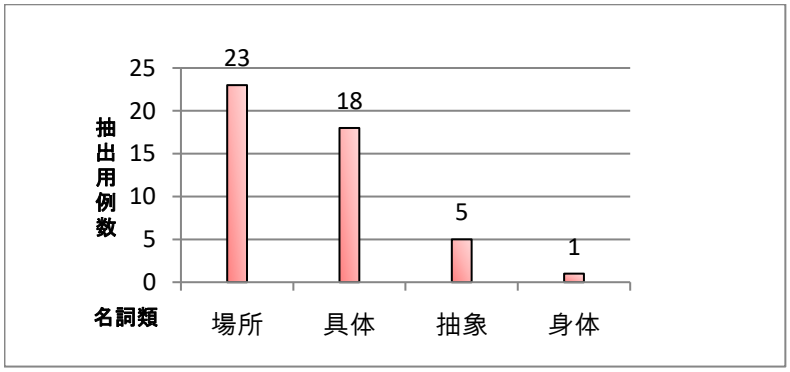

図 12.「おもて」の先行名詞の名詞類別分布

下の図13は表42，43の「そと」と「おもて」の先行名詞の現れ方を比較して示した図で，コーパスから収集された「そと」と「おもて」の用例数の差が大きいということを表わす．

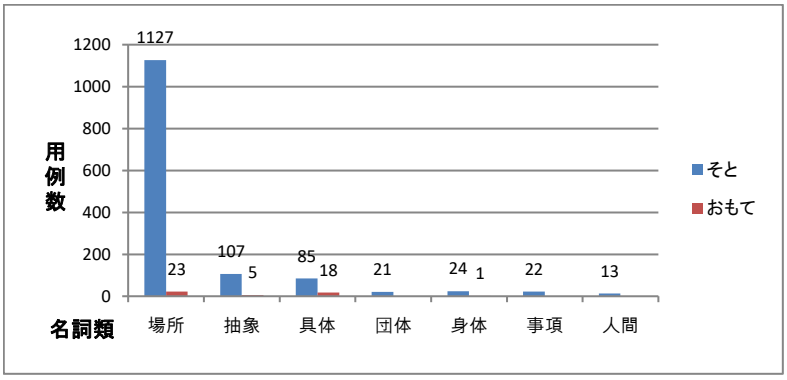

図 13.「そと」と「おもて」の先行名詞の名詞類別分布

上記の表42と表43の「そと」と「おもて」の先行名詞を表44に示す．括弧のなかの数字は出現用例数で，網掛の部分は「そと，おもて」に共通して現れる先行名詞である．「そと」の場合は，出現用例数3以上の名詞を対象としたが，「おもて」の場合は，そもそも用例が極めて少なく，3回以上出現したのは「封筒，水」の2例しかなかったため，47例を全て対象にした．

表 44. 類型①における[そと/おもて＋格助詞]の頻出先行名詞

そと	[そと＋格助詞]の先行名詞	おもて	[おもて＋格助詞]の先行名詞
そとに	窓(96)，ドア(22)，家/部屋/店(各21)，学校(11)，体(9)，建物/門/蚊帳(各8)，エリア/車/自分(各7)，国/事務所(各6)，テント/塀/意識/障子/家庭/町(各5)，事業所/扉/世界/細胞/刑務所/会場(各4)，輪/心/御廉/小屋/社会/戸/言語体系/宇宙/玄関/ケージ/ヨーロッパ/ビル/格子/島(各3)	おもてに	封筒(3)，淵(2)，池(2)，店(2)，兜鉢(2)，板張り/意識/月/薬局/小切屋/沼/社会/歴史/ビル/ハガキ/葉/100円/袋(各1)
そとの	窓(40)，部屋(6)，城壁(3)	おもての	用例なし．
そとで	窓(18)，家(10)，学校(8)，店(5)，ドア/門/車(各4)，家庭/建物/部屋(各3)	おもてで	楽屋(1)
そとが	窓(8)	おもてが	スカーフ(2)，家/光沢紙/池/はね(各1)
そとを	窓(120)，家(4)	おもてを	水(3)，ダリヤ/札/腕/九回/勝手口(各1)
そとへ	窓(11)，ドア(7)，部屋/店(各6)，門(5),家/車/家庭/病室/小屋/町/柵(各3)	おもてへ	世間/ホテル/番屋(各1)
そとから	窓(15)	おもてから	生垣/きもの/妓楼/旅籠宿/広瀬屋(各1)
そとまで	―	おもてまで	―

上記の表44の先行名詞を見ると，「家，店，ビル」といった一部の場所名詞は「そと，おもて」に共通して現れるが，「窓，部屋」といった名詞は，「そと」とは共起するが，「おもて」とは共起しない．また，「淵，池，沼，月」といった自然空間を表す場所名詞は「そと」とは共起せず，「おもて」としか共起しない．また，「そと」と共起する具体名詞は「門，扉，戸」などの境界を表すものや「テント，車」など具体的な空間あるいは場所を表わすものが大部分であるのに対し，「おもの」と共起する具体名詞は「はがき，葉，スカーフ」など具体物を表す．このようなことから，どちらか一方としか共起しない先行名詞の意味特性を分析して，それらの名詞と共起する「そと」または「おもて」の意味領域を記述することができる．

一方，「家，店，意識，社会，ビル」といった一部の名詞は「そと，おもて」の両方と共起することから，このような共通の先行名詞を伴う「そと，おもて」の連語構成が後項の連語と共にどのようにな意味を実現するかを分析し，「そと，おもて」の意味領域の重なる部分と重ならない部分を記述する．

5.2.2. 類型①先行名詞を伴う連語構成の前項・後項の連語

以下では，上記の表44の先行名詞とともに「そと，おもて」の中心語がどのよう意味を表すかを，格助詞別に検討していく．

5.2.2.1. 前項の連語の先行名詞の分析

［先行名詞＋そとに/おもてに］

＜先行名詞＋そとに＞

［先行名詞＋そとに］の場合，先行名詞は場所名詞＞抽象名詞＞具体名詞の順に現れ，特に「窓，ドア，建物」といった場所名詞が約80％と最も多い．そのうち，場所名詞や具体名詞と「そとに」の連語構成は，先行名詞が指す場所空間や具体空間に含まれないそとの空間，対応する空間を指す．これらの先行名詞は空間的意味特性によってさらに細分類することができ，コーパスから収集した例文を分析し，その意味特性をまとめると，次の通り：

第一に，「窓，ドア，扉，障子，戸」といった平面を表す名詞が境界物となり，連続する内部空間と外部空間を仕切る場合である．これらの名詞は，(162a，b)のように内部と外部の境界となり，(162a)の「そと」は，「ドア」という境界物を通して「出ていく」とすぐに広がる＜開放・移動・疎通の空間＞を表す．また，「そとに」と共起する先行名詞のうち約20%を占める「窓」は，(162b)のように，内部と外部の境界となり，「窓」を通して見えてくる「そと」の空間は＜可視的空間＞であると言え，「窓」と直接接触している空間というより，風景や背景など，視覚的にある程度距離を持つ＜非接触の空間＞を表すことが多い．

第二に，「建物，部屋」といった立体を表す名詞が境界物となる場合である．「建物，部屋」は，(162c)のように壁によって取り囲まれた＜閉ざされた空間＞であり，「建物，部屋」そのものが一つの境界物となり，その内部空間と外部空間を区切ることもできる．

第三に，「学校，刑務所，事務所」といった名詞は，＜具体物の空間＞からなる特定の場所を表すこともあるが，場合によっては，ある特定の活動を行う団体や組織を意味する．(162d)の「そと」は，具体的な

建物の外部空間を表すのではなく，団体や組織から離れた＜抽象的な空間，環境＞という意味に拡大される．

場所名詞に続いて，「意識，心」といった抽象名詞が13％を占め，その次は「車，テント」といった立体の具体物名詞が8％を占める．(162e)の「そと」は「意識」という抽象名詞からなる抽象空間と対立する具体的な空間を表わす．

(162) a. 淳子ちゃんはニヤッと笑い、バッグから携帯電話を取りだしながらドアのそとに出ていった．＜LBo9_00214＞
(준코는 미소를 지으며 백에서 휴대전화를 꺼내면서 방문 밖으로 나갔다.)

b. 照りつける太陽は今も高く，窓のそとに見える校庭の景色にも変わりはない．
＜LBi9_00187＞
(내리쬐는 태양은 지금도 높고, 창 밖에 보이는 교정의 풍경도 변함이 없다.)

c. 建物のそとに出ると，明るい光と，街の騒音に包まれた．＜LBd9_00050＞
(건물 밖으로 나오자, 밝은 빛과 거리의 소음에 휩싸였다.)

d. その原因を単に学校のそとに求めればすむというのでもない．＜LBj3_00154＞
(그 원인을 단지 학교 밖에서 찾으면 된다는 것도 아니다.)

e. 人間の意識のそとにある物質世界の存在を否定し，五感による知覚は神によってひきおこされるとした．＜LBl9_00080＞
(인간의 의식 밖에 있는 물질 세계의 존재를 부정하고, 오감에 의한 지각은 신에 의해 생겨난다고 하였다.)

＜先行名詞＋おもてに＞

［先行名詞＋おもてに］の場合，先行名詞は具体＞場所＞抽象名詞の順に現れ，そのうち，具体名詞が最も多く，約46%を占める．(163a)のように，「封筒，ハガキ，葉」といった平面の具体名詞と共に＜主となる面，表面＞を表すだけでなく，三次元の具体物も含めて，その具体物の＜主たる面あるいは表面＞を指す．具体名詞に続いて場所名詞が約42%を占めるが，そのうち，「池，淵，沼」といった自然物名詞とともに用いられる「おもて」は，(163b)のように，自然物，とりわけ水面や月面などの表面，平面的空間を表すと．一方，「店，ビル」といった場所名詞と共に用いられる「おもて」は，どのような後項の連語を伴うかによって，＜店を出るとすぐに繋がる外部の空間＞という立体の具体空間を表すこともあれば，(163c)のように＜店の前面＞という平面的空間を表すこともある．

また，「社会，歴史」といった抽象名詞と「おもて」が共起する場合は，(163d)のように＜社会の前面＞という抽象的意味を表す．

(163) a.封筒のおもてに第二次試験出欠届在中と書いたほうがいいですか. ＜OC14_05948＞
(봉투 겉에 제2차시험 출결신고 재중이라고 쓰는 편이 좋을까요?)

b.波のおもてに, きらきらと光がきらめいている. ＜PB39_00229＞
(파도 표면에, 반짝반짝 빛이 반짝이고 있다.)

c.半田は, 缶ビールを手に薬局のおもてにある呼び鈴を押し, ガラス戸を開けて中に首を入れた. ＜OB5X_00115＞
(한다는 캔맥주를 들고 약국 앞에 있는 벨을 누르고, 유리문을 열고 안으로 머리를 넣었다.)

d.その間, 益次郎は歴史のおもてに立つことなく, ひたすらここで兵学者として, 士官の教育にあたる毎日を過ごしていた. ＜LBn9_00252＞
(그동안 마스지로는 역사의 전면에 나서는 일 없이 줄곧 여기에서 군사학자로서 사관의 교육에 종사하는 나날을 보내고 있었다.)

[先行名詞＋そとの/おもての]

＜先行名詞＋そとの＞

[先行名詞＋そとの]の場合, 先行名詞は「窓, 城壁, 部屋」といった場所名詞が全体の約88%を占める. その中でも「窓」といった平面を表す名詞の割合が圧倒的に高く, その場合, 「窓」は内部空間と外部空間の境界となり, 「そと」の空間は, 例文(164)のように, 「闇, 雨, 夕焼け」といった自然現象の空間であったり, 「風景, 景色」など視覚的背景の空間, 「集会, 工事」など活動の空間を表す.

(164) 窓のそとの闇もとっぷりと深まったころ, 彼はソファにへばりついているわたしにそう声をかけた. ＜LBf9_00121＞
(창문 밖의 어둠도 완전히 깊어졌을 무렵, 그는 소파에 딱 들러붙어 있는 나에게 그렇게 말을 걸었다.)

＜先行名詞＋おもての＞

それに対し, [先行名詞＋おもての]の用例は得られなかった.

[先行名詞＋そとで/おもてで]

＜先行名詞＋そとで＞

[先行名詞＋そとで]の場合, 先行名詞は場所名詞が85%を占め, その中でも, (165a)のように「窓, ドア」といった平面を表す場所名詞が境界物として用いられ, これらの先行名詞と共起し, 「そと」が, ＜視

覚，聴覚，活動，自然現象の外部空間＞を表すことが圧倒的に多い．続いて(165b)のように，「家，学校」などとともに用いられ，場合によって具体的な外部空間を表したり，抽象的な外部空間を表したり，さらに，(165c)のように，「家庭，制度」といった抽象名詞とともに用いられ，「家庭」や「制度」という範囲を離れた抽象的空間を表す場合が6%，「車」など具体名詞が4%，「作品」といった事柄名詞が4%を占める．事柄名詞の場合は，具体物の作品を表すこともあれば，作品の内容という抽象的空間を表すこともある．

(165) a.昼休みに，この小学校の佐田先生という人がする話を，窓のそとで聞くのが楽しみでした．
＜PB54_00203＞
(점심 시간에 이 소학교의 사다 선생님이라는 사람이 하는 이야기를 창 밖에서 듣는 것이 즐거움이었습니다.)

b.家のそとでインターネットを使いたいのですが，どうしたら良いのでしょうか？
＜OC02_00139＞
(집 밖에서 인터넷을 사용하고 싶은데 어떻게 하면 됩니까?)

c.むしろ，確定拠出年金の制度のそとで，通常の貯蓄商品を購入して資産運用したほうがはるかに有利となるものと考えている．＜PB23_00153＞
(오히려 확정거출연금제도 밖에서 통상적인 저축상품을 구입하여 자산운용 하는 편이 훨씬 유리할 것으로 생각한다.)

＜先行名詞＋おもてで＞

それに対し，[先行名詞＋おもてで]の場合は，用例が1例しかなく，場所名詞である「楽屋」の前の限定された空間を表す．

[先行名詞＋そとが/おもてが]

[先行名詞＋そとが]の場合，コーパスから収集された15例の先行名詞を見ると，「窓」が8例，「門，ドア，垣」といった平面の具体物名詞で，内部空間と外部空間の境界となり，その境界の外の空間は立体空間で，存在，変化の空間を表す．

それに対し，[先行名詞＋おもてが]の場合，先行名詞は「スカーフ，光沢紙」といった平面の具体物名詞が3例，「翼」といった動物の身体部位を表す名詞が1例，「池」といった自然空間を表す名詞が1例，「家」といった具体空間を表す名詞が1例収集された．具体空間である「池」は「おもて」とともに用いられ，その立体空間の一部分である池の表面，平面空間を表すが，「家」は「おもて」とともに用いられ，立体空間を表す．

[先行名詞＋そとを/おもてを]

［先行名詞＋そとを］の場合，コーパスから収集された145例の先行名詞を見ると，場所名詞が99％を占める．その中でも，「窓」が120例で，ほかに「戸，門，扉，垣根」といった境界を表す平面の場所名詞が見られる．

それに対し，［先行名詞＋おもてを］の場合，先行名詞は「水」といった自然物の場所名詞が3例，「勝手口」という場所名詞が1例収集されただけで，両方とも立体的場所ではなく，平面的境界物を表す．また，具体名詞「ダリヤ，札」と身体名詞「腕」が1例ずつ収集されたが，これらの名詞も「おもてを」と共に平面を表す．

［先行名詞＋そとへ/おもてへ］

［先行名詞＋そとへ］の場合，先行名詞は「窓，ドア」と言った平面の具体空間，「部屋，店」といった立体の場所名詞が82％を占める．続いて，「ケージ，車」といった具体名詞が9％，「家庭，文明」といった抽象名詞が6％である．

それに対し，［先行名詞＋おもてへ］の場合は，「ホテル，番屋」といった場所名詞と「世間」といった抽象名詞が1例ずつ収集され，平面を表すことはなく，立体の空間を表す．

［先行名詞＋そとから/おもてから］

＜先行名詞＋そとから＞

［先行名詞＋そとから］の場合，収集した用例のうち場所名詞が最も多く，約78％を占める．「窓，ドア」といった境界を表す場所名詞のほかに「家，部屋」といった立体の場所名詞と共起することが多い．特徴的なのは，(166)のように，「海，地球」といった自然物の場所名詞が「そとから」と共起し，自然物の内部空間に対する外部空間を指すのではなく，「海，地球」という自然物が空間的範囲を区切る境界物となることである．次いで，「袋，寝巻き，画面」といった具体名詞が11％，「体，身体」といった身体名詞が6%，「世界，幸楽」といった抽象名詞が5％を占める．

(166) 島原湾から有明海にかけては，年に何度か，新天地を求めて海のそとから人々がやってくる．＜LBk9_00257＞
(시마바라만부터 아리아케해에 걸쳐서는, 일년에 몇 번인가 신천지를 찾아 바다 밖에서 사람들이 찾아온다.)

＜先行名詞＋おもてから＞

それに対し，［先行名詞＋おもてから］の場合，先行名詞は「妓楼，生垣，旅籠宿，広瀬屋」といった場所名詞が大部分で，このような「おもて」は，その場所や建物の前面の立体空間を表わす．

［先行名詞＋そとまで/おもてまで］

［先行名詞＋そとまで］の場合は場所名詞が94%を占めており，そのうち「窓，戸」といった境界を表す名詞が約半分で，その境界を通って「そと」の空間に移動したり影響を及ぼすことを意味する．それに対し，［先行名詞＋おもてまで］の用例は収集されなかったが，これは到着点という空間的領域を持たない「おもて」の空間的限界の現れであると考えられる．

これまでの[そと+格助詞]と[おもて＋格助詞] の先行名詞の分析の結果から，「そと」と「おもて」の空間的意味領域をまとめ，表45 に示す:

表 45. 前項の連語と「そと，おもて」の空間的意味領域

	そと	おもて
1)	境界物となる場所名詞，立体・平面の具体名詞を伴う．	境界物となる場所名詞を伴わない．
2)	項目1)の先行名詞は「うち」と「そと」の境界であるが，「そと」への移動の通路でもあり，「そと」は＜開放・疎通の空間＞で，「窓」と頻繁に共起し，＜可視的空間＞の意味を表す．	「おもて」は，平面の具体物の表面である場合，中が見えない＜不可視空間＞を表す．
3)	立体の場所名詞のうち，「部屋，病室」といった区画された空間は「そと」と「うち」が対立し，「そと」の範囲は限定されない．	「家，店，ビル」といった場所名詞は「おもて」とも共起し，立体空間を表すが，その建物や場所の前の限られた空間を表す．
4)	「そと，おもて」は両方とも自然物の場所名詞と結合するが，「そと」は立体空間を表す．	「おもて」は「月，水，池」といった自然物空間を立体ではなく，平面化する．
5)	「そと」は現象名詞とともに自然現象の生起・状態変化を伴う．	「おもて」は現象名詞を伴わない．
6)	「そと」は立体物の外部の状態を表すことができる．	「おもて」は二次元・平面の具体名詞とともに外側・表面を表す．
7)	「うち」と対立するが，方向を指定しない．	「うち」と対立し，正面，前面の方向を指定する．
8)	抽象的な意味の「そと」は＜否定的・不満＞の空間を表す．	「おもて」は，「社会・歴史」といった概念的な抽象空間を表す場合は，＜肯定的＞意味を表す．

5.2.2.2. 共通の先行名詞を伴う「そと，おもて」の意味用法

表44から，「そと，おもて」の両方と共起する先行名詞を取り出して示す．「そと，おもて」の用例数の格差も大きく，「おもて」の用例がいずれも一例しかないため資料としての限界はあるが，限られた中で分析を進めることにする．括弧の中の数字は収集された用例数（「そと」の用例数/「おもて」の用例数）である:

場所名詞　「家(38/1)，店(32/2)，ビル(3/1)」
抽象名詞　「意識(5/1)，社会(3/1)」

以下では，類型①のうち，共通の先行名詞を伴う「そと，おもて」の連語構成の後項の連語を照らし合わせ，「そと，おもて」の意味領域の重なりとズレを探る．以下では，後項の連語の位置に現れた動詞を，意味による動詞分類にしたがって＜移動動詞，存在動詞，活動動詞，状態動詞，知覚動詞＞に分類したうえで，「そと，おもて」の意味領域を記述する．

共通の先行名詞が場所名詞であるもの

(167) 店のそとに出ると，なおも冷たい潮風が吹いていた．　＜LBn2_00069＞
(가게 밖으로 나오자, 아직도 차가운 바닷바람이 불고 있었다.)

(168) この店のおもてに出て，左に行ったすぐの横町に…　＜LBt9_00187＞
(이 가게 앞으로 나가서, 왼쪽으로 가서 바로 그 골목에…)

(167)，(168)は前項の連語と後行の連語が共通しているため，弁別の基準となる情報はない．しかし，(167)の「そと」は「うち」に対する外部の空間で，特に方向や位置等は指定していないのに対して，(168)の「おもて」は，店の外部空間の中でも店の正面の方に限定される．

(169) a. 家のおもてが俄かに騒がしくなった．＜OB1X_00098＞
(집 앞이 갑자기 소란스러워졌다.)

b. 家のおもてにはJR片町線が通っていたが，1時間に1本しかない単線だった．
＜PB30_00008＞
(집 앞에는 JR 가타마치선이 지나고 있었지만 1시간에 한 번밖에 없는 단선이었다.)

(170) a. そのうち門のそとが騒がしくなった．＜LBf9_00111＞
(그러는 사이 문 밖이 소란스러워졌다.)

b. 手には椅子の脚部が握られている．部屋のそとが騒がしくなった．＜PB19_00258＞
(손에는 의자 다리를 쥐고 있다. 방 밖이 소란스러워졌다.)

(169a)の「家のおもて」は開かれた三次元の空間で，視覚的・聴覚的に制限がない．また，(169b)の「おもて」は「家のそと」と違って，方向と範囲の制限を含む空間で，外から見て家の前面を表し，限られた範囲の空間である．一方，(169a)と (170a, b)はいずれも「騒がしくなる」という後項の連語を伴うが，「家」は「おもて」と「そと」のとちらとも共起するのに対し，「門」と「部屋」は「おもて」とは共起しない．このようなこと

から,「家, 部屋, 門」のいずれとも共起する「そと」の意味領域は, 方向や範囲を指定しない, ある内部空間に対する外部空間全体を意味すると見ることができる.

共通の先行名詞が抽象名詞であるもの

(171) 人間の意識のそとにある物質世界の存在を否定し, 五感による知覚は神によって引き起こされるとした. ＜LBl9_00080＞
(사람의 의식 밖에 있는 물질세계의 존재를 부정하고, 오감에 의한 지각은 신에 의해 생겨난다고 하였다.)

(172) ちょこちょこと意識のおもてに顔を出し, その存在を主張する. ＜LBs1_00017＞
(이따금 의식 밖으로 얼굴을 내밀고, 그 존재를 주장한다.)

(173) 出家修行の魅力というのはなにかと言うと, この社会のそとに出るということです. ＜LBk3_00072＞
(출가 수행의 매력이란 무엇인가 하면, 이 사회의 밖으로 나간다는 것입니다.)

(174) 老いた人は, 自分の知識と知恵を, 社会のおもてに出ている人に貸すだけでなく, 代わりに祈り役を引き受けることが喜びともなるのです. ＜LBq1_00043＞
(늙은 사람은, 자신의 지식과 지혜를 사회의 전면에 나와 있는 사람에게 빌려주기만 하는 것이 아니라, 대신 기도하는 역할을 받아들이는 것이 기쁨이 되기도 합니다)

(171)の「意識のそと」は「物質世界」が存在する存在の空間を表すのに対し, (172)の「意識のおもて」は存在の空間ではなく, 出現の空間を表す. 抽象的な空間においては「そと, おもて」の意味領域にズレがあることを示し, 意味領域は異なる. (171)の「そと」は「意識」という抽象空間から離れた外部の空間で,「意識」に属しない空間であるのに対し, (172)の「おもて」は「意識」という抽象空間の外側に向いた面であり,「意識」の表面であり, 二次元の平面的空間である. また, (173)の「そと」は「社会」から外れた別の空間で, (174)の「おもて」は「社会」に属する空間であり, しかも「社会」のなかでもよく目につく中心的位置を表す. このように「そと, おもて」は具体空間においては意味領域の部分的重なりを見せるが,「意識, 社会」といった抽象的空間においては意味領域の重なりは見当たらず, ズレが大きくなる.

5.2.3. 類型③前項の連語を伴わない連語構成の後項の連語

先行名詞を伴わない類型③の用例は,「そと」が649例,「おもて」が111例収集された. 先行名詞を伴う類型①に比べ,「おもて」の用例が多く現れる. 以下では, 収集された用例を中心語の格助詞によって分類したうえで,「そと, おもて」と後項の連語との結合関係を通して「そと, おもて」の意味領域を記述する.

Ø＋[そとに/おもてに]

先行名詞を伴わない「そとに」の用例は267例で，後項の連語は「出る(48%)，出す(4.5%)」といった移動動詞が最も多く，存在を表す「いる，ある」が6%，「見る，目をむける」といった知覚動詞が5%を占める．先行名詞を伴わない「おもてに」の用例は65例で，そのうち「出る(25%)，出す(16%)」といった移動動詞が最も多い．特徴的なことは，「そと」の場合は自動詞の「出る」が大部分であるのに対して，「おもて」の場合は「出る」と「出す」が大差を見せない．

(175) そとに出ると，初夏の雨に街は白く煙っていた． ＜LBo5_00002＞
(밖으로 나가자 초여름 비에 거리는 뽀얗게 보였다.)

(176) おもてに出ると，空気に湿り気が感じられた． ＜OB3X_00267＞
(밖으로 나가자 공기에 물기가 느껴졌다.)

(177) そう思いながら私はそとに出る支度をした． ＜OB6X_00256＞
(그렇게 생각하면서 나는 밖에 나갈 준비를 했다.)

(178) そのことがおもてに出ることはまことにまずい． ＜OM12_00001＞
(그 일이 밖으로 드러나는 것은 정말 곤란하다.)

(179) 膿をそとに出さずに表面に薬を塗っても，炎症は悪化するばかりだ．＜PB33_00198＞
(고름을 밖으로 빼내지 않고 표면에 약만 바르면 염증은 악화되기만 한다.)

(180) 感情をおもてに出すのではなく，ある程度は制御するのが大人である．＜LBt1_00015＞
(감정을 겉으로 드러내는 것이 아니라, 어느 정도는 제어하는 것이 어른이다.)

(181) ずっと内に秘めてきた本音をそとに出すのは容易なことではない．＜PB49_00353＞
(계속 속에 숨겨왔던 본심을 밖으로 드러내는 것은 쉬운 일이 아니다.)

(175)，(176)のように「そと，おもて」が移動動詞「出る」と共起する連語構成では，両方とも具体的な外部空間を表す．(177)の「そと」は物理的空間ではなく，家の外あるいは外部の社会活動等の場を意味する抽象的空間で，「おもて」とは重ならない．(178)の「おもて」は，外部の世界に向かって自分を見せるための抽象的空間で，他人による評価を前提とする空間である．そのため，「おもてに出す」という行為は困難をもたらす行為である．一方，(179)の「そとに出す」行為の対象物は「膿，熱，力」や「人，旗，畳，洗濯物」といった実体性名詞が大部分であるのに対して，(180)の「おもてに出す」行為の対象物は「感情」で，

「悲しみ，苦しみ，わだかまり，心，気持」といった非実体性の抽象名詞，特に他人には見せたくない心理や感情を表す名詞が多い．このようなことから，「そと」は具体的・客観的空間を，「おもて」は抽象的・主観的空間を表す傾向が高いと言える．

(181)では，外部の世界に向かって「本音」を表す行為が容易でないということ，「そと」という外部空間に向かって自分の意志で「本音，不満」などを表す空間であり，自分に属する空間ではない．それに対し，(180)の「おもて」は，自分に属する空間で，自分で「感情」などを制御すべき空間であり，その裏に自分の本当の心理や感情を隠す空間である．コーパスから収集した用例を検討した結果では，(180)のような抽象的感情，否定的な感情などを表す場合は，「おもて」を用いることが多い．

Ø＋[そとで/おもてで]

先行名詞を伴わない「そとで」の用例は94例で，「働く，遊ぶ，会う，食べる」といった活動動詞が21％で，そのうち「食べる」といった飲食動詞が17％を占める．続いて「待つ」が12％，「気配がする，聞こえる，響く」といった知覚動詞の順に共起する．「気配がする，聞こえる，響く」等は外の空間で発生した音や動きが内部空間に伝わってくることを意味し，「そと」の＜生起・活動・疎通の空間＞の特徴を表す．また，「そと」は「働く，遊ぶ，会う，食べる」といった動詞とともに物理的空間を表すこともでき，社会的活動の場としての抽象的空間を表す．それに対し，「おもて」は収集された13の用例のうち，「音がする，声がする」といった聴覚関連の動詞が46％に上り，「待つ」という活動動詞が23％を占める．そのようなことから，「おもて」は＜生起・活動・疎通＞の空間であり，「そと」と意味領域が重なる部分があると見られる．

(182) 出入口が一つしかないことをウェイターに確認して，そとで待つことにした．＜LBo9_00071＞
(출입구가 하나 밖에 없는 것을 웨이터에게 확인하고，밖에서 기다리기로 했다.)

(183)「近くにいるらしい．おもてで待とう.」パブの外に出た．＜LBe9_00204＞
(‘가까이 있는 것 같아. 앞에서 기다리자.’ 술집 밖으로 나갔다.)

(182)の「そと」は特に空間の範囲を限定していないが，(183)の「おもて」は「パブ」から離れていない，限定された範囲内の空間で，「そと」の空間的範囲内の一部分である．

Ø＋[そとが/おもてが]

先行名詞を伴わない「そとが」の用例は13例で，「見える，明るくなる，暗くなる」といった視覚動詞，視覚的変化を表す動詞が69％を占める．ほかにも「寒い，騒がしい」といった状態を表す動詞との結合が目立つ．

それに対し，先行名詞を伴わない「おもてが」の用例は「気になる，騒がしくなる」の2例しかなく，視覚動詞や視覚的変化を表す動詞との結合は見当たらない．

(184) そとがやけに騒がしいから，そとに出てみたんだ．　＜LBk9_00122＞
(밖이 몹시 시끄러워서 밖에 나가보았어.)

(185) そのとき，おもてが騒がしくなった．　＜OB6X_00201＞
(그 때，밖이 시끄러워졌다.)

(186) 夫も一緒に出て行って，そとが明るくなると帰って来るのだ．　＜LBt9_00214＞
(남편도 같이 나가서 밖이 밝아지면 돌아오는 거야)

(187) おもてはそろそろ薄暗くなってきている．　＜LBk9_00179＞
(밖은 슬슬 어두워지지 시작했다.)

(184)の「そと」と(185)の「おもて」はいずれも聴覚的変化を伴う立体空間であり，意味領域の重なりが見られる．また，(186)の「そと」と(187)の「おもて」はどちらとも視覚的変化を表す動詞と共起し，意味領域の重なりが見れれるが，使用頻度の面では，「そと」の出現頻度が高く，「おもて」は(187)の用例以外は見当たらない．

Ø＋[そとを/おもてを]

先行名詞を伴わない「そとを」の用例は40例で，後項の連語としては「見る，のぞく，ながめる」といった視覚動詞が48%，「通る，歩く，散歩する」といった移動動詞が43%を占める．それに対し，「おもてを」の用例は7例しかなく，そのうち「通る」が2例で，ほかには「見せる，編む，使う，撃つ，買う」と結合する．

(188) 天気のいい日はそとを歩くなど変化をつければ持続しやすいでしょう．＜OC09_02817＞
(날씨가 좋은 날은 밖에서 걷거나 하는 변화를 주면 지속하기 쉬울 것이다.)

(189) おもてを通ると，要するにショーウインドーみたいなところにちゃんとエイズのPRをしてあるわけなんです．＜OM31_00001＞
(앞을 지나가면，요컨대 쇼윈도우 같은 곳에 꼭 에이즈 광고를 하고 있거든요.)

(188)の「そと」は，「歩く」動作が行われる具体空間で，(189)の「おもて」も「通る」と結合して，移動の空間を表す．このとき，「そと」は「通る」ことも「歩く」こともできる空間，即ち，＜移動と通過＞のできる空間であるのに対し，(189)の「おもて」は「通る」との結合は自然であるが，「歩く，散歩する」といった範囲の広い移動動詞との結合は不自然で，「そと」の意味領域とは異なる，範囲を限定する空間的特性を表す．

Ø＋[そとへ/おもてへ]

先行名詞を伴わない「そとへ」の用例は90例で，そのうち，「出る，飛び出す」と「出かける，行く」といった移動動詞が82%を占める．一方，「おもてへ」の場合は，12の用例のうち80%が「出る，飛び出す」といった移動動詞と結合し，「そとへ」と重なる部分があるが，「出かける，行く」といった動詞との結合は不自然で，「そと」とのズレが見られる．

(190) 一通り見終わると，みんなはそとへ出て，まわりの家を見て歩いた．＜LBg9_00022＞
(한 번 다 둘러보고 다들 밖으로 나가 주변의 집을 돌아보았다)

(191) おもてへ出ると，陸奥湾についても説明をしてくれた． ＜PB36_00133＞
(밖으로 나오자 무쯔완에 대해서도 설명을 해주었다)

(190)，(191)の「そとへ」と「おもてへ」の用例では後項の連語も共通し，方向を表すへ格と結合する場合，「そと，おもて」の意味領域の重なりは大きくなると見られる．

Ø＋[そとから/おもてから]

先行名詞を伴わない「そとから」の用例は145例で，「見る」といった知覚動詞が最も多く，37%を占める．続いて「入る，帰る，侵入する，吹き込む」といった移動動詞が13%，「(鍵を)かける，押し付ける，射し込む」といった取付動詞が7%を占める．「おもてから」の用例は10例で，「入る，洩れてくる」といった移動動詞が37%，「見る」といった知覚動詞が36%を占め，後項の連語も共通することが多い．

(192) そとから見ると，硝子の深い青みがよりいっそう深く見える． ＜LBs9_00084＞
(밖에서 보면, 유리의 깊은 푸른색이 더 깊어 보인다.)

(193) 磐梯山はおもてから見たのと裏側から見たのとは，趣がちがう．＜LBf2_00055＞
(반다이 산은 앞에서 보는 것과 뒤에서 보는 것이 정취가 다르다.)

(194) おもてから見ただけでは，昔の墓跡は分からない．＜LBc2_00041＞
(겉으로 보기만해서는 옛날 무덤 자리였는지 알 수 없다.)

(192)，(193)，(194)の「そと，おもて」の連語構成だけでは「そと，おもて」の意味領域を区別することが難しく，文の他の構成要素との意味関係を見なければならない．(192)の「そと」は境界となる硝子を取り囲む外部空間を表し，方向の制限はないが，(193)の「おもて」は「裏側」の反対側を意味し，空間的範囲は，ある物体の表の面，表面側に限定される．(193)と(194)の「おもて」も連語構成のレベルでは意味領

域の違いが分からないが，主節との意味関係をから，(194)の「おもて」は(193)と違って，前面あるいは正面の意味ではなく外観という意味であることが分かる．

(195) そとから入ってきた光の波は，これらの粒子に当って散乱される．＜LBf4_00004＞
(밖에서 들어온 빛의 파도는 이들 입자에 닿아 퍼져나간다)

(196) おもてから入ると地下一階の感じだが，裏庭の方から見ると，そっちが一階となる．
＜OB6X_00067＞
(앞쪽으로 들어가면 지하 1층 같지만, 뒤쪽 정원에서 보면 그쪽이 1층이 된다.)

(197) ふたりの隊員が，土間の板戸を蹴り飛ばした．そとから雪と風が吹きこんできた．
＜LBn9_00067＞
(두 대원이 봉당의 판자문을 걷어찼다. 밖에서 눈과 바람이 들이쳤다.)

(195)，(196)においても，後項の動詞だけでは「そと」と「おもて」の意味領域の重なりやズレを取り出すことが難しく，修飾される名詞，補語や主節との関係などから「そと」と「おもて」の意味領域を取り出すことができる．(195)，(197)の「そと」は「雪，風，光，炎の光」といった自然現象が存在したり発生する空間で，場所の範囲と方向が限定される(196)の「おもて」とは空間的性質を異にする．

5.2.4.「そと，おもて」の意味領域のまとめ

これまで後項の連語との結合関係を通して取り出された「そと，おもて」の意味領域を，次のように表46に示す．

表 46. 後項の連語と「そと，おもて」の空間的意味領域

	そと	おもて
1)	ある場所や具体物でできた立体の境界物や平面的境界から離れた空間.	ある場所や具体物の境界面に直接接した空間で，「そと」の領域の一部となる空間.
2)	方向と範囲の制限はない.	正面や事物の主たる面を表し，方向と範囲の制限がある.
3)	移動・通過・開かれた空間.	限定された範囲の移動・通過.
4)	視覚的・聴覚的空間.	視覚的・聴覚的空間・触覚的空間.
5)	抽象的空間を表す場合は，先行名詞の領域から完全に離れた別の空間.	抽象的空間を表す場合は，先行名詞の領域内の空間で，その空間の中でも中心的・正面の空間.
6)	実体性名詞を補語とする具体的・客観的空間.	心理・感情を表す非実体名詞を補語とする抽象的・主観的空間.

第6章　韓国語と日本語の内外空間名詞の意味用法の対照

第4章と第5章では，韓国語と日本語の内外空間名詞「안，속，밖，겉」と「うち，なか，そと，おもて」について，これらの内外空間名詞がどのような語彙とよく共に用いられ，どのような意味を表すかを，実際に言語使用の場で用いられた用例を対象に実証的に考察し，内外空間名詞の多義の意味領域を記述し，さらに類義関係と対義関係を考察し，語彙的意味の広がりについて全体像を捉えた．

第6章では，韓国語と日本語の内外空間名詞の意味領域を分析した結果得られた言語事実を基に，韓国語と日本語の内外空間名詞を対照し，その対応関係，類似点と相異点を明らかにする．二段階に分けて検討を行う．まず，韓日両言語を対照する際は，ある空間を表す概念が韓国語ではどう表現されるかという点だけではなく，どう表現されないかという点にも注目しつつ，日本語との対応関係に現れる一致とズレを綿密に分析して記述する．次に，その結果を基に，個別の言語の分析だけでは見えてこなかった言語事実や言語的特性はないか，韓日両言語の内外空間名詞の意味領域の全体的な構造における類似点と相異点を明らかにする．

韓国語と日本語の内外空間名詞を対照する方法としては，これまでの通り，空間名詞と格助詞からなる連語構成を中心に照らし合わせることにする．

まず，中心語の前項の連語の統辞的構造によって分類した類型①から③の連語構成を，中心語と共起する前項の連語となる先行名詞，後項の連語の意味特性によって，＜具体空間，抽象空間，範囲，状況，時間＞の範疇に分類したうえで，韓国語と日本語の内部空間名詞の類義の対である「안，속」と「うち，なか」を対照し，続いて外部空間名詞「밖，겉」と「そと，おもて」を対照する．

6.1.「안，속」と「うち，なか」の意味用法の対照

6.1.1. 類型①先行名詞を伴う連語構成の対照

6.1.1.1.「안，속」と「うち，なか」の先行名詞の分布の対照

類型①を対照する際は，主に中心語の前項の連語に現れる先行名詞を中心に考察する．実際の分析に入る前に，韓国語と日本語のコーパスから収集した用例に現れた，韓国語と日本語の内部空間名詞とその先行名詞の出現の様相や分布を概略的に示して，その現れ方の類似点と相異点を示す．

まず，韓国語の内部空間名詞「안」と「속」の現れ方と分布を示す．

下の表47(表12の再掲)によると，［안＋格助詞］の先行名詞は，場所名詞が43％，時間名詞が18％，身体名詞と抽象名詞がそれぞれ14％，具体名詞が11％を占める．さらに，これらの先行名詞を中心語の格助詞によって分類すると，先行名詞の分布と出現用例数に大差があることが鮮明にあらわれる．特に，「안에」の先行名詞を見ると，時間名詞が半分近くを占めるのに対し，「안에서」の場合は，時間名詞の用例は見当たらず，抽象名詞が半分近くを占める．また，方向を表す助詞「으로」と結合した「안으로」の場合は，場所名詞が79％と，圧倒的に多い．

表 47. 類型①における[안＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類(表12の再掲)

名詞分類	格助詞結合形別の出現用例数													
	안에		안에서		안으로		안의		안을		안이		合計	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
時間名詞	162	46.0	-	-	8	6.0	-	-	-	-	-	-	170	18.0
場所名詞	128	36.0	33	15.0	100	80.0	49	46.0	69	80.0	28	62.0	407	43.0
身体名詞	65	18.0	17	8.0	18	14.0	20	19.0	7	8.0	5	11.0	131	14.0
具体名詞	-	-	71	31.0	-	-	19	18.0	10	12.0	7	16.0	107	11.0
抽象名詞	-	-	105	46.0	-	-	18	17.0	-	-	5	11.0	128	14.0
合計	355	100	226	100	126	100	105	100	86	100	45	100	943	100

*「-」表示は全く現れないという意味ではなく，低頻度でもコーパスの用例に載っている可能性はあるが，統計処理上，資料の中には含まれていないという意味である.

また，下の表48(表14の再掲)によると，[속＋格助詞]の先行名詞は，抽象名詞が最も多く，40%を占める. 続いて現象名詞が17%，場所名詞が14%で，時間名詞の用例は収集されなかった. これらの先行名詞を中心語の格助詞によって分類した結果を見ると，「속에」の場合は，身体名詞と場所名詞が最も多く，「속에서」の場合は，抽象名詞が約70%，現象名詞が20%を占める. 特に，「속에서」の先行名詞は，非実体性名詞が88%を占めるなど，全体的に「속」の中心語は非実体性名詞と結合する傾向が高い.

表 48. 類型①における[속＋格助詞]の頻出先行名詞の名詞類別分類(表14の再掲)

名詞分類	格助詞結合形別出現用例数													
	속에		속에서		속으로		속의		속을		속이		合計	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
抽象名詞	91	16.0	479	69.0	93	32.0	78	35.0	19	17.0	–	–	759	40.0
現象名詞	78	14.0	132	19.0	67	23.0	–	–	37	32.0	–	–	314	17.0
場所名詞	117	21.0	–	–	92	32.0	20	9.0	33	29.0	–	–	262	14.0
身体名詞	152	27.0	–	–	17	6.0	16	7.0	20	18.0	5	100.0	210	12.0
活動名詞	47	8.0	87	12.0	–	–	44	20.0	–	–	–	–	178	9.0
事柄名詞	39	7.0	–	–	–	–	64	29.0	–	–	–	–	103	5.0
具体名詞	40	7.0	–	–	18	7.0	–	–	5	4.0	–	–	63	3.0
合計	564	100	698	100	287	100	222	100	114	100	5	100	1889	100

*「-」表示は全く現れないという意味ではなく，低頻度でもコーパスの用例に載っている可能性はあるが，統計処理上資料の中には含まれていないという意味である. **表の中の数字は各格助詞形の頻度順10位の先行名詞の用例数である.

ある先行名詞が「안」と「속」のいずれとも共起する場合，先行名詞の意味特性を分析し，その結果から空間名詞の意味領域の相異を取り出すことができなくなる. このような類義の対における意味領域の重なりは，あらゆる形態に共通して現れるのではなく，一部の格助詞と結合した中心語に現れる現象であり，韓国語の内部空間名詞においては，大部分の場合，「안에，속에」「안에서，속에서」に限る現象であり，

「안」と「속」と共通して現れる先行名詞の意味領域は，＜所在を表す具体空間＞，＜身体空間＞，＜概念的抽象空間＞に偏っている．

しかし，「안」と「속」の双方と共起したり，混用の傾向があると言われる場合でも，実際は「안」と「속」のうち，どちらか一方とより頻繁に共起する場合と，両方とほぼ同等に共起する場合がある．このような場合は，下記の表49の通り，収集された用例数を比較して，実際の言語使用の場で「안」と「속」のうち，どちらがより頻繁に使用されるか，その出現頻度による「傾向性」を調べたうえで，連語構成の後項の連語として用いられる用言の意味特性から，「안」と「속」の意味領域を取り出した．

表 49.「안」と「속」の両方と共に現れる名詞(表15の再掲)

共通の先行名詞	안에	속에	共通の先行名詞	안에서	속에서	共通の先行名詞	안으로	속으로	共通の先行名詞	안의	속의
	用例数			用例数			用例数			用例数	
입(口)	47	23	사회(社会)	38	51	입(口)	9	17	몸(身体)	9	7
시간(時間)	35	14	틀(枠)	12	19	－	－		사회(社会)	3	21
몸(身体)	18	23	세계(世界)	9	25	－	－		우리(我)	3	10
우리(我)	17	12	공간(空間)	8	18	－	－		－	－	－
내(自分)	14	21	구조(構造)	7	21	－	－		－	－	－
공간(空間)	10	14	－	－	－	－	－		－	－	－
상자(箱)	9	22	－	－	－	－	－		－	－	－
품(懐)	8	12	－	－	－	－	－		－	－	－

＊出現用例数が3以上の用例から比較した．

＊[안을/속을，안이/속이]の場合は，用例数が3以上である共通の先行名詞は収集されなかった．

つぎに，日本語の内部空間名詞「うち，なか」の現れ方と分布を示す．

日本語の場合，[うち＋格助詞]の先行名詞は時間名詞が最も多く，約34％を占め，抽象名詞が18％，人間名詞が12％，事柄名詞が11％を占める．これらの先行名詞を中心語の格助詞によって分類すると，韓国語の場合と同様に，格助詞によって，より頻繁に共起する先行名詞の種類に偏りがあり，「うちに」の場合は，時間名詞が49％を占め，圧倒的に多く，[うちの]の場合は，数量名詞，事柄名詞の順で，[うちから]の場合は人間名詞，時間名詞，事柄名詞の順となる．全体として，[うち+格助詞]の場合は，時間名詞を先行名詞とする[うちに]の用例が圧倒的に多い．

[なか＋格助詞]の先行名詞は，全体的に，抽象名詞が23％，場所名詞が15％，事柄名詞が14％，具体名詞が12％，人間名詞が11％を占め，「うち」に比べて，意味領域の範囲がはるかに広い．「なか」と共起する先行名詞としては，抽象名詞が最も多いが，実体性名詞と非実体性名詞に広く分布してることが特徴で，実体性名詞が約41％，非実体性名詞が約51％であり，非実体性名詞の比率が71％である「うち」とはその性質が異なる．

これらの先行名詞を中心語の格助詞によって分類すると，「なかに」の場合は，抽象名詞が最も多く，続いて人間名詞，場所名詞，事柄名詞の順で，「なかの」の場合は，具体名詞が約21％，抽象名詞が約19％，場所名詞が約18％で，具体的な空間を表す先行名詞の出現頻度が高い．「なかで」の場合は，抽

象名詞が約30%で，事柄名詞，具体名詞，活動名詞の順に現れる．

また，「うち」と「なか」は，韓国語と異なり，基本的意味である具体的空間では意味領域が重ならず，心理的意味領域，範囲を表す意味領域で意味用法の重なりが見られる．心理的意味領域では，「うち」は＜概念的・静的空間，不可視性の空間，閉鎖的な空間＞を表すことが多く，「なか」は＜心理的活動や感情的変化の空間，動的空間＞を表す．

これまでの内容に基づいて，[안/속＋格助詞]，[うち/なか＋格助詞]の先行名詞を意味論的名詞分類に従って分類し，図14（図3の再掲）と図15（図9の再掲）に示す．

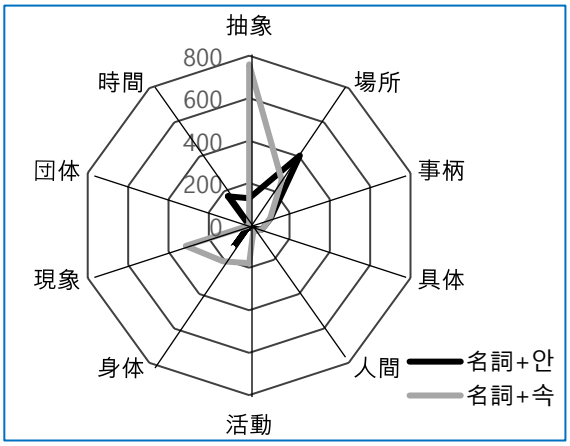

図 14. [안/속＋格助詞]の先行名詞の分布（図3の再掲）

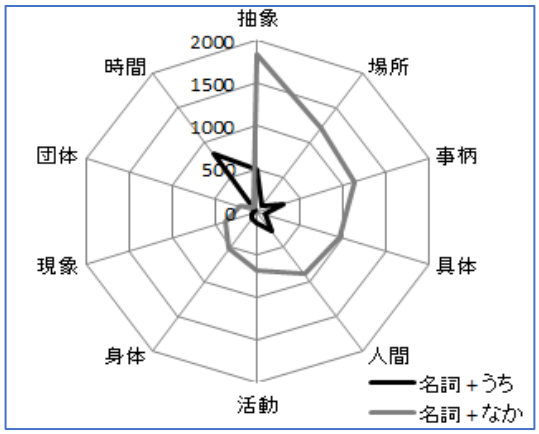

図 15. [うち/なか＋格助詞]の先行名詞の分布（図9の再掲）

図14では，韓国語の先行名詞の分布から「안，속」の意味領域の分布と具体空間と身体空間における意味領域の重なりが見られ，図15から「うち，なか」の意味領域の分布と抽象空間における意味領域の重なりを見ることができ，図14と15を照らし合せ，上述した「안，속」と「うち，なか」の意味領域の分布の相異点を見ることができる．

6.1.1.2. 類型①先行名詞を伴う「안，속」と「うち，なか」の連語構成の対照

以下では，韓国語と日本語の用例に現れた先行名詞を＜具体空間，抽象空間，範囲，状況，時間＞に分類したうえで，先行名詞の例文を取り上げながら韓国語と日本語の内部空間名詞の意味領域を対照する．ここで取り上げられる例文は並列コーパスからの例文ではなく，韓国語コーパス及び日本語コーパスからそらぞれ抽出された例文であり，付された韓国語訳および日本語訳は筆者による．

先行名詞が具体空間であるもの

具体空間を表す先行名詞を，意味によって場所空間，自然物空間，具体物空間，身体空間に細分類

して考察を行う. これらの連語構成の用例中, 高い頻度で共起する先行名詞の用例を中心に韓国語と日本語の内部空間名詞の意味用法を対照するが, 特に中心語と共起する前項と後項の連語との結合関係に注目し, 内外空間名詞の意味領域の記述を通して, 韓日両言語の対応関係を記述する.

＜場所空間＞

(韓国語の例文)

(198) 집에 불이 나자 방 안에/?방 속에 갇힌 두 아이가 목숨을 잃은 실제 사건. ＜CB000133＞

(部屋のなかに閉じ込められた二人の子供が命を落とした.)

(199) 구수한 과자 익는 냄새가 방 안에/?방 속에 가득 찼다.＜BGXX0037＞

(香ばしいお菓子を焼くにおいが部屋のなかにいっぱいである.)

(200)구수한 과자 익는 냄새가 집 안에/?집 속에 가득 찼다. ＜BGXX0037＞

(香ばしいお菓子を焼くにおいが家のなかにいっぱいである.)

(201) 생사람을 집 속에/집 안에 가두어 놓고 불을 질렀다.＜BEXX0004＞

(何の罪もない人を家のなかに閉じ込めてから火をつけた.)

(198), (199)の[방 안에]は自然であるが, [방 속에]は不自然である. また, (199)の先行名詞「방」を(200)のように「집」に入れ換えると, [집 안에]は自然であるのに対し, [집 속에]は不自然である. このようなことから,「방」と「집」は, ＜囲まれた空間ではあるが, 閉鎖的空間ではない＞という意味特性があり, ＜閉ざされた空間ではない＞「안」とよく共起すると見ることができる. (199)を見ると, 後項の連語「차다」は,「집」という＜三次元の立体空間, 深さより体積＞を表す意味特性を持つ先行名詞とともに, 補語である「냄새」の＜拡散＞の意味特性により,「속」ではなく「안」を選択するのが自然である.

(201)の場合は,「집 속에」を「집 안에」に入れ換えることはできるが, コーパス調査の結果から, ＜閉じ込める, 断絶, 拘束＞の意味を持つ「가두다」などと結合する場合は「안」より「속」とより頻繁に共起する傾向があり, 部分的な意味領域の重なりが見られる.

(202) 어느 숲 속에/?숲 안에 토끼 가족이 살고 있었습니다. ＜CH000111＞

(ある森のなかにうさぎの家族が住んでいました.)

(202)では, [숲 속에]は自然な表現であるのに対し, [숲 안에]に入れ換えると不自然になるが, これは, 先行名詞「숲」の意味特性である＜密集, 非可視性＞によるものであると考えられる.

一方, 日本語の例を見ると, 場所を表す先行名詞は全て「なか」と共起し, 以下の日本語コーパスの例

文(203)～(206)でも場所を表す先行名詞「部屋，牢獄，花畑，トンネル」は全て「なか」と共起する．

（日本語の例文）

(203) a. 部屋のなかにおじいちゃんが座っていました． ＜OB6X_00248＞
(방 안에 할아버지가 앉아 있었습니다.)

b. ひとつの建物の中に映画館が何軒も入っているケースも多い． ＜LBm2_00076＞
(하나의 건물 안에 영화관이 몇 개나 들어있는 경우도 많다.)

(204) 人間は自ら創り上げた牢獄のなかに，自らを閉込めているようなものです．
＜OB6X_00058＞
(사람은 스스로 만들어낸 감옥 속에 자신을 가두어두는 것 같은 존재입니다.)

(205) 花は花畑のなかに隠せば目立たぬ理屈ぞ． ＜LBk9_00088＞
(꽃은 꽃밭 속에 숨겨야 눈에 띄지 않는 이치이지.)

(206) どうにかトンネルのなかに這い込むことができた． ＜LBi9_00007＞
(어떻게든 터널 속으로 기어들어갈 수 있었다.)

(203)から(206)の空間名詞「なか」の連語構成は，それに対応する韓国語訳の連語構成では一対一の対応関係ではなく，ズレが見られる．韓国語訳を見ると，(203)の「部屋のなか，建物のなか」以外に(204)～(206)の「牢獄のなか，花畑のなか，トンネルのなか」の「なか」はいずれも「속」と共起する．「방，건물」のように＜出入のできる三次元の空間＞の意味特性を持つ先行名詞を伴う場合は「안」と共起するが，「감옥，꽃밭，터널」のように＜まわりが取り囲まれている空間や閉鎖的な空間＞を表す先行名詞がくる場合は「속」と共起する．

以上(198)から(206)では，先行名詞が具体空間を表す用例を韓日両言語でそれぞれ検討した．具体空間を表す先行名詞を伴い，「안，속」，「うち，なか」が連語構成を成すとき，意味領域の対応関係は，次の通りに整理できる．

まず韓国語の場合，「안，속」のどちらか一方としか共起できない場合と「안，속」のどちらとも共起できる場合がある．前者は先行名詞の意味によって，後者は後続する連語の意味によって共起可否が決まる．「안，속」のどちらか一方としか共起できないものは先行名詞の意味特性によって二つに分けられる．一つ目は＜囲まれた空間ではあるが，閉鎖的空間ではない＞意味特性をもつ先行名詞をとるものだ．「방＋안에」のように＜閉ざされた空間ではない＞ことを表す「안」が選択される．二つ目は＜何らかのものによって囲まれた空間・閉鎖的な空間＞の意味特性を表す先行名詞をとるものだ．この場合「감옥/꽃밭/터널＋속에」のように「속」と共起する．

先行名詞が「안」と「속」のどちらとも共起する場合は，後項の連語の空間的意味特性が開放的であるか，閉鎖的であるかなどによって「안」と「속」のどちらと共起するかが決まる．コーパスの調査の結果からも後項の連語が開放的意味特性を表す場合は主に「안」と共起し，閉鎖的意味特性を表す場合は「속」と共起する傾向が明らかになっている．

次に，日本語の場合，場所を表す先行名詞の内部空間を表わす場合，全て「なか」と共起し，「うち」との意味領域の重なりは見当たらない．

以上の分析の結果をまとめると，先行名詞が具体的場所空間を表す場合，「안」と「속」はいずれも「なか」と対応し，「なか」による包括的対応関係を示す．

＜自然物空間＞

（韓国語の例文）

(207) 산 속에 살면 가슴 속이 맑아진다. ＜BHXX0022＞
（山のなかで暮らすと，胸のなかがさわやかになる．）

(208) 대낮에도 숲 속에서 뻐꾸기가 울어대었다. ＜(AE000400＞
（真昼にも森のなかでカッコウがさえずっていた．）

(209) 부원들은 땅 속에 묻힌 비닐과 캔, 빈 병들을 캐냈다. ＜BA93A045＞
（部員らは土のなかに埋められていたビニールと缶，瓶を掘り出した．）

（日本語の例文）

(210) わたしは頭から砂のなかにくずれこんだのでした. ＜PB54_00208＞
(나는 머리부터 모래 속으로 들어갔던 겁니다.)

(211) ただ，遠くに行ったときにはテントを張って，森のなかで寝止まりをしていました.
＜LBl4_00037＞
(다만, 멀리 갔을 때에는 텐트를 치고 숲 속에서 잠을 잤습니다.)

(212) この大腸菌が水のなかにどれだけあるのか調べることにした. ＜LBh4_00004＞
(이 대장균이 물 속에 얼마나 있는지 조사하기로 했다.)

韓国語の例文(207)，(208)，(209)では「산，숲，땅」といった自然物の空間を表す先行名詞と共起し，後項の連語の意味特性による制約を受けることなく「속」と共起する．(207)，(208)，(209)の先行名詞は，いずれも外部からの断絶，自然物による境界，取り囲まれた状況，内部が見えない＜不可視性の空間＞という意味特性を表す名詞であり，これらの先行名詞は全て「속」と共起し，日本語訳はいずれも「なか」となる．

日本語の例文(210), (211), (212)は「砂, 森, 水」といった先行名詞を取り, いずれも「なか」と共起する. 先行名詞が＜自然物空間＞を表す場合, 韓国語は「속」と, 日本語は「なか」とのみ共起し, 韓日両言語間でズレは見られなかった. このようなことから, 自然物空間を表す場合, 「속」と「なか」は＜対応関係＞を示すと言える.

＜具体物空間＞

(韓国語の例文)

(213) 종이 상자 안에 옷을 수납한 다음 제습제나 방충제를 넣는 것을 잊지 말도록. ＜CB98D286＞

(段ボール箱のなかに衣服を収納した後, 除湿剤や防虫剤を入れることを忘れないように.)

(214) 벌들을 캄캄한 상자 속에 가두어서 운반하였다. ＜BHXX0057＞

(蜂を暗い箱のなかに閉じ込めて運んだ.)

(日本語の例文)

(215) 箱のなかに五十二枚のカードが入っている. ＜LBg4_00032＞

(상자 안에 52장의 카드가 들어 있다.)

(216) あの袋のなかにはなにが入ってるんだろう. ＜PB59_00042＞

(저 자루 속에는 뭐가 들어 있을까?)

韓国語の例文(213), (214)の「상자」は, ＜出し入れのできる具体物空間＞を表し, 「안」と「속」のどちらとも共起する. しかし, (213)のように「상자」の空間的特性が＜開放性＞を持つ具体物空間である場合は「안」と共起することが多く, (214)のように, 「상자」が＜密閉性や非可視性＞を持つ場合は「속」と共起する. このようなことから, ＜具体空間＞を表す先行名詞と共起する空間名詞「안」と「속」は, 前項と後項との連語の意味特性によって, 「안」 または 「속」のいずれかが選択されるのである.

これに対し, (213), (214)の日本語訳はいずれも「なか」となり, 日本語の例文(215), (216)でも, 共通して「なか」と共起している.

このようなことから, 先行名詞が具体物空間を表す場合, 「안」 と 「속」はどちらとも「なか」と共起し, 「なか」による包括的対応関係を示す.

＜身体空間＞

(韓国語の例文)

(217) 입 안에 쓴 침이 자꾸 괴었다. ＜BEXX0009＞

(口のなかに苦いよだれが溜まった.)

(218) 사내가 입 속에 박하사탕을 가득 쑤셔 넣은 채 말했다. ＜BEXX0007＞
（男の人が口のなかにハッカ飴を詰め込んたまま話した.）

（日本語の例文）

(219) 頭のなかに酸素がゆき渡る. ＜LBt9_00020＞
(머리 속에 산소가 고루 퍼진다.)

(220) 次男のほうは、医療をつがせるという青写真が、院長の頭のなかにはあるらしい.
＜LBe9_00165＞
(차남 쪽은 의료를 이어받게 하려는 청사진이 원장의 머리 속에는 있는 것 같아.)

韓国語の例文(217), (218)の先行名詞「입」は, 後項の連語との意味関係によって「안」と「속」の両方と共起する. 収集されたコーパス資料からも,「안, 속」ともに用いられる様相を見ることができる. その使い分けの基準は, (217)の「안에 (침이) 고이다」のような, 具体的な空間性を表す連語構成の場合は「안」と共起し, (218)のように後項の連語「집어넣다, 쑤셔넣다」とともに＜密集した, 深い, 不可視の空間＞の意味特性を表す場合は,「속」と共起する. このようなことから,「안」と「속」は＜具体的な身体空間＞を表す場合は意味領域が重なるが, ＜空間性と密集性, 開放性と閉鎖性, 可視性と不可視性＞の弁別要素が介入すると, 意味領域が細分化する.

一方で, 韓国語の例文(217), (218)の日本語訳を見ると, 身体名詞はすべて「なか」と共起している. このことから, 日本語の「なか」にくらべ, 韓国語の「안」と「속」は身体空間をより細分化して表現しようとする傾向があるといえる. また, 日本語の例文(219)では,「頭のなか」は「ゆきわたる」といった動詞と共起して＜通過, 拡散＞の具体的空間を表し, (220)の「頭のなか」は抽象的空間を表す.

このようなことから, 身体空間を表す場合,「안」と「속」はいずれも「なか」と対応し,「なか」による包括的対応関係を示す.

先行名詞が抽象空間であるもの

抽象空間を表す先行名詞のうち高い頻度で空間名詞と共起する名詞を, 意味によって観念的抽象空間を表す名詞と心理的抽象空間を表す名詞に下位分類したうえで, これらの名詞を伴う連語構成の用例を中心に, 韓国語と日本語の内部空間名詞の意味用法を対照する.

共起頻度が上位の頻出名詞を見ると, 韓国語の場合は「생활, 사회, 마음, 관계, 의식, 기억, 분위기, 구조, 틀, 세계」などが挙げられ, 日本語の場合は「無意識, 心, 生活, 歴史, 社会, 夢, 世界, 関係」などが挙げられる. ここでは,「생활, 사회, 관계, 분위기, 구조, 틀, 세계」といった客観的・観念的な意味を表す名詞を＜観念的抽象空間＞に,「마음, 의식, 기억」といった主観的・心理的意味を表す名詞を＜心理的抽象空間＞に分類した.

＜観念的抽象空間＞

(韓国語の例文)

(221) 우리는 하루가 다르게 변화하는 사회 속에서 살아가고 있다. ＜CB000119＞
(我々は日ごとに変化する社会のなかで生きている.)

(222) 한국사회 안에서 전개되고 있는 문화현상을 분석했다.＜BHX0049＞
(韓国社会のなかで展開されている文化現象を分析した.)

(223) 경제활동은 그 사회체제와 문화의 틀 속에서 이뤄져야 한다.＜CA96C294＞
(経済活動はその社会体制と文化の枠組みのなかで行われなければならない.)

(224) 언론은 법과 기존 규제의 틀 안에서 자율 규제를 해야 한다.＜CH000058＞
(マスコミは法と既存の規制の枠組みのなかで自主規制をしなければならない.)

(日本語の例文)

(225) そのためには, 社会のなかに出かけて行き, 生活経験を増やしてほしい.
＜PB53_00537＞
(그러기 위해서는, 사회 속으로 나가, 생활 경험을 늘리기 바란다.)

(226) 日本の大企業ほど世界のなかで国際競争力の強い企業はありません.
＜PB23_00567＞
(일본의 대기업만큼 세계 속에서 국제경쟁력이 강한 기업은 없습니다.)

(227) それなりの効用を生活のなかで感じているのではないでしょうか. ＜LBm4_00046＞
(그 나름의 효용을 생활 속에서 느끼고 있는 것이 아닐까요.)

韓国語の例文(221), (222)を見ると, 先行名詞「사회, 틀」が共通して現れるが, (221)は「속에서」と, (222)は「안에서」とそれぞれ共起する. コーパスから収集された用例数の面では, 抽象名詞のうち「사회, 구조, 틀, 세계」は「안」と「속」のいずれとも共起するが, 出現頻度の面では「안」より「속」の頻度が高い.

(221)の「속」は, 抽象的空間の＜状況, 状態, 活動＞を表し, 後項の連語として「살아가다, 자라다」といった＜継続性・活動性＞を表す動詞と共起することが多いのに対し, (222)の「안」は, ＜範囲・領域, 条件＞を表す動詞と共起することが多い. (221)のように, 先行名詞が＜観念的抽象空間＞を表す場合, 中心語の後項の連語として＜継続性・活動性＞を表す動詞を伴う場合は, 「속」と共起する. その一方で, (222)は, (221)と同様に, ＜観念的抽象空間＞を表す先行名詞を伴う場合でも, 後項の連語によって範囲が指定される＜範囲指定の空間＞となる場合は「안」と共起する.

このようなことから，観念的抽象空間を表す場合，「속」と「안」の意味領域は細分化され，「속」は〈状態・状況の継続，活動＞の意味領域を，「안」は＜範囲指定＞の意味領域を表すといえる．

また，韓国語の例文の日本語訳を見ると，(221)～(224)はいずれも「なか」と共起する．また，日本語の例文(225)，(226)，(227)の先行名詞「社会，世界，生活」も共通して「なか」と共起し，その韓国語訳はいずれも「속」と対応する

以上のことから，観念的抽象空間を表す場合，「안，속」と「なか」は＜「なか」による包括的対応関係＞を示すということができる．

＜心理的抽象空間＞

(韓国語の例文)

(228) 나는 마음 속으로 절절히 느꼈다. ＜BHXX0023＞
(私は心のうちで切々と感じた．)

(229) 돌사자는 사람들의 기억 속으로 사라져갔습니다. ＜BGXX0037＞
(石のライオンは人々の記憶のなかに消え去りました．)

(日本語の例文)

(230) 子どもが自分の心のうちにしまっていたことを打ち明けてきたとき，… ＜LBn4_00005＞
(아이가 자기 마음 속에 간직하고 있던 것을 털어놓았을 때,…)

(231) 自分の心のなかにある概念，イメージを個性的な言葉として抽出する努力なしに，力強い言葉は生まれないであろう. ＜LBl4_00010＞
(자기 마음 속에 있는 개념, 이미지를 개성적인 말로 추출하는 노력 없이, 강력한 말은 탄생하지 않을 것이다.)

(232) 頭のなかで理解することと，心のなかで思うことには差がある．＜LBq9_00023＞
(머리 속으로 이해하는 것과, 마음 속으로 생각하는 것에는 차이가 있다．)

韓国語の例文(228)～(229)を見ると，心理的抽象空間を表す「마음，기억」といった先行名詞はいずれも「속」と共起し，「안」の意味領域と重ならない．日本語の例文(230)～(232)を見ると，共通の先行名詞「心」と結合する中心語は，後項の連語との結合関係によって「うち」と共起するか，「なか」と共起するかが決まる．(230)の後行の連語は，〈閉鎖，不可視＞の意味を持つ「しまる」であるのに対し，(231)の後項の連語は存在を表す「ある」ということから，(230)は「うち」と共起し，(231)は「なか」と共起する．

一方で，(228)の「感じる」のように後項の連語が心理動詞である場合は，「うち」と共に現れる傾向が高いのに対し，(229)，(231)のように＜動作＞，＜存在＞を表す動詞と結合する場合は，「なか」と共起する傾向が高い．また，(231)のように，補語が個人の心理・感情ではなく「概念，イメージ，葛藤，正義」とい

った客観的・観念的抽象名詞であったり「道，柱，女の人」といった具体物，人間名詞である場合は，存在の空間として「なか」が用いられる．

抽象名詞「心」は，「思う，呟く，叫ぶ」といった＜思考．言語活動＞を表す動詞と結合する場合，「うち，なか」の両方と共起する傾向があり，意味領域の重なりを見せる．韓国語の場合，＜心理的抽象空間＞を表す連語構成では「속」と共起し，「안」との意味領域の重なりはみられない．日本語の場合，＜心理的抽象空間＞はさらに＜主観的・心理的＞意味領域と＜客観的・観念的＞意味領域に細分類され，「うち」は主に＜主観的・心理的＞意味領域を，「なか」は主に＜客観的・観念的＞意味領域を表す．以上のことから，心理的抽象空間を表す場合，「속」は「うち，なか」を包括する＜部分的対応関係＞を示す．

先行名詞が範囲を表すもの

人の集合や数量を表す先行名詞が高い頻度で空間名詞と共起し，ある範囲を表したり限定する連語構成をなす場合，これらの連語構成を先行名詞の意味特性と後項の連語との関係から見て，＜数量的範囲，集合の範囲および比較対照の範囲＞という三つの類型に分けることができる．

以下では，これらの人の集合及び範囲を表す連語構成の用例を，次のように三つの類型に分けて考察し，韓国語と日本語の意味用法を対照する．

1) ある提示された数量や基準以内に範囲を限定する＜数量的範囲＞
2) 一定のグループや集団，限定された範囲を意味する「集合」に属する＜集合の範囲＞
3) ある対象となる範囲全体の中から一定の部分を強調・比較する＜比較対象の範囲＞

＜数量的範囲＞

ここでは，ある提示された数量や基準以内に範囲を限定する＜数量的範囲＞を表す「안，속」と「うち，なか」の連語構成を中心に対照，記述する．

＜数量的範囲以内＞

（韓国語の例文）

(233) a.운 좋게 관문을 통과하여 2만 5천명 중 백명 안에 들게 되었다.
＜BIXX0002＞
（運よく関門を通り抜け，二万五千人のなかで百人のうちに入った．）

b.그런데 첫 시험에서 50 등 안에 들게 되었다. ＜BIXX0004＞
（ところで，最初の試験で50位内に入った．）

（日本語の例文）

(234) 隣接の施設で作業していた七人も、最初の発表の四九人のうちに含まれています．
＜LBr4_00039＞

(인접한 시설에서 작업하고 있던 7명도, 최초 발표의 49명 안에 포함되어 있습니다.)

韓国語の場合，(233)のように「명(名)，등(等)，리(厘)」といった数量名詞と「안에」が結合して，ある基準のなかに入るということを意味する．「명，등，리」といった名詞はいずれも範囲を表す「안」と共起し，「속」とは共起しない．また，(233)の日本語訳を見ると，「안」は数量の単位によって「うち」と対応したり，「ない」と対応する．

一方で，日本語の場合，ある数量的範囲以内という意味を表す場合は「うち」とのみ共起し，「なか」とは共起しないことから，「うち」と「なか」の意味領域の重なりはないと見られ，(234)のように数量的範囲を表す「うち」は，韓国語の「안」と対応関係を示す．

＜数量的範囲の一部＞

上記の(233)(234)は，ある提示された数量や基準以内に範囲を限定する用法であるが，以下の例文は，ある提示された数量的範囲から一部を選び出す用法であり，韓国語の場合，「안，속」は用いられず，「가운데，중」と共起し，日本語の場合は主に「うち」が用いられる．

（日本語の例文）

(235) 十一人のうち，九人しか生還しなかった．＜LBo9_00203＞
(열한 명 가운데/중에서 9명 밖에 살아돌아오지 못했다.)

(236) それが三分の二も，つまり三人のうちの二人は厚生年金方式をとって，一人だけが私学共済の方式をとっている，選択をしている．＜OM25_00006＞
(그것이 삼분의 이나, 즉 세 명 가운데(중) 두 명은 후생연금방식을 취하고, 한 명만이 사학공제 방식을 취하는 선택을 하고 있다.)

(237) 四百五十戸のうちで大体三百戸ぐらいは移転しなければならぬだろうという現状，…＜OM12_00003＞
(450 집 가운데(중에서) 대략 300 집 정도는 이전하지 않으면 안될 것이라는 현상, …)

(235)，(236)，(237)の「うち」は，先行名詞が指す＜数量的範囲＞を限定し，そのうちの一部を選択することになる．このような＜数量的範囲＞を限定する「うち」の格助詞別の用例数を見ると，「うち＞うちの＞うちで＞うちから」の順で，「うちに」の用例は収集されなかった．

次に，韓国語との対応関係を見ると，＜数量的範囲内＞をあらわす場合と異なり，＜一定の数量的範囲＞から一部を選択する場合は，日本語の範囲を表す「うち」と韓国語の「안」との対応関係は成立せず，「가운데，중」との対応関係を示す．

このような韓国語の「안, 속」と異なり, 日本語の「うち, なか」は＜集合の範囲＞, ＜数量的範囲＞, ＜比較対象の範囲＞の三つの範囲を表すことができる. 以下では, 日本語の用例のみ挙げる.

＜集合の範囲＞

(238) 警察はパーティの出席者のなかに犯人がいると考えた. ＜LBs9_00108＞
(경찰은 파티 참석자 중에/가운데 범인이 있다고 생각했다.)

(239) 数多くの応募者のなかから選ばれた人が… ＜PB12_00212＞
(수많은 응모자 중에서/가운데 뽑힌 사람이…)

(240) 国が定める要件を満たす者のうちから核物質防護管理者を選任しなければならない. ＜OW5X_00038＞
(국가가 정하는 요건을 충족하는 사람 중에서 핵물질방호관리자를 선임해야 한다.)

(241) 業者と契約した請負代金は、管理費のうちから業者に支払った、契約による業者の収入ですから… ＜PB13_00612＞
(업자와 계약한 도급대금은 관리비 중에서 업자에게 지불된, 계약에 의한 업자의 수입이므로…)

日本語コーパスから収集した用例を分析した結果では, ＜集合の範囲＞の場合, 中心語の格助詞によって「うち」あるいは「なか」との共起に制約が見られる. (238)のように集合・集団を表す先行名詞と「なかに」が共起する用例は142件収集されたが, 「うちに」と共起する例は収集されなかった. しかし, (239), (240)のように, 中心語がカラ格である場合は, 「うち, なか」のいずれとも共起し, 意味領域の重なりが見られる. しかし, さらに細密に「うち」, 「なか」と格助詞が結合する条件を観察すると, 「うち」と「なか」の領域は完全に重なるとはいえない. (239)の[なかから]の先行名詞は選びだすための対象となる集団を「応募者, 出席者」といった一般的な集団として示すのに対し, (240)の「うちから」の先行名詞は, 選び出すための対象となる集団を「要件を満たす者」といった, より具体的に条件が指定された集団, あるいは特定の範囲に限定されるという相異点がある.

このように集団の範囲を表す「うち, なか」は, 「안, 속」ではなく, 「가운데, 중」と対応し, 集合の範囲を表す用法では, 「안, 속」と「うち, なか」の対応関係は成立しない.

＜比較対象の範囲＞

(242) 財政政策のうちで最も効果のみやすい公共投資の直接的な効果についてまずみてい

こう. ＜PB43_00190＞
(재정정책 가운데/중에서 가장 효과를 보기 쉬운 공공투자의 직접적인 효과에 대해 우선 살펴보자.)

(243) 各種の浄化施設のなかで最も良い結果が得られている. ＜LBl5_00023＞
(각종 정화시설 가운데/중에서 가장 좋은 결과를 얻었다.)

(242), (243)の「うちで, なかで」は, 先行名詞からなる比較対象の範囲を表す. この場合, コーパスから収集した実際の言語使用の場では「なかで」がはるかに頻繁に用いられる. また, 韓国語訳を見ると, 「안」「속」との対応関係は成立せず, 「가운데」「중에서」と対応する. このようなことから, 比較対象の範囲を表す場合, 「うち, なか」は「안, 속」とは対応関係が成立せず, 「가운데, 중」と対応関係を示す.

先行名詞が状況を表すもの

「안, 속」と「うち, なか」が抽象名詞, 現象名詞, 活動名詞と共起して＜状況＞を表す場合の意味領域の対応関係を見ていく.

(韓国語の例文)

(244) 형제는 캄캄한 어둠 속에서 쉬지 않고 부르고 있었다. ＜BGXX0031＞
(兄弟は, 真っ暗な闇のなかで, 絶えず呼び続けていた.)

(245) 그들은 기근과 칼과 재앙의 심한 고통 속에서 죽어갔다. ＜AH000330＞
(彼らは飢饉と刀, 災いの激しい苦痛のなかで死んでいった.)

(246) 면담은 매우 호의적인 분위기 속에서 계속되었다. ＜CE000029＞
(面談は非常に好意的な雰囲気のなかで続いた.)

(247) 유행의 변화 속에서 정숙성에 대한 정의는 끊임없이 바뀌었다. ＜AH000460＞
(流行の変化のなかで貞淑性に対する定義は絶えず変わってきた.)

(日本語の例文)

(248) 雨のなかを傘もささず自転車を走らせ… ＜LBs3_00183＞
(빗 속을 우산도 받지 않고 자전거로 달려…)

(249) 二世は, 一世の背中を見ながら, 差別と貧困のなかで, 生きる道を模索した世代といえる. ＜LBr3_00158＞

(2세대는 1세대의 뒷모습을 보면서 차별과 빈곤 속에서 살 길을 모색한 세대라고 할 수 있다.)

(250) 長引く不況のなかで，企業の投資は鈍化し… ＜LBi5_00010＞
(길어지는 불황 속에서 기업의 투자는 둔화되고…)

韓国語の例文(244)，(245)，(246)，(247)は，「어둠，고통，분위기，변화」といった先行名詞とともに，ある状態または状況を表す．そのとき，これらの先行名詞はいずれも「속에서」と結合し，「안에서」とは結合しない．また，日本語の例文(248)，(249)，(250)では，現象名詞「雨」，抽象名詞「貧困，不況」」が「なか」と共起してある状態や状況を表わしている．

このようなことから，抽象名詞，現象名詞，活動名詞などと共起して状況を表す「속」は，「なか」と対応関係を示す．

先行名詞が時間を表すもの

時間を表す先行名詞と結合する場合，中心語の空間名詞はどのような意味領域を表し，韓日両言語はどのような対応関係を見せるかを見ていく．

(韓国語の例文)

(251) 제2단계의 금리자율화를 이달 안에 실시할 예정이다. ＜BA93E009＞
(第二段階の金利自律化を今月のうちに実施する予定である．)

(252) 오늘 안으로 꼭 내야 된다 카더라. ＜CG000114＞
(今日のうちに必ず出さなければならないと言っていた．)

(日本語の例文)

(253) 一年のうちにその場所がすっかり埋め立てられ、大きな建物がいくつも建っていた．
＜LBbn_00026＞
(일 년 사이에 그 장소가 완전히 매립되어，큰 건물이 몇개나 서있었다.)

(254) そんななか，子供のうちから英語を学ばせようとする動きが高まっています．
＜PB43_00321＞
(그런 가운데，어린아이 때부터 영어를 배우게 하려는 움직임이 높아지고 있습니다.)

韓国語の例文(251)，(252)の「안에，안으로」は，決まっている一定の時点や期限を表す．この場合，

時間の範囲を表す「안」は「ー에，-으로」しか取らず，「안」と格助詞との結合に制限があることが分かる．また，「속」との意味領域の重なりは見られない．日本語の例文(253)，(254)はいずれも「うち」と共起する．また，時間名詞ではないが，年齢による時期を表す「子供，小学生」といった名詞と「うち」が結合すると，一定の時間的範囲・期間を表し，格助詞によって終了の時点または始発の時点を表す．

韓国語と日本語の対応関係を見ると，(251)，(252)の「안에，안으로」は日本語の例文(253)の[うちに]と対応するのに対し，(254)の「うちから」は「안부터」ではなく，「때부터」と対応する．

このようなことから，時間の範囲を表す場合，一定の期限内という時間的限定の意味を現わす「안」は「うち」と対応関係を示すのに対し，時間の範囲を現わす「うち」は，「안」のほかに「사이，동안」などと対応する用法もあり，部分的対応関係を示す．

6.1.2. 類型②の前項の連語の対照

類型②の前項の連語が動詞の連体形である場合，「속」は以下の例文のように＜状況・状態の継続＞を表す．韓国語のコーパスから収集された用例を見ると，「속」の用例が 76 例検出されたが，格助詞による分布の差が大きく，「속에서，속에」を中心に現れる．なお，韓国語コーパス検索の結果では，＜状況・状態の継続＞を表す「안」の用例は収集されなかった．

＜状況を表す場合＞

（韓国語の例文）

(255) 제국주의 침탈이 심화되는 속에서 내적 개혁을 추진해간 세력들을 평가하는 문제와 연관되어 있다. ＜BB94Z007＞
(帝国主義の侵奪が深化するなかで内部的な改革を進めていった勢力を評価する問題と関連している．)

(256) 그렇지 않았던 사람들이 얼마나 어려운 속에서 공부를 해야 했는지, 나 한 사람의 경험으로써 능히 짐작이 가는 이야기다. ＜BB94Z007＞
(そうではなかった人達がどんなに困難ななかで勉強をしければならなかったか，ぼく一人の経験をもって容易に推察がつく話である．)

（日本語の例文）

(257) 需要が大幅に増加するなかで国内生産が低い伸びにとどまっているため…
＜OW3X_00098＞
(수요가 대폭 증가하는 가운데 국내생산이 낮은 성장에 머물러 있기 때문에…)

(258) くらいなかで耳をすました. ＜PB2n_00046＞
(어두운 속에서 귀를 기울였다.)

(255), (256)の「속에서」は，＜ある事態・状態が持続する中＞という意味を表わす．(255)はある事態が続く状況を表すが，この場合，連体節を伴う「속」は，助詞「－에서」と結合した形で＜事態が進行する空間＞の意味だけではなく，連体節のなかで進行する事態の継続という意味を表す．(256)は，前項の連語「貧しい」が「속」を修飾する関係となっているが，この場合，「속」は単独では正しく意味を実現することができず格助詞「-에서」と結合して「속에서」という形で初めて「貧しい状態」という意味を表す．また，韓国語コーパスの用例を収集して検討した結果，このような「속에서」は，ある事態・状況に対する否定的な判断を反映することが多く，特に感情・心理を表す場合，＜멋적다，쓸쓸하다，불안하다，어렵다＞等の否定的な動詞を用いることが分かる．韓国語でこのような＜状況・事態の継続＞を表す場合，「안」との意味領域の重なりは見られない．

日本語の場合，(257)の［なかで］は，主節の内容に反する対称的な状況の＜事態の進行・継続＞を表している．ある自然現象や状態，心理を表す動詞連体形と共起する(258)の［なかで］は，韓国語の「속에서」と対応するが，対称的な事態の進行・継続を表す(257)は韓国語の「가운데」と対応する．

このように＜状況＞を表す「なか」は，ある自然現象や状態・心理状態を表す場合は「속」と対応するが，主節の内容と対称的な状況の事態の進行・継続を表す場合は「가운데」と対応する．このようなことから，「속]と「なか」は，部分的対応関係を示すと言える．

＜時間的条件を表す場合 ＞

（日本語の例文）

(259) 手遅れにならないうちに産婦人科へ．＜OC09_05704＞
(늦기 전에 산부인과에.)

(260) 訪ねてくるお客様も一緒になって楽しむうちに夕食となった．＜PB37_00069＞
(찾아오는 손님도 하나가 되어 즐기는 사이에 저녁시간이 되었다.)

(261) 自分がまだ生きているうちに成果を見たいのだ．＜PB59_00400＞
(내가 아직 살아있는 동안에 성과를 보고 싶은 것이다.)

日本語の場合，(259)，(260)，(261)のように動詞の連体形と「うち」が結合して＜一定の期間内，時間の経過＞を表すことができる．しかし，(259)，(260)，(261)の「うち」は，ある状態や条件が続く期間を意味する＜時間的条件＞を表し，そのときの時間または期間の認識には，主観的な判断が介入するのが特徴的で，時間名詞と共起して客観的な時間の範囲を表す用法とは異なる．このような「うち」の意味領域は，(259)，(260)，(261)の韓国語訳に見られるように，「전(前)，때(内)，동안/사이(内)」に細分化する対応関係を示す．それに対し，「韓国語コーパス」からは動詞連体形を伴う「안」と「속」の連語構成が＜時間的条件＞を表す用例は収集されなかった．

このように，「うち」は，韓国語における「전，때，동안/사이」といった時間的限定の意味領域を表す語彙と対応し，「안，속」とは対応関係が成立しない．

6.1.3.「안，속」と「うち，なか」の対照のまとめ

「안，속」と「うち，なか」の意味領域を対照して得られた結果をまとめると，次の通りである．

1) 韓国語の「안」と「속」は，基本義である具体空間，身体空間，観念的な抽象空間の意味領域では重なる部分があり，実際の言語使用の場では混用の様子も見られる．この場合，「안」と「속」の主な弁別要素は，共起する前項・後項の連語の＜開放性，可視性，密集性，範囲限定＞である．
2) 日本語の「うち，なか」は，基本義である具体空間の意味領域では重ならない．具体空間を表す韓国語の「안」と「속」は両方とも「なか」と対応し，韓国語の方が日本語より空間をより細分化して表現しようとする傾向が見られる．
3) 先行名詞が抽象的な心理空間を表す場合，韓国語は主に「속」と共起する．日本語の場合は「なか」と共起する頻度がはるかに高いが，先行名詞が観念的・客観的な意味領域を表す場合は「うち」とも共起することがあるが，一部の格助詞との結合に限定され，部分的な意味領域の重なりが見られる．日本語の場合，身体名詞でありながら抽象化して感情・心理を表す「胸」は「うち，なか」のいずれとも共起するが，結合する格助詞によって頻度の差が大きい．
4) 具体的な状況や抽象的な状況を表す場合，韓国語では「속」を，日本語では「なか」を用いる．
5) 時間の範囲を表す場合，韓国語と日本語のズレが目立つ．日本語では主に「うち」を，韓国語では「중，때，전，동안/사이」となり，内部空間名詞の間の対応関係が成立しない．
6) 範囲を表す場合，韓国語においては「안에，안으로」と言った形態で数量の範囲を表すが，集合の範囲，比較対象の範囲を表す場合は，「안」ではなく「중，가운데」が用いられる．それに対し，日本語の「うち」は数量の範囲，集合の範囲，比較対象の範囲を表し，「なか」は集合の範囲，比較対象の範囲を表す．「うち，なか」の意味領域の重なりが見られる範囲限定の用法においては，「うち」は範囲限定の条件や集団の構成要素を明確に限定するのに対し，「なか」はより広い範囲の集団・集合を対象とする傾向が見られる．
7) ある条件が続く期間を意味する時間的条件を表す場合，「うち」は「전，때，동안/사이」と対応し，「안，속]とは対応しない＜対応不成立の関係＞を示す．

これまで韓国語と日本語の内部空間名詞を対照して得た結果を，下記の表 50 に示す．表における記号の説明は，次の通りである．

- 表のなかの記号のうち「＞，＜」の表示は，コーパスから収集された用例数の多少を示す（開かれた方の用例数が多い）．
- 「⊃，⇔，⊂」の表示は，一方では複数の用法があり，他方では単一の用法がある場合，その包括の方向を示す．開かれた方が複数の用法を意味し，⇔は対応関係を示す．
- 「N」は，前項の連語となる先行名詞から抽出された弁別基準を表し，「V」は，後項の連語となる用言，補語，対象語などから抽出された弁別基準を意味する．
- 網掛の部分は，研究対象である内外空間名詞に含まれていないものを示す．

表 50.「안，속」と「うち，なか」の意味領域の対照

前項の要素			韓国語		「안，속」と「うち，なか」の対応関係	日本語	
形態	先行名詞の意味領域		先行名詞＋(안/속)	弁別要素		先行名詞＋(うち/なか)	弁別要素
先行名詞	具体空間	場所空間	방（안） 감옥(속) 집(안＜속)	(N/V) 開放性 閉鎖性	⊂	部屋(なか) 牢獄(なか) 家（なか）	
		自然物空間	산（속）		⇔	山（なか）	
		具体物空間	상자(속＞안) 차（안＞속）	(V) 可視性 開放性	⊂	箱（なか）	
		身体空間	몸（속＞안） 입（안＞속） 머리(속)	(V) 空間性 密集性 閉鎖性	⊂	体（なか） 口（なか） 頭（なか）	
	抽象空間	観念的抽象空間	사회(속＞안)	(V) 空間性 範囲限定	⊂	社会(なか)	
		心理的抽象空間	마음(속)		⊃	心（うち） 心（なか）	(V) 主観的・心理的 客観的・観念的
	範囲	集合範囲	예산(안)		⇔	予算(なか)	(N/V) 集合全体
			가운데，중		⊃	応募者(なか) 満たす者(うち)	(N/V) 集合全体 集合の構成要素
		量的範囲	명,등,리(안)		⊂	~人/~位(うち)	(N)基準，程度
			~명(가운데,중)			人　（うち）	(N)数量
		比較範囲	(가운데,중)		⊃	うち うちで，なかで	
	状況		빈곤(속)		⇔	なか	
	時間		시간(안)		⊂	時間（うち）	
			~학생(때)			子供（うち）	
用言の連体形	状況		어두운(속) 내리는(속)		⊂	暗い(なか) 降る(なか)	
			증가하는(가운데)			増加する(なか)	
	時間		젊을(때,전,동안)		⊂	若い（うち）	

6.2.「밖，겉」と「そと，おもて」の意味領域の対照

本節では，「밖，겉」と「そと，おもて」を対照する．まず，第4章と第5章の分析の結果を基に，韓国語と日本語における[밖＋格助詞，겉＋格助詞]，[そと＋格助詞，おもて＋格助詞]の連語構成の現れ方を簡単にまとめて対照すると，次の通りである．

韓国語コーパスの「밖，겉」の現れ方をみると，「밖」は3,601例，「겉」は203例あり，「겉」の用例数が極めて少ない．さらに，「겉」の場合，先行名詞を伴う用例は4例にとどまり，「밖，겉」の共通の先行名詞もない．

一方，日本語コーパスの「そと，おもて」の現れ方をみると，先行名詞を伴う「そと＋格助詞」の用例が1,411例あったのに対して，先行名詞を伴う[おもて＋格助詞]の用例は極端に少なく，47例しか収集されなかった．また，格助詞との結合の様相を見ると，[そと＋格助詞]の場合，二格の用例が44%と用例数が最も多く，次いで「ノ＞デ＞オ＞ヘ＞カラ＞マデ＞ガ」の順となっている．それに対し，「おもて」の場合，二格の用例が最も多く収集されたが，ノ格とマデ格の用例は一例も収集されなかった．

「밖＋格助詞，겉＋格助詞」，「そと＋格助詞，おもて＋格助詞」の先行名詞の現れ方を見ると，韓国語の場合は，「겉」の先行名詞があまり収集されなかったのに対し，日本語の場合は「そと，おもて」に共通して用いられる先行名詞が少数ではあるが存在するなど，韓国語の外部空間名詞「밖，겉」とは異なる点がある．例を挙げると，同じ場所名詞であっても，「家，店，ビル」といった一部の場所名詞は「そと，おもて」に共通して現れ，「窓，門，部屋」といった名詞は「おもて」とは共起しない．

一方，後項の連語として現れる動詞をみると，「밖，겉」はともに「드러나다，나타나다」といった出現動詞，「있다」といった存在動詞，「보다，보이다」といった視覚動詞と共起して＜視覚の空間，出現の空間，存在の空間＞を表すという共通点はあるが，さらに細密に分類すると，「밖」は＜立体空間，活動の空間，社会的空間＞を表すのに対し，「겉」は＜平面空間，変化の空間，個人的空間＞を表し，意味領域の重なりは限定的である．さらに，「밖」は移動動詞と共起して＜移動＞の空間を表すことができるのに対し，[겉」は移動動詞とは共起せず，出現動詞との共起のみ見られる．

日本語の場合は，「そと，おもて」ともに「出る，出す」といった移動動詞，「表す，現す」といった出現動詞と共起する頻度が高く，「そと」と「おもて」は意味領域の重なりが見られる．また，日本語の「そと，おもて」は共通して視覚動詞や聴覚動詞と共起し，視覚的・聴覚的意味領域の重なりが見られるのに対し，韓国語の「밖，겉」の間には視覚動詞のみ共通して現れる．

6.2.1.「밖」と「そと」の連語構成の対照

以下では，「밖」と「そと」の連語構成を中心に，外部を表す空間名詞の意味領域を対照し，その対応関係を記述する． まず，類型①の先行名詞を意味によって分類した結果を基に，具体空間と抽象空間に大別して韓国語と日本語の外部空間名詞の意味領域を対照する．以下の例文の一部には，これまでの内容から再引用されたものがある．

具体空間を表す場合

先行名詞が具体空間を表す場合，＜場所名詞＞と＜境界物空間＞に分けて考察する.

＜場所空間＞

(韓国語の例文)

(262) 문 밖에 서 있는 것은 어머니가 아니라 호랑이다. ＜CH000111＞

(門のそとに立っているのは，お母さんではなく虎だ.)

(263) 방 밖을 잠시 이리저리 살피더니… ＜CE000073＞

(部屋のそとをしばらくあちこち見まわしてから…)

(日本語の例文)

(264) 二人がいそいそと肩を並べて門のそとに消えた. ＜PB29_00350＞

(둘이 부랴부랴 어깨를 나란히 하고 문 밖으로 사라졌다.)

(265) 夜中に騒がしい物音がおこっても、部屋のそとに出られてはなりません. ＜PB19_00052＞

(밤중에 소란스러운 소리가 나더라도, 방 밖으로 나가시면 안됩니다.)

(262)の先行名詞「방」と共起する[밖」は，三次元の立体的な場所空間であり，「호랑이」が立っている存在の空間を示す. (263)の「밖」は同じく具体的な場所空間で，「살피다」という動作の対象となる視覚的空間を意味する. (264)，(265)の「そと」は先行名詞「門，部屋」と結合し，出入りのできる移動空間であることを表す. このような具体的な立体空間，場所空間を表す「밖」と「そと」の意味領域は一対一の対応関係を示す.

＜境界物空間＞

(韓国語の例文)

(266) 경찰관은 창 밖으로 뛰쳐나가 간신히 목숨을 건졌다. ＜CB000133＞

(警察官は窓のそとに飛び出して，かろうじて命を救った.)

(267) 볼이 골라인 밖으로 나갔습니다. ＜CH000086＞

(ボールがゴールラインのそとに出ました.)

(日本語の例文)

(268) (勢いあまってラインのそとに出たときなどに)ファウルを受けたらどうなるんですか.

＜OC06_01923＞

(기세가 넘쳐서 라인 밖으로 나갔을 경우 등에 파울을 받으면 어떻게 됩니까?)

(269) 窓のそとに広がっているのは，索漠とした都会の町．　＜LBl8_00018＞
(창 밖에 펼쳐진 것은，삭막한 도회의 거리.)

(266)の「밖」は「창」という二次元の境界物によって区分された空間で，三次元の具体的な空間であり，後項の連語によって飛び出したり，出ることのできる移動の空間である．(269)の「そと」も「窓」を境界物とする三次元の具体的な空間で，後項の連語により存在の空間であると同時に視覚的空間となる．「밖」と「そと」は一対一の対応関係を示し，意味領域のズレは見られない．(267)の「골라인」と(268)の「ライン」という境界を超えた「밖，そと」は，線という一次元の境界線，一定の基準となる地点を超えた二次元，平面的な具体空間で，移動の空間である．このような境界物となる場所名詞・具体名詞を伴う具体空間を表す「밖，そと」の意味領域は一対一の対応関係を持つ．

(韓国語の例文)
(270) 문 밖에서 엿듣던 오사장은 헛기침을 하며 인기척을 냈다．．＜BEXX0024＞
(門のそとで立ち聞きをしていたオ社長は，咳ばらいをして人の気配を出した．)

(日本語の例文)
(271) 窓のそとでジェット機の爆音が聞こえた．　＜LBk9_00039＞
(창 밖에서 제트기의 폭음이 들렸다.)

(270)の「밖」と(271)の「そと」は，音や事件，出来事が発生し，なかに聞こえたり，見えてくる空間で，状況・状態・変化の空間である．(270)では，なかの音が「밖」に伝わり，(271)では「そと」から音や動き等が「なか」に伝わってくる空間である．このようなことから，知覚的空間を表す場合，韓国語の「밖」と日本語の「そと」は一対一の対応関係を示し，意味用法のズレは見られない．

上述した場所空間，境界物空間として，存在空間，移動空間，知覚空間を表す「밖」は「そと」と意味領域が重なり，対称の対応関係を示す．

抽象空間を表す場合

抽象空間を表す先行名詞と結合する場合，＜概念的抽象空間＞，＜社会的抽象空間＞，＜身体的抽象空間＞に分けられる．

＜概念的抽象空間＞

(韓国語の例文)
(272) 작품 밖에 존재하는 모든 것에 대한 새로운 진술을 요구하는 것.
＜BHXX0066＞

(作品のそとに存在する全てのことに対する新しい陳述を求めること.)

(日本語の例文)

(273) 三大都市圏のそとでは, 圏内における市街化区域とそれ以外の区域の差ほど大きな差がない点を指摘できる. ＜OW1X_00334＞

(3대 도시권 밖에서는 권내의 시가화구역과 그밖의 구역의 차이만큼 큰 차이가 없다는 점을 지적할 수 있다.)

(272)の「밖」は, 具体物としての＜作品の外部＞の空間を意味するのではなく, 作品の内容に属しない抽象的な外部空間を表す. (273)の「そと」は, 実際の境界線によって取り囲まれた具体空間ではなく, 概念的な抽象空間を表す. このように, 作品, 映画など具体的な形状を持ちながら一方で内容は抽象的なものとして存在する事柄名詞が先行名詞として伴う場合, 韓国語の「밖」と日本語の「そと」は一対一の対応関係を示し, 意味領域のズレは見られない.

＜社会的抽象空間＞

(韓国語の例文)

(274) 나라 밖에서 본 국내의 사정은 명확하지 않아 답답할 때가 많았다. ＜CH000087＞

(国のそとで見た国内の事情は明確ではなく, もどかしいと感じるときが多かった.)

(日本語の例文)

(275) 夫はそとで働き, 妻は家庭を守る. ＜OW6X_00516＞

(남편은 밖에서 일하고 여성은 가정을 지킨다.)

(274)の「밖」は, 「国」といった社会的集団・範囲を離れた社会的抽象空間を表し, そのときの「そと」の空間は, 具体空間と同様に移動, 活動, 営為, 存在, 視覚的活動のできる空間であり, 韓国語と日本語の意味領域のズレは見当たらない. (275)の「そと」は, 「家庭」など社会的集団・範囲に対立する概念としての「そと」の空間で, 韓国語の「밖」と同様に, 移動, 活動, 営為, 存在, 視覚の空間であり, 「밖」との意味領域のズレは見当たらない. このようなことから, 社会的抽象空間を表す「밖」は, 「そと」は対称の対応関係を示す.

＜身体的抽象空間＞

(韓国語の例文)

(276) 할아버지 앞에선 감히 그런 소리란 입 밖에 내지 못하던 필재였다.＜AE000400＞

(祖父の前ではあえてそのようなことは口に出すこともできなかったピルゼだった.)

(277) 관의 사람들 눈 밖에 나도 안 되겄지마는 사실은 옛날하고 우린 다르단 말입니

다. ＜BEXX0004＞
（官吏に睨まれてもだめだけと，実は，我々って昔とは違うんです．）

(276)，(277)は身体名詞と「밖에」の連語構成が慣用表現となったものである．個別の語彙が表していた本来の意味，「身体」を表す空間的意味は薄くなり，抽象的な意味を表すようになったため，「そと」の意味領域とのズレが大きい．本来空間名詞が表していた空間的意味が薄れたり，失われ，抽象的な意味に転じたり，固まった表現になる場合，基本義は薄くなり，抽象的・心理的空間を表すことになるが，韓国語の「밖」は否定的な意味を表すことが多い．

また，慣用表現として固まったため格助詞との結合にも制約が現れ，「눈 밖을，입 밖을」のように助詞を入れ替えると意味が成立しない．具体的な身体空間を表す場合は「밖」と「そと」の対応関係が成立するが，このような身体的抽象空間を表す場合は，「밖」と「そと」の対応関係は成立しない．

6.2.2.「겉」と「おもて」の連語構成の対照

次は「겉」と「おもて」の連語構成を見てみよう．［겉」はほとんど先行名詞を伴わないことから，中心語の後項の連語として現れた動詞を中心に分析を進める．

具体空間を表す場合

＜具体物空間・自然物空間＞

（韓国語の例文）

(278) 겉에 바른 니스가 […] 들떠있고，먼지가 거멓게 앉았다.＜BEXX0009＞
（表面に塗ったニスが[…]浮き上がり，ほこりが黒く積もっている．）

（日本語の例文）

(279) 波の表には,きらきらと光がきらめいている． ＜PB39_00229＞
（파도 표면에는 반짝반짝 빛이 빛나고 있다）

(278)の「겉」と(279)の「おもて」は同じく＜表面＞という具体空間を表すが，日本語の場合，ある物体の＜表面＞を表す用例はあまり収集されなかったが，得られた用例は「月，池，沼，水」といった自然物の表面を表すことが多かった．それに対し，韓国語の場合は，「달，연못，늪，물」といった外部に面した部分を「겉」というのではなく，「표면」を用いることが多い．このようなことから，ある物体のそとに向けた面を表す場合，「겉」と「おもて」の意味領域にズレが見られ，一対一の対応関係を示さない．

＜場所空間＞

韓国語の「겉」は二次元の平面的な空間であり，場所を表すことはない．以下では，場所空間を表す「おもて」の例文とそれに対する韓国語訳を見ていく．

（280） やがて，病院の窓ガラス越しにおもてを眺めているらしい写真が，新聞に載った．
＜PB39_00276＞
（얼마 안 있어 병원 창문 너머로 밖을 바라보는 듯한 사진이 신문에 실렸다.）

(281) すると，そのとき，おもてで「トン，トン」と戸をたたく音がしました．＜PB2n_00135＞
（그러자 그 때，밖에서 쿵쿵하는 두드리는 소리가 났습니다.）

(282) パトカーがキキーッと停まり，警官がひとり，おもてに出た．＜LBg9_00018＞
（경찰차가 끼익하고 멈춰서자，경찰관이 한 명 밖으로 나왔다.）

(283) 大抵の部屋の表には、金盥と洗濯板が立てかけてある.＜LBk9_00277＞
（대부분의 방 앞에는 놋대야와 빨래판이 기대어 세워져 있다.）

(280)，(281)，(282)の「表」は外の立体的な空間を表す．(280)の「おもて」は，窓を境界とする「そと」の空間で，視覚的空間でもあり， 韓国語の「밖」と対応する．一方，(281)の「おもて」は，その空間のなかで音を出したり，戸をたたいたりする活動のできる立体空間・聴覚の空間で，(282)の「おもて」は車のそとの空間を表し，韓国語の「밖」と対応する．また，(283)のように「おもて」は物を置いたり，人々が活動する存在の空間でもある．

このように，日本語の「おもて」は具体的な場所空間，視覚・聴覚的空間，活動の空間，移動の空間を表すのに対し，「겉」は平面の空間，表面という意味を表し，立体的な場所空間を表さない．

(284) 出入り口が一つしかないことをウェイターに確認して，そとで待つことにした．(182 の再掲)
（출입구가 하나 밖에 없다는 것을 웨이터에게 확인하고 밖에서 기다리기로 했다.）

(285)「近くにいるらしい．表で待とう」パブのそとに出た．(183 の再掲)
（「가까이 있는 것 같아. 앞에서 기다리자. 」술집 밖으로 나갔다.）

(284)の「そと」は，「うち」と「そと」の境界である出入り口を出たその先の空間を指し，特に範囲を限定していないのに対し，(285)の「おもて」は「パブ」から離れていない，正面という方向と範囲が決まっている空間で，「そと」の一部分ではあるが，範囲の限定された空間である．また，韓国語との対応関係を見ると，(283)，(285)のように前面の空間であることが明確である場合は，「앞」と対応するが，それ以外の場合には「밖」と対応する．

抽象空間を表す場合

(韓国語の例文)

(286) 패션 모델들도 겉에서 보는 것과는 달리 매우 고달픈 직업이다.＜BHXX0050＞
(ファッションモデルもそとから見るのと違って，大変しんどい職業だ．)

(日本語の例文)

(287) 日本人はよく内気だ，なかなか本心をおもてに現わさない，といわれますが…
＜LBe3_00050＞
(일본사람은 내성적이다, 좀체 본심을 겉으로 드러내지 않는다고 합니다만…)

(288) 金田一耕助はこれを読んでも，かくべつなんの興味もおもてにあらわさなかった．
＜OB0X_00001＞
(긴다이치 고스케는 이것을 읽고도, 별반 어떤 흥미도 겉으로 보이지 않았다.)

(286)の「겉」は，外から見える外見という意味で，＜表面的，実際と異なる＞という否定的な意味を表し，(287)，(288)の「おもて」も人や世間に見せるための表面的な部分という抽象的空間を表す．韓国語の場合，「드러내다，나타나다」といった出現動詞や「보다，보이다」といった視覚動詞と結合することが多く，表裏の断絶，不通の空間で，主に感情等を表す心理的抽象空間である．日本語の場合も，「出す，現れる，見る」といった動詞と結合し，(286)の「겉」と(287)，(288)の「おもて」は意味領域の重なりを見せる．

6.2.3.「밖，겉」と「そと，おもて」の対照のまとめ

これまで，「밖，겉」と「そと，おもて」の意味領域の重なりとズレの考察を通して，韓日両言語の対応関係を記述した．その結果をまとめて，以下に示す．

1) 「밖」の意味領域は＜具体空間＞と＜抽象空間＞に大別することができる．
「밖」の具体空間は，先行名詞の意味上の分類によって三次元立体の場所空間，三次元立体と二次元平面，一次元の線を含む境界物空間に分類し，さらに後項の連語によって移動空間，知覚空間，活動空間，存在空間に分けることができる．このような具体空間を表す「밖」は具体空間を表わす「そと」と対応関係が成立する．
2) 「밖」の抽象空間は，先行名詞によって概念的抽象空間，社会的抽象空間，身体的抽象空間に分類し，さらに後項の連語の意味特性によって細分類される．概念的抽象空間は存在空間，移動空間，表示空間，活動空間に，社会的抽象空間は具体空間と同様に細分類され，身体的抽象空間は表示空間に限定される．概念的抽象空間と社会的抽象空間の場合は，「そと」と対応関係にあるが，身体的抽象空間は，対応関係が成立しない．
3) 「겉」の意味領域は平面の具体空間と抽象空間に大別することができる．
「겉」の連語構成はほとんど先行名詞を伴わないため，後項の連語の意味特性によって空間的意味領域を分類した．具体空間は，付着，発生，視覚，触覚，不可視の空間を表し，「おもて」とは

意味領域のズレがある．また，「겉」と「おもて」が共通して二次元の平面やモノの表面を表す場合，「겉」は具体物の表面を表すのが普通であるが，「おもて」は具体物より自然の表面の状態を表すことが多く，その空間的性質が異なるという面で，意味領域のズレが見られる．

4) 「겉」の抽象空間は，主体自身が人や世間に向けて見せようとする表面的空間で，表裏の断絶，否定的空間であり，主に感情等を表す心理的抽象空間を表す．それに対し，「おもて」の連語構成が表す抽象空間は，心理的抽象空間と社会的抽象空間に分類することができる．心理的抽象空間の場合は，「겉」と「おもて」は意味領域が重なり，対応関係にある．社会的抽象空間を表す「おもて」は社会の前面に出るといった肯定的な意味を表し，「겉」とは対応関係が成立しない．

5) 具体空間を表す「밖」は具体空間を表す「そと」と「おもて」の意味領域と重なり，包括の対応関係を現わす．日本語の場合，内部の空間に対立する外部の空間としての「そと」は特に範囲を制限しないが，「おもて」は「そと」の一部分であり，「うち」と「そと」の境界線から離れていない空間を示し，韓国語の「밖」と対応するが，方向や位置を指定する成分と結合する場合は「앞」と対応する．

これまでの韓国語と日本語の外部空間名詞「밖，겉」と「そと，おもて」の分析の結果を，下の表51に示す．

表 51.「밖，겉」と「そと，おもて」の意味領域の対照

	「밖」の意味領域	対応語	「そと」の意味領域	対応語
具体空間	1-1) 立体の具体空間. 1-2) 平面の具体空間.	そと	1)~8) は「밖」の意味領域と対応する.	밖
	2) 移動空間・通過・拡散の空間.			
	3) 境界物や境界線から離れた空間. 方向の制限を持たないが空間.			
	4) 動作・活動の空間.			
	5) 状況・状態の生起・変化の空間.			
	6) 存在の空間.			
	7) 視覚と聴覚の空間，＜可視性＞の空間.			
	8) 具体名詞の＜モノ性＞を＜空間性＞に.			
	9) 具体空間を表す「겉」と意味領域の重なりはない.		9) 立体空間の「おもて」を包括し，「おもて」より範囲の広い，開かれた空間.	
抽象空間	10) 感情・心理の抽象的空間では客体志向性を表す.	そと・おもて	10) 心理・感情の抽象空間では客体志向性を表す.「밖」と部分的に対応.	밖
	11)活動の空間（社会的抽象空間）	そと	11)の活動空間は「밖」と対応する.	밖
	「겉」の意味領域	対応語	「おもて」の意味領域	対応語
具体空間	1) 立体や平面の具体物の表面.	表面	1)平面・立体の具体物の表面.	표면
	2)平面的具体物の前面. 主となる面.	おもて	2-1) 平面の具体物の主となる部分. 2-2) 立体の具体空間の前面. 立体の具体空間の正面	앞면 앞 정면
	3) 生起の空間.	表面	3) 存在の空間	
	4) 付着・密着の空間.		4) 平面の場合，付着の空間	
	5) 視覚・触覚の空間.（外から表面に向けての作用）		5-1)平面の場合：視覚・触覚の空間. 5-2)立体の場合：視覚・聴覚の空間（外から中に向けての作用）	겉 표면 앞・밖
	6)「겉」自体の性質・状態変化を伴う空間.		6)「おもて」自体の性質・状態の変化は見られない.	
	7)表裏の断絶・不通の空間.		7-1)平面の場合は＜断絶・不可視の空間＞. 7-2) 立体の場合は＜非断絶・移動可能の空間＞ 8)立体空間は方向と範囲が限定される.	앞면 앞・밖 앞・밖
抽象空間	9)感情・心理を表す空間.	うわべ みため	9) 感情・心理を他者に見せる面.	겉
	10)否定的価値判断.		10)社会的な空間の場合，肯定的価値判断.	ー

第7章　韓日内部空間名詞における語彙性と文法性の対照

第4章から第5章までは韓国語と日本語における内外空間名詞の意味用法を記述し，第6章では，その結果を基に韓国語と日本語における内外空間名詞の意味用法を対照し，その類似点と相異点を記述した．その結果，韓国語と日本語の内外空間名詞は，基本的意味である具体空間の意味領域から抽象空間の意味領域への意味拡大が顕著であること，その意味拡大の範囲や程度等は，同一言語の中でも個別の空間名詞によって差があることを計量的分析の結果として示した．また，空間名詞の意味が基本的な意味から抽象的な意味に拡大していくにつれ，基本的な意味の段階では成立していた類義関係や対義関係が抽象化が進行した段階ではズレが生じたり，対応関係が成立しなくなり，他の語との結合関係に制約が生じることを例を通して示した．

このように韓国語と日本語における意味上の変化は，韓日両言語の対照を通してより鮮明に把握することができる．韓国語と日本語の空間名詞は語彙の体系や意味用法に類似するところが多く，一対一の対応関係を現わすことも多いが，これまでコーパスから収集した資料を分析した結果を見ると，基本的な意味から抽象的な意味に転移していくにつれ，意味領域の対応関係にズレが生じることも少なくない．このような意味拡大は，語彙的意味の変化に留まることもあるが，語彙的範疇から文法的範疇への文法化につながることもある．韓国語と日本語の相対空間名詞においても，意味の抽象化による，実質名詞から依存名詞（日本語の場合は形式名詞．以下では両方合わせて依存名詞とする．）への変化，語彙性の希薄化[72]や文法性の増大とみられる現象があることが指摘されている．

本章では，韓国語と日本語の内部空間名詞「안,속」と「うち，なか」について，意味拡大による語彙的面と文法的面の変化を考察し，韓日両言語を対照する．

本論に入る前に，文法化に関する本研究の立場を述べた後で具体的な議論を行う．本来文法化というのは通時的な概念であり，通時的な変化の蓄積の結果物である．しかし，本研究は共時的な観点で論を進めるため，通時的な現象である文法的変化をどう把握し，どう記述するかについては踏み切った議論に至っていない．そこで，通時的現象である文法化を，時間の流れによって縦の面から見るのではなく，現在という時点を横に切り取り，その断面を観察する方法を取る．その断面を見ると，既に文法化が完成した形態，文法化が現在進行している形態，文法化への変化が始まった形態など，連続線上に現れる様々な段階の文法化の形態や構成が共存することになるが，そのうちの一つとして現れる内部空間名詞の語彙的・文法的変化の様相を捉えて記述する．

7.1. 空間名詞の意味拡大と文法化について

7.1.1. 文法化に関する本研究の立場

文法化とは，もともと名詞や動詞など語彙的範疇に属するものが語彙的要素を失い，前置詞や接続詞，

---

[72] 日野（2001）は，Heine and Reh(1984)に基づき，意味変化の分類として，抽象化（具体的な意味がなくなり，抽象的な意味が現れること），抽出化（意味の部分的喪失），意味の希薄化（意味の喪失）の三つの段階を示した．

接辞といった文法的機能を担う文法的範疇へ変化していく過程である[73].

『言語学大辞典(1996:1193－1196)』では，文法化について「自立的，語彙的な形式が一定の文法的機能を担う形態素，すなわち文法形式(grammatical form)に変わるような言語変化のこと」とし，「このような文法化のプロセスは，音韻，形態，意味という言語の三つのレベルの変化が密接に関連した複合的な現象である．すなわち，音韻レベルでは，単語の発音の弱まりと縮小，意味レベルでは，自立的な単語に備わる具体的(すなわち語彙的および語用論的)な意味の弱化と抽象的・文法的な意味の獲得，形態・統語レベルでは，問題の言語形式の単位と構造に関する固定，縮小，圧縮，というような形で顕現する．」と記している．Heine et a1.(1991)では，具体的な領域から抽象的な領域への移動が文法化の基本原理であることを指摘したうえで，人>物＞行為＞空間＞時間＞質の順に意味領域が移動するとし，このような文法化現象は汎言語的であることを指摘した．

このように意味の抽象化が起こっている場合でも，依然として語彙的性質を保ち，多義語として語彙的範疇にとどまるものもあり，語彙的意味の抽象化に留まらず，語彙としての自立性を失い，文法的機能を担う，形態・統語的側面の変化を経て，文法範疇になるものもある．一般的に文法化の研究では，通時的変化の結果として文法範疇に移動したものに限って文法化と認め，研究の対象にしている．このような観点からすれば，名詞の文法化は，具体性から抽象性への意味拡大の段階を経て，ある名詞が自立性を喪失して依存名詞化し，最終的には語尾等の文法素となることに限定される．

しかし，文法化の過程は，次第に変化していく漸進的な一連の変化[74]であり，その過程には中間的な段階がいくつも存在し得る．このように，文法化の最終的な段階である文法素には到達していなくても，語彙的意味の変化による文法的変化に向けた過程にあると認められる現象も文法化現象として捉え，文法化の範囲に入れようとする立場[75]もある．이성하(1998:55)は，文法化をより広く認める立場を示し，「厳密に言って，あらゆる言語形態は，語彙的地位から外れると同時に，それらの変化は全て文法化であるということができ，このときの言語形態は全て文法素に当たる」としている．안주호(1997)は，「文法化とは，主に語彙的機能をしていた語が文法的機能をするか，または文法的機能をする形態の一部になること，あるいは，あまり文法的な機能を持たないものから，より文法的な機能を持つものに変化する現象である.」とし，文法化を「完成したもの」に限定する既存の研究とは異なる立場を取っている．また，文法化の過程

---

[73] Hopper and Traugott(1993)による．Hopper and Traugott(1993:8)はまた，文法化は，通常通用される語彙項目が文法的な項目になる言語学的変化，あるいは，文法的な項目がさらに文法化する言語学的変化の一部であるとしている．

[74] Hopper and Traugott(1993)は，文法化に関する研究の基本原理は「連続変異(クライン)」の概念であるとし，変化の観点から見ると，ある形態は，急激にある範疇からほかの範疇に変換されるのではなく，漸進的に一連の変化を受けるとしている．また，「連続変異」という用語は，歴史的な面では，形態の進化による自然的な経過であり，共時的には，一方の端にはより完全な形態の「語彙」が存在し，その反対側には凝縮された縮約的な「文法形態」が存在する，架空の境界線に沿う複数の形態の配列の連続体であるとした．

[75] 文法化の範囲をより広く捉えた研究として，韓国語学では，안주호(1997)が挙げられる．안주호(1997)では，完全に文法化していない依存名詞の段階も文法化の過程として捉え，研究の対象としている．また，砂川有里子(2000)は，「文法化」とは，実質的な意味を持つ語が機能語へと変化することで，空間を表す動詞や名詞の時間表現への変化もその一つであるとした．

において，ある形態の語彙的意味と文法的意味はある程度相関関係があり，語彙的意味が減少すると，文法的意味が拡大するようになるが，明白に分断された境界があるわけではなく，度合いの問題であることを強調している．

안주호(1997:39-41)は，文法化の過程を大きく「自立的語彙素＞依存的語彙素＞接語＞語尾・助詞・接尾辞」の過程であるとしたうえで，「文法化現象」と言われている文法化の進展の度合いを三つの段階に分けて提示している．第一段階は自立的語彙素が多義化して依存的になる段階であり，本動詞から補助動詞に，自立名詞から依存名詞になる段階であるとし，第二段階は補助動詞や依存名詞が前後の要素と結合して依存度が高くなり，制約的に用いられる接語(clitic)になる段階であるとし，第三段階は融合により語尾・助詞・接尾辞といった完全に異なる範疇になる段階であるとした．このような議論に関連して，안주호(1997:52, 54)によって提示された「文法化の三段階の特性」の表と「文法化の三段階」の表を，筆者により改変し，下の表52に示す．

表 52. 文法化の三つの段階とその特性-안주호(1997:一部改変)

<table>
<tr><td>文法化の三段階
文法化の特性</td><td>文法化の第一段階
依存名詞化</td><td>文法化の第二段階
接語化</td><td>文法化の第三段階
語尾・助詞・接尾辞化</td></tr>
<tr><td></td><td>統辞的構成</td><td>形態・統辞的構成</td><td>形態的構成</td></tr>
<tr><td rowspan="2">統辞的構成の場合</td><td rowspan="3">依存名詞化</td><td>終結部分に現れる接語構成</td><td>終結語尾
先語末語尾</td></tr>
<tr><td>連結部分に現れる接語構成</td><td>連結語尾</td></tr>
<tr><td>単一形態の場合</td><td>助詞の機能をするもの
接辞の機能をするもの</td><td>助詞
接辞</td></tr>
<tr><td colspan="4">文法化の側面と特性</td></tr>
<tr><td>音韻的な面</td><td colspan="3">自立的語彙素とは異なる音韻論的変化の傾向を見せることもある．/
融合が行われる．</td></tr>
<tr><td>形態的な面</td><td colspan="3">次第に，より依存的/制限的/固定的に用いられるようになる．</td></tr>
<tr><td>統辞的な面</td><td colspan="3">統辞的制約が多くなる．/新しい機能が派生する．</td></tr>
<tr><td>意味的な面</td><td colspan="3">有縁性が薄くなる．/新しい意味が派生する．
物理的/客観的意味 -----→ 抽象的/主観的意味
物理的空間 -------→ 時間的空間 -------→心理的空間</td></tr>
<tr><td>べた書き・挿入の可否</td><td colspan="3">助詞や副詞の挿入が不可能になる/べた書きの完成</td></tr>
<tr><td>抽象化のメカニズム</td><td colspan="3">隠喩 ----------→
再分析/類推 ——————————→
融合</td></tr>
</table>

上記の表の文法化の段階からすると，韓国語の相対空間名詞の場合，「밖」のほかに文法化が完結したと見られるものはない．안주호(1997)では，現代韓国語における名詞の助詞化について，潜在的に関

係的意味を表していた「関係的名詞」としての意味が拡大し，本来副詞句を形成していたものが先行名詞とより強く結合して後置詞になり，更に助詞になる過程を経るのが普通であるとし，助詞となり得る依存名詞は主に「場所」を表す名詞のうち，具体性を持つ語彙が多いと指摘し，これらの名詞が助詞化する過程で，場所的空間を表していたのが心理的空間を表すようになり，さらに，話者の主観的判断を表す様態の意味を持つようになるとした．そのような例として，統辞的な構成であったものが，融合により単一の形態である助詞となった「밖에」を取り上げ，文法化第二段階の助詞の機能をするものの例として挙げている．

本研究の対象である韓国語の内部空間名詞「안」と「속」の場合，語彙的意味の面では抽象化が進むが，心理的な空間への変化や主観的意味を表す段階に留まっている．文法的な面の変化としての名詞の範疇の変化，あるいは形態的・統辞的変化には繋がらず，依存的用法への変化や他の語彙や助詞など文法要素との結合の制約が現れる程度であるため，既存の「文法化」の観点からすれば，まだ文法化の対象範囲に含まれない段階である．しかし，本研究では，これまでの韓国語と日本語の内外空間名詞の意味領域の分析と対照を通して，名詞の文法化の初期段階と取られる語彙的意味の抽象化と文法的な面の変化を見て取ることができた．さらに，内外空間名詞のうち，「밖」の文法化の過程に現れていた意味拡大や文法的側面の制約などの変化が，初期の段階ではあるが目につく．このようなことから，内部空間名詞の意味拡大と抽象化，それに伴う文法的側面の変化と見られる現象が，文法化の初期段階の変化を示すものであると見ることができよう．以下では，文法化という用語を，上記で述べた文法化の過程にある中間的な段階の存在も含め，広い範囲の文法化現象に適用する．

下の図16は，上記のような既存の文法化理論を基に便宜上名詞の文法化の過程をいくつかの段階に分けて図示したものである．文法化は，連続線上の現象であり，段階別に明確に区切られる現象ではないことを示す．また，文法化は，語彙的意味の変化による語彙的・文法的自立性の弱化と結合の制限を含めることから始まるという本研究の立場を示す．

次項では，韓国語と日本語の内部空間名詞「안，속」と「うち，なか」について，下の図16の点線で囲まれた段階に見られる，意味拡大による語彙的面と文法的面の変化を考察し，対照する．

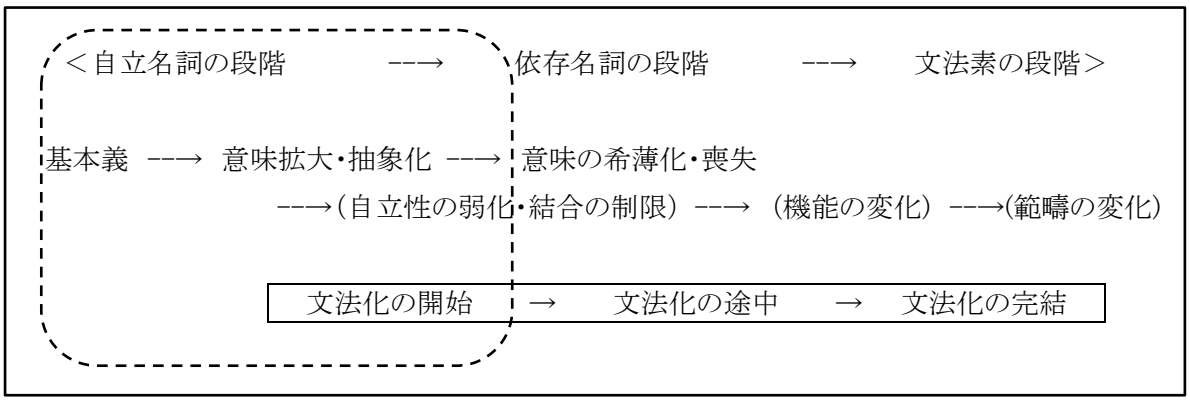

図 16. 名詞の意味拡大と文法化のプロセス

7.1.2. 韓国語と日本語の空間名詞の意味拡大と文法化の研究

韓国語の場合，空間名詞の意味拡大に関する研究は，第2章の先行研究で述べた通り，語彙論的観点からの研究や認知言語論的観点からの研究が多く，文法化の観点から空間名詞の意味拡大を論じた研究はまれである．

そのうち，김한샘(2006)は，通時的観点から韓国語の関係空間名詞に関する意味変化の分析を行った．その論では個別の名詞によって度合いの差はあるが，名詞は，意味の側面では，「具体的空間＞心理的空間(範囲，量)＞条件，状況＞原因＞時間＞質」の変化を表すとし，韓国語の空間名詞は既存の意味を交替するのではなく，持続的に維持しながら意味の領域を拡大する傾向があるとした．また，「밖」のほかに文法化が完結した空間名詞はないが，依存的用法と助詞結合形の固定性を明らかにし，同一の意味領域を構成する「위，아래，앞，뒤，가운데，안，밖」は，共通する流れのなかで意味が変化する過程にあるとした．김한샘(2006:174)では，「안」の意味の変化について，空間的意味は持続的に維持しながら，ある境界の内側という物理的空間を表す意味が心理的空間に拡大し，その結果，＜閉鎖性＞を表すようになったとし，下の例(289)を挙げている．(289a)では，物理的空間の意味が家の中で最も閉鎖的な空間である＜안방(内室，奥)＞を意味し，(289b)では，そとで公の活動をする夫に対応する意味としての＜안(妻)＞を意味するようになるとした．このような(289a,b)の場合にも，本来の空間的意味の影響を受け，主に助詞＜에서＞とともに用いられるとしている．また，(289c)では，「안」が，本来の基本義である＜物理的な空間のなか＞，＜境界の内側＞という意味から，抽象化の原理によって＜ある範囲のなか＞を指す＜範囲＞の意味を表すようになり，(289d)では，＜時間の範囲＞を表すようになるとし，「안」の意味は，空間から閉鎖性に，空間から範囲，時間の領域に変化したとしている．

(289) a.안에서 어머니의 부르는 소리가 들렸다.
(なかから母の呼ぶ声が聞こえた．)
b.살림은 안에서 알아서 하니 저는 잘 모릅니다.
(家事はうちで切り盛りするので，私はよく知りません．)
c.만 원 안에서 마음껏 시켜 먹어.
(一万ウォン以内で，思い切り出前を取って食べて．)
d.이제 걸어가도 한 시간 안에 고향에 도착할 수 있다.
(もう歩いても一時間内に故郷に着くことができる．) 김한샘(2006:174)

このように，김한샘(2006)では，「안」の意味拡大の様相については例示しているが，依存的用法や助詞との結合制限の問題については，論じていない．

このような空間名詞の依存的用法とその特性について，이영제(2013)では，韓国語の空間名詞は，存在論的意味領域を基準に実体的空間名詞と様式的空間名詞に区別される[76]とし，そのうち，様式的空間

[76] 実体的空間名詞と様式的空間名詞の区別は，유혜원(2008)の分類による．유혜원(2008:202-203)では，최경봉(1998)の名詞分類における実体と様式という分類基準を基に，空間名詞を実体的空間名詞と様式

名詞は基本的に自立名詞に属するが，脈絡によって，依存名詞のように依存的特徴を見せることがあるとし，自立名詞の依存的用法と依存名詞の文法的特性は異なるものではないと論じている．このような依存的用法の空間名詞は，主に＜状況，条件，環境，結果，(特定の)範囲＞などの意味に解釈されるときに依存的特性が現れるとし，次の例を挙げている．

(290) a.세상 사람들의 무관심 속에 버려지는 아이들이 많다.(例20の再掲)
(世のなかの人々の無関心のなかで捨てられる子供達が多い．)
→*속에 버려지는 아이들이 많다.
(*なかで捨てられる子供達が多い．)
b.궂은 날씨 속에도 많은 관객들이 모여들었다.(例21の再掲)
(悪い天気のなかでも大勢の観客が集まって来た．)
→*속에도 많은 관객들이 모여들었다.
(*なかにも大勢の観客が集まって来た．) 이영제(2014:38-39)

(290)では，空間名詞「속」の先行成分を省略すると非文になることから，「속」が先行する名詞に意味的に依存していることが分かり，(290)の「속」は自立名詞とは性格が異なると指摘している．

また，本来の空間的意味ではなく，時間的意味として用いられる場合に依存的になる空間名詞もあるとし，そのような空間名詞として，「안」を挙げている．「안」は，空間的意味と時間的意味を表す場合，いずれも統辞的に依存的な様相が見られるとし，「안을 닦다(なかを洗う)，안이 비어있다(なかが空である)，안으로 들어오다（なかに入る）」における「안」は自立的であるが，(289)′の「안」は依存的であるとしている．

(289)′ c.만 원 안에서 마음껏 시켜 먹어.
(一万ウォン以内で，思い切り出前を取って食べて．)
→*안에서 마음껏 시켜 먹어.
(*なかで，思い切り出前を取って食べて．)
d.이제 걸어가도 한 시간 안에 고향에 도착할 수 있다.
(もう歩いても一時間内に故郷に着くことができる．)

的空間名詞に分類し，様式的空間名詞をさらに様式的空間自立名詞と様式的空間依存名詞に下位分類した．実体的空間名詞は，「서울」といった実体的空間物固有名詞と「길，집，지역」などの実体的空間物一般名詞に分類し，様式的空間名詞は「앞，위」などの様式的空間自立名詞と，例は挙げていないが，様式的空間依存名詞に分類している．この分類を基に，이영제(2014:33)では，様式的空間自立名詞が主導的機能を担う場合は自立性を持つが，補助的機能を担う場合は依存性を持つという点に注目している．これらの名詞について，김한샘(2006:160)では，関係の中で相対的に把握される空間名詞である「앞，뒤，가운데，위，아래，안，밖」などを「関係空間名詞」としている．

→*이제 걸어가도 안에 고향에 도착할 수 있다.

(*もう歩いても内に故郷に着くことができる.)　　이영제(2014:39)[77]

このように(289)′の「안」は，ある対象の範囲を規定する意味を表し，「ある対象」に該当する先行成分を必須成分として要求する．この場合，「안」の先行成分を省略すると非文になることから，「안」が補充語を必要とする依存的特性を現わすとしている．이영제(2013，2014)は，文法化を論じるものではなく，名詞の分類に関する論考ではあるが，他の自立名詞とは異なる空間名詞の依存性と文法的制約に注目している点で，本研究の立場と共通するところがある．

日本語の場合，江口(2006)では，「うち」という一種の形式名詞が単独で助詞のようなふるまいをし，「辞」として使われる現象に注目し，同様の意味を持つ「なか」では単独の辞的用法がないことから，「うち」のこの用法を持つこと自体が「うち」の特質であるとした．「うちで」と「うち＋φ」は，その分布に特殊な性質が加わり，その特殊性のゆえに複合辞的な性質を得ているとし，「うち」は空間を表す名詞から形式名詞に，形式名詞からさらに文法性のより強い「辞」へと，文法化が進んでいるとした．

日本語の形式語化について，日野(2001:1-3)は，文法化における意味変化を，具体的な意味がなくなり抽象的な意味が現れる「抽象化」，意味の部分的な喪失である「抽出化」，意味の喪失である「意味の希薄化」の三つのタイプに分類している．これを機能的な見方で分類すると，抽象化と抽出化を経る言葉は指示的機能を保っているが，意味の希薄化を伴う言葉は指示的機能がなくなり，代わりに文法的，表現的機能[78]を持つようになるとしている．

また，意味変化の第一段階である抽象化の理論を提唱したHeine et al(1991b:157)では，抽象化の進展の方向を，抽象度によって具体的意味から抽象的意味へ，「人＞もの＞過程＞空間＞時間＞質」のような順位付けをしている．これに対し，日野(2001:13)では，「時間」から「質」への変化は一般的でないとし，その代わりに「空間」から「質」への変化を提示し，ひと/ものから空間へ，空間から時間へ，空間から質への順位付けを示した．さらに，Heine et al(1991b:157)の抽象化の順位付けの裏付けとして，意味範疇の間の抽象度を測る基準として可算性，可視性，触知性を挙げ，下記の表53のように可算性と可視性，触知性の程度が高くなるほど抽象度が低くなるとした．

表 53. 意味範疇のあいだの抽象度をはかる証拠-日野(2001)

証拠/意味範疇	ひと/もの	空間	時間/こと	質
可算性	＋	＋	＋	－
可視性	＋	＋	－	－
触知性	＋	－	－	－

[77] 例文(289)′は，김한샘(2006:174)からの引用の再引用で，下線は이영제(2014)による．

[78] 日野(2000:2)では，ある語が表現的機能をもっているということは，その語は話し手の，ある状況に対する特別な態度や姿勢を表しているということであるとしている．

日野(2001)によると，三つの意味特性「可算性」，「可視性」，「触知性」はそれぞれ「＋」と「－」で示され，「＋」は「できる」，「－」は「できない」を意味し，それぞれの意味特性において，「＋」は「－」よりも具体的であるという．したがって上掲の表中では「ひと/もの」がもっとも具体的で，「空間」，「時間/こと」の順で，「質」がもっとも抽象的ということになる．

このような名詞の意味拡大の方向について，안주호(1997:92, 93)は，韓国語の依存的名詞について，その意味拡大は主観的な意味になるのが一般的であるとし，細部的には，第一に，物理的空間の意味が時間的空間，そして心理的空間を表すようになるもの，第二に，客観的なことを指示していた自立名詞から主観的なことを意味するようになるもの，第三に，状況を表していたのが理由を表すようになるものがあるとした．これをまとめると，物理的空間＞時間的空間＞心理的空間，客観的＞主観的，状況＞理由の方向となる．また，김한샘(2006)では，韓国語の空間名詞の意味は，具体的空間＞心理的空間(範囲，量)＞条件，状況＞原因＞時間＞質の順に変化することを示した．

本研究では，韓国語と日本語の内外空間名詞について，意味拡大による語彙的意味の薄れと文法的意味の変化の様相を共時的な観点から考察する．そのために，意味拡大による空間名詞の意味の実体性の変化，他の成分への依存性の変化を中心に考察をする．そのうち，実体性の変化を判断する基準の一つとして，日野(2001)の「可算性，可視性，触知性」を用いることにし，上掲の表53の横の軸の意味範疇に韓国語の空間名詞の意味拡大の方向を反映して，「ひと/もの」の代わりに「具体」，「質」の代わりに「抽象/心理」を入れ，表54に示す．

表 54. 韓国語と日本語の内部空間名詞の意味拡大の方向

	←—具体的/客観的/物理的				抽象的/主観的/心理的 ——→		
実体性の基準	具体	空間	活動	範囲/量	状況	時間	抽象/心理
可算性	＋	＋	＋/－	＋	－	＋	－
可視性	＋	＋	＋	＋/－	＋	－	－
触知性	＋	－	－	－	－	－	－

本研究では，このような「具体から範囲，状況，時間，抽象」への意味拡大の方向を基に，コーパスから収集された用例の空間名詞に先行する名詞を対象に，現在という断面において「안，속」と「うち，なか」が基本義から抽象的な意味に至るまでどのような意味拡大の様相を現しているかを見ていく．研究の方法としては，次の点に注目して考察を進める．

1) それぞれの空間名詞はどのような意味の変化を表しているか．
2) 意味の変化による他の語彙との結合や共起の制限はないか．
3) 意味の変化による助詞など文法的な要素との結合の制限はないか．

7.2. 韓国語と日本語の内部空間名詞の意味拡大による語彙性と文法性の変化

7.2.1. 先行名詞の分布に現れる意味拡大の様相

下記の表55，56は，韓国語と日本語のコーパスから収集した用例を対象に，「안，속」と「うち，なか」の

先行名詞を意味によって分類し，意味拡大の段階別に表に示したものである．空間名詞の場合，単独で空間的意味を表すこともあるが，多くの場合は先行する成分の修飾を受け，その意味が具体的に実現される．従って，「안，속」と「うち，なか」に先行する名詞の分布を通して，空間名詞の意味拡大の様相を示し，比較することができるのである．詳細は前掲の表によるが，「안」は表12，「속」は表14，「うち」は表31，「なか」は表32の通り．なお，数字が空白となっている項目もあるが，今回収集された資料では見られないという意味であり，実際の発話において使われる可能性が全くないことを示すのではない．また，意味拡大の全体的な様子を把握するための表であることから，表の項目を既存の意味拡大の項目に合わせて単純化し，下位分類の項目は省略する．表55，56の数字は全体対象用例数に対する当該名詞類の出現頻度である．

表 55. [안/속＋格助詞]の先行名詞の分布

名詞の種類 / 空間名詞	[안/속＋格助詞]の先行名詞の名詞類						
	具体	活動	範囲	状況	時間	抽象	合計
안	68	―	―	―	18	14	100
속	34	9	―	17	―	40	100

表 56. [うち/なか＋格助詞]の先行名詞の分布

名詞の種類 / 空間名詞	[うち/なか+格助詞]の先行名詞の名詞類						
	具体	活動	範囲	状況	時間	抽象	合計
うち	14	5	15	3	34	29	100
なか	42	9	5	7	―	37	100

上記の表55，56の先行名詞の分布を基に，各々の内部空間名詞の意味拡大の方向と用例を示す．

1)「안」の先行名詞は，具体空間を表わす名詞が68%を占め，続いて時間名詞，抽象名詞の順に出現頻度が高い．これらの先行名詞と連語を構成する「안」は，具体的空間の意味から時間的意味，抽象的意味へと，その意味が拡大する傾向を見せる．しかし，これは先行名詞の意味上の分類による傾向であり，実際に「나라，테두리」といった抽象名詞が「안」の先行名詞になる場合，「나라，테두리」は範囲の空間を表す．上記の表51の抽象名詞を先行名詞としてとる用例を調べたところ，ほとんどが「안에서」とともに範囲を表すことが分かったが，表51では，先行名詞の本来の意味特性によって抽象名詞に分類している．

以下では，基本義から拡大された意味までの例を挙げる．

(291)내일은 날이 흐리면 온종일 <u>방 안에</u> 누워 있으리라.＜AC000008＞ （具体空間）
（あしたは曇りだったら，一日中<u>部屋のなかで</u>横になろう．）

(292)주어진 시간 안에 어떻게 요령있게 발표할 것인가. ＜BB94Z008＞
（与えられた時間内でいかに要領よく発表するか.） （空間→時間）

(293) 그 테두리 안에서 움직이는 것이 질서라는 주장도 있다.＜CH000017＞
(その枠のなかで動くことが秩序であるという主張もある.) （空間→範囲）

2)「속」の先行名詞は，抽象空間を表す名詞が最も多く，40%を占め，続いて具体空間を表わす先行名詞が34%を占め，さらに状況，活動空間への意味拡大が見られ，全体として抽象的意味領域を表す傾向が高い．なお，「속」の用例では，時間と範囲への意味拡大は見当たらなかった．

(294) 나는 이 거미를 상자 속에 넣어두었다.＜BHXX0057＞ （具体空間）
（私はこのクモを箱のなかに入れておいた.）

(295)그는 우장을 쓴 채 빗줄기 속에서 소리쳐대고 있었다.＜BEXX0009＞
（彼はレインコートを着て，雨のなかで叫んでいた.） （空間→状況）

(296)우리는 지난날의 역사 속에서 오히려 희망을 읽어내야 한다. ＜BHXX0054＞
（我々は，過去の歴史のなかでむしろ希望を読み取らなければならない.） （空間→抽象）

3)「うち」の先行名詞は，時間を表す名詞が最も多く，34%を占め，続いて抽象，範囲，具体，活動空間，状況を表わす名詞の順となっている．ただ，上記の表56の具体名詞の項目には「胸，腹」などの身体名詞も含まれているが，これらの身体名詞は「うち」と共起して抽象的意味を表すことが多く，全体として，意味拡大の頻度は，時間，抽象，範囲，具体空間の順で，他にも活動，状況の意味領域への幅広い意味拡大が見られる．

(297) 城のうちへ筧を引き，水車を廻して巧みに水を汲み入れているのも面白い. （具体空間）
＜LBm9_00125＞
(성 안으로 홈통을 끌어와, 물레방아를 돌려 물을 잘 퍼올리는 것도 흥미롭다.)

(298) 毎月課金されますので，1ヶ月のうちに24時間は使えます. ＜OC02_04263＞
(매월 요금이 부과되므로 1달 동안 24시간은 쓸 수 있습니다.) （空間→時間）

(299) シンポジウム当日は…盛況のうちにおえることができた. ＜PB58_00033＞
（심포지움 당일은…성황리에 마칠 수 있었다.） （空間→状況）

(300) それから，心のうちの不安を隠そうとするように，…＜OB1X_00173＞　　（空間→抽象）
（그리고는 마음 속의 불안을 감추려는 듯이，…）

4)「なか」の先行名詞は，具体空間を表す名詞が最も多く，42%を占めるのに対し，抽象空間を表わす名詞は 37%を占め，続いて活動，状況，範囲を表す名詞の順である．全体としては，高頻度の順で具体空間，抽象空間，活動空間，状況，範囲の意味領域を表し，時間の意味領域への意味拡大は見当たらない．

(301) 散歩することすら稀で，一日のほとんどの時間を家のなかで過ごした．　　（具体空間）
＜Bn2_00008＞
（ 산보하는 것조차 드물고，하루의 대부분의 시간을 집 안에서 지냈다.）

(302) その数多い花のなかから，思いつくままに春から夏，秋へと紹介してみよう．（空間→範囲）
＜LBj7_00008＞
（그 수많은 꽃 중에서 생각나는 대로 봄부터 여름，가을순으로 소개해보자.）

(303) 一日一万五〇〇〇もの広告メッセージの氾濫のなかで，あなたが覚えていられるのはいったいいくつあるだろうか．＜PB46_00067＞
（하루 만 오천개나 되는 광고 메시지의 범람 속에서，당신이 기억할 수 있는 것은 대체 몇 개나 될까.）　　（空間→状況）

(304) ステークホルダーの期待は彼らの心のなかにありますので…　＜PB43_00545＞
（스테이크홀더라는 기대는 그들의 마음 속에 있기 때문에…）　　（空間→抽象）

7.2.2. 韓国語の内部空間名詞「안，속」の意味拡大による語彙的・文法的意味の変化

以下では，具体空間の意味から範囲，時間，抽象的な意味に至るまで，意味拡大による意味の変化とそれに伴う文法的側面の変化の有無を例を通して検討する．

まず，「안」の用例を見てみよう．

(305) a. 할머니는 방 안에 누워 있었다.　＜BEXX0022＞　　（具体空間）
（祖母は部屋のなかで横になっていた．）
→ 할머니는 안에 누워있었다.

b.첫 시험에서 50 등 안에 들게 되었다.　＜BIXX0004＞　　（数量的範囲）
（最初の試験で50位以内に入るようになった．）

→ *첫 시험에서 안에 들게 되었다.

c.이달 안에 시행할 예정이다. ＜BA93009＞ (時間-時間的範囲)
(今月のうちに行う予定である.)
→ *안에 시행할 예정이다.

d.기존 제도의 틀 안에서 자율규제를 해야 한다.＜CH000058＞(抽象-抽象的範囲)
(既存の制度の枠組みのなかで自主規制をしなければならない.)
→ *안에서 자율 규제를 해야 한다.

(305)は, 先行名詞の意味によって「안」の表す意味が異なる. (305a)は「방」という具体的な内部空間を表すが, (305b)は順位を表す単位名詞「등」と共起して等級や順位の範囲を, (305c)は「이달」という時間名詞と共起して一定の時間内という時間的限定を, (305d)は「틀」という抽象的意味を表す名詞と共起して一定の形式や格式に収まる空間という抽象的範囲を表す. このとき, (305a)の「안」は, 先行成分が省略されて「할머니는 φ안에 누워있었다」になっても, 語彙的な面では具体空間という基本的な意味を表すことができ, 文法的な面でも述語の項として機能し, 語彙的自立性は保たれる.

それに対し, (305b, c)は, 先行名詞が省略されると, 語彙的な意味が成立しなくなるだけでなく, 文法的にも非文になる. また(305b, c)の「안」を省略すると「50등에 들게 되었다」,「이달에 실시할 예정이다」となり, 順位や時間的範囲を表すことはできるが, 限定の意味はなくなる. このようなことから, (305b, c, d)の「안」は, (305a)の「안」と形態は同一であっても, 語彙的な面では先行する名詞の意味に依存的であり, 単独では主語や目的語として機能することができず, 文法的な面においても制約が生じたと見られる.

このような意味拡大による変化は助詞との結合関係にも現れる. 下記の(305)′では,「안」の意味拡大による格助詞との結合制限を示す.

(305)′ a.방 안(에/이/을/으로/에서) (具体)
(部屋のなかで)
b.첫 시험에서 (50 등) 안(에/*이/*을/으로/*에서) (範囲)
(初の試験で50位以内に)
c.이달 안(에/*이/*을/으로/*에서) (時間)
(今月のうちに)
d.기존 제도의 틀 안(에/*이/*을/으로/에서) (抽象)
(既存の制度の枠組みのなかで)

(305a)′の具体空間を表す「안」は格助詞との結合に制限が見られないのに対し, (305b.c.d.)′の場

合，範囲，時間などの抽象的意味を表す先行名詞と結合すると，(305a)′と異なり，主格や対格の助詞をとらなくなる結合制限が見られる．これは意味拡大による抽象化が「안」の空間名詞としての実質的な意味の弱化に留まらず，文法的な面でも変化をもたらしたことを意味する．

次に，「속」の用例を見てみよう．

(306) a.벌들을 캄캄한 상자 속에 가두어서 운반하였다. ＜BHXX0057＞ (具体物)
（蜂を真っ暗な箱のなかに閉じ込めて運んだ．）
→ 벌들을 속에 가두어서 운반하였다.

b.대낮에도 숲 속에서 뻐꾸기가 울어대었다. ＜AE000400＞（例208の再掲）（場所）
（真昼にも森のなかでカッコウがさえずっていた．）
→ ?대낮에도 속에서 뻐꾸기가 울어대었다.

c.우리는 하루가 다르게 변화하는 사회 속에서 살아가고 있다.＜CB000119＞(抽象)
（我らは日ごとに変化する社会のなかで生きている．）
→ *우리는 속에서 살아가고 있다.

d.그들은 기근과 칼과 재앙의 극한 고통 속에서 죽어갔다.(例245の再掲) (状況)
（彼らは飢饉と刀，災いの極度の苦痛のなかで死んでいった．）
→ *그들은 속에서 죽어갔다.

e.집중호우가 내리는 속에서 잠을 자다가 당한 참변이었다.(例64の再掲) (状況)
（集中豪雨が降り注ぐなかで寝ていたところあった惨事であった.）
→ *속에서 잠을 자다가 당한 참변이었다.

(306a, b)の「속」は，先行名詞を省略しても具体空間としての語意を維持する．それに対し，(306c, d, e)の「속」は，連体修飾語を必須の成分とし，連体修飾語がなければ意味をなさず，語彙的な面でも文法的な面でも先行成分に依存的であると言える．(306c)の「속」は概念的抽象空間を，(306d)の「속」は具体的・抽象的側面を合わせ持つ状況の意味を表し，(306e)の「속」は，具体的空間の中である状態が継続する状況を表す．同じ状況を表す場合でも，先行名詞に修飾される場合に比べ，動詞の連体形に修飾される場合のほうが，継続の意味および臨場感が強調される．

ここまで例文を検討した結果，(306c, d, e)の「속」は，語彙的意味が薄くなるにつれ，独立した名詞としての特性は減少し，ほかの文の成分に依存的になるという点が鮮明に現れた．また，(306c, d, e)の「속」は，具体的な空間を表わす意味から状況を表す意味に拡大すると，先行名詞への依存度が高くなるだけではなく，助詞との結合においても「에」，「에서」との結合に制限される．

下記の(306)′では,「속」の意味拡大による格助詞との結合制限を示す.

(306)′ a.상자 속(에/이/을/으로/에서) (具体物)
(箱のなかに)
b.숲 속(에/이/을/으로/에서) (具体空間)
(森のなかに)
c.변화하는 사회 속(*에/*이/*을/*으로/에서) (抽象)
(変化する社会のなかで)
d.심한 고통 속(에/*이/*을/*으로/에서) (状況)
(極度の苦痛のなかで)
e.집중호우가 내리는 속(*에/*이/을/*으로/에서) (状況)
(集中豪雨が降るなかで)

(306a, b)′の場合は格助詞との結合に制限が見られないのに対し,(306c, d, e)′の場合は主格や対格の助詞をとれないなどの制約があり,これは「속」の意味拡大による抽象化が語彙的意味の変化に留まらず,文法的性質にも変化をもたらすことを示す.

以上の例文の検討を通して,「안」と「속」は,具体空間を表す場合,先行要素による修飾を受けなくても,文のなかで単独で意味を表し,文の成分として機能することができるが,「속, 안」を修飾する先行要素によって,単独では語彙としての実質的な意味を表すことができず,名詞としての語彙性は薄くなることを確認することができた.また,このような語彙的意味の変化により,格助詞との結合が制限されたり,特定の格助詞との結合関係が緊密になることが分かった.例えば,時間の範囲や数量的範囲を表す「안에」,状況を表す「속에서」は,分布の面でも出現用例数の面でも偏りを見せる.このような形態は,実質的な意味を喪失して語彙的にも文法的にも依存的である依存名詞とは異なるが,一般の自立名詞とも明確に区別される依存的特性を表す.

7.2.3. 日本語の内部空間名詞「うち, なか」の意味拡大による語彙的・文法的意味の変化

以下では,日本語の内部空間名詞「うち, なか」について,基本的意味領域を表すものから意味拡大により抽象化したものまで,用例を通して,意味拡大による語彙的・文法的変化を見ていく.

まず,「うち」の用例を見てみよう.

(307) a.渡辺の胸のうちで不安が急速に脹れ上がった.＜PB39_00464＞ (身体・心理)
(와타나베의 가슴 속에 불안이 급속히 부풀어올랐다)

b.彼らの心のうちに,まだ生々しい恐怖や不安や怒りがあるのをしばしば発見する。
＜LBq3_00047＞ (抽象)

(그들의 마음 속에 아직 생생한 공포와 불안, 분노가 있다는 것을 자주 발견한다.)

c.無意識のうちに伸びた手が時計のベルを止めた. ＜PB29_00126＞ (状態)
(무의식중에 뻗은 손이 시계의 벨을 껐다.)

d.それをすべて夜のうちにすましておいたらどうだ. ＜OB4X_00195＞ (時間)
(그것을 전부 밤 사이에 해놓는게 어떠냐.)

e.十一人のうち, 九人しか生還しなかった.＜LBo9_00203＞ (範囲)
(열한 명 중, 아홉 명 밖에 살아돌아오지 못했다.)

下記の(307)′では,「うち」の意味拡大による格助詞との結合制限を示す.

(307)′ a.胸のうち(に/が/を/で/から) (身体・心理)
(가슴 속에)
b.心のうち(に/が/を/で/*から) (抽象)
(마음 속에)
c.無意識のうち(に/*が/*を/*で/*から) (状態)
(무의식중에)
d.夜のうち(に/*が/*を/*で/*から) (時間)
(밤 사이에)
e.十一人のうち(*に/*が/*を/で/から/,) (範囲)
(열한 명 중)

日本語コーパスから収集した結果によると,「うち」の場合, 具体空間を表す先行名詞と共起して＜具体空間＞を表す用例はまれである.「胸, 頭」といった身体名詞と共に用いられることがあるが, その場合でも, 具体的な身体の部位を意味するのではなく, 抽象化した心理的空間を表すことが多い.

「うち」は抽象, 時間, 範囲の意味領域への意味拡大が顕著であり, 特に時間と範囲への意味拡大が目立つ. (307a)の「うち」は人の気持ち, 心のなかを意味する.「胸」という身体空間のなかという具体的な意味から抽象化してはいるが, 格助詞の制限もあまりない. これは, (307b)の心理空間を表す「うち」も同様で,「心のなか」という抽象的な心理空間を表すが, 格助詞との結合の制限もあまりなく, 主格と対格をとることができるなど, 文法的にも制約があまりない. しかし, 先行名詞を省略すると非文になることから, 語彙的な意味の希薄化は確認できる. このようなことから, (307a.b.)の「うち」は, 具体空間の意味は薄れているものの, 文法的な変化はあまり見当たらないという, 一般的な意味拡大の方向とは異なる様相を現わす. これは韓国語においても,「마음 속이/을/에/에서/으로」のように訳され, 韓日両言語において

同様の意味拡大の様相が見られる.

それに対し, (307c)の「無意識のうちに」の「うち」は「終始そのようなさまであるあいだ」という意味であるが, 単にある時間的な範囲を意味するというより, 「うち」と共起する「無意識」という語彙が意味する状態が時間的意味を表す「うち」より強調される. この場合, 「うち」は先行名詞への意味上の依存度が高く, 助詞との結合も二格に限定される. このような「うち」の意味の変化に注目すると, 「暗黙のうちに, 秘密のうちに」等にも見られるように「うち」は時間的意味としてではなく, ある状態の持続という抽象的な意味に拡大したと見られる. (307d)の「うち」は, ある時間的範囲を限定する意味であり, 時間を表す名詞句を伴わないと意味が成立しない. また, このときの「うち」は結合する格助詞も「二」格に制限される.

韓国語の訳では「밤 사이에/동안에」となり, 「안」と「속」とは対応せず, 意味領域のズレがある. このような, 韓国語と日本語の位置を表す空間名詞の間の対応関係のズレについて, 塚本(2006:38, 44)はこのようなズレは韓国語と日本語の空間名詞における文法化の差によるものであるとしている. 例えば, 「冷めないうちにお召し上がりください. 」という例文の韓国語訳は「식기 전에 드세요. 」となり, 日本語の位置を表す名詞「うち」が位置の意味を失い, 転じて一定時間の間隔を表すのに対し, 韓国語では, 位置を表す名詞「안, 속」と対応するのではなく, 「전(前)」という位置・時間の前後を表す空間名詞と対応することを指摘し, 韓国語の「안, 속」は文法化が生じておらず, 元来の位置の意味が失われていないため, 日本語の場合に成立するそういったことが不可能であるとしている.

このように, 日本語の場合, 時間を表す「うち」の類型が複数存在するが, 韓国語の場合, (305c)の「이달 안에 시행할 예정이다」のように, 期限への意味拡大があるのみである. 時間的意味を表す「うち」は, 韓国語では「때, 전, 동안, 사이」と対応し, 拡大された時間的意味に対して, それぞれの意味にあった別の語彙を用いる傾向がみられる. このような対応のズレを文法化の観点から見ると, 日本語の時間的限定を表す「うち」は, 韓国語の時間的限定を表す「안」に比べ, 語彙的意味の抽象化が多岐にわたり進み, 先行名詞への意味的依存度もより高くなり, その結果として韓日両言語の内部空間名詞の文法化の進展の様相と程度の違いが生じ, 対応のズレとして現れたものと見られる.

また(307e)の集合の範囲を表す「うち」は, 格助詞を伴わないゼロ格の用例が最も多い. (307e)の「うち＋φ」の類に関連して, 江口(2006)は, 集合の範囲を設定するゼロ格の「うち」は, 同じく集合の範囲を設定するデ格の「うち」より強い分布の制限を持つことを指摘し, 助詞なしの方がより一層文法化が進んでいると指摘した. さらに, 江口(2006)は, 下記の例(308)を挙げて, 日本語において比較的に自由とされる名詞句の語順に関連して, 集合の範囲設定を表す「うち」句は, 特定の句との前後関係に制約が生じることがあり, このような分布制約を持つという点は, 一種の辞となった「うち」が何らかの文法的な性質を持つに至ったことであるとした.

(308) a.そこにいた学生のウチ, 太郎だけが事件について知らされていなかった.
(그곳에 있었던 학생 중, 타로만 사건에 대해 연락을 받지 못했다)
*b.太郎だけがそこにいた学生のウチ, 事件について知らされていなかった.
(타로만 그곳에 있었던 학생 중, 사건에 대해 연락을 받지 못했다.)

江口(2006:235, 236)

集合の範囲を表す「うち」に見られる助詞なしの形態は，韓国語の「안」と対応するのではなく，空間名詞から依存名詞に転じた「중」の助詞なしの形態と対応する．このようなことから，範囲を表す「うち」は韓国語の範囲を表す「안」より意味拡大の範囲が広く，度合いも進展していると言える．

日本語の「うち」の文法化について考えるとき，本来は名詞修飾節を伴う「うち」の文法化のことを言う．しかし，このような節の修飾を受ける「うち」は，韓国語では「가운데，중(에)」と対応し，ここでは言及しないことにする．

以下では，「なか」の用例を通して，その意味拡大の様子と語彙的・文法的変化を見ていく．

(309) a.部屋のなかにおじいちゃんが座っていました． ＜OB6X_00248＞ （具体空間）
(방 안에 할아버지가 앉아 있었습니다.)

b.アップル・サイダーを口のなかに流し込んだ． ＜OB2X_00280＞ （身体）
(애플사이다를 입 안에 들이부었다.)

c.それなりの効用を生活のなかで感じているのではないでしょうか．＜LBm4_00046＞
(그 나름의 효용성을 생활 속에서 느끼고 있는 것이 아닐까요.) （活動）

d.彼女は心のなかで自分を叱りつけていた． ＜LBs9_00113＞ （抽象）
(그녀는 마음 속으로 자신을 질책하고 있었다.)

e.警察はパーティの出席者のなかに犯人がいると考えた.＜LBs9_00108＞ （範囲）
(경찰은 파티 출석자 중에 범인이 있다고 생각했다.)

f.保全か宅地化の選択のなかで、宅地化を選び… ＜PB16_00033＞ （範囲）
(보전과 택지화의 선택 가운데/중에서 택지화를 택하여…)

g.需要が大幅に増加するなかで国内生産が低い伸びにとどまっているため…
＜OW3X_00098＞ (수요가 대폭 증가하는 가운데 국내생산이 낮은 증가에 머물러 있어서…) （状況）

下記の(309)′ では，「なか」の意味拡大による格助詞との結合制限を示す．

(309)′ a.部屋のなか(に/が/を/から/で)（방 안에） （具体）

b.口のなか(に/が/を/から/で) (입 안에) (身体・具体)
c.生活のなか(で/に/*が/*を/から) (생활 속에서) (活動)
d.心のなか(で/に/が/を/から) (마음 속에서) (抽象)
e.出席者のなか(に/*が/*を/から/で) (출석자 가운데/중) (範囲)
f.保全か宅地化の選択のなか(で/*に/*が/*を/*から) (範囲)
(보전과 택지화의 선택 가운데/중)
g.需要が大幅に増加するなか(で/*に/*が/を/*から/,) (状況)
(수요가 대폭 증가하는 가운데)

(309a, b)のように「部屋, 口」といった具体的な場所や身体空間を表す「なか」は, その意味を補充する先行名詞がなくても単独で実質的な意味を表すことができ, 格助詞との結合においても制限はなく, 文法的要素への変化は見られない. しかし, (309c)の「なか」は, 世の中に暮らしていく生活という活動を表し, 具体的な空間の意味から概念的活動空間の意味に拡大してはいるが, 一方で, 空間的意味をある程度持っているため, 格助詞はニ格, デ格, カラ格を取ることができると見られる. (309d)の「なか」は, 抽象的な心理空間を表し, 実質的な空間の意味は薄れているため, 先行名詞を省略すると意味が成立しない. これは, (307b)の心理空間を表す「うち」も同様であるが, 具体空間の意味は薄れているものの, 文法的な変化は見当たらないという, 一般的な意味拡大の方向とは異なる様相を現わす. これは韓国語においても,「마음 속이/을/에/에서/으로」のように訳され, 韓国語と日本語に共通する意味拡大の様相であると言える.

(309e)は集合の範囲を, (309f)は比較対象の範囲を表し, いずれも「なか」だけでは意味を表すことができず, 先行名詞に意味上依存的であるという点は共通している. しかし, (309e)の場合, ニ, カラ, デ格をとることができるのに対し, (309f)の比較対象の範囲を表す「なか」が結び付くのはデ格のみで, 結合の制限の度合いに差がある.

この集合の範囲を表す「なか」は, 韓国語の内部空間名詞と対応するのではなく,「중, 가운데」と対応する. 韓国語の「중, 가운데」は, 自立名詞として「物事の中, 内部」,「一定の境界の内部, 真ん中」という空間的位置を表し, 文脈によって「多くのうち」,「集合体の範囲のなか」という範囲の意味を表す場合もあり, さらに「何かをしているなか, 間, 途中」という背景や進行状況を表す場合もあり, 範囲を表す「なか」と「うち」のどちらとも対応関係を示す.

(309g)の「なか」は,「需要が増加する」という, 主節の背景となる状況を表す. このときの「なか」は, 基本義の具体的空間の意味はなくなり, 状況という非実体の意味市がないため,「なか」の語彙性は希薄化したと言える. 一方, 文法性の面では, 格助詞「デ」と結合して状況を表す副詞節を構成し, 位置も固定的であることから, 文法性は増したということができる. これに対応する韓国語訳の「수요가 증가하는 가운데」の「가운데」についても, 同様のことが言える.

以上のことから,「なか」は基本義である具体空間の意味を維持している段階では, 名詞としての意味の自立性を保持しているが, 意味の拡大にともない, 活動, 範囲, 抽象空間, 状況等を表すようになり, このように意味が抽象的・主観的になるほど, 格助詞との結合制限や位置の固定性が現れ, 文法的側面

の変化が進むと見られる.

7.3. 第7章のまとめ

本章では, 韓国語と日本語の内部空間名詞「안, 속」と「うち, なか」について, その意味拡大による語彙的意味と文法的意味の変化を対照した. 韓国語と日本語の内部空間名詞は, 単独で文の主語や対象語として用いられることもあれば, 先行の成分がなければ意味をなさない依存的用法もあるという点に注目して, それぞれの空間名詞がどのような意味拡大により, どのような語彙的・文法的意味の変化を表すかを調べた. 現段階では内部空間名詞の抽象化の結果として, 語彙的意味の薄れにより, 空間名詞単独では意味が曖昧になったり, 意味を表すことができず, 他の補充成分を必要としたり, 文が成立しなくなるなど依存的様相が見られること, このような語彙的意味の薄れにより文法的な面では助詞結合の制限や結合の固定性が現れることを確認したことに留まり, 意味拡大による語彙性と文法性の度合いを判断したり表示できる客観的な基準はまだ見出されていない. また, 本研究は共時的な観点からの研究で, 意味拡大による変化の過程を捉えることはできないという限界はあるが, それぞれの空間名詞がどのような段階に来ているかをありのまま見て取ることができた. 以下にその結果をまとめて示す.

1) 韓国語と日本語の内部空間名詞は共通して具体的空間の意味から抽象的意味へ拡大しているが, 詳細においては, その意味拡大の様相と程度には差が見られる. このような意味拡大による語彙性の希薄化と文法的変化の相異は, 「안, 속」と「うち, なか」の対応のズレの原因にもなっている.
2) 韓国語の場合, 「안」は具体空間を表す先行名詞と共起して具体的な空間の意味を表すが, 数量的範囲, 時間, 概念的抽象空間を表す場合は, 特定の格助詞との結合の制約が見られる. 例えば「안에」は時間的領域へ, 「안에서」は抽象的意味領域への変化が目立ち, 状況や抽象的・心理的意味への拡大は見られない.
3) それに対し, 「속」は, 具体的空間を表す用例が34%にとどまり, 抽象的意味を表す用例は具体空間を表す用例の約2倍にのぼる. このような出現頻度と意味領域の拡大の様相から, 「속」は「안」に比べて, 抽象化が進んでいると見られる. また, 「안」の場合と異なり, 「속」は状況や抽象的空間・心理的空間への意味拡大が見られる反面, 時間や範囲の領域への意味拡大は見られない. また, 連体節の修飾を受ける「속」は, 語彙的意味は薄くなり, 主節の背景となる「ある事態や状態の持続」という状況を表し, 語彙的意味は薄くなる. このように「속」は, 文法的な面で明確に文法化が進行したとは言えないが, 意味拡大した用法では特定の助詞と結合し, 位置の固定性を現わすなど, 文法的側面の変化が見られる.
4) 日本語の場合, 「うち」は, 先行名詞と共起して具体空間を表す例はまれで, 時間と範囲への意味拡大が目立つ. 範囲を表す用法では助詞なしの形で用いられ, その際は語順に制限が見られることから, 文法的変化がより進展したと言える. 時間を表す「うち」は, 韓国語では「안에/안으로」だけではなく, 「동안」という依存的名詞と対応する. 語彙的意味の対応と文法化の度合の観点から見ると, 日本語の時間的意味を表す「うち」は韓国語の時間的意味を表す「안」に比べ, 語彙的意味がより希薄化したと見られ, 対応関係にズレが目立つ. 「なか」は, 基本義である具体空間の意味を維持している段階では意味的自立性を保持しているが, 意味拡大により抽象化が進んだ

段階では格助詞との結合の制限が見られる．日本語の場合，範囲を表す「うち」と「なか」は韓国語の「안」,「속」ではなく，より依存的とされる「가운데」,「중」と対応する．韓国語の範囲を表す「가운데」は自立名詞ではあるが，用法によっては，先行成分がなければ非文になる依存的特性を持ち，範囲を表す「중」は単独では用いられない依存名詞に分類される．

5) このようなことから，日本語と韓国語の内部空間名詞の語彙的意味の拡大と抽象化，それによる文法的要素への変化の様相と度合には差があり，そのような違いが対応関係のずれの一原因であると言える．

以上の内容をまとめると以下の表57の通り．韓国語と日本語でズレが見られる箇所を網掛で示す．

表 57. 韓国語と日本語の内部空間名詞の意味拡大と文法性の変化

空間名詞	意味領域	内部空間名詞の意味拡大の様相	助詞結合の制限	対応する韓国語・日本語
안	具体	방 안에(이/을/에서/으로)	×	部屋の (なかで)
	時間	오늘 안에(으로)	○	今日の (うちに)
	範囲	50등 안에(으로)	○	50位 (ないに)
	抽象	법의 테두리 안에(에서/으로)	○	法の枠の (なかで)
속	具体	상자 속에(이/을/에서/으로)	×	箱の (なかに)
	抽象	역사 속에서(으로)	○	歴史の (なかで)
	心理	슬픔 속에(에서/으로)	○	悲しみの (なかで)
	状況	집중호우 속에서	○	集中豪雨の (なかで)
		집중호우가 내리는 속에서	○	集中豪雨が降る (なかで)
うち	具体	家のうちに(が/を/で/から)	×	집 (안에)
	範囲	①(集合範囲)満たす者のうちから	○	충족하는자 (가운데/중)
		②(数量範囲)三人のうちの二人は	○	세 명 중 두 명 (가운데/중)
		③三人のうち，(語順制限)	○	세 명 가운데 (가운데/중)
	時間	①一ケ月のうちに	○	한 달 (안에)
		②子供のうちから	○	아이 때부터 (때)
		③本を読んでいるうちに	○	책을 읽고 있는 (동안에/사이에)
		④冷めないうちに	○	식기 (전에)
	状況	盛況のうちに	○	성황 (리에)
	抽象	心のうちに	×	마음 (속으로)
なか	具体	家のなかで(が/を/に/から)	×	집 (안에서)
	範囲	①10人のなかから(数量範囲)	○	10명 (중에서)
		②応募者のなかから(集合範囲)	○	응모자 (중에서)
		③その業績のなかで(比較対象の範囲)	○	그 업적 (가운데/중에서)
	活動	生活のなかで	○	생활 (속에서)
	状況	不況のなかで	○	불황 (속에서)
		需要が増加するなかで	○	수요가 증가하는 (가운데)

この表57により，韓日両言語の内部空間名詞における意味拡大の様相とその進展の過程における文法的側面の制限の有無を明らかにし，そのような相異が韓国語と日本語の内部空間名詞の対応関係のズレの原因の一つであることを示すことができた．また，このような意味拡大による語彙的要素の希薄化と文法的要素への変化は，コーパス用例を検索して分析した結果からも裏付けられるように，空間名詞という一つの意味グループのなかで一定の方向として進んでいる現象であることが確認できた．さらに，これは個別の単語を調べるのではなく，連語構成という語彙間の結合関係を中心に据えることで，より効果的にかつ鮮明に取り出すことができたと考える．

第8章　結論

本論文では，韓国語と日本語の内外空間名詞を対照し，語彙的意味の広がりと意味拡大の様相に見られる韓日両言語の特性を明らかにすることを主な目的として，それぞれのコーパスを用い，計量的調査と用例の分析を行った．

具体的には，韓国語と日本語の内外空間名詞「안，속，밖，겉」と「うち，なか，そと，おもて」について意味領域を記述し，対照した．次は，その結果得られた語彙的意味の広がりと意味拡大の様相を基に，韓国語と日本語の内外空間名詞に見られる語彙性の希薄化と文法的変化の様相を考察し，照らし合わせた．とりわけ，これまでの空間名詞の研究とは異なる観点で内外空間名詞を細密に分析して記述し，語彙と文法という総合的な観点で，韓国語と日本語の内外空間名詞の特性を明らかにしようと努めた．

本章では，これまでの考察の結果を述べる．まず，8.1では，第4章から第7章までに明らかになったことをそれぞれ整理して示し，8.2では本論文の意義と課題について述べる．

8.1. 研究結果の要約

第4章では，内外空間名詞「안，속，밖，겉」と格助詞の結合形を中心語に据え，各々の中心語がどのような前項の連語，あるいは後項の連語と結合し，どのような意味を表すかを分析した．具体的には，内外空間名詞と格助詞の結合構造を中心語とする連語構成を対象に，先行要素の統辞的構造により，先行名詞を伴なう連語構成，用言の連体形からなる連体修飾語を伴う連語構成，前項の連語を伴わない連語構成の三つの類型に分けて，語彙的・統辞的構造の中で実現される意味を分析した．

次に，その結果を基にして，類義関係と対義関係など系列関係から，「안と속」，「밖と겉」の類似点と相違点を分析した．その結果，類義の対に意味用法上の重なりが見られる場合は，コーパスから収集した用例の出現頻度に基く「傾向」をより自然な表現の根拠として用いた．さらに，「안，속，밖，겉」の対立関係を通して，結合関係では見て取ることのできなかった意味用法の弁別点を取り出し，これらの結果を基にそれぞれの内外空間名詞の意味領域と内外空間名詞の意味グループとしての関係を明らかにした．以下にその結果を示す．

(1) 「안/속/밖/겉＋格助詞」の先行名詞の分布とその意味特性を分析し，次の通りの結果が得られた．

① 「안」の場合，先行名詞のうち，場所名詞，身体名詞，具体名詞など実体を持つ実体性名詞が約70％以上を占めるのに対し，「속」の場合，抽象名詞，現象名詞，活動名詞，事柄名詞など実体を持たない非実体性名詞が70％以上を占める．このようなことから，「안」は具体的空間を主に表すが，「속」は抽象的拡大意味を主に表すと言える．

② 「안，속，밖，겉」は，時間名詞や抽象名詞など非実体性名詞と共起する場合または単独でも抽象的な意味を表す場合は，限られた格助詞と結合する傾向があり，その意味領域は限定される．例えば，時間名詞は「안에，안으로」と共起して時間的限界や期限，範囲を表すなど，語彙的・統辞的に制約される傾向が見られる．

③ 「안」と「속」は場所空間，具体空間，身体空間など実体性が高い意味領域で意味の重なりが密接で，実体性の低い抽象的空間では意味領域の重なりが少なくなる．

④ 前項の「안」と「속」の意味領域の重なりについて明らかになったことを，以下に示す．

・ある先行名詞が「안」と「속」の両方と共起すると言っても，実際はどちらか一方が多く用いられる傾向を見せるものと，両方がほぼ同等に用いられる傾向のものに分けられる．

・「입，몸」など身体名詞の場合は，身体との緊密性，一体性，不可視性，閉鎖性が強調される場合は，「속」をより好む傾向があり，具体的な空間としての意味が強調される場合は，「안」がより頻繁に用いられる．

・抽象名詞との連語構成では，「안」は先行名詞により規定される＜範囲・領域内，条件＞の意味を表す付加的成分となることが多いのに対して，「속」は前項の連語により規定される抽象的空間の＜状況や状態，持続性＞という意味を表し，動詞の必須項となることが多い．

・場所名詞の場合，平面の場合は「안」と共起し，立体の場合は「속」と共起する．先行名詞が，「회화 공간」のように＜開かれた可視の空間＞を表す場合は「안」を用いるが，「바다，땅」のように＜閉ざされた不可視の空間＞を表す場合は「속」を用いる．

・具体名詞「상자」の場合，混用の傾向が見られるが，コーパスを調査した結果では，「속」の出現頻度が2.5倍に上る．前項と後項の連語の意味特性が＜不可視性，深さ，閉鎖性＞に繋がる場合は，「속」との共起頻度が高くなる．

⑤ 韓国語コーパスから収集した「밖，겉」の現れ方をみると，「밖」は3,601例，「겉」は203例あり，「겉」の用例数が極めて少ない．さらに，「겉」の場合，先行名詞を伴う用例は4例にとどまり，「밖，겉」の共通の先行名詞もない．「밖」の場合，先行名詞としては，場所名詞が80％以上である．

(2) 「안，속，밖，겉」の意味領域と意味関係は次の通り：

① 「안と속」，「밖と겉」は，具体的空間を表す場合に，意味用法の重なりが見られ，実際の言語場では混用の様相も見られる．「안と속」，「밖と겉」は，基本義から時間的意味，抽象的意味へとその意味が拡大すると，他の語彙との結合関係に制約が生じ，基本義の用法で成立していた対立関係も成立しなくなることがある．

② 「안」と「속」の弁別点としては，可視性と不可視性，開放性と閉鎖性を挙げることができる．他にも，[안」は広さを持つ拡散の空間，存在空間，移動の空間で，それに対し，「속」は深さを持つ密閉性の空間，自然物・自然現象の空間，存在空間，継続状態・状況の空間，心理的・感情的空間である．

③ 「밖」と「겉」の最も重要な弁別点は，境界の有無である．「밖」は境界を越えて，あるいは境界を通して「うち」と「そと」が疎通できる空間であり，その境界線または境界物から離れた空間も含まれる三次元の空間である．それに対し，「겉」は境界を介さず，一体物の表と裏の関係にある．「밖」は，移動，出現，事態発生の空間で，視覚的・聴覚的空間，立体的空間であるが，「겉」は，存在，付着，露呈，状態変化の空間で，平面的空間である．

④ 対義関係においては，基本的に「안と밖」，「속と겉」の対立関係となるが，「안」が平面の表面を意味する場合は，「밖」ではなく，「겉」と対立関係をなし，基本義である具体空間の意味から，時間的意味や範囲などに抽象化すると，基本的な対義関係は成立しなくなる．

第5章では，第4章で韓国語に関して行ったものと同様に，内外空間名詞の格形態，先行要素，後行動詞を中心に日本語の内外空間名詞「うち」，「なか」，「そと」，「おもて」の意味を分析し，次の結果が得られた．

(1) 内外空間名詞の使用頻度は，内部を表す空間名詞が外部を表す空間名詞よりはるかに頻繁に用いられることが分かった．「なか＞うち＞そと＞おもて」の順で使用され，最も使用頻度の高い「なか」は次に頻度の高い「うち」に比べ3倍近い使用頻度の差が見られた．

(2) 「うち」は，非実体性名詞を先行名詞とするものが70％ほどで，＜時間，心理，抽象的空間＞を表す．また，「うち」は身体名詞や人間名詞などの実体性名詞と共起する場合にも，抽象化した＜心理空間＞や＜範囲＞を表し，具体的空間を表すことはあまりない．一方，「なか」と共起する先行名詞は，実体性名詞が49％，非実体性名詞が51％で，「うち」の場合と異なり，具体的空間から抽象的空間，範囲，状況まで，意味領域の幅が広い．そのため，「うち」と「なか」は，具体的空間では意味境界が離れていき，意味的重なりがあまり見られないが，の抽象的空間では意味境界が接近し，意味領域の重なりを見せる．

(3) 類義の対である「うち」と「なか」の意味領域の重なる部分と相補的部分を分析し，以下に示す．

①実体性の高い先行名詞と共に具体空間を表す場合，「うち」と「なか」の意味領域の重なりは見られないが，＜心理・感情＞，＜範囲の限定＞といった抽象的意味を表す場合，「うち」と「なか」は密接な意味領域の重なりを見せ，混用の傾向が見られる．「うち」と「なか」が「胸」，「腹」といった身体名詞と連語を構成し，心理的空間を表す場合，「うち」は＜不可視の静的空間，プライベートな閉鎖的・心理的空間＞を表すのに対し，「なか」は＜可視的，動的空間，開放的空間＞を表す傾向がある．

②「うち」と「なか」は，「心」など非実体性の先行名詞と共に＜心理・感情＞といった抽象的意味を表す場合，補語，対象語，後項の用言との結合関係から意味領域の違いが見られる．具体的には，「うち」は「恐怖，不安，怒り，気持ち」などと共起し，＜主観的感情，否定的心理状態＞を表すのに対し，「なか」は「プラン，正義，概念，イメージ，意識」などと共起し，＜概念的，肯定的抽象空間＞を表す傾向がある．また，「うち」は「思う，考える」といった思考・感情を表す心理動詞と共起して＜不可視の空間，静的，閉鎖的空間＞を表すことが多いのに対し，「なか」は感情・思考・知覚を表す心理動詞，「告げる，読む，呟く，言う，叫ぶ」といった発話動詞，「凍る，崩壊する」といった変化動詞とともに心理的活動，感情的変化を表す＜可視的空間，動的，開放的空間＞を表す．

③「うち」と「なか」はいずれも＜集団の範囲の限定＞を表すが，「うち」は，ある集団の範囲が一定の条件や数量などにより強く制限されたり，その集団の構成要素の属性などが明示的に規定・限定される場合に用いられるのに対し，「なか」は，ある集団の範囲が比較的にゆるやかで，明示的に規定されない場合に用いられる．

(4) 「そと」と「おもて」について明らかになったことを以下に示す．

① 日本語コーパスから収集した「そと」と「おもて」の用例のうち，先行名詞を伴う「そと」と「おもて」の

現れ方を見ると，「そと」は1,411例，「おもて」は47例あり，「おもて」の用例数が極めて少ない．一方，先行名詞を伴わない類型では，「そと」が649例，「おもて」が111例収集され，単独でも空間名詞としての意味を強く保持していると見られる．

②「そと」は，場所名詞を先行名詞とするものが80％を占め，続いて抽象名詞，具体名詞の順となっている．一方，「おもて」と共起する先行名詞は，場所名詞が約49％を占め，具体名詞が約39％，抽象名詞が約11％となっている．

③「そと」は，ある境界物を超えた外部の領域で，平面・立体の空間を表わし，方向や範囲を特に制限しない．それに対し，「おもて」は平面空間の場合は境界物が存在しない．

④「そと」と「おもて」は，平面空間を表わす場合は意味領域が重ならないが，立体空間では意味領域の部分的重なりが見られる．立体空間を表わす「おもて」は「そと」の一部分であり，基準となる空間や具体物の正面，前面の空間を表わし，「そと」と＜移動・通過＞の意味領域が重なる．

⑤ 具体空間を表わす場合，「そと」は＜視覚，聴覚，非付着＞の拡散的空間であるが，「おもて」は＜視覚，聴覚，付着＞の限定的空間である．

⑥「そと」と「おもて」は，「세계(世界)，사회(社会)」といった抽象名詞と共起し，抽象的空間を表す場合，「そと」は離れた外部空間を，「おもて」は中心的内部空間をそれぞれ示し，それらの意味領域は重ならない．

第6章では，第4章と第5章においてなされた分析の結果を基に，韓国語と日本語の内外空間名詞を対照し，その対応関係，類似点と相異点を明らかにした．韓日両言語を対照する際は，これまでの分析の結果を基にして，内外空間名詞の意味範疇を＜具体空間，抽象空間，状況，時間，範囲＞に分類したうえで，「안，속」と「うち，なか」，「밖，겉」と「そと，おもて」の意味をそれぞれ対照した．

(1) 「안，속」と「うち，なか」の意味領域を対照して得られた結果をまとめ，以下に示す．

① 韓国語の「안」と「속」は，基本義である具体空間，身体空間，観念的抽象空間の意味領域で重なる部分があり，実際の言語使用の場では混用の様子も見られる．この場合，「안」と「속」の弁別要素は＜開放性，可視性，密集性，範囲限定＞である．それに対し，日本語の「うち」と「なか」は，具体空間の意味領域で重なりは見られず，具体空間を表す韓国語の「안」と「속」はいずれも「なか」と対応する．このようなことから，具体空間の意味領域では，日本語より韓国語の方が具体空間を細分化して表現しようとする傾向があると言える．

② 先行名詞が抽象的・心理的空間を表す場合，韓国語は「속」と共起する．それに対し，日本語は「なか」と共起する頻度が高いが，先行名詞が観念的・客観的な意味領域を表す場合は，「うち」とも共起し，抽象空間を表わす韓国語の「속」は日本語の「なか」と対応することもあれば，「うち」と対応することもある．このようなことから，抽象的・心理的意味領域では，韓国語より日本語の方が抽象空間をより細分化して表現しようとする傾向があると言える．

③ 具体的な状況あるいは抽象的な状況を表す場合，韓国語は「속」を，日本語は「なか」を用い，内部空間名詞の間で対応関係が見られる．

④ 時間の範囲を表す場合，韓国語と日本語のズレが目立つ．日本語は主に「うち」を用いるのに対し，

韓国語は，時間的期限を表す場合は「안」を用いるが，ほかに時間の範囲を表す場合は「중，때，전，동안」などを用い，韓日両言語の内部空間名詞の間で一対一の対応関係は成立しない．

⑤ 範囲を表す場合，日本語の「うち」と「なか」はその意味領域で重なる部分があり，詳細において範囲限定の条件や集団の構成要素を明示・限定する場合は「うち」を用い，より広い範囲の集団を対象とする場合は「なか」を用いる．それに対し，韓国語は，等級の範囲を表す場合の「안」以外は，主に「중，가운데」を用い，韓日両言語の内部空間名詞の間で対応関係は成立しない．

(2)「밖，겉」と「そと，おもて」の意味領域を対照して得られた結果をまとめ，以下に示す．

① 具体空間を表わす場合，韓国語の「밖」は立体の移動空間や存在空間，視覚的・聴覚的空間を表わすが，「겉」は平面の視覚的空間や触覚的空間を表わし，立体的具体空間の意味領域に重なりは見られない．それに対し，日本語の「そと」と「おもて」は，とちらとも立体的具体空間，視覚的・聴覚的空間を表わすことができ，立体的具体空間の意味領域では部分的な重なりが見られる．このような立体的具体空間を表わす「밖」は「そと」，「おもて」と包括的対応関係を示すが，方向や範囲が指定された「おもて」は，「밖」ではなく，「앞」と対応する．

② 抽象空間を表わす「밖」は，概念的・社会的抽象空間を表す場合は「そと」と対応関係を示すが，身体名詞と共に固まった表現をなす場合は，日本語とのズレが見られる．

③ 平面の具体空間を表わす場合，「겉」は主に具体物の表面を表すが，「おもて」は具体物の主となる面，自然空間の表面の状態を表すことが多く，意味領域のズレが見られる．

④ 感情・心理の抽象空間を表す場合，「밖」は感情などを出す対象となる外部空間であるが，「겉」は感情を表す者自身に属する空間で，対象となる空間ではない．このような「밖」と「겉」は，「そと」と「おもて」の意味領域と対応関係をあらわす．

⑤ 抽象空間を表わす「겉」は，感情などを表す心理的抽象空間であり，否定的意味を表すことが多い．それに対し，「おもて」は，心理的抽象空間と社会的抽象空間を表わし，心理的抽象空間を表わす場合は「겉」と意味領域が重なり，対応関係を示すが，社会的抽象空間を表わす場合は，社会の前面，主となる位置といった肯定的意味を表し，「겉」とは意味領域が重ならず，対応関係を持たない．

第7章では， 韓国語と日本語の内部空間名詞「안，속」と「うち，なか」について，その意味拡大による語彙的意味と文法的意味の変化を対照した．韓国語と日本語の内部空間名詞は，単独で文の主語や対象語として用いられることもあれば，先行の成分がなければ意味をなさない依存的用法もあるという点に注目して，それぞれの空間名詞が，どのような意味拡大により，どのような語彙的・文法的意味をあらわすかを調べ，その結果をまとめ，以下に示す．

(1) 韓国語と日本語の内部空間名詞は具体的な空間の意味から抽象的な意味へ拡大する面で共通しているが，詳細においては，その意味拡大の様相と程度には差が見られる．このような意味拡大による語彙性の希薄化と文法的変化の相異は，「안，속」と「うち，なか」の対応のズレの原因にもなっている．

(2) 韓国語の場合，「안」は，具体空間を表す先行名詞と共起して具体的空間を表す用法が中心である

が，数量的範囲，時間，概念的抽象空間への意味拡大と特定の格助詞との結合制約が見られる．例えば，「안에」は時間的領域へ，「안에서」は抽象的意味領域への変化が目立ち，状況や心理的抽象空間への意味拡大は見当たらない．

(3) それに対し，「속」は，具体的空間を表す用例より抽象的意味を表す用例が約2倍にのぼり，「안」に比べて，抽象化が進んでいると見られ，「안」とは異なり，「속」は状況や抽象的・心理的空間への意味拡大が進んでいる反面，時間や範囲の領域への意味拡大は見られない．また，連体節の修飾を受ける「속」は，具体的内部空間を表わす語彙的意味は薄くなり，「ある事態や状態の持続」を表す．文法的な面では，明確に文法化が進行したとは言えないが，助詞との結合や語順に制約が見られる．

(4) 日本語の場合，「うち」は，具体空間を表す例はまれで，時間と範囲への意味拡大が目立つ．特に範囲を表す用法のうち，助詞を伴わない形態ではと語順の制限が見られ，文法的面の変化がより進展したと見られる．時間を表す「うち」は，「안」 のみならず「때，전，사이」や依存的名詞「동안」と対応する．このような語彙的意味の変化および文法的面の変化を基に，時間と範囲を表す「うち」は，「안」に比べ，語彙的意味がより希薄化し， 文法的面の変化が進行したということができる．

(5) 「なか」は，具体空間という基本義を維持している段階では意味的自立性を保持しているが，意味拡大による格助詞との結合制限が見られる．範囲を表す「うち」と「なか」は，「안， 속」ではなく，自立性のより弱い「가운데， 중」と対応する．

(6) このようなことから，内部空間名詞の抽象化の結果として，語彙的意味の薄れ，文法的な面における助詞結合の制約，語順の制限を確認し，このような意味の抽象化による語彙的要素の希薄化と文法的要素への変化は，空間名詞という一つのグループあるいは体系のなかで一定の方向として進んでいる現象であることが確認し，それぞれの空間名詞がどのような段階に来ているかをありのまま見て取ることができた．

8.2. 研究の意義と今後の課題

本研究は，韓国語と日本語の内外空間名詞を対照し，語彙的意味の広がりと意味拡大の様相に見られる韓日両言語の特性を明らかにしようと試みた．そのためにコーパスを用い，実際の用例を対象に分析を行い，実証的で客観的な結果が得られるように努めた．このような研究目的に関連して，本研究の持つ意義は次のように要約し得る．

第一に，本論文は語彙論的観点からの研究ではあるが，相対的空間名詞である内外空間名詞が自立名詞としての用法と関係名詞的用法を持つことに注目して，韓国語の「안，속，밖，겉」と日本語の「うち，なか，そと，おもて」について，それぞれの空間名詞がどのような語彙とよく共に用いられ，どのような意味を表すかを観察し，語彙間の結合関係および系列関係を通して，実際の意味実現のレベルに見られる意味用法をより細密に記述することができた．このような語彙間の結合関係に関する情報は，単に意味記述の問題など語彙研究の分野に留まらず，外国語としての語彙教育の分野でも利用できる部分がある．

第二に，韓日両言語の内外空間名詞の意味拡大の様相や進展の過程に見られる違いが，韓国語と日本語の内部空間名詞の対応関係のズレの原因であることを明示的に示すことができた．また，このよう

な抽象化による語彙的要素の希薄化と文法的要素への変化は，コーパスから収集した用例を分析した結果により裏付けられ，内部空間名詞という一つの意味グループのなかで一定の傾向を見せることが確認できた．

第三に，韓国語と日本語の対照においては，韓日両言語の使用様相や分布を示すことができた．意味領域の記述と意味関係の対照の基礎となる資料作りが一部分ではあるができたことで，その結果を基にして，ある空間を表す概念がそれぞれの言語でどう表現されるか，またはどう表現されないかという点を明らかにすることができた．韓国語と日本語の内外空間名詞の対応関係に見られる一致とズレは，両言語における空間と時間，心理・感情などの意味拡大の様相の違いによることを明らかにした．また，本論文は言語教育を論ずるものではないが，実際に言語教育の場でよく取り上げられる類義語の問題や言語間の対応関係などの問題についても，より具体的に触れることができた．

最後に，本研究で十分な議論ができなかった点を，残された課題として記述しておく．

第一に，空間名詞を中心語として，共に現れる前項と後項の連語の意味特性から，それぞれの内外空間名詞の意味領域を取り出し，その結果を基に韓国語と日本語を対照した．しかし，本論文では，主に語彙論的観点で研究が行われ，後項の連語をなす用言と対象語，補語との関係，格助詞と述語との関係に見られる分布の制限など，統語的な面の分析を深める必要があり，今後の課題として残す．

第二に，韓国語と日本語の内外空間名詞の対立項に，内外空間名詞以外の語彙が位置していることがあるが，今回は考察の対象から外している．しかし，双方向の対照に見られる非対称項目は，個別言語の分析では見えてこない特徴を指し示すものでもあることから，それらを含んだより広い範囲の考察が必要である．また，両言語の漢字語の内外空間名詞も対象としていないが，対照研究の面でも文法化研究の面でも，今後の課題としたい．

第三に，意味拡大による語彙的意味の希薄化と文法化について，それぞれの内部空間名詞の語彙的意味の希薄化と文法化による変化を記述しようと試みたが，空間名詞間，あるいは言語間の文法化の度合いをどう判断するかという客観的な基準を論じたり，提示することはできず，さらなる考察が必要である．現段階では，内部空間名詞の意味拡大の結果として，単独ではその意味が曖昧になったり非文になるため，他の補充成分を必要とし，依存的になる傾向が見られるという点，このような語彙的意味の薄れにより文法的な面では助詞結合の制約や分布の制限などが見られるという点を確認し，記述することに留まった．また，本研究は共時的な観点からの研究であるため，意味拡大による変化の過程を捉えることはできなかったという限界は残る．

第四に，韓国語と日本語のコーパスを用い，計量的な分析を試みることにより，客観的なデータに基づく使用様相の提示，類義と反義関係の記述，自然さの問題などに関連して意味ある成果を上げているが，計量言語学や統計の観点から，より徹底した資料分析が求められる部分がある．今後は，計量的な調査と分析の適正性を確保するとともに，そのような計量的分析の結果が言語学的にどのような意味を持つか，さらに考察を深める必要がある．

【初出一覧】

以下に，本論文の内容のもとになった論文・口頭発表，及び，本論文での該当箇所を記す(発表年順).
ただし，本論文執筆にあたり，内容を大幅に修正している.

【論文】
「意味グループをなす内外空間名詞「안，속，밖，겉」の意味用法について」『朝鮮学報』 朝鮮学会　第211輯(平成21年4月刊) 87頁～133頁
※第4章

【論文】
「日本語の空間名詞「うち」と「なか」の意味用法　－コーパスに基づく連語構成の分析を中心に－」『日本学報』 韓国日本学会　第89輯(2011年11月) 31頁～48頁
※第5章

【論文】
「한일 내부공간명사「안，속」과「うち，なか」의 의미영역」『日本語学研究』 韓国日本語学会　第33輯(2012年3月) 17頁～35頁
※第4章，第5章，第6章

【論文】
「日韓外部空間名詞「そと，おもて」と「밖，겉」の空間的意味領域」
『日本語学研究』 韓国日本語学会　第35輯(2012年12月) 73頁～92頁
※第4章，第5章，第6章

【口頭発表】
「韓日相対空間名詞の意味拡張の様相－内部空間名詞の語彙性と文法性の変化に注目して－」 韓国日本言語文化学会　2013年度春季国際学術大会(2013年6月1日，慶熙大学校)予稿集　pp. 60－63
※第7章

【参考文献】

(1) 韓国語で書かれた文献

권도경(2005) '국어 어휘의 다의성 연구', 서울대학교 대학원 박사학위논문
김광해(1993) "국어 어휘론 개설", 서울:집문당
김광해(1995) "어휘연구의 실제와 응용", 서울: 집문당
김동환(2010) '인지언어학 연구 방법론', "우리말연구"제27권, 5-28, 우리말학회
김선희(1987) '현대국어의 시간어 연구', 연세대학교 대학원 박사학위논문
김선희(1988) '공간어와 시간적 의미', "목원어문학" 7, pp.5-33, 목원대학교
김성경(2006) '일본어 공간명사의 분류-참조물과의 위치관계를 중심으로', "Foreign Languages Education" 13, 477-487
김성경(2010) '일본어의 공간인지 유형에 관한 연구', 동덕여자대학교 대학원 박사학위논문
김진해(2000) '연어의 계열관계 연구', "國語學" 35, 199-222, 서울: 國語學會
金鎮海(2000) '國語連語研究', 경희대학교 대학원 박사학위논문
김한샘(2006) '말뭉치에 기반한 공간 명사의 의미 변화 연구', "泮矯語文研究" 21, 159-186, 서울: 반교어문학회
남경완(2008) "국어 용언의 의미 분석", 서울: 태학서
남윤진(2000) "현대국어의 조사에 대한 계량언어학적 연구", 서울: 태학사
노대규(1988) "국어 의미론 연구", 서울: 국학자료원
노마히데키[野間秀樹](2002) "한국어 어휘와 문법의 상관구조", 서울: 태학사
목정수(2013) '한국어의 핵심을 꿰뚫어 본 교육 문법서-Yeon & Brown (2011), Korean: A Comprehensive Grammar를 중심으로', "형태론" 15-1, 55-81. 서울: 집문당
민현식(1990)'시간어와 공간어의 상관성(1)', "國語學"20, 47-71
민현식(1999) "국어 문법 연구", 서울: 도서출판 역락
민경모(2013) '한일 대조연구의 동향 분석과 과제', "언어와 문화" 9-2, 145-172, 한국언어문화교육학회
박경현(1987) "現代國語의 空間概念語 研究", 서울: 한샘
박병선(2002) "한국어 계량적 연구 방법론", 서울: 역락
박승윤(1997) ''밖에'의 문법화 현상', "언어" 22-1, 57-70 서울: 한국언어학회
박지영(1996) '겉, 바깥, 속, 안의 의미 분석: 복합어 구성을 중심으로', 경북대학교 교육대학원 석사학위논문
서은(2004) '공간어에 나타나는 개념적 은유 연구', 이화여자대학교 대학원 석사 논문
서정수(1996; 2006) "국어문법", 서울: 한양대학교 출판원
손평효(2012) "공간말 '앞'과 '뒤'의 연구, 서울: 도서출판 박이정
신은경(2005) '국어 공간어의 의미변화연구', 고려대학교 대학원 박사학위 논문
심재기(1982) "국어어휘론", 서울: 집문당

안정아(2007) ‘현대국어 의존 명사의 의미 연구’, 고려대학교 대학원 박사학위 논문
안주호(1997) “한국어 명사의 문법화 현상 연구”, 서울: 한국문화사
안효경(2001) “현대국어의 의존명사 연구”, 서울: 도서출판 역락
유혜원((2008) ‘국어 명사구의 통사•의미론적 연구’, 한국어학 38, 197-221, 한국어학회
이성하(1998) “문법화의 이해”, 서울: 한국문화사
이수련(1991) “한국어와 인지”, 서울: 박이정
이영제(2013) ‘한국어 기능명사 연구’, 고려대학교 대학원 박사학위 논문
이영제(2014) ‘공간명사의 의존 용법과 규정 기능’, “어문논집” 58, 38-52, 중앙어문학회
이운영(2004) ‘한국어 명사의 다의적 해석’, 서울대학교 박사학위 논문
이응백, 국어국문학편찬위원회(1998) “국어국문학자료사전”, 서울: 한국사전연구사
이정애(1996) ‘{안/밖/속/겉}의 의미연구’, “한국언어문학” 37, 153-169, 한국언어문학회
임근석(2002) ‘현대 국어의 어휘적 연어 연구’, 서울대학교 대학원 석사학위 논문
임근석(2010) “한국어 연어 연구”, 서울: 도서출판 月印
임지룡(1984) ‘공간감각어의 의미특성’, “배달말” 9-1, 119-137, 배달말학회
임지룡(1988) ‘국어대립어의 의미상관체계에 대한 연구’, 경북대학교 대학원 박사학위 논문
임지룡(2009) ‘다의어의 판정과 의미 확장의 분류 기준’, “한국어 의미학” 28, 193-226, 한국어 의미학회
임지룡(2017) “한국어 의미 특성의 인지언어학적 연구”, 서울: 한국문화사
장원재(2014) “코퍼스를 활용한 일본어연구와 일본어교육연구”, 서울: 한국문화사
정동경(2005) ‘시간명사에 대한 통시적 연구 -고유어를 중심으로-’, 서울대학교 대학원 석사학위 논문
정동경(2013) ‘국어 시간명사의 역사적 연구’, 서울대학교 대학원 박사학위 논문
정수진(2010) ‘국어 공간어의 의미 확장 연구’, 경북대학교 대학원 박사학위 논문
천기석(1993) ‘운동동사와 상태동사의 비교’, “한국언어문학” 31, 183-204, 한국언어문학회
최경봉(1996) ‘명사의 의미 분류에 대하여’ “한국어학” 4, 11-45, 한국어학회
최경봉(1998) “국어 명사의 의미연구”, 서울:태학사
최경봉(2000a) ‘단어의 의미확장과 어휘 체계’, “언어학” 8-2, 177-195, 대한언어학회
한송화(2000) “현대 국어 자동사 연구”, 서울: 한국문화사
한용운(2003) “언어 단위 변화와 조사화”, 서울:한국문화사
한유석/설근수 공저(2004) “한국어 시소러스 연구”, 한국문화사
홍재성 외(1997) “현대한국어 동사 구문 사전”, 서울: 두산동아
홍종선(1992) “국어의 위치어 연구”, 홍익어문 10, 459-473, 홍익대학교 홍익어문연구회

(2) 日本語で書かれた文献

秋元美治(2002) 『文法化とイディオム化』, 東京:ひつじ書房
荒川清秀(2004) 「空間名詞と空間化」,『国文学解釈と鑑賞』 第69巻7号, 32-38頁, 東京:志文堂

石綿敏雄(1999) 『現代言語理論と格』, 東京:ひつじ書房
江口正(2006) 「集合を設定する「うち」の分布特性」,『複合辞研究の現在』, 236-241頁, 大阪:和泉書院
大堀壽夫(2005) 「日本語の文法化研究にあたってー概観と理論的課題ー」,『日本語の研究』 第1巻3号, 1-17頁, 東京:日本語学会
生越直樹(2002) 『対照言語学』, 東京:東京大学出版会
亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 東京:三省堂
金康洙(2015) 「時間関係節に見られる日本語と韓国語の様相」,『日本学報』 103, 1-20頁, ソウル:日本学会
金聖京(2010) 「日本語の空間認知の類型に関する研究-日本語区間指示語の分析を中心に」, 同徳女子大学校大学院 博士論文
国広哲弥(1982) 『意味論の方法』, 東京:大修館書店
国広哲弥(2002) 「語義の構造」, 斉藤倫明編 『朝倉日本語講座 4, 語彙・意味』, 東京:朝倉書店
黄小麗(2016) 「空間名詞「中」の文法化に関する中日対照研究,『日本語学研究』 第48輯, 143-158頁, 韓国日本語学会
崔亨先(2008) 「「～うちに」節に関する一考察:「～前に」節との対応関係を中心に」, 誠信女子大学校大学院 修士論文
荘司育子(2008) 「文法研究の応用ー形式名詞についてー」,『大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究 6』, 大阪外国語大学
砂川有里子(2000) 「空間から時間へのメタファー」,『空間表現と文法』, 東京:くろしお出版
籾山洋介(1991) 「多義語の分析-空間から時間へ」,『日本語研究と日本語教育』, 名古屋:名古屋大学出版会
高田誠(1991) 「基本語彙の対照研究 : 量的な対照をめぐって」,『文藝言語研究.言語篇』 19巻, 1ー13頁, 筑波 : 筑波大学文藝・言語学系
田中章夫(1978) 『国語語彙論』, 東京:明治書院
田中茂範・松本曜(1997) 『空間と移動の表現』, 東京:研究社
趙義成(2007) 「不完全名詞をめぐって」,『韓国語教育論講座』 第1巻, 553-573頁, 東京:くろしお出版
塚本秀樹(1997) 「語彙的な語形成と統語的な語形成-日本語と朝鮮語の対照研究-」, 国立国語研究所著作 『日本語と朝鮮語 下巻 研究論文編』, 191-212頁, 東京:くろしお出版
塚本秀樹(2006) 「言語現象と文法化ー日本語と朝鮮語対象研究ー」,『日本語と朝鮮語の対照研究』, 東京大学21世紀COEプログラム「心とことばー進化認知科学的展開」研究報告書, 27ー61頁, 東京:東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
塚本秀樹(2009) 「文法化と形態・統語的仕組み-日本語と朝鮮語の相違を引き起こす要因-」『第17回中日理論言語学研究会ハンドアウト』
南潤珍(2006) 「日本語と韓国語の連語構造の対照分析に基づいた韓国語教材開発に関する研究」 平

成16-17年度科学研究費補助金基盤研究研究成果報告書(課題番号16520333)
南潤珍(2007)「韓国語教育におけるコロケーション情報の活用」,『韓国語教育論講座』 第1巻, 609-627頁, 東京:くろしお出版
野間秀樹(1990b) 「現代朝鮮語の名詞分類-語彙論・文法論のために」,『朝鮮学報』 第135輯, 天理:朝鮮学会
野間秀樹(1993) 「現代朝鮮語の対格と動詞の統辞論」,『言語研究 Ⅲ』, 71-168頁, 東京:東京外国語大学
野間秀樹(1994) 「現代朝鮮語の語彙分類の方法」,『言語研究 Ⅳ』, 45-68頁, 東京:東京外国語大学
浜之上幸(1991) 「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」,『朝鮮学報』 第138集, (1)1-93頁, 天理:朝鮮学会
方允炯(2007)「名詞に接続する形式名詞「うち」の意味・機能ー明治期と現代との用例比較を通じて-」,『日語日文学研究』 61-1, 145-158頁, 韓国日語日文学会
方允炯(2008) 「形式名詞「なか」の意味と機能ー明治期と現代との用例比較を通じてー」,『日本語学研究』 第23輯, 113-128頁, 韓国日本語学会
日野資成(2001) 『形式語の研究-文法化の理論と応用-』, 福岡:九州大学出版会
堀江薫(2005) 「韓国語と日本語の文法化の対照-言語類型論の観点から-」,『日本語の研究』 第1巻3号, 93-107頁, 日本語学会,
朴江訓(2010) 「韓日両言語における「밖에」と「しか」の統語的認可条件」,『日本学報』 83, 47-58頁, 韓国日本学会
朴江訓(2014)「韓日両言語の文法化に関する対照研究-文法化の度合いを中心に-」,『日本語學研究』 第39輯, 83-99頁, 韓国日本語学会
宮島達夫(1994) 『語彙論研究』, 東京:むぎ書房
宮下博幸(2006)「文法化研究とは何か」, 早稲田言語研究会会報 第10号, 20-47頁, 東京:早稲田言語研究会
森田良行(1988) 『基礎日本語辞典』, 東京:角川書店
森田良行(1991) 『語彙とその意味』東京:アルク
森田良行(2001) 『意味分析の方法』, 東京:ひつじ書房
森田良行(2004)「移動動詞と空間表現」,『国文学解釈と鑑賞』 第69巻7号, 19-25ページ, 東京:志文堂
油谷幸利(2009) 『日韓対照言語学』, 東京:白帝社

(3) 英語で書かれた文献

Firth, J. R.(1951), Modes of Meaning, In *Paper in Linguistics 1934-51*, London, Oxford University Press
Heine, Bernd, Urike Claudi, and Friederike Hünnemeyer.(1991) *Grammaticalization: A Conceptual framework*. Chicago: The University of Chicago Press
Heine, Bernd, Urike Claudi, and Friederike Hünnemeyer.(1991b) From cognition to grammar:Evidence

from African languages. In Traugott and Heine eds., vol. 1: 149-87
Hopper, Paul. J.& Elizabeth Closs Traugott(1993), *Grammaticalization*, Cambridge University Press
Lewis, Michael ed.(2000), *Teaching Collocation-Further development in the Lexical Approach,* Hove: Language Teaching Publications
Lyons, John(1977), *Semantics 1·2*, Cambridge University Press
Sinclair, J. (1991), *Corpus, Concordance, Collocation,* Oxford: Oxford University Pres
Singleton, D.(2000), *Language and the Lexicon*, London: Arnold
Vyvyan Evans & Melanie Green(2006), *Cognitive Linguistics An Introduction*, Edinburgh University Press(임지룡·김동환 옮김(2008), "인지언어학 기초", 서울: 한국문화사)

(4)辞書

국립국어연구원(1999) "표준국어대사전", 서울: 두산동아
국립국어원 "표준국어대사전" 인터넷판. www.stdweb2.korean.go.kr
연세대학교 언어정보개발원(1998) "연세한국어사전", 서울: 두산동아
安田吉実, 孫洛範(1973;1995) "엣센스 일한사전", 서울: 민중서림
安田吉実, 孫洛範(1989) "엣센스 한일사전", 서울: 민중서림
松村明監修(2012) 『デジタル大辞泉』, 東京:小学館
新村出編(2009) 『広辞苑(第6版)』, 東京:岩波書店
林 巨樹(1985;1989) 『現代国語例解辞典』, 東京:小学館
小学館辞典編集部(1994) 『類語例解辞典』, 東京:小学館
菅野裕臣他共編(1998;2006) 『ｺｽﾓｽ朝和辞典 第二版』, 東京 : 白水社
池原 悟ほか編集(1997)『日本語語彙大系, 1. 意味体系(1997)』 東京:岩波書店
池原 悟ほか編集(1999)『日本語語彙大系 CD-ROM版』 東京:岩波書店

【謝辞】

本論文の完成に当たり，多くの方々にご指導とご助言をいただきました．

本研究を進めるに当たり，ご指導をいただいた指導教員の東京外国語大学大学院総合国際学研究院の南潤珍先生に感謝を申し上げます．南潤珍先生には、終始暖かい激励と研究全体にわたり丁寧なご指導を賜り，研究の過程を見守り続けていただきました．筆者の力不足で研究が進まず，落ち込んでいるときにも，常に励まし，ご助言をくださいました．心より深く感謝を申し上げます．

東京外国語大学大学院総合国際学研究院の趙義成先生，五十嵐孔一先生には，博士後期課程の授業とゼミ，論文の執筆にあたり，多くのご指導と貴重なご助言をいただきました．心よりお礼を申し上げます．

東京外国語大学大学院におられた野間秀樹先生，伊藤英人先生には，東京外国語大学の博士後期課程入学以来，大学院の授業とゼミのなかで多くのことを学ばせていただき，貴重なご指導を賜わりました．心よりお礼申し上げます．

また，東京大学大学院総合文化研究科の生越直樹先生，神田外語大学の權容璟先生には，本論文の審査委員をお引き受け下さり，貴重なご意見やご助言をいただきましたこと，心より深くお礼申し上げます．

さらに，研究を遂行し，論文を完成するに当たり，励ましやご支援をくださいました多くの方々に，この場を借りて厚くお礼申し上げます．最後に，いつも温かく見守り，心から応援してくれた家族に感謝します。

2019年 4月 金 恩惠